

昭和四十六年十二月三十一日

忘
れ
な
草

第四号

目次

目録

- 一、昭和四十六年八月九日の慰霊祭、読経中の焼香
- 二、十一時二分のサイレンに黙禱を捧げる遺族たち
- 三、敬虔な面もちで焼香に向う遺族たち
- 四、慰霊祭に供えた生花と調会長の焼香
- 五、長崎医大付属医学専門部の海軍々医学生たち
- 六、被爆直後の長崎医大附近と現在の基礎教室全景
- 七、被爆直後の付属病院と現在の病院の全景
- 八、新興善国民学校における被爆者診療風景
- 九、爆風で倒れかかった巨大な医大の門柱
- 一〇、目茶々に破壊された長崎製鋼所の工場
- 一一、学部四年生服巻勝之君の遺品
- 一二、原爆中心地付近の地図
- 一三、被爆当時の基礎教室と付属病院の見取図

| | | |
|----------------------|-------|----|
| 「忘れな草」に寄せて…………… | 佐藤純一郎 | 一 |
| 「忘れな草」第四号発刊について…………… | 調来助 | 二 |
| 「忘れな草」の思い出あれこれ…………… | 調来助 | 二 |
| 昭和四十五年と四十六年の慰霊祭…………… | 田吉チエ | 二 |
| 昭和四十五年……………三 | | |
| 昭和四十六年……………四 | | |
| 昭和四十五年四月の国会陳情報告…………… | 田吉チエ | 四 |
| 昭和四十五年秋の陳情の準備…………… | 調来助 | 六 |
| 昭和四十五年秋の陳情…………… | 田吉チエ | 八 |
| 昭和四十六年七月の陳情記…………… | 調来助 | 一五 |
| 昭和四十六年十月の陳情記…………… | 田吉チエ | 一九 |
| 軍医依託生の件について…………… | 調来助 | 二一 |
| 久留米地区遺族の集いの記…………… | 菅原文彦 | 二二 |
| 新しく判明した犠牲者と遺族…………… | 調来助 | 二三 |
| 靖国神社合祀の追加申請…………… | 調来助 | 二四 |



1. 昭和46年の慰霊祭, 読経中の焼香



2. 黙禱を捧げる遺族たち



3. 敬虔な面もちで焼香に向う遺族たち



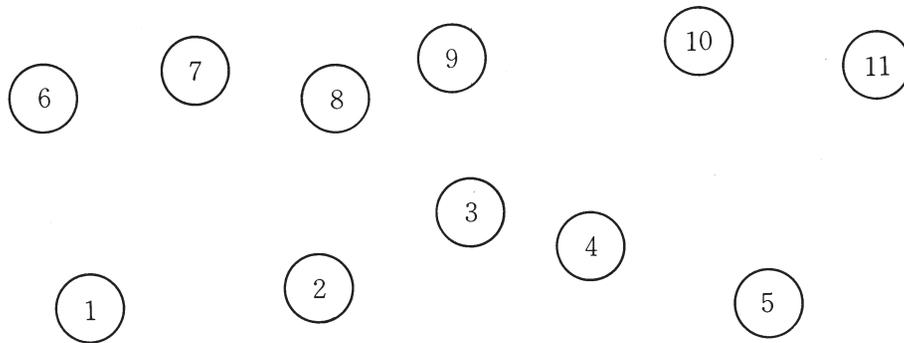
4.(a) 慰靈祭に供えた生花



4.(b) 焼香を行う調遺族会長



5. 旧長崎医科大学付属医学専門部の海軍々医学生たち



1. 松永信之

2. 大槻秀雄(原爆死)

3. 江口有一

4. 堤一真

5. 和田政太郎

6. 村上健二

7. 沖賢治

8. 米村博臣

9. 佐藤一夫

10. 中村定正

11. 佐保光康



6.(a) 被爆直後の長崎医科大学附近
(左方が基礎教室, 右方の煙突の所が附属病院)



6.(b) 現在の長崎大学医学部基礎教室の全景



7.(a) 被爆直後の長崎医科大学付属病院全景



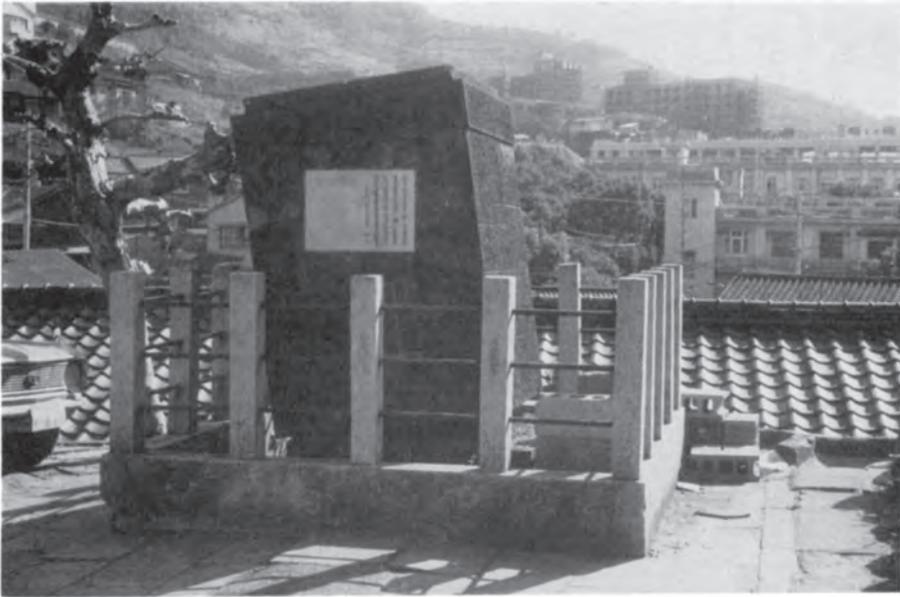
7.(b) 現在の付属病院全景



8.(a) 新興善国民学校に収容された被爆者たち



8.(b) 医師の治療を受ける原爆火傷の小児



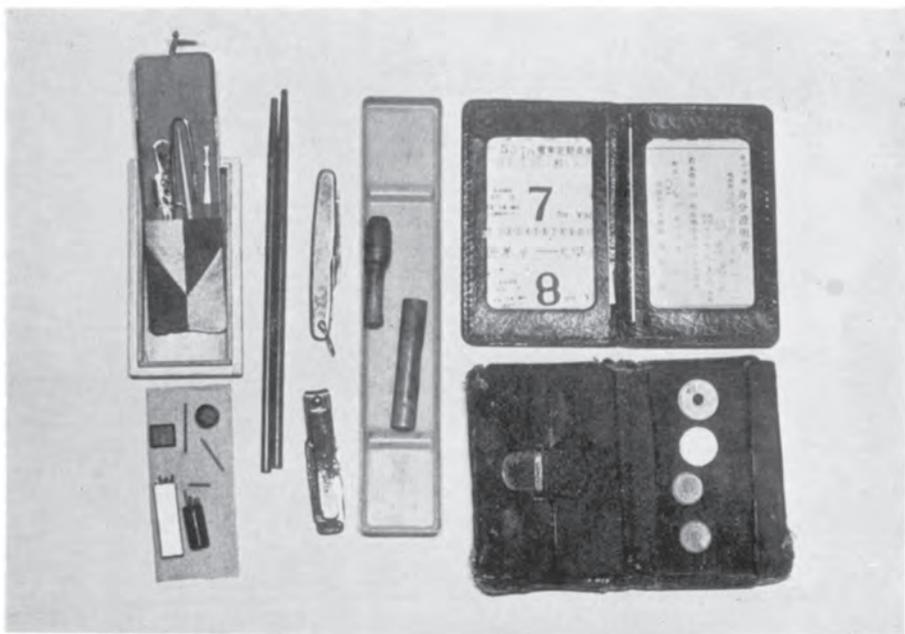
9. 爆風で倒れかかった長崎医大の門柱



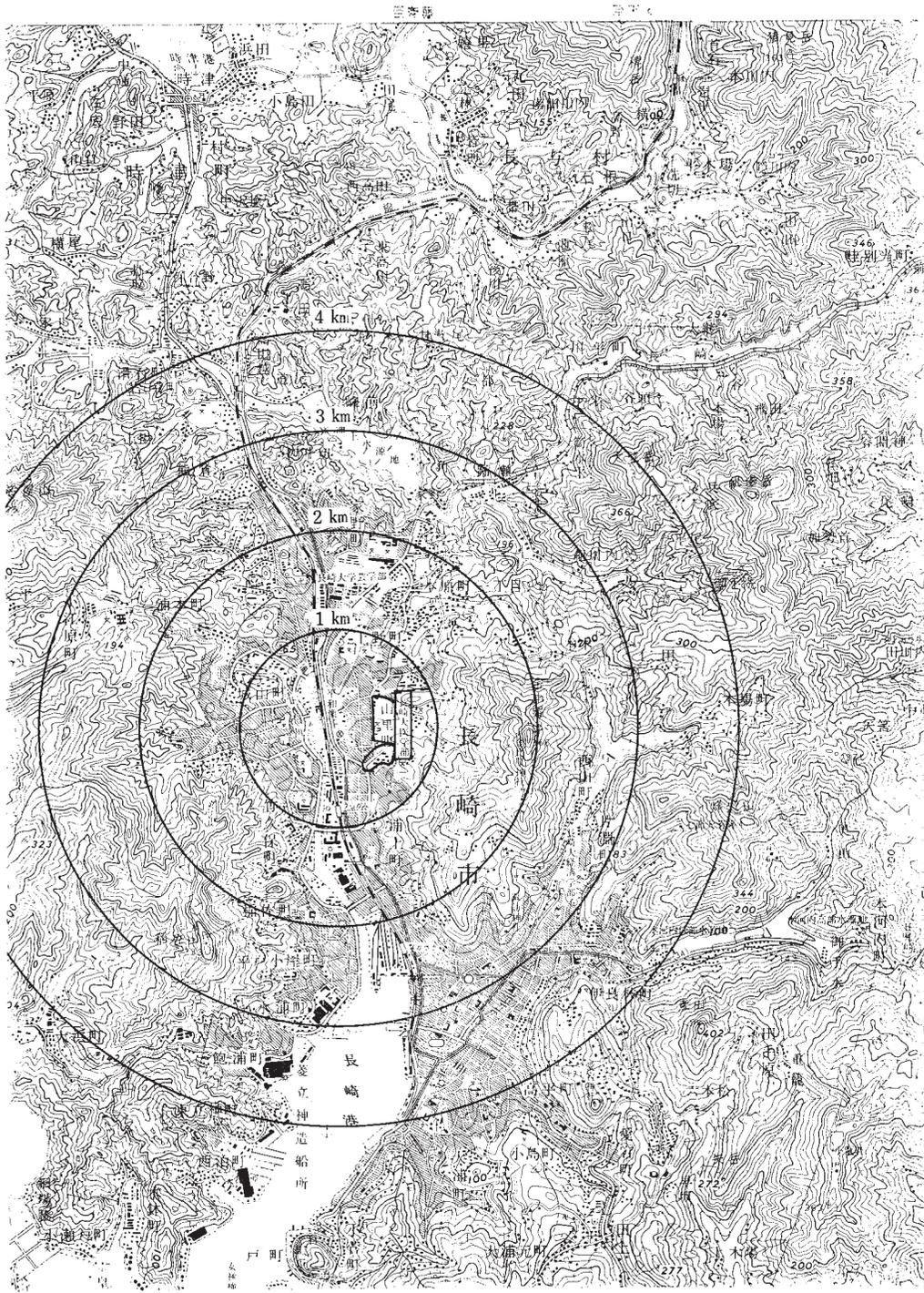
10. 目茶々に破壊された長崎製鋼所の工場
(大学病院の西南方約700m)



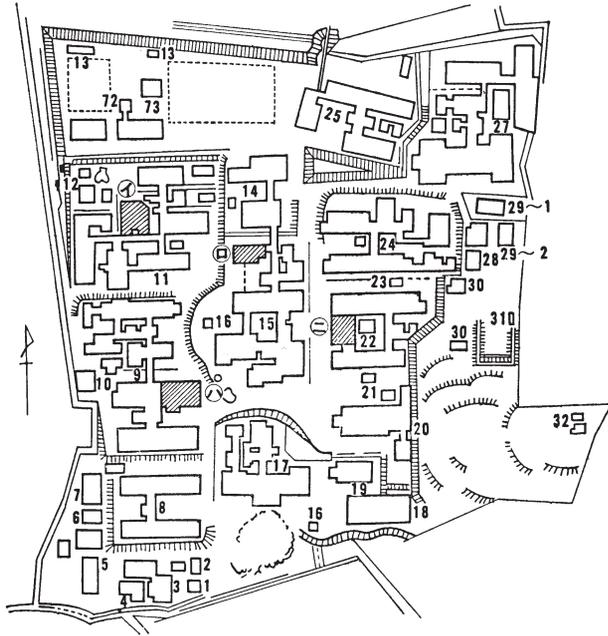
11.(a) 学部4年服巻勝之君の遺品



11.(b) 同 上



12. 爆心地浦上を中心とした長崎市の地図
(円の間隔は1 Km)

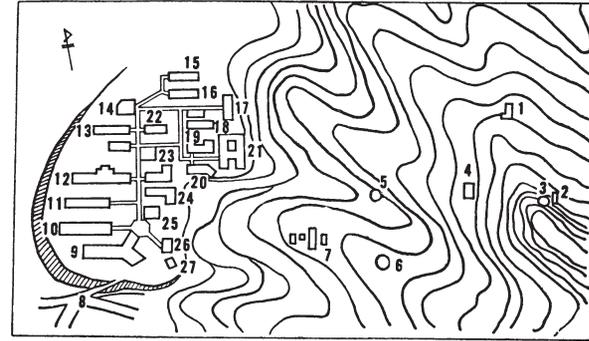


旧長崎医科大学基礎教室の配置図

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|---------|--------|----------|---------|-------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-------|---------------|-----------|-----------|--------|--------|-----------|-----------|---------|---------|-----------|----------|-----------|-----------|--------|------------|-------------|------------|------------|----------|---------|----------|------------|----------|
| 1. 門 | 2. 自動車庫 | 3. 配電室 | 4. 学生会議室 | 5. 柔剣道場 | 6. 物置 | 7. 機械工教室 | 8. 法医学教室 | 9. 病理学教室 | 10. 土壌学教室 | 11. 解剖学教室 | 12. 焼 | 13. 物置、便所及脱衣所 | 14. 細菌学教室 | 15. 衛生学教室 | 16. 銅像 | 17. 本館 | 18. 雨天体操場 | 19. 学生集書館 | 20. 図書館 | 21. 大講堂 | 22. 生理学教室 | 23. 蓄電池室 | 24. 生化学教室 | 25. 薬理学教室 | 26. 温室 | 27. 薬学専門部室 | 28. 水槽及ポンプ室 | 29-1. 銃器控室 | 29-2. 生徒控室 | 30. 大弓射場 | 31. 射的場 | 32. 睦会講堂 | 72. 医学専門部室 | 73. 生徒控室 |
|------|---------|--------|----------|---------|-------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-------|---------------|-----------|-----------|--------|--------|-----------|-----------|---------|---------|-----------|----------|-----------|-----------|--------|------------|-------------|------------|------------|----------|---------|----------|------------|----------|

備考：斜線は多数の学生が避難した講堂を示す。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ① 解剖学講堂 (医専1年生) | ② 衛生学講堂 (医専2年生) |
| ③ 病理学講堂 (学部2年生) | ④ 生理学講堂 (学部1年生) |



旧長崎医科大学附属病院及び東側丘陵の見取地図

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1. 丘の中腹の民家 倒壊したが焼けず、この家より米と釜を持ち出し握り飯を作って被爆者に配給した。 | 9. 外来本館：コンクリート建、地下1階、地上3階、全焼。 |
| 2. 穴弘法の茶店 倒壊、焼けず。 | 10. 内科病棟：地下1階、地上3階 |
| 3. 穴弘法 (様) 入口は幅55cm、高さ145cm、奥行は約3×3mの広さを有する洞窟で、奥に弘法大師が祀られている、一般の信仰が厚い。 | 11. 耳鼻咽喉科病棟：2階 |
| 4. 穴弘法寺 小さいが綺麗なお寺であった。真言宗、原爆の際倒壊、但し火災は起らなかった。 | 12. 外科病棟：3階 |
| 5. 放射線科の急設バラックの所在地で、私(調)は8月9日の夜ここで一夜を過ごした。 | 13. 産婦人科病棟：3階 |
| 6. 角尾学長及び高木附属医専部長が9日夜野宿されたところ。 | 14. 北講堂：階段教室 |
| 7. 保健婦養生所 古い木造建物、原爆爆発後間もなく発火炎上。 | 15. 小児科病棟：2階 |
| 8. 外来本館前の坂道 この坂道には人、馬などの死体が無数に見られた。 | 16. 眼科病棟：2階 |
| | 17. 精神科病棟：2階 |
| | 18. 皮膚泌尿器科病棟：2階 |
| | 19. 高北 (伝染病棟)：2階 |
| | 20. 高南 (結核病棟)：地下1階、地上2階 |
| | 21. 看護婦寄宿舍：木造2階 |
| | 22. 産婦人科手術室：2階 |
| | 23. 古屋野外科手術室：2階 |
| | 24. 調外科手術室：2階 |
| | 25. 南講堂：1階平面、2階階段 |
| | 26. 調理部：2階 |
| | 27. 洗濯室：2階 |

「忘れな草」に寄せて

長崎大学医学部長 教授 佐藤 純一郎

「忘れな草」の第四号が近く刊行されるという。

吾子二人を亡くされた調名誉教授が、精根を傾けての編集である。

巻頭の一頁を私に割いて下さるといふ。医学部長という職に在るがゆえであろうか。原爆にゆかりなきにしも非ずとのことであろうか。

「忘れな草」に寄せられた思出の数々、そこには肉親の悲しみがあり、嘆きがあり、憎しみがある。

思い出を書き綴ることによって自ら慰むとすれば、それも救いの一つであろう。

だが、私までが、それをここに書き記すつもりはない。

あの惨状を忘れ去ったというのではない。原爆直後の大学を焼き尽すあの炎を、師や友や教え子たちの死体を、手に触ればボロボロと崩れ去った骨の触感を、私の網膜は、そして私の

指の知覚は、いつ迄も覚えている。

曾て私は大学の思い出集「追憶」にこう記した。

「誌すべく何物も無きが如く感じ、誌すべくあまりにも多過ぎるが如く思い、また、それにもまして追想すること自体が、心の古傷を疼かせるがためである……」と。

その思いは今でも尚、そのまま生きているからである。

忘れな草は春から夏にかけて、藍色の小柄な花をつける草である。

あの日、この可憐な花が、「忘れな草」の命名者の眼に焼き付いたのもあろうか。命名の由来は私は知らない。

しかし、夏の野に忘れな草が花をつける毎に、過ぎし日の原爆の思い出を哀しみ、そして嘆きは、より深く、より切なく、涙を新たに誘うのであろうか……。



「忘れな草」第四号発刊について

調 来 助

「忘れな草」は、昭和四十三年四月に初号を発刊してより茲に四年、回を重ねると四回、初めは唯一回の刊行と思ひ、初号とも第一号とも明記しなかつたが、幸に多大の好評を博したので、遅れて到着した手記を追加として第二号に蒐録し、これで終る積りであつたところ、四十四年八月九日が丁度二十五回忌に該当したので、改めて遺族の方々に相談して、故人の写真及び遺稿を集め、翌四十五年三月にその第三号を出版した。さて愈々これが最後と思ひ、遺族の方にもその由を申し伝えておいたが、色々の理由で遅れた方が大勢あり、折角提出して頂いた写真も沢山集まつたので、思ひ切つて第四号を発刊することを決心した。

私も今年七十二才、いっお迎えが来るか測り知れぬ年齢となつた。久しく文通を辱うした方々も次々に他界されて、少なからず寂寥を痛感している今日、一応は所期の目的を達したと思われるので、以後は本という形でなく、パンフレット型式のもので、遺族の方々の連絡を続けたいと思つている。この点あしからず御諒承をお願い致したい。

お蔭を以て今回も一八九名の方から御手記を戴き、二〇〇頁程度の本が出せそうで、編集者としてこの上の喜びはない。寄稿者の方々に、心から御礼を申し上げる次第である。

「忘れな草」の思い出あれこれ

調 来 助

本誌の刊行を企図した昭和四十二年の夏以来、今日まで約四年半を経過したが、そ

の間に四巻を発刊することが出来、四四五人の遺族の方々、及び三〇人の先輩・同僚の方々から、貴重な「原爆思い出の手記」を戴いて、略々誤りのない当時の情勢、特に原爆被爆の悲惨さを、表現し得たように考へる。寄稿者の方々には心からお礼を申し上げます。

本誌の印刷は終始当地の同文印刷株式会社にお願ひし、この間毎熊修爾氏には一方ならぬお世話を受けた。遺族会を代表して衷心感謝申し上げます。

「忘れな草」の名は、実は私が勝手につけた名で、漢字に直せば「勿忘草」、英語では forget-me-not——原爆を忘れず、その犠牲となつた我が子、我が兄弟を忘れず、永遠に心に秘めて、死者の霊を慰めようとの願ひから、付けさせて頂いた。新版世界大百科辞典を繙くと、その花は藍青色の可愛らしい花で、花言葉は「真の愛」とのことである。どうか永久に忘れられない、大衆に愛される本であつて貰いたい、と希つている。

遺族からの寄稿者は、四巻を通じて四四五人のほり、この中一回寄稿者が二二一人、二回の人が一四七人、三回の人が七四人、四回の人が三人で、延べにすると七四九の手記が寄せられたことになる。その内訳は第一号が二五六、第二号が一四、第三号が二八八、第四号が一九一で、頁数もそれに応じて、第一号が一七五頁、第二号が一九頁、第三号が二九八頁、第四号が二〇〇頁余となつた。

ひところ私は、この四巻を適当に編集し直して一冊の本に纏め、遺族の方だけでなく、一般の人達にも読んで頂いたら、と考へた事もあつたが、それは大変な事業で、作家でも文筆家でもない私には至難な業であり、且つは出版社に多大の迷惑をかける懼れもあつて、遂に思い止まらざるを得なかつた。惜しいような気もする。

「忘れな草」は、第一号を一、一〇〇部、第二号を八〇〇部、第三号を一、三〇〇部、第四号を一、〇〇〇部印刷したが、第一号は私の手許に唯一部を残すのみで絶版となり、第二号は四三部、第三号は七八部残っているが、これも絶版となつているので、やがてはこの世から姿を消すであろう。第四号は今印刷したばかりなので、どれだけを一般の用に供し得るか、全く不明の状態にあるが、私も寄稿者の方と共に、心

魂を打ち込んで作りあげた本なので、一冊でも多くの方々に読んで頂きたいのが、現在の偽らざる心境である。

昭和四十五年と四十六年の慰霊祭

調 来 助
田 吉 子 乙

毎年春に出版していた「忘れな草」が、私(調)個人の事情で大変遅れましたので、二年分の報告と一緒にせねばならぬようになりました。遺族会の皆様には甚だ申訳ありませんが、あしからず御諒承のほどお願い申し上げます。

昭和四十五年の慰霊祭

調 来 助

今年も丁度あの日を思い出させるように、真夏の太陽が燦々と照り輝く暑い暑い日だった。にも拘らず、今年が惨禍の日から満二十五年の年忌に当るせいか、昨年にも劣らぬ大勢の参拝者があって、我々当事者も、感激と感謝の気持ちで、涙の出るほど嬉しかった。殊に九十歳になられる片山愛而様が、福岡県築上郡から、酷暑の中を遠路御参列下さったのには、自ら頭が下り、地下の片山道生君(学部三年のとき原爆死、名簿番号八七)も、定めて喜ばれたことと思う。

慰霊祭は昨年と同じく、聖徳寺住職の説経に始まり、十一時二分に合せて黙祷、佐藤医学部長代理青木教授の御挨拶、それに私も一言皆様にお礼の言葉を述べ、再び説経の中に三々五々入念の焼香をすませて、同窓記念会館の二階に集合し、恒例の遺族懇談会に移った。その時の模様は田吉女史の報告に詳しく書かれているので、その方を御覧いただきたい。

原爆二十五周年忌の慰霊祭

田 吉 子 乙

昭和四十五年八月九日、遂に原爆二十五周年の記念日を迎えた。あの日を想わせる快晴の十一時二分!! ゲビロが丘に集う遺族はこの丘に立ち、九州各地はもとより、

遠路中国地方より、或いは四国より、爆死した学生達の遺族の心は、皆一つなのである。月日は遠く去るとも、心に浮ぶあの時の惨状は変ることなく、互に悲憤の憶いを語り合ったのであった。

然し年移れば人は齡を重ね、一人一人の家の中の変遷を求むれば、あの時爆死したあの子が生きてあれば——という言葉の重みは、あの時を知るものでなければ、わからぬものと考ええる。

例によって同窓会館の懇談会の席上で、年老いた親心が、縷々として披歴されたのである。概要を記せば次の通りであった。

(一)昭和四十二年に靖国神社に祀られ、続いて見舞金七万円を下賜されたことは、真に感謝に耐えない。

(二)特に調査長初め、世話人となって行動して下さった方々には、その労に対して厚く感謝するものである。

(三)然し考えてみれば、他の学校において爆死した学生生徒は、準軍属として認められ、その遺族も丁重に、僅かといえども年金が下賜されているのに、なぜ長崎大学の学生には、その恩典がないのか。

(四)長崎市内の遺族のみに御苦勞をかけては相済まぬので、他県に散在するものも、何とかお手伝したいものである。

(五)運動資金を集めてでも、もっと積極的に陳情をしては如何?

(六)の発言に対して、蒲原理事より、「金二千円程度の寄付を募ってはどうか」との発言があり、一同拍手のうちに可決して、直ちに二十数名の方々が寄付をよせられた。その有様に接し、吾が子を憶う心も偲ばれて、つい涙ぐましくなった。

それに先立ち、調査長より昨年来の経過報告があり、田吉、大楠、瀧川よりもそれぞれ報告が行われた。何れにしても、年毎に齡を加えられる遺族達のこと、或いは毎年他界して逝かれる消息を知るにつけ、今更のように人命の儂さを思い、吾が子等の戦死を人並に認められたしと希う心で、一ぱいになるのであった。

その後九月、十月と、遺族の方々の手紙と運動資金が、続々と会長調先生の許に集

り、会長は感激しつつ御老軀に鞭打って、或る時は福岡の大学に戦時中の文部省通牒を探され（長崎医大のは焼失した為）、或る時は他県の遺族を訪ねて他県選出の代議士にも会われ、大阪、名古屋、東京など至る処の遺族の招きにも応じて、実に遺族達の生活問題と、死亡学生への公正な処置を希うことに取組んで居られる日常は、近くに居らねばとても理解出来ない状況であることを、お伝えしたい。

その間に政府の要人との手紙のやりとりにも暇なく、時折り訪れると手紙等の中に坐して、細々と返書をしたためて居られる根気のよさは、誠に学者肌の先生なればこそと、心ひそかに感嘆に耐えぬ次第である。

さもあれ、お互に寄る年波に疲れも速く、病氣にも勝てぬことを考えれば、早く初心を達して子の霊に告げ、平和を希う心を平等に得たいものと、合掌したくなる。

(四五、一一、二〇)

昭和四十六年の慰霊祭

調 来 助

今年はその惨劇の日から満二十六年、仏事や神事の年忌を過ぎると、さすがに報道陣の動きも少なく、世の中は原爆の災禍を忘れたような静けさであったが、我々は生ある限りあの悲惨事を忘却することは出来ず、又犠牲になった人々のためにも法養を営むのは当然のことなので、七月中旬、犠牲学徒の遺族の方には遺族会から、その他の遺族の方には大学から、それぞれ案内状を差上げることにした。然し余り遠方の方々は却って御迷惑ではないかと考え、今年は九州管内、及び中国、四国の方々にだけに出すこととした。東京、近畿、その他遠隔の方々へは大変失礼でしたが、悪しからず御諒恕をお願い致したい。

八月九日は毎年快晴で、昭和二十年のあの日を想わせるような暑さであったが、今年には朝からどんよりと曇り、十一時二分の黙祷の頃は、恰かも地下の霊を哀悼するかの如く、小雨がぱつぱつと降り降っていた。その後には戴いた花田静枝様（医大三年花田紀君の母室）の句

○ 雨降れば雨に思いの原爆忌

は、よくその情緒を現わしていると思う。

例年と同じく、グビロが丘の広場は遺族の方や大学関係者で埋めつくされ、黙祷、読経、焼香など、一段としめやかな雰囲気の中に行事は滞りなく終り、同窓会館二階での懇談会でも、溢れんばかり多数の遺族の方が集り、それに来賓として元長崎大学長古屋野宏平先生、社会党代議士中村重光氏の列席も辱うした。

先ず会長から一年間の経過報告があり、併せてこの一年間に二十人の年老いた遺族代表者の方が他界され、我々の運動が焦眉の急を要することを強調、古屋野学長からも、この運動が一日も早く達成されて、地下の霊を慰め、遺族の方々の安堵が得られるよう期待、且つ念願するとの激励のお言葉を頂戴した。

中村代議士は毎年本会に御出席下され、助言や激励のお言葉を頂いているが、今年も御多忙の時間をさかれて、御懇切なお話があり、本件は必ず成功するものと思うから、運動を継続するようにとのことであった。

続いて田吉チエ理事の陳情苦心談、蒲原盛男理事からは会計報告があり、遺族の古賀説一様（医大二年古賀洋一郎君の父上）からも激励のお言葉があつて、午後一時盛會裏に散会した。

(四六、九、二五)

昭和四十五年四月の国会陳情報告書

田 吉 チ エ

昭和四十四年夏から、調会長の手によって「忘れな草」第三号の出版準備が始まられ、約一年を経過して見事に完成、希望の会員のお手許に配布されたことは、御承知の通りであります。

この間全国に散在する遺族へ趣旨を連絡、原稿の依頼、写真集めなど、全く超人的の精力を傾けられた調先生の姿には、時折り訪問するのみの私は、只頭を下げて合掌するのみでした。集録も多分これが最後かも——などと、紙片の中に坐して御夫妻で話され、微笑を浮かべられる清廉なムードの中にひたると、ふっと涙ぐましくなるのを

禁じ得ませんでした。

二十五年前の遠い学生達の姿を憶い、遺族の哀愁を抱きつつ、緻密にして誤謬を嫌う学者肌の、人間味あふるる誠意の結集であるこの「忘れな草」、これを手にした各方面の方々が、押し戴いて感激される姿に、私もまた幾度か打たれました。一人居てページをめくり、吾が子の写真を眺めては、現代の平和の基礎となった子供に、年令を加えて祈る親心は、どなたも一つと存じます。

「そう、これを持って四十五年度の陳情に」と、期せずして発起人の心が一致し、四月下旬に上京することになりました。

要旨は、「この原爆死亡学生達の取扱いを、動員学徒並みにしてほしい」ということであります。期日は昭和四十五年度の靖国神社大祭に、調査長が出席される前後と定め、五月十二日に国会が終る以前にとなった訳です。かくして調、滝川、大楠、田吉の四人が、四月二十七日より五月一日までの予定で出かけました。顔触れがいつも同じなのは、前年度各方面に折衝した内容を、微細に知っていないと出来ぬことなので、メンバーが限定されるのは止むを得ないこととお許し下さい。それに上京の費用にも限度があり、多数の出席は不可能な現状であります。

次に日程を逐つて陳情の有様を記すと、次の通りであります。

四月二十七日午後三時五十分、特急さくらにて上京、二十八日午前十一時三十分東京着、荷物を預け、直ちに衆議院議員会館にかけつけた。途中警備員の配置が何となく物々しいので、尋ねると、今日は沖繩デーで午後より学生等のデモがあり、万一を警戒したもので、繁華街は窓の釘付け等も見受けられる始末、愚図々々しているところ帰れなくなるかも知れぬ、とおどされたが、郷土出身の代議士には是非会わねばならぬので、衆議院の倉成、西岡、中村重光、金子、白浜、小宮、松尾氏等、参議院の初村氏などの事務室を上ったり降ったりして、お願いして廻ったが、目下本会議寸前とかで、不在の方が殆んどであった。在室は小宮氏と金子氏であったが、ゆっくりお話を聞かない有様で、民社党の小宮氏などは初めてではあり、要点をつまんでお願いしたら、よく勉強して協力する、との事であった。

倉成氏に衆議院請願の紹介をお願いし、初村氏に参議院への紹介者となって頂いた。そして遂に午後四時となったので、デモの事もあり、急いで宿に引揚げた。

四月二十九日は天皇誕生日で、国会方面は全部休み、止むなく靖国神社に参拝してゆっくり学生達の眞福を祈り、我々遺族の願いが叶いますように祈って宿に帰り、明日の具体策を練って疲れを休めた。

四月三十日は張り切って目を覚したが、テレビが私鉄やバスのストを報じているので、大慌てに宿を出て議員会館に急ぎ、まだ一人も居ない待合室で待機、ここで調査長と合流した。

先ず初村氏に会って請願の件をお頼みし、次で西岡文部政務次官室に行く。事情に精しい次官は、快く善処する意を示され、一寸心ならず。次に社会労働委員長の倉成代議士に面会、珍らしく部屋に居られてお話をする。兎に角援護局長への面会をお世話下され、直ちに厚生省へ向った。然しストのため局長の出勤が午後になるとのこと、庶務課長に面会したが少しも要領を得ず、止むなく一旦引揚げて、午後一時過ぎ再び援護局長室を訪れた。次は局長とかわした問答の要点である。

調 先般来の取扱いで、防空監視中に爆死した三人の学生処置の件は、真に感謝に堪えない。当時大学に於ける学長命令は絶対的のもので。勅令や文部省令と同様に有力なものであった。学生はそれに服従して戦時態勢に協力していたもので、夏期休暇中の登校も、決して単なる勉学のみのもではなかった。他の動員学徒以上に、国の要請する軍医となる為の学習の外に、手不足の人命救助作業にも従事していた事実を認めて、その処遇を動員学徒と同じにして戴きたい。

局長 動員学徒は国家動員法による学徒勤労令によって、強制的に動かされていたものである。長崎大学の医学生は、そうとは認められない。

課長 医師を志したのはあくまで自由意志であって、七月以降作業場から大学に帰されたのは、本来の医師へ志す希望を入れたものである。

田吉 強制といえば、昭和二十年四月からの彼等の動きについて、例えば医専一年生の如きは、四月入学が延期されて、六月末まで工場で軍事に協力させられていたも

のであるし、七月からの動きも本人の意志ではなく、すべて国の強制によって素直に動いていたものである。

課長 医師となる本来の希望の通りに動かされたもので、本望だと思う。当時は国民全体が身を捧げていたので、学生のみではない。献身は当然の動きである。

田吉 夜も当番を立て、食事も持参で学校に詰めていたのは、医師の学習のためではなく、命令による強制的待機であった。七月以降も医師への学習のみでなく、軍の作業が多かったのを記憶している。日記を見ればその実情が判ると思つて、本日の陳情書に添えてあるので、それを見ていただきたい。

課長 当時の日本国民は、女も百姓もすべて待機の姿勢であった。学生故にといつて特別扱いは出来ない。

大楠 先般（昭和四十二年度）の見舞金七万円は、文部省から戴いて有難いと思つているが、これが厚生省から出ていたら動員学徒に扱えますか。

次長 あれば異例の見舞金で、原爆死した長崎大学であればこそ出されたもので、他の厚生省関係とは違った同情的のものである。

局長 動員学徒が現在の待遇となつた経過は、どうなっているか。

次長 昭和二十八年に弔慰金三万円下賜、三十四年に年金支給（但し五年間）、三十九年に準軍属として年金が支給されることとなり、現在に及んでいる。

大楠 その様であれば、大学生も年を遡うて是非善処していただきたい。

局長 現在では解決した事例となつているので困難であるが、遺族の心情はよくわかるので、夏休みを返上して動員されていた事実など、よく研究したいと思つてい

X X X

る。
以上はほんの要点だけを書いた次第であるが、中々容易でない様子であった。しかし全国に例のない原爆死のケースである点は認めておられるし、積極的リーダーとして大学生が救援作業に当り、兵と共に動いていた事実を必ずや調査して下さいと信じ、且つ地元選出代議士の超党派の熱意と温情に期待して、一先ず引揚げることに

した。

(四五、五一〇)

昭和四十五年秋の陳情の準備

調 来 助

今年八月九日の慰霊祭後の懇談会で、私初め、田吉、大楠、滝川の各理事が陳情の苦心談を申し上げましたところ、それが遺族の皆様に感銘を与えたとき、数人の遺族の方から、色々御助言を頂きました。

一、石井光次郎代議士を御紹介下さつた菅原文彦様御夫妻

八月二十五日付で逸早く、久留米の菅原文彦様（学部一年菅原寮二君の父上）及び令夫人のちよ様から、次のような文面の御芳書が届きました。

「二十五周年記念慰霊祭式典に参列致し、共々にありし日の倂、靈に相まみゆる思いでございました。また先生はじめ中村代議士の御努力を承り（倉成議員と共に御協力）、田吉、大楠両夫人方の切々なるお言葉伺ひまして、感激と感謝で一杯でございました。若くして尊い犠牲となりました靈に捧げんと御心境を承り、私共も陰ながら微力を捧げたいと心に誓いました。早速久留米にある石井代議士の事務所にお伺いして、秘書の中垣氏にお話ししました処、すぐに東京事務所にお電話下され、久留米で石井先生に御面会出来る日取りなど、打合せて頂きました。

久留米には長崎医大の同窓会員が十二、三名ほど居ります。主人は老体ですが、久原孝夫氏（長大第一外科出身、同窓会の世話人）はじめ、笠豊治氏（内科、世話人）、北里第三氏（内科、前世話人）、井出速見氏（内科）の方々も皆、母校の恩師、後輩生徒のために、是非とも協力せねばと申しておられます。

何れ石井先生との面会の日取りも決りますので、その節は是非お出で下さいませ。お待ち致して居ります。」

その後石井代議士との面会日が九月二十七日と決定したので、前日午後久留米に赴き、久原氏宅に一泊して、翌二十七日早朝に石井代議士にお目にかかり、長崎医大

原爆死亡学生の処理につき、これまでの経過を縷々御説明申上げ、善処方をお願い致しました。石井代議士はこの件については全く御存知なかったが、関係当局に聞いた上、出来たら何とかしたいとのことでした。

同日午後、菅原様のお宅に同地方の遺族の方十人余りお集りになり、御馳走を戴きながら種々懇談して、なごやかな秋のひと時を過しました。このことは菅原様の御手記に詳しく書かれていますので、ここでは省略させていただきます。(二二頁参照)

二、三池信代議士を御紹介下さった江口虎三郎様

江口様(学部二年江口宏君の父上、元長崎医大付属薬専の教授兼部長)からは、八月三十一日付で、次のようなお手紙を頂きました。

「先日西日本新聞で、長崎大学の原爆犠牲者徒に対し、動員学徒に準じた取り扱いをして頂くよう、陳情して居られる趣きの記事を拝見致しました。

実は私の家のすぐ近所に、私の子供の時から友人であり、現在自民党代議士(九回選出)である三池信君というものがいます。

この間帰郷しましたので、西日本新聞の記事の趣を話し、長崎医大の調名誉教授(犠牲者徒の遺族会々長)が、この件について非常に骨折って下さっているので、一度本省に行って事情を聞いてくれ、そして調教授に最大限の協力援助をしてくれるよう頼みました。直ぐ本省に行ってみるとの事でした。

前述の通り、三池君は私の子供時代からの親友であり、立派な男で、所謂政治屋ではありません、必要な時は同君にも相談されたら、と存じます。」

この様な書簡を受取ったので、若し江口先生が我々と一緒に上京されて、三池代議士その他に陳情して下さいたら、この上もない幸と考え、十月五日に先生の住所である佐賀県神埼郡三田川町に赴き、上京の件をお願い致しました。

江口先生のお宅には既に中山フク様(医専二年中山喜昭君の母上)、生島クラ様

(医専二年生島一夫君の母上)、原テイ様(医学一年原襄君の母上)、川崎美和子様(薬専二年吉田一馬君の令妹)が来て居られ、皆で協議の結果、江口先生から快諾の

御返事を得ることが出来ました。

三、大坪保雄代議士を御紹介下さった古賀説一様

古賀様(学部二年古賀洋一郎君の父上)からは、十月十六日付で次のような文面のお手紙を頂きました。

「本日先生の陳情書と、石井光次郎先生御紹介のプリントを拝見致しました。私も石井先生の同志である自民党代議士、大坪保雄先生と懇意に致して居りますので、本日大坪先生に手紙を出しておきました。御上京の折には是非大坪先生にも御面会の上御陳情下さいますようお願い申し上げます。」

四、大平正芳代議士を御紹介下さった菅和人様

菅様(学部二年菅道之君の父上)からも、次の様なお手紙を頂きました。

「本日遺族援護についての陳情書を拝見致しました。遺族会の役員の方々が、衆議院その他を御訪問の由。就ては自民党代議士の大平正芳先生は、香川県第二区選出で池田内閣のとき官房長官、外務大臣、佐藤内閣のとき通産大臣をして居りました。党内でも色々役員をされております事は、既に御承知の事と存じますが、小生は香川県綾歌郡宇多津町の大平後援会の役員をして居りますし、夫人しげ子様は家内弥生とは昵懇で、御帰省の際は度々お目にかかつて居ります。

大平先生は非常にお忙しく、寸暇もないと思いますが、本日同封しました端書二枚を提出の上、御陳情なされては如何かと存じます。先は取急ぎ要用まで。」

五、進藤一馬代議士を御紹介下さった岩永宝作様

岩永様(医専一年岩永功君の父上)からは次のようなお手紙を頂きました。

「政府へ御提出の陳情書を本日拝見させて頂きました。原爆被爆学生援護方については、私も日頃個人的に親しくして居ります自民党代議士進藤一馬先生(福岡県一区選出)へ、別に依頼状を出しておきますので、御上京の折は是非御面会の上陳情されますよう、お願い申し上げます。」

六、加藤六月代議士を御紹介下さった三村仲二様

三村様(医大二年三村寛君の父上)からも、岡山県選出の自民党代議士加藤六月氏を紹介して頂きました。お手紙が見当たらないので、ここに転載することは出来ません

が、内容は全く前の方々と同様の文面でした。

七、佐藤首相夫人寛子様との交渉を仲介して頂いた田中澄江女史

昨昭和四十五年、一年間を通してNHKのホームドラマ「虹」が放送された事は、皆様の記憶に新しいことと思えます。丁度八月九日の原爆記念日の頃、そのドラマで長崎被爆のことが放送され、医大の被害状況など詳しく述べられたので、私は非常な感銘と喜びを覚え、作者の田中澄江女史に早速お礼状を差上げました。

すると女史から折返し、「私の主人の父は元長崎医大教授、義弟も長崎医大卒で、医大とは他人のような気がしないので、私に出来ることがあったらさせてほしい。例えば佐藤寛子夫人にお願ひするようなことなど——」という葉書が来ました。因みに女史の御主人は同じく作家の田中未知夫氏で、そのお父上は医大の内科教授だった田中民夫先生であります。

首相夫人と聞いて少々恐れをなしましたが、この好機を逸してはと考え、思いきって、首相夫人にお見せしても差支えないような、暗に佐藤首相に陳情するような書簡を、田中女史の許に送りました。

その後女史の提案で「忘れな草」を首相夫人に贈り、秘書からの電話で、「首相も陳情書を御覧になって、一応関係当局に調べさせてみよう」と云って居られる。由を承りましたが、臨時国会中で政界は多事多端な時期でもあり、その後は何の音沙汰もなく今日に至っております。田中女史も心配して時々様子を尋ねられますが、何とも返事の仕様がなく、私もほとほと困っている次第です。

(四六、九、二〇)

昭和四十五年秋の陳情

田 吉 チ エ

昭和四十六年度の予算編成は、四十五年の秋から始まって十二月に決定するので、その前には非厚生省や文部省にお願ひせねばと、十月下旬に上京することになった。

今度は長崎県ばかりでなく、他県代議士への陳情も併せ行いたいというので、佐賀

の江口虎三郎先生（元長崎医大薬学専門部長）にもお願ひして同行して頂いた。その他は調先生を初め、滝川、田吉、大楠の一行で、大楠女史は稍々健康を害しておられたが、じつとしては居られぬという熱意で参加された。

十月二十四日長崎発で、二十五日午後東京着、二十六日から陳情を開始した。流石に東京の風は冷い。午前九時第二議員会館に集合、先ず長崎県の代議士の方々を訪れた。倉成先生、西岡先生、白浜先生、金子先生、中村弘海先生、中村重光先生、次で参議院会館に行き、田口先生、初村先生、等々、室の内外を問わず、お暇をみては陳情をし、どうしても不在で会えない時は、秘書の方に細々と伝言を頼んだ。

午後は厚生省へ行き、先ず大臣官房企画室長の江間時彦氏を訪ねた。同氏は医専一年故松田藤祐君の義兄（姉婿）に当る人で、我々の運動にも深い理解があり、この日も自ら武藤援護局長のお部屋まで案内して頂いた。

武藤局長とは細部に亘る質疑応答を重ねたが、特に調会長は「医専一年生が六月まで工場に動員されていたのを、短期間に軍医を養成するために、七月から急遽医大へ移されたのは、工場動員よりも緊急を要する学校動員へ転換されたものであって、普通の動員学徒と少しも変りがない」ことを強調し、「その他の長崎医大生も、速かに軍医となって出征するために、日夜中央司令による特別訓練に励み、一旦有事の際は学外に出て救護に従事するなど、準軍属に等しい行動をとっていたことを高く評価され、どうか動員学徒と同様の取扱いをして頂きたい」と懇願された。

然し問題は終始回転して、法律問題の細部に亘ると行詰り勝ちとなり、結局は資料の研究不足で快い解答が得られず、残念ながら再度の運動に余地を残して引揚げねばならなかった。唯ここで従来と異って問題になった点は、軍医依託生の件と、昭和三十六年以来援護法に適用されている学生の遺族が数名あることであった。

軍医依託生の件は以前から問題にする積りで、遺族の方にも調会長から問合せの手紙を出されたが、記憶が判然しない方も多く、会長が官報で調べられた時も、人名の発見が困難だったようで、生残りの海軍軍医学生（依託生）から借りた辞令も、厚生省はただプリントしただけで、言を左右にして之を承認しようとはされなかった。

間違つて既に年金を貰っている数名についても、「そんな筈はない、当方で詳細に調査して返事する」との事であった。我々はそれらの人達に迷惑のかかるような発言はせず、唯他の学生の場合もこれと不公平にならないように、全員を援護法に適用して頂きたい旨を強調して、一応引きさがることにしたのである。

翌二十七日も午前九時より議員会館に出かけ、江口先生の御案内で自民党の三池信代議員にお目にかかった。九回も当選された方だけあって、政界の事情にも精通され又立派な人格者で、江口先生や私達の言葉に耳を傾けられ、色々有難い助言を頂いたばかりでなく、要職にある、御呢懇の伊能繁次郎代議員（千葉県選出、自民党）の許まで自ら御案内下され、我々の意中を充分お話しして頂いた。洵に感謝に堪えない。

次で大坪保雄代議員（佐賀県）にもお目にかかれてお願いしたが、大平正芳代議員（香川県）、加藤六月代議員（岡山県）、進藤一馬代議員（福岡県）の方々は御多忙のため面接の機会が得られず、遺憾ながら秘書の方に言伝をお願いして、夕暮れ近く議員会館を辞した。

東京の午後は陽の落ち方も早く、裾を吹く冷風は私共にとって益々冷いものであった。然しあの二十五年前を憶えば、軍も民も一つになり、学生も銃後を守る第一線で闘つて無残に爆死したのに、どうして準軍属はおろか、動員学徒の中にも入ることが出来ないのか、この疑問が解けぬ限り遺族の心は釈然とせぬ、と自分に云い聞かせ、ヘトヘトの体を宿に引揚げた次第である。

この度の陳情を振り返ってみると、要は法律の解釈問題であり、政府を動かす資料の問題なので、帰つたら原選出代議員の総力にお頼りせねば、と考えた。

友人同志抱き合つて死んだあの子等の事や、師弟の恩愛の姿を思えば、まだ何か遺族のために為さねばならぬ大きな力がありそうで、このまま引き下る訳にはゆかぬと、私は夜のとばりの中に起きて、考えつづけている。（四五、一一、二〇夜）

昭和四十五年秋に提出した陳情書

私は昭和二十年八月九日、長崎市に投下された原子爆弾を身をもって体験し、倥傯にも九死に一生を得たのでありますが、昭和四十年三月に長崎大学医学部教授を定年退官して以来、原爆死亡学生の遺族の一人である故を以て、旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会の会長を勤めることになりました。

愛児を喪つて不遇の日々を送っている老齢遺族の惨状を見るにつけ、これを黙視するに忍びず、同志教名と相図つて、政府御当局に対し、死亡学生の靖国神社合祀並びにその遺族の援護を請願致し、併せて戦争の残忍さ、原爆の恐ろしさを世の人々に知らせるために、昭和四十三年以来、遺族の原爆思い出の手記集「忘れな草」を発刊して今日に至りました。

政府御当局並びに国会議員の方々におかれては、我々遺族の衷情を御賢察下され、昭和四十二年度には文部省予算より遺族一名当り七万円の御見舞金を下付せられ、且つ死亡学生の靖国神社合祀を快く認可していただきました。遺族の欣びは甚しく、衷心より感謝申上げた次第であります。

然しながら、これら遺族の大多数は、高齢に達した父又は母であり、而もその約三分の一は既に死亡し、存命中のものも殆んど七十才以上、中には八十才を越ゆるものも少くない現状であります。そしてこれら高齢の遺族は、夫婦揃いでない限り、親戚の家に寄寓するものが多く、中には病氣入院中のももあり、七十才を越えながら女中奉公をしている人もあります。これらの遺族たちは、七万円のお見舞金に感謝しながらも、何とかして年金が戴けたらと聊かながら、不安な心細い余生を送っている状態であります。

私共は数年来援護年金の御支給を請願申上げて参りましたが、「当時長崎医科大学の学生は動員されておらず、授業中に原爆を被爆した」という理由のもとに、動員学徒中にも加えられず、二十余年間、何等の恩典にも浴することなく過して来たのであります。

の最重要地点の一である事を考えれば、長崎に笈を負う我等若人の責務や重且大なるものがあるのである。

九月十八日、満州事変十周年記念日を卜し、本学の報国隊結成式が挙行されたが、其の際の角尾地方部長兼隊長の切々たる訓辞は、実に我等聒く者の肺腑をつくものがあつた。我等は期待に反く事なく、我等の道を邁進せん。大東亜建設の高き使命に向つて、今や我が長崎医大報国隊の勇壮なる大行進は、既に進発を起したのである。

防護団と報国隊

学生主事 池田吉人

(昭和十七年三月三十一日発行の団報より抜萃)

長崎医科大学防護団は、昭和十二年九月二十九日、勅令第五五〇号を以て公布せられたる官庁防空令の定むるところに従つて設立せられたる機関であつて、本令第一条に謳われたる「国家に於て管理する施設」、即ち本学に於ては長崎医科大学に含まれるあらゆる施設に関する防空の実施を目的とする。

従つて本学防護団では、その規約第一条に「本団は戦時、事変又は震災に際し、警備と防衛に備ふる為め之を組織す」。「本団は本学職員（この場合従業員を含む）、学生、生徒及び患者並に建物等を防護することを目的とし、時機に依り、学外の救護にも従事することあるべし」と定め、之が運用に便なるため、一部八班、即ち

- 一、本部
- 二、部局班（各教室、学部、付属医専、付属薬専、大学事務、物理的療法科、薬局並に病院事務の二十五班）

三、警備班

四、救護班

五、防毒班

六、防火班

七、避難所管理班

八、工作班
九、配給班

をおき、各班はそれぞれ、その名称の示すところによつて理解せらるる様な仕事を、分担することとしてある。

これに対し、「本学々生、生徒は、右諸班の作業を補助す。其の編成等に関しては学生主事に於て之を定め、団長に報告するものとす。その変更に付いても亦同じ」とも規定されており、学生生徒は当然防護団の一大構成要員であるのである。

一方に於て、かくの如き機関のあるところへ、更に地方に於て昨夏学校報国隊なるものが結成せられて、昨春来発足した平時の修練機関たる学校報国団を以て、有事即応の措置を速かに講じ得る様、指揮命令系統の確立せる隊組織となし、統制規律ある体制を整備し、修練強化と共に、平素修練せるところの体力と学力の総てを挙げて、有事の際には国家的要請に基く各種の要務に服し、以て公に報することとなつたのである。

長崎医科大学報国隊は茲に於て本隊と特技隊と、特別警備隊とを組織し、特技隊は之を医療班、担架班及び防毒班に分ち、常時充分なる訓練を行い、有事即応の態勢をとることとなつてゐるが、長崎医科大学報国隊と云うからは、大学、薬専及び医専を併せてその最も得意とする分野に於て活動することが、最も有効適切なる奉公でなければならぬから、勢ひ我が長崎医科大学報国隊の実際上の活動分野は、医療と防毒であり、之に不可分の関係にある担架の仕事も亦不可欠のものである。これ等の任務を有する特技隊は、国家的要請ある場合には報国隊長の命により、概ね特別警備隊と共に有機的に合同協力して、学外に挺身、以て難を救うのである。

翻つて考えると、長崎医科大学防護団にも既に救護班あり、防毒班あり、而して又「時機に応じて学外の救護にも従事することあるべし」と定められてある。想うに、我が防護団を組織するものは、職員と学生生徒と従業員とである。又我が防護団員は即ち報国隊員であつて、従業員を除いた職員と学生生徒より成り、上に戴く団長又は隊長は即ち学長その人であるから、報国隊と防護団とは、一にして二ならず、防護団

の救護班が外に出ずれば即ち報国隊医療隊及び担架隊となり、防護団の防毒班はそのままに報国隊のそれである。報国隊特別警備隊は、その任務の性質上、常に学外における活動を目的とするが故に、学内のための防護団における役目は免除されてある。その代り場合によっては、報国隊担架隊としての活動を要請されることがある。

換言すれば、本学を護る銃後のものは防護団であり、本学を護るのみならず、学外にも出でて奉公するところのものは報国隊である。而してその時主としてその第一線に立つものは、本学報国隊の真髓を發揮すべき特技隊及び特別警備隊であるのである。

報国隊員が学外に挺身して充分なる活動をなし、救護の実を挙げ、我が長崎医科大学の名譽を宣揚し得るは、偏に防護団員の銃後鉄壁の護りがあればこそであるから、内に残った防護団員各自の責務も亦、寔に重且つ大である。

一朝事ありて報国隊の特技隊員として部署につくも、その責務に毫末も軽重の別あるべからず。

それ故に学生生徒諸君には、右の趣旨を理解せられ、選ばれて特技隊員たり、特別警備隊員たるものは、常に長崎医科大学の名譽のために、自重自愛、当然持たるべき気高き矜持に相応わしい訓練を平素より心懸けらるべく、又命を受けて防護団の要員として学内の護りに就くものは、その責務の重大さを認識して、それぞれの部署を守り、平素より各自の持場に親しみ、訓練を怠ることなき様切望する次第である。

原爆死亡学生たちの遺稿集「忘れな草」第三号より抜萃

一、付属医専一年生 故秋口明海君の日記より

【昭和二十年七月一日、日、小雨】 小雨を降る中に校庭で医専の入学式が行われた。学長の訓辞に、「医専は我國に於ける唯一の勉学続行の学校である。故に諸君は國家から医専に動員されたのだ、という覚悟の下に勉学に努めよ」とあった。続いて医大の学徒報国隊の結成式が行われた。

【七月二日、月、曇後晴】 報国隊の編成が行われ、僕は第一小队第一分隊に編入

された。担任は学生主事の小野教授。授業はなく、空襲に備えて病院廊下の瓦裂ぎをやる。

【七月三日、火、晴】 田上^{たがみ}に軍の陣地構築作業に行く。塚廻りだった。

【七月十五日、日、曇】 今日^{たがみ}は薬理学教室の疎開作業をした。日曜日^{たがみ}も休みなし。

【七月十八日、水、曇】 今日^{たがみ}も防空当番だ。一晚中眠れないだろう。

【七月二十七日、金、晴】 十二時半頃空襲警報が発令され、総員配置につく。

【七月三十日、月、曇】 午後は病院の疎開作業をやる。皆汗だくだ。

【七月三十一日、火、晴】 朝九時半に空襲警報が発令され、総員配置につく。十時半頃敵機が間断なく上空に現われ、友軍機との間に空中戦が展開された。

【八月一日、水、晴後曇】 生涯忘れられない日である。十一時半頃警報が出て防空配置についていると、敵機が上空に現われ、猛然火を吐く地上砲火、暫らく両者の交戦に見とれていると、突然頭上に土砂が崩れ落ち、やられたッとはかり附近の教室の床下に潜り込む。第一波が去ったので這い出してみると、病院は濛々たる煙に包まれている。我々消火班員は、それッとはかりポンプを担いで消火に駆けつけた。火事は産婦人科教室、敵の波状攻撃の合間を見ては消火を懸命にやる。皆真剣そのものだった。この波状攻撃で、区専三年の永見君と二年の大野、益田両君が尊い犠牲者となられた。全身に敵愾心が湧き立つのを感じる。

【八月二日、木、晴後曇雨】 今日^{たがみ}は病院の清掃作業、僕は梅木、秋吉両君と第一解剖の蛸壺式防空壕掘りをやり、午后三時まででどうやら完成した。午后は五時から九時まで防空当直。

【八月三日、金、風雨】 今日^{たがみ}も病院の復旧作業、僕等は高南病棟近くに落ちた爆弾の穴埋め、直径十米もある大きな摺鉢の穴だ。雨の中を二時頃まで作業して予定を終了。学校へ帰っていると、又婦人科に行けとのこと、へとへとに疲れて四時半ごろ帰宅。

【八月四日、土、雨後曇】 九時から校内清掃作業、僕等の受持は薬専の倒潰電柱の

復旧、今日も雨で困ったが、三時頃終る。

【八月五日、日、晴】 今日から講義が始まった。

【八月六日、月、晴】 午前九時十分頃警報が出て、午前中の講義は全部休講、午後一時より大講堂で八月一日爆死の三君の学徒隊葬あり、高木部長の弔辞は哀悼の情惻々として、吾人の胸に迫るものがあつた。我々は三君の屍を越えて、愈々怨敵撃滅に邁進するばかりだ。

二、医学部仮卒業生 故村上吉作君の遺言状と通信文

【遺言状】 皇国の為大東亜戦の花と散る。男子の本懐之に過ぐるものなし。七度生れて敵国を撃滅せん。

【通信文の一節】 この度医科を除く他の専門学校は殆んど入営することとなり、医科だけが特別扱いを受けている以上、我々もその積りで緊張して居るべきだと思ふ。

(昭和二十年三月六日付)

三、医学部四年生 故上原利之君が令妹に与えた訓辞

我が妹に捧ぐ。汝の健康と多幸を祈りつつ、克く両親に仕え、良妻賢母たるべし。太く短く、吾等が人生は暗夜の空に美しく咲いて散り行く、華麗なる彼の火花の如くあり度きものなり。維新の大業、大東亜戦争下に生を享けし我等、恋々として生命を永らえんよりは、無窮なる民族の生命の礎として、無窮の大義に生きん。

(皇紀二六〇四年四月九日付)

四、医学部四年生 故中尾守男君が母上に与えた書簡の一節

今日も朝から五回、当地は空襲を受けました。正に九州は決戦場です。

(昭和二十年五月十四日付)

五、医学部二年生 故大場次郎君が母上に与えた書簡の一節

本来なら夏休みで帰るのですが、次第に戦局が悪化し、負傷者も多くなり、医者が不足する一方なので、政府は夏休中も勉強させ、一日も早く卒業させて戦地へ送る積りです。

六、医学部一年生 故大西俊夫君が叔父上に宛てた書簡の一節

文科の生徒は続々と軍人になって、直接国家のお役に立って戦地へ参りますが、我々理科生は銃後——と申しても今は前線ですが——で挺身すべく命ぜられています。

(昭和二十年四月七日付)

七、医学部一年生 故野津恭君が出征中の兄上に宛てた書簡の一節

戦局は息ずまる如き緊迫感を与えるようになり、敵の本土上陸必須の時、皇恩に報い奉る時は今、と張切っています。

八、医専三年生 故青木茂君が父上に宛てた書簡の一節

連日の空襲で、無事だった病院が今日遂にやられました。私は友人数名と共に、皮膚科棟の屋上で監視をしていたのですが、突然雲間より出て来た編隊数機が、我々を目掛けて直進し、約四十五度の角度から投弾しました。驚いて屋上から駆け下りましたが、あと二、三段で地下室という所で、猛烈な音と共に身近くに白煙があたり、爆風で身体が少し浮いたようでしたが、その瞬間自分がどうしていたか、今から考えても思い出せません。

気がついてみたら階段の下の所で、眼と耳を掩って倒れていました。周囲は真白に立ちこめた煙、爆薬くさい臭い、種々の破片、恐らく爆風のために二、三段滑り落ちたのだと思います。友人の互に呼びあう声に立ち上ってみたら、先程まで何事もなかった隣の婦人科教室に直撃弾が命中し、壁は破潰して見る影もなく、一部暗赤色の煙を出して燃えている最中でした。しかも何たる事か、落下地点から僕の倒れていた所までは僅かに二十米、その上周囲の数名の者は、破片やガラスで負傷していたのに、僕はいささか傷一つなくて無事でした。入院及び外来患者は早く待避させた為、何ら怪我はありませんでしたが、学生は或いは屋上、或いは教室、或いは廊下で活躍中でしたので、我が同輩、殊に同クラスの者が負傷したことは何よりも残念でした。

(昭和二十年八月一日付)

九、医専三年生 故浅倉多計久君が父上に宛てた書簡の一節

【第一信】 小生等の卒業は、本年九月と決定しました。十月には入隊になるらしいです。刀の方も宜しく願います。あと三カ月で卒業とは、思いもかけぬ事で驚きまし

たが、文部省の命令で致し方なく、只今クラス一同猛烈に勉強しています。

〔第二信〕 昨晚防空当直で学校に泊りました処、空襲警報が鳴り続き、遂に徹宵警備に付きましました。これで四日間寮に帰らずにおります。(二十年六月二十五日付)

〔第三信〕 去る八月一日、敵は遂に長崎の地を侵しました。内科病棟の屋上で敵機の監視に立ったところ、敵の中型、小型数編隊が長崎市上空で乱舞し、市内数カ所に投弾、屋上から眺めていたら、中型八機が病院の方向に進行して来るのを発見、四十五度の角度なので、危険とばかり四階下の地下室まで飛ぶように駆け降り、伏せた途端に隣の病棟に落下して爆発、小生は幸にかすり傷一つなく幸運にも助かりました。それから小生は命令によって直ちに市内に派遣され、医療隊として活躍しました。

(二十年八月五日付)

一〇、医専二年生 故大槻秀雄君が父上に宛てた書簡の一節

六日には午後一時から三人の犠牲者の葬儀(長崎医科大学葬)がありました。私は代表で弔辞を読みました。亡くなった三人の学生の遺族に対しては、大学医療隊長の影浦先生から賞詞が渡されましたが、それには「名譽の戦死を遂げ、医学徒の龜鑑と認む」と書かれていますので、大野君達も安らかに瞑目してくれるものと思います。(二十年八月七日付)

一一、医学二年生 故河村万喜生君が父上に宛てた書簡の一節

敵は沖繩決戦の直接基地たる九州を狙って、毎日攻撃して来るようになりました。僕等は警報が鳴ると同時に、防空補助員として町の分団に出動するため、毎日満足な授業は出来ません。

一二、医専二年生 故松尾宏君が出征中の父上に宛てた書簡の一節

皇国の興廢の岐路に立つ今日に於て、何が故に国家は医学に於てのみ勉強を継続させているか、否、吾々は国家の命令により、召集を受けて医学を勉強しているんだ、という覚悟をもって大いに頑張っています。しかし私共もいつ御召しが来るかわりません。御召しとあらば明日にでもペンを捨てて、勇躍征途につく覚悟は出来ております。

愈々九月頃から私共二年生も、医療隊として救護の任にあたることとなりました。若人の熱と意気とを以って、死力を尽して頑張るつもりです。(二十年七月二十二日付)

一三、医専二年生 故松元武紀君が鹿兒島の母上に与えた書簡の一節

急に吾々二年生一同に農村麦刈り動員が参りまして、四日から昨九日まで、千綿村という所で奉仕作業をして、唯今元気に帰って参りました。

私も鹿兒島に帰って死にたいのですが、長崎医科大学徒隊に加えられたので、帰れなくなりまして。(昭和二十年六月十日付)

一四、医専一年生 故嶋村治君の遺書

治はこれより征きます。莞爾として一人大君の辺にこそ死ぬ時が参りました。勇んで米兵の息の根を止める覚悟であります。飽くまで立派な死を選びます。どうか御安心下さい。この十九才の年まで何事もなく無事に育てて下さったことを、心から厚く御礼申し上げます。

一五、医専一年生 故関家雅俊君の書簡の一節

こちらも五日程前から毎日のように、沖繩の小型やB29共が来て油断なりません。敵機は決つたように昼食頃来るので困ります。折角の授業も途中で中止され、午後は空襲続きで休業となり、結局講義は有耶無耶のうちに無くなってしまいました。(二十年八月二日付)

一六、医専一年生 故古田弘久君の一節

抑々吾等の同窓や後輩が、殉国の一念やみがたく、或いは特攻隊に、或いは生産陣の一翼に、真に粉骨碎身、ただ勝たんが為に敢闘している時、吾等のみが学園に残つて学んでいるということは、何等恩典でもなく、ただ国家が我等に期待するところが重大なる為であります。即ち我等は軍医として立つべく期待されていますので、特攻の心を心とし、神機の到来を信じてただ一心不乱、国家の為に医学を学ぶのです。されば私は今学園の特攻隊の一員と自負して、何事をも辞せざる覚悟であります。

(二十年七月二十日付)

昭和四十六年七月の陳情記

調 来 助

昨年の秋以来中断されていた陳情を又やることになり、私は九大医学部事務室で見せて貰った戦時中の文部省通牒を整理し、七月中旬に陳情書を作製して、いつ上京するかを田吉、滝川兩理事に相談した。七月下旬ならばというので、七月二十六、七の両日に陳情を行うこととし、北海道に滞在中の大楠琴子理事にも通知して、上京を促した。

二十四日に陳情書を久保知事に差上げて御協力方を懇請し、同日長崎出発、私は千葉県市川市に娘がいるので、二十五日到着後その家で一泊したが、夕刻頃から突然激しい腰痛が起り、微熱もあるようで、翌二十六日の陳情が果して出来るかどうか、ひどく不安になって来た。

二十六日早朝起きてみると、腰痛は益々甚しく、洗面所やトイレは這うようにして漸う用を足した。それではならぬと娘からバイエル社のアスピリンを貰い、これを飲んで先ず歩く稽古をした。静かに歩けば何とか歩けることが判ったので、家を六時四十分に出て三人が泊っている第一ホテルに行き、一緒になって永田町の議員会館に車をとばした。

通常国会がすんだ直後なので、皆暇になられただろうと推測したのは大きな間違いで、多くの議員が選挙区に帰った留守で、面会出来たのは、白浜、中村（重光）、初村、田口、倉成の五議員（面会順）であった。

白浜議員は最近自民党政調会副会長になられ、大変お忙しそうだったが、メモをとりながら詳しく我々の意見を聞いて頂いた。政調会は各議員から集った諸問題を調整する所だから、詳しく聴取して頂いたことは、強ち望みなきにもあらずと大に意を強くした。

中村議員は以前から我々の運動に同情を寄せられる方で、午後には我々四人を、ご

自分で援護局長の所まで案内して頂いた。

初村参議は二十年八月一日の爆弾死亡学生三人の件で、大変尽力して頂いた方であるが、原爆死亡学生の件についてはまだ認識が浅いようで、盛んに長崎市全体の原爆死亡者の援護について力説して居られた。然し医大学生の件も詳細にお願いしておいたので、近く必ずや認識を深められることと思う。

田口参議は古くから動員学徒の遺族援護に尽力して居られる方で、先客があったにも拘らず、我々を招じ入れて、長時間に亘りメモをとりながら聞いて頂いた。「要するに動員学徒と同じように取扱って貰いたいのですね」と、念を押されたところから推察して、この方も大いに望みがあるように考えられた。

倉成議員はこの度副幹事長になられ、大変お忙しそうだったが、中食をとりながら引見され、「自分も何とかして貴意に添うよう努力しよう」と、力強いお話であった。最初から手がけて下さっている関係もあり、無下にはなさらないことと思う。

午後は一時から中村議員に伴われて、厚生省の中村一成援護局長を訪れた。初めてお目にかかる方だったが、中村議員から一通りの説明があると、私達の請願の件もよく御存知で、責任上すぐには色よい御返事は頂けなかったが、理解は前局長よりも深いように感ぜられた。

斉藤厚生大臣は丁度保健制度問題の会議中で、お目にかかることは出来なかったが数年前倉成議員の御案内で一度陳情したこともあり、お人柄から見ても、何とか了解して頂けるように思われた。

田吉理事も今日一日の陳情を顧みて、「今度は何となく出来そうな気がする」と嬉しそうに云っていた。果してそうなれば万々歳だが、私もまんざら悪い気持はしなかった。

私はこの日終日気分が勝れず、腰痛も甚しいので、午后三時頃第一ホテルに帰り、夕食もとらずにベッドに入った。夜に入り、元氣な三人からサンドウィッチやジュースを運んで頂いたが、翌日の陳情に備えて、そのまま床についていた。

翌二十七日、少しは気分もよくなったがまだ本当ではない。と云ってそのまま帰郷

も出来ないので、四人連れ立って先ず長崎県東京事務所を訪問、鎌田恵所長に面会して、県選出議員の会合の際に渡して頂くように、陳情書十数部をお渡した。次で靖国神社に詣でて犠牲学徒の冥福を祈り、議員会館に引返して三池議員にお目にかかった。同氏はこの度も軍医依託生のことを話されていたが、この運動の成否は、一にかかって長崎県選出議員の結束如何にあることを強調された。

西岡議員、金子議員、中村(弘海)議員の事務所にも立ち寄ったが、皆帰省中で不在だったため、秘書の方に伝言を託してホテルに帰り、帰りの汽車の都合で午後三時発の新幹線で西下した。(四六、九、二七)

この請願運動の際に提出した陳情書

昭和二十年八月九日に投下された原子爆弾により、多数の長崎市民が死亡したことは周知の事実ですが、その際旧長崎医科大学では、五百三十名の前途有望の学生達が、その犠牲となって尊い生命を失いました。

これらの医学生及び薬学生達は、他の学部の学生やその他高校生、中学生達が工場等に動員拘束されていたのと全く同様に、夏休中にも拘らず、政府の命により長崎医科大学内に拘束されて、短期間内に軍医に養成されるために特別訓練を受けていたのであります。

このことは昭和二十年三月十八日の閣議に於て決定された「決戦教育措置要綱」にも明記されており、次いで昭和二十年五月二十一日に煥発せられた勅令「戦時教育令」、翌二十二日に公布された「戦時教育令施行規則」によっても明らかとなっております。

その他昭和十九年にも、三月三十日に「医学関係学校臨時短縮に関する件」、三月三十一日に「決戦非常措置に基く学徒動員実施要綱に依る学校別学徒動員基準」、六月十四日に「決戦非常措置に基く大学教育に関する措置要綱」、八月二十二日に勅令「学徒勤労令」、八月二十三日に文部省令「学徒勤労令施行規則」等が次々に発布せ

られ、長崎医大の学生達はこれをよく遵守して、一日も早く軍医となって国家に奉公の誠を致すべく、恪勤精励していたのであります。若し彼等が他の学部の学生達と同様に、学校を離れて工場等に動員されていたならば、このような大量の死を喫することもなく、又もし死亡した場合は、夙に遺族援護法にも適用されたことは明らかであります。

何卒旧長崎医科大学の原爆死亡学生達の死が、自由な立場における学修中の死亡でなく、政府の命により結成された報国学徒隊の一員として、夏休中も休むことなく学内に拘束され、国策に添う医学の修練中に起った殉職死として、動員学徒と同様の措置を講ぜられ、年老いて余命幾何もない親達に年金を支給せられますよう、伏して懇願申し上げます。

昭和四十六年七月二十六日

旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会

| | | | |
|-----|----|---|-----|
| 理事長 | 調 | 来 | 助 |
| 理事 | 滝川 | 勝 | |
| 同 | 蒲原 | 盛 | 男 |
| 同 | 田吉 | チ | エ |
| 同 | 大楠 | 琴 | 子 |
| 同 | 大 | 先 | アサキ |
| 同 | 有 | 富 | 玉 |
| 同 | | | 与 |

戦時中に発布された医学部関係の通牒

決戦教育措置要綱

昭和二十年三月十八日 閣議決定

第一方針

現下緊迫セル事態ニ即応スル為、学徒ヲシテ国民防衛ノ一翼タラシムルト共ニ、真

學生產ノ中核タラシムル為、左ノ措置ヲ講ズルモノトス。

第二措置

一、全学徒ヲ食糧増産、軍需生産、防空防衛、重要研究、其ノ他直接決戦ニ緊要ナル業務ニ総動員ス。

二、右目的達成ノ為、国民学校初等科ヲ除キ、学校ニ於ケル授業ハ、昭和二十年四月一日ヨリ昭和二十一年三月三十一日ニ至ル期間、原則トシテ之ヲ停止ス。

国民学校初等科ニシテ特定ノ地域ニ在ルモノニ対シテハ、昭和二十年三月十六日閣議決定学童疎開強化要綱ノ趣旨ニ依リ措置ス。

三、学徒ノ動員ハ教職員及学徒ヲ打ッテ一丸トスル学徒隊ノ組織ヲ以テ之ニ当リ、其ノ編成ニ付テハ所要ノ措置ヲ講ズ。但シ戦時重要研究ニ従事スル者ハ研究ニ専念セシム。

四、動員中ノ学徒ニ対シテハ、農村ニ在ルカ工場事業場等ニ就業スルカニ応ジ、劣作ト緊密ニ連繫シテ、学徒ノ勉学修養ヲ適切ニ指導スルモノトス。

五、進級ハ之ヲ認ムルモ、進学ニ付テハ別ニ之ヲ定ム。

六、戦争完遂ノ為特ニ緊要ナル専攻学科ヲ修メシムルヲ要スル学徒ニ対シテハ、学校ニ於ケル授業モ亦之ヲ継続実施スルモノトス。但シ此ノ場合ニ在リテハ、能力限り短期間ニ之ヲ完了セシムル措置ヲ講ズ。

七、本要綱実施ノ為、速ニ戦時教育令（仮称）ヲ制定スルモノトス。

備考

一、文部省所管以外ノ学校、養成所等モ亦、本要綱ニ準ジテ之ヲ措置スルモノトス。

二、第二項ハ第一項ノ動員下合アリタルモノヨリ逐次之ヲ適用ス。

三、学校ニ於テ授業ヲ停止スルモノニ在リテハ、授業料ハ之ヲ徴収セズ。学徒隊費其ノ他学校経営維持ニ要スル経費ニ付テハ、別途措置スルモノトシ、必要ニ応ジ国庫負担ニ依リ支弁セシムルモノトス。

戦時教育令

（抜萃）

昭和二十年五月二十一日 勅令第三百二十号

第四条

戦局ノ推移ニ即応スル学校教育ノ運営ノ為特ニ必要アルトキハ、文部大臣ハ其ノ定ムル所ニ依リ、教科目及授業時数ニ付特例ヲ設ケ、其ノ他学校教育ノ実施ニ関シ特別ノ措置ヲ為スコトヲ得。

戦時教育令施行規則

（抜萃）

第三条

令第三条ノ規定ニ依ル学徒隊ノ教育訓練ハ左ノ事項ニ重点ヲ置クモノトシ、其ノ指導監督ニ関シテハ、大学高等専門学校ノ学徒隊（職場学徒隊ニ属スル場合ヲ含ム）ニ在リテハ文部大臣、其ノ他ノ学徒隊（職場学徒隊ニ属スル場合ヲ含ム）ニ在リテハ当該学校ノ所在地ノ地方長官之ヲ行フモノトス。

一、軍事教育ニ関スル事項

二、防空防衛ニ関スル事項

三、生産技術ニ関スル事項

四、其ノ他戦時ニ緊要ナル教育訓練ニ関スル事項

第九条

文部大臣特別ノ必要アリト認ムルトキハ令第四条ノ規定ニ依リ、国民学校、盲学校、聾啞学校、青年学校、中学校、師範学校、高等師範学校、女子高等学校、臨時教員養成所、実業学校教員養成所、専門学校、高等学校、又ハ大學生ニ関スル文部大臣ノ定メタル規定又ハ認可シタル學則ニ拘ラズ、左ノ各号ノ措置ヲ為スコトアルベシ。

一、教科課程、学科課程、又ハ教授及訓練課程並ニ修練課程ニ付、其ノ一部ヲ欠キ、若ハ重点ナル取扱ヲ為シ、又ハ授業日数ヲ短縮スルコト

二、一定期間内ニ修業年限又ハ在学年限内ノ所要課程ヲ集約シテ課スルコト

三、一定期間ヲ限り学校ニ於ケル正規ノ授業ノ停止ヲ命ズルコト

国家総動員法

(抜萃)

昭和十三年四月一日 法律第五十五号

第五条

政府ハ戦時ニ際シ、国家総動員上必要アルトキハ、勅令ノ定ムル所ニヨリ、帝國臣民及帝國法人其ノ他ノ団体ヲシテ、国、地方公共団体又ハ政府ノ指定スル者ノ行フ総動員業務ニ付、協力セシムルコトヲ得

決戦非常措置ニ基ク学徒動員実施要綱ニ依ル学校別学徒動員基準

(抜萃)

学徒動労令

(抜萃)

昭和十九年八月二十二日 勅令第五百十八号

第十二条

文部大臣又ハ地方長官ハ、命令ノ定ムル所ニ依リ、特別ノ事情アル場合ニ於テハ、学校報國隊ニ依ル学徒動労ノ全部又ハ一部ノ停止ニ関シ、必要ナル措置ヲ為スコトヲ得。

学徒動労令施行規則

(抜萃)

昭和十九年八月二十三日

第九条

左ノ各号ノ一ニ該当スル場合ハ、文部大臣又ハ地方長官ハ令第十二条ノ規定ニ依リ、学校長ニ対シ必要ナル措置ヲ命ズルコトヲ得。

一、勤勞要員過剩トナリ、学徒動労ヲ繼續スルノ要ナシト認メル場合

二、使用又ハ従業条件適正ヲ欠キ、学徒動労ノ本旨ニ悖ルト認メラルル場合

前項各号ノ場合ニ関スル認定ハ、文部大臣又ハ地方長官關係官庁ト協議ノ上之ヲ為スモノトス。

文部大臣又ハ地方長官ハ、令第十二条ノ規定ニ依リ、学校長ニ対シ学校報國隊員ニシテ左ノ各号ノ一ニ該当スルモノニ付、必要ナル措置ヲ命ズルコトヲ得。

一、学徒動労ノ為、業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リ、学徒動労ヲ為スニ堪ヘザルニ至リタルモノ

二、国家ノ要請ニ基キ、特定ノ研究又ハ訓練ニ従事セシムル必要ヲ生ジタル

者

昭和十九年三月三十一日 文部次官通牒(発体六八号)

第一 大学高等専門学校

甲 理科系学生徒

二 医学及歯科医学

1 動員方針及動員期間

イ、集団配置ヲ原則トスルコト

ロ、第四学年及第三学年ハ、通年動員スルヲ原則トシ、所定ノ病院等ニ於テ実習勤務ニ服セシムコト

ハ、第二学年及第一学年ハ臨時緊急ナルモノニ動員スルコト

2 出動先

軍病院、工場、事業場、附属病院、総合病院及医学關係試験研究施設等

3 割当配置

文部省ニ於テ陸軍、海軍、厚生、各省等ト協議ノ上割当配置ヲ行フコト

三、薬学關係

1 動員方針及動員期間

イ、第三学年ハ通年動員ヲ原則トシ、分散又ハ集団配置ヲナスコト

ロ、第二学年ハ集団配置ヲ原則トシ、通年動員スルコト

ハ、第一学年ハ臨時緊急ナルモノニ動員スルコト

2 出動先

病院、製薬、化学工場、試験研究施設等

3 割当配置

病院、試験研究施設ヘノ動員ハ医学及歯科医学ニ準ジ、工場ヘノ動員ハ工鉦關係ニ準ジテ取扱ヒ、兩者ノ調整ハ關係省ト協議ノ上文部省之ヲ行フコト

昭和十九年六月十四日 文部省専門教育局長通牒

第一 方針

二、休暇、日曜日等ノ休業ハ原則トシテ之ヲ廃止シ、勤労働員ト睨合セテ学力ノ充実ニ力ムルヲ建前トスルモ、一面学生ノ心身ノ休養並ニ厚生施設ニ付、適切ナル配慮ヲ為スコト

第二 要領

二、通年勤員ニ非ザル場合ニ於ケル教授訓練ハ、左ノ事項ヲ基準トシテ適切ナル指導ヲ講ズルコト

三 教授及研究指導等ニ付テハ左記ニ依ルコト

イ、勤員ノ実施ニ即応シ得ル授業日数ヲ予定シ、緩急ニ即応シテ之ヲ実施シ得ル如ク措置スルコト

ロ、実験、実習、演習等ニ付テハ勤労働員ニ依ル作業ヲ考慮シ、特ニ工夫按配ヲ為スコト

ハ、第一学年(医学ハ第一及第二学年)ハ臨時緊急ナルモノニ限り勤員セラルベキ以テ、力メテ重点的ニ且充実シタル教授ヲ行ヒ、可能ナル限リ上学年ノ教授ヲモ実施スルコト

三、学徙勤員ノ特殊ナルモノ又ハ勤員セラレザル学徙ニ対スル教授訓練ハ、左ノ事項ヲ基準トシテ適切ナル措置ヲ講ズルコト

3 身体虚弱ノ学徙ニ付テハ、学徙勤員ノ行ハザルモ、大学ニ於テ健民修練ヲ実施シ、或ハ学内ノ軽度ナル勤勞ニ限ラシメ、或ハ教授、助教等ノ研究補助員トスル等ノ方途ヲ講ジ、之ガ教授訓練ニ付テハ、分散配置ノ学徙ニ準ジ実施スルコト。尚右ニ該当スル学徙ノ故意ニ帰郷セシメ、或ハ徒ラニ休學ヲ強制スルガ如キコトナキ様留意スルコト

昭和十九年三月三十日 文部省専門教育局長

先般協議会ノ際御意見有之タル教授事項ニ関シ、陸海軍医務関係当局ノ要望事項ヲ別紙写ノ通り送付致スベキニ付、参照置キ相成度、追テ学徙勤労働員強化ニ伴フ教授方策ニ関シテハ、別途通牒ノ見込ニ付御了知相成度。

大学専門学校医学科教育期間短縮ニ伴フ海軍要望事項

(方針)

決戦下医学科卒業生ノ大部分ガ軍医タルノ現状ニ鑑ミ、教育ノ重点ハ軍衛生勤務ノ完遂ニ遺憾ナカラシムルタメノ基礎的準備教育ニ指向ス。

(要望事項)

一、臨床医学教育ニ一層重点ヲ指向シ、各科共日常最モ多ク且ツ緊要ト認ムル疾病ノ診断治療ニ主力ヲ注ギ、特ニ内・外科的領域診療ノ基本タルベキ事項ハ充分之ヲ修得セシメ、就中一般救急治療手技、日常ノ卑近ナル診療手技、常用処方、医学用語等ニ重点ヲ指向スルト共ニ、将来軍医タルタメニ必須ノ精神要素ノ涵養ニ留意ス。

二、大学専門学校ニテ教育スベキ前項重点事項ニ付テハ、再教育実施ノ要ナキ迄ニ各種ノ方途ヲ講ジ、教育ノ精到ヲ期ス。

昭和四十六年十月の陳情記

田 吉 子 工

夏のあの八月九日が又めぐり来て、グピロが丘は緑繁々、思い出の丘に集う肉親の人々の憶いは、何処を馳せ巡るのであろうか。それにしても相見る人々の姿が年々少しづつ変り、髪の色も目立ち、足の歩みにも年令の深みを覚ゆる時、二十六年の時を移りをしみじみと悟るのでした。あのお父様もお母様も御他界ときいては、

胸の奥底に音もなく冷え冷えと、自分も又その中に——と救くなるのでした。

一片の骨すら残さず消え失せた吾子の冥福を祈り、記念碑の前に額突けば、在りし十九才の若い顔のみが浮いては消える。それにしても健在ならば、今頃自分達はどんなに楽しく護られていることか、と嘆く老いた遺族を前にするとき、これでよいのか——と又しても胸えぐるる思いでした。老いゆく人の親の切なき！ せめて国へ捧げた子を哀れと思し召さば、残された父母の労りとして、僅かの年金を賜われかしと、しみじみ考えることでした。

調会長を中心にして、「勇気を出して又上京しましょう」と話し合い、腰をあげたのが十月十九日、偶々沖繩国会開催中で、東京は騒然としており、少人数の陳情団の意志が果して認められるかどうか、その上高血圧や夏バテで、体も思い通りには動かなかつたが、各方面から「元気を出さねば駄目ですよ。」「続行せねばこの運動は実りませんよ。」と励まされ、「それもそうだ、この儘では死んでも死に切れない」と勇気を出して、調会長から作って頂いた陳情書を携え、滝川、大楠、田吉の三人で出かけました。

二十日に東京に着くと、街は「反戦デー」の噂にみちて、国会附近は警官や機動隊の警備で物々しい有様でした。然し来た以上は何とかして役目を果さねば、日数と費用にも制限があり、二十一日は早朝から東京出張所を経て、議員会館に詰めかけました。思えばこの階段の登り降りも幾度か、やつとの思いで訪ねてみれば、「本会議中につき昼まで待て」とか、「四時過ぎにならねば駄目」等々、心ははやれども如何ともならず——。でも神のお助けか、東京出張所よりの丁寧な御案内で、先ず第一番に厚生省の援護局長に面会が許可され、三十分間ぐらい、じっくりと陳情を繰り返すことが出来ました。

「私共も精根が尽き果てました。寄る年波で、あの世へ旅立つ人も年毎に多くなります。何とかして、お国の為に一身を捧げた子供達を哀れと思ひ、生活の支えとして遺族達に少々でも、年金を下付して頂きますように」とお頼みしました。

中村局長は鹿兒島の産、西郷さんを偲ばせる偉文夫で、「前向きに考えます。資料

も今までのをよく調べます。時期は云えぬが何とか善処します」と、温顔で話して下さいました。ほのぼのとした温さというのでしょうか、今度は出来そうだという予感か、ふっと浮びました。

次は昼の休みに、幸にも参議院議員の田口長治郎氏に、都合よくお目にかかれました。「むつかしい問題です。しかし十年間もよく頑張りましたね。何とかして上げたい」と云って、直ちに増岡社会部長（広島）に電話で話して頂き、後で聞くと、そのあと援護局長とも打合せて下さったとのことでした。

次で倉成先生にも白浜先生にも、次々にお目にかかつてよくお頼みしました。七月の陳情の際と同じく、「難かしい問題だが前向きに協力する」とのお言葉を頂き、ホッとした気持で中村重光氏、金子氏、西岡氏、小宮氏、初村氏、中村禎二氏の方々をお訪ねしましたが、皆御多忙で中々姿を見出せない中に、屋外では若い学生達の行動が激しく、「早く宿に帰らぬと今夕が危ない」とおどかさされ、早目に引揚げました。何とも慌しい気分で、まるで戦場をゆく思い、これが平和な都心であろうか——。情ない事と思いました。

翌二十二日早朝、昨日の社会部会の様子を知らないと、田口先生に電話すると、「援護局長と今後の事を細々と話した結果、前向きに法律改正をするよう、又予算にも入れるよう善処努力します」と、はっきり云われた時、本当によかったと、お互いに顔を見合せたことでした。

しかし、これは長崎県選出の諸先生ばかりでなく、他県の方々にもお力を借りねばならぬと、又々議員会館へ駆けつけました。三つの議員会館で、先生のお出でを待ち受けては事務室をお訪ねしましたが、既に郷里に帰られた方もあって、代議士という人の多角的な多忙さを、身近かに感じた事でした。不穏な空気が霞ヶ関附近に漂い、ゆっくり落ちついて陳情も出来ぬので、不気味な感じのうちに早々に引揚げました。

この若者たちは何を企図しているのか、日本人同志、立場が異なるとは云いながら、互いに争っている姿はこれでよいのか、と考えさせられました。

「子供の命を返せ」と叫びたいこの老人の心を知っているのか。断られても断られ

ても、こうして上京して来る我と我が身をじつと見つめて、味気なく宿の夜は更けていったのでした。「もう今度が最期かも」。何も云わなくても、三人の心の奥は共通なもので一ばいでした。

理不尽に踏みにじられた二十六年前の学生達の青春が、たまらなく哀れなのである。あの頃、あの時、ただ素直に純情に動いていた彼等の人間性と働きに、区別をつけようとするのは何故なのか。あの断末魔の日本を護るのは、良心的な日本人の務めでしかなかったと思う。ゲートルを巻いた鉄カブト姿の若者達の心の中に、必死の祖国愛があったのは、その資格の如何に拘らず、同一であったのではなかったか――。

割り切れぬ追想の中で、遺族の行方を又しても考えてみる一夜でした。

陳情三日目の二十三日、今日は午前中、又くどいようであるが議員のお部屋を一巡してお願ひ申上げ、更に東京出張所に寄って一部始終を報告し、今後の連絡方を呉々もお頼みして帰路につき、最後に靖国神社に詣でて、この老父母の祈りが成就するよう、神前に額づきました。

今度の陳情に当り、親切に誠意をこめて私共に接して下さった衆議院・参議院の先生方、事務局の方々、そして地元で後援して下さいました方々に、厚く御礼申上げます。終りに調会長が精神こめて作成された陳情書の稿を掲げて、筆を擱きます。

陳 情 書

旧長崎医大の学生五三二名が昭和二十年八月九日、長崎に投下された原爆の犠牲となって死亡したことは、十年来私共が陳情を重ねている通りで、彼等は我が儘勝手に夏休み中に医学の勉強をしていたのではなく、他の学生達が工場に動員されて生産に働んでいたのと全く同様に、国の命令により学校に動員され、当時不足していた軍医に養成されるために、学徒報国隊の一員となって学校を敵の爆撃から守ると共に、非常の際は学外に出て被爆者の救護に従事しながら、修業年限短縮による突貫教育を

受けていたのであります。

以上の事実は、昭和二十年三月十八日に閣議決定された「決戦教育措置要綱」によっても明らかところで、彼等は直接決戦に緊要なる業務に動員され、戦争完遂の為に緊要なる専攻学科(医学)を修めるために、夏休み中にも拘らず学校に於ける授業が継続されて、原爆被爆という前古未曾有の災難に遭遇したのであります。依つてその状態は他の学生達が工場に於て爆死したのと全く同じで、当然動員生徒の遺族援護法と同様の措置が講ぜらるべきものと考えます。

私達の陳情の要旨は次の通りであります。

- 一、長崎医大の原爆犠牲生徒を、他の動員生徒と同様に認めて戴きたい。
- 一、他の動員生徒の遺族と同様に、旧長崎医大原爆犠牲生徒の遺族にも、年金を支給して戴きたい。

昭和四十六年十月二十日

旧長崎医科大学原爆犠牲生徒遺族会

理事長 調 来 助

軍医依託生の件について

調 来 助

旧長崎医大原爆犠牲生徒の遺族援護法適用が難行している時、ふと思いついたのは軍医依託学生のことである。「軍医依託生ならば、その遺族は当然援護法に適用されねばならない筈だ」と考え、生残りの依託生五島和夫君に相談したところ、幸い同君は凶のような海軍省発行の辞令を持っておられたので、これを貸して頂いて厚生省と交渉することにした。

五島 和夫

海軍軍医学生ヲ命ヌ

昭和十八年二月五日

海軍省

が、判然とした答が少なく、辞令を保存しておられる方は一名も見付からなかった。

厚生省では五島君の辞令を数枚復写していたが、結論としては、「依託生は身分が大学にあって、まだ軍には入っていない。従つて法的にも軍人や軍属と認めることは出来ない」と云つて、援護法適用外と主張してやまなかった。

法令となるところは弱いので、何とも反論の仕様がなかったが、自民党の三池信代議士は、「そんな筈はない。何とか出来る筈だ。依託生の名は当局に調べさせれば必ず判ると思う」とのことであつた。

事の成否は今から何とも云えないが、先ずこれから片付けて行き、更に進んで一般学生にも及ぼして行きたいとも考へている。

(四六、九、二〇)

久留米地区遺族の集いの記

久留米市梅満町九六三 菅原 文彦

去る九月二十六、七の両日(四十五年)、調先生御来駕の内報を頂きましたので、このよい機会に、当地区の遺族の方々と先生を囲むひととき一時の集いを思い立ち、遺族名簿を繰つて、或いは電話で、或いはお手紙を差上げて都合を伺いましたところ、皆様も心から欣ばれ、是非参加致したいとの御返事を頂きました。

期日は調先生が二十七日午前中に、自民党代議士石井光次郎先生に面接される関係上、午後二時集合とし、場所は手狭ながら、拙宅に集つて頂くことに致しました。

当日は幸に秋晴れの好天氣に恵まれ、御老体にも拘らず、左記の方々が、或いはお

これに先だち、どれだけの人が陸軍や海軍の軍医依託生であつたかを知りたいと思ひ、経済学部に保管の官報を調べたが、遂に発見することは出来なかつた。また遺族の方々にアンケートの往復葉書を出した



一人で、或いは付添の方と御一緒に、いそいそと定時に駆けつけて頂きました。

東 国造様(医大二年東秀昭君の父上、八十才、大牟田市)

笠 久恵様(医大一年市川幸男君の姉上、久留米市)

大西 周子様(医大一年大西欣二君の母上、七十三才、大牟田市)

その付添として欣二君の令弟の夫人も御一緒に来訪

菅原文彦夫婦(医大一年菅原寮二の両親、七十八才と七十四才、久留米市)

中村 餘平様(医大一年中村清一君の令弟、大川市)

笠 久恵 中島スエノ

池田 クニ 大西 周子

青木専二郎 松鶴 弘之

松鶴 ツネ

菅原 文彦 調 来助

中村 餘平

菅原 チヨ 東 国造

池田 クニ様 (医専二年池田博実君の母上、六十七才、久留米市)

中島 スエノ様 (医専二年中島正武君及び医専一年中島欣一君の母上、八十三才、福岡県八女郡黒木町)

岡県八女郡黒木町)

調 来助先生 (医専一年調弘治君の父上、七十一才、長崎市)

松鶴弘之様御夫妻 (医専一年松鶴璋君の御両親、八十二才と六十七才、八女市)

青木専二郎様 (葉専二年青木茂樹君の父上、六十九才、久留米市)

以上の外、医大二年齋田正勝君のお母様も (本年七十才)、この日を楽しみに待つて居られましたのに、高血圧のためお出でが出来なかったのは、誠に残念でございます。しかしその代りに、調外科出身で久留米に外科病院を開設して居られる久原孝夫先生が、オブザーバー格で列席して頂きましたので、全部で十四人になりました。

爽やかな秋晴れのひと時、調先生を囲んでそれぞれに追憶を語り、懇談を交わし、心通う遺族同志たちは、何れも初対面ながら、亡くなった息子達に代り、恩師を囲んで同窓会をしているような感じで、時の過ぎるのも忘れ、お別れの折には、久原先生の御厚意で写真を撮って頂き、名残りを惜しみつつ、元気な姿での再会を約し合いました。 (四五、一〇、三二)

【調附記】 私が久留米へ出かけたのは、遺族援護法適用の件を石井代議士にお願ひする為だった。菅原氏御夫妻は日頃から石井代議士と御呢懇の由で、会見の日取りその他一切を御世話され、その上この心温まる和やかな遺族懇親会を、企画実現して頂いた。誌上をかり衷心よりお礼を申し上げます。

新しく判明した犠牲者と遺族

調 来 助

昭和四十五年四月から現在までの間に、左記の新犠牲者と遺族が判明した。

(一) 医大二年の何振欽君は、大学に保管中の記録に、「休学中、行方不明」とあったので、生存中とのみ思っていたが、医大四年林中鳳君の御遺族林五桂氏からの通知

で、死亡のことが判明し、その後令弟の何振楳氏との連絡もとれるようになった。

(二) 医専一年の岩永栗範君は、昭和二十年三月発行の長崎新聞の医大付属医専入学者発表中にその名が出ていたが、大学保管の記録中にも「追憶」にもその名がないので、幸に助かれたものと思っていたが、昨年七月、母堂から戸籍謄本、野母崎町長高木米雄氏の在学証明書、遺族給与金証書の写し等が送付され、既に年金まで戴いておられることが判明したので、遺族会名簿にその名を記載することとした。

(三) 医専一年の篠原昇君のことは、長大原研の西森一正教授からお話があり、昇君の姉上からも戸籍謄本を送って頂き、間違のないことが判明した。

(四) 「追憶」の衛生学教室の記事の中に、「研究補助員二名(氏名不詳)」とあり、同教室では大倉教授以下全員が遭難死亡しているので、研究補助員二名も恐らく死亡したものと思われる。その中の一名が実は中村嘉長君で、御遺族の篠崎範子女(姉上)が、本年八月九日の慰霊祭に参列され、医学部の坂下一夫庶務係長に申し出られたので、念のため戸籍謄本を提出して貰って、確認した次第である。

(五) 死亡者の名だけ判っていて、遺族が新しく判明したのは、次の通りである。

- ① 助 教 授 土江 乾一 (妻、土江 雅江)
- ② 助 教 授 中村 定八 (姉、竹下 ルキ)
- ③ 助 手 古川 一郎 (弟、古川 哲二)
- ④ 医大四年 林中 鳳 (弟、林 五桂)
- ⑤ 医大三年 和泉 哲朗 (妹、蘇 碧 霞)
- ⑥ 医大二年 太田 祐司 (弟、太田 晴造)
- ⑦ 医大一年 桃原敬太郎 (姉、岩宮 豊子)
- ⑧ 医専二年 郭 芳 徽 (父、郭 炳 均)
- ⑨ 医専一年 篠崎 兵衛 (兄、篠崎 魏)
- ⑩ 看護 婦 山下 栄子 (母、山下 キヌ)
- ⑪ 看護婦生徒 江林キヨノ (義兄、江林房雄)
- ⑫ 看護婦生徒 小川 和子 (弟、小川 富一)

- ⑦ 看護婦生徒 河野 鈴子 (父、河野 加熊)
- ⑧ 同 谷口千鶴子 (母、谷口 ミツ)
- ⑨ 同 土岐富美子 (父、土岐秀右衛門)
- ⑩ 同 半泊ハマ子 (父、半泊 与助)
- ⑪ 同 吉田喜代子 (母、中村ヨシエ)
- ⑫ 同 若松 嘉子 (母、若松 ケサ)

靖国神社合祀の追加申請

調 来 助

旧長崎医科大学の原爆死亡学生四百四十八名が、昭和四十二年度に靖国神社に合祀され、その遺族に対して七万円宛の見舞金が下付されたことは、既に報告した通りであるが、同年度内に申請を行なわなかった人、及びその後になって遺族が判明したため申請を行ない得なかった人達が、合せて二十一名あり、又現在外国人となられた台湾及び韓国の学生十七名も、当時は日本人であったので、その時限に於ては当然合祀される権利があったものとして、文部省当局及び靖国神社に交渉していたところ、見舞金の下付は別として、靖国神社には合祀して差支ないとの通達があった。

依って昨年以來、左記の学生の遺族から必要関係書類を集め、去る九月に文部省へ申請書を提出したが、天皇陛下の御外遊で決裁が得られず、今秋の大祭には間に合わなかったが、来春は必ず合祀するとの通知が、この程大学宛に届いた。

【追加申請をした日本人学生】

- 岩崎 誠彦 (学部仮卒) 相川 清澄 (学部四年) 生駒 晋助 (学部二年)
- 太田 祐司 (学部二年) 風早 哲郎 (学部二年) 久保 道也 (学部二年)
- 堀家 潤 (学部二年) 高妻 秀夫 (学部一年) 佐賀 章生 (学部一年)
- 竹本 文亮 (学部一年) 立石 和生 (学部一年) 西谷 重 (学部一年)

- 野津 恭 (学部一年) 箱田 吉清 (学部一年) 桃原敬太郎 (学部一年)
- 浅田 昇 (医専三年) 古森 泰而 (医専二年) 田中 秀雄 (医専二年)
- 篠崎 兵衛 (医専一年) 篠原 昇 (医専一年) 松山 常雄 (医専一年)

【台湾及び韓国の学生】

- 蘇 百 齡 (学部四年) 戴 懷 德 (学部四年) 徳山 達人 (学部四年)
- 林 中 鳳 (学部四年) 和泉 哲郎 (学部三年) 神木晚次郎 (学部三年)
- 陳 克 振 (学部三年) 何 振 欽 (学部二年) 白川 清志 (学部二年)
- 馬 祖 詒 (学部二年) 竜 頭 集 (学部一年) 高原 繁巳 (医専三年)
- 李 集 鏞 (医専三年) 郭 芳 徽 (医専二年) 高橋 二郎 (医専二年)
- 林 栄 主 (医専二年) 永田 嘉瑞 (医専一年)

因みに、台湾及び韓国学生の遺族に対しては、靖国神社から合祀の通知は出されないうそであるが、機会があつて神社に参拝されることは差支ないとの事であるから、念のため申し添える。

(四六、一〇、一八)

全国戦没者追悼二十五年祭に出席して

鍬 先 あさき

昭和四十五年八月十五日には、政府主催による靖国神社全国戦没者追悼二十五年祭が、日本武道館に於て行われることになり、参列の代表の方々と共に、長崎医大被爆死亡学生の父兄代表として、また当時医専三年鍛先清四郎の母として、特別参加を許されましたことは、この上もない俵せでございました。ここに私の拙い参拝記を、かいつまんで綴らせて頂きます。

【八月十三日、木曜、晴、蒸し暑し】

西陽のさす長崎駅控室の長椅子に腰かけながら、二十五年前の原爆の惨状や、八月十五日の終戦布告のラジオ放送のことなどを、今更のように思い浮べていた。人々は年を重ねて老境に入り、よくも今日まで恙なく生き長らえたものと驚きながらも、縁

あつて五十余名の人々と共に、全国戦没者追悼式参列の旅に加えて頂いたことを、心から感謝せざるにはいられなかつた。

汽車は十四時四十分発の特急「はやぶさ」、大勢の人に見送られて発車すると、互に往時を偲び語り合いつつ、配給の釜飯と若布の味噌汁に心も和んで、七時過ぎには早や寝台の人となつた。

【八月十四日、金曜、曇】

列車は十時十分、定時に東京駅に着く。待っていたバス二台に分乗し、先ず皇居前に行き、二重橋を背景にして記念撮影、次で修理中の国会議事堂を参観し、終ると東京タワーへ案内され、ここで中食をとる。なる程高い塔だと感心しつつ、一巡して東京の街々を眺め、三時には明治神宮に参拝して、今日の日程を終り宿舎に向つた。

【八月十五日、土曜、曇、風強し】

愈々追悼式典の日、台風九号が長崎に上陸するとの放送が気懸りのまま、八時に宿舎を出て靖国神社へ行き、他県の人々と共に昇殿参拝、私は亡子清四郎を懐に浮べ、永久に安らかに眠ることを念じた。思はず涙が出る。

参拝が終ると、大鳥居の下で記念写真を撮つて頂き、やがて今日の式場である日本武道館に案内された。広い武道館の正面には祭壇が設けられ、「全国戦没者追悼式」と横書きされた黒布の幕の下に、大国旗が貼られ、これをとりまくように白と黄の菊の花が、一面に飾られて大きな扇型をなしている。

壇の正面中央には慰霊の塔が設けられ、その両側に両陛下御寄進の見事な花籠が安置されていて、両陛下のお席は向つて右側上段にすらえてあつた。長崎県代表者の席は、会場の半分位の所から階段になつていて、その一段目で、最もよい場所であつた。この日の参拝者は五千四百人と云われたが、まだ空席があちこちに見られたから武道館の広さが凡そ想像されることと思う。

十一時頃になると、目のくらむような電灯が天井にともつた。恐らく千個もあろうか。やがて佐藤首相はじめ各大臣が入場され、続いて君が代の奏楽のうちに両陛下が御入場になり、お席におつきになつたところで、総理大臣が式辞を述べ、それが済ん

だころ丁度正午になつて、一同起立して黙祷を捧げた。満場凍として、咳の声一つ聞えない。

その後、天皇陛下がお言葉述べられ、これに来賓及び遺族代表の追悼の辞が続いたが、特に遺族代表の弔辞は、我が身につまされて、目頭の熱くなるのを禁じ得なかつた。

両陛下が御退場になると、静かな音楽の中に総理以下、来賓、厚生大臣、地方公共団体代表、各都道府県及び沖縄遺族代表一名宛の献花が行われ、式はおよそ一時頃に終了した。その後、裏千家の献茶や詩吟などが催され、私達は屋食のお寿司を戴きながら、これを観賞した。

武道館の式典がすむと、一同は千鳥が淵の無名戦士の墓に参拝し、一部の人の希望で上野動物園にも行き、砂塵をあげながら童心に返つて宿舎についたのは、四時を過ぎた頃であつたらう。宿舎では一夜のうちに親しんだ五人の友と、横になりながら語り合うのも、また楽しいひとときであつた。

【八月十六日、日曜、快晴】

東京にしては珍らしい青空、多分台風がスモッグを吹き払つてくれたためである。宿に別れを告げ、一同ハトバスに乗り込んで、NHK、泉岳寺、浅草、三越などを見学、恰かも修学旅行のような楽しい一日を過ごし、午後三時、東京駅で一行と快を分ち、新幹線から特急さくらに乗りついで、翌十七日無事長崎に帰りついた。

思えば戦争と原爆の縁につながることは云え、大勢の年老いた遺族と共に、靖国神社参拝の光栄に預り、あまつさえ、両陛下御臨席のもとに、高位高官の居並ぶ中で立派な追悼会を催して頂き、入江侍従長謹書の色紙まで頂戴するなど、国及び県の御心尽しの程は、何と御礼を申上げてよいやら、只々感激の外はありませんでした。合掌

御製

年あまたへにける
けふものこされし
うからおもへは
むねせまりくる

(四五、一〇、一七)

老齡遺族の現況調査

調 査 来 助

私は、唯今私たちが行っている陳情（遺族援護法適用の請願）の参考資料にするために、昨年の秋、原爆死亡学生の御両親で、現在なお御存命の方々に對し、アンケート調査用の往復ハガキを差上げ、(一)現在の年齢、(二)現在の健康状態、(三)お子様方の生死、以上三項目の調査を行った。

ハガキを差上げた方々は、昭和四十二年に文部省からお見舞金を下付された遺族四十八人のうち、老齡になられた実父、実母、継母、

| 遺族の區別 | 人 | 数 |
|-------|-----|-----|
| 実父 | 一七〇 | |
| 実母 | 一五四 | |
| 継母 | 一四 | 三四五 |
| 養父母 | 七 | |
| 妻 | 二 | 四 |
| 実子 | 二 | |
| 実兄 | 四 | |
| 実弟 | 二 | |
| 実姉 | 一 | 九九 |
| 実妹 | 一 | |
| 叔父 | 三 | |
| 叔母 | 六 | |
| 計 | 四四八 | |

養父母の方々だけを對象としたので、その総数は三四五人の筈であるが（第一表）、このうち二二人の方は、以前から音信不通で連絡がとれず、実際にハガキを出した三三三人の中でも、三二人の方からは残念ながらお返事がなく、一二人の方は両親とも既に他界されていたので、統計的調査が出来たのは、残りの二七九遺族に過ぎなかった。

本来ならば四四八遺族の全部について行うべきであったかも知れないが、調査の目的が遺族援護法の請願であり、従つてその該当者だけにしぼつたのである。このような数になつた次第である。しかしこの材料からでも、結論的には同じことが云えると思う。

一、存命中の父母の総数（第二表）

二七九遺族の中には、母親が他界されて父親だけになられた家族（表のA、一三五）、父親が亡くなつて未亡人となられた家族（表のB、一四四）、両親とも揃つておられる家族（表のC、九八組）などがあり、父親の数は一三五人であるが、母親

第二表

| 年 齡 | (A) 父親の 数 | (B) 未亡人となつ た母親の 数 | (C) 両親揃つた家 の母親の 数 | (A) + | (B) + |
|------|--------------|-------------------------|-------------------------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 満九〇歳 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 八七 | 七 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 |
| 八六 | 七 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 |
| 八五 | 七 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 | 〇 | 〇 | 七 | 〇 |
| 八四 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 八三 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 八二 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 八一 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 八〇 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 七九 | 三 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 |
| 七八 | 四 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 | 〇 | 〇 | 四 | 〇 |
| 七七 | 八 | 〇 | 〇 | 八 | 〇 | 〇 | 〇 | 八 | 〇 | 〇 | 〇 | 八 | 〇 | 〇 | 〇 | 八 | 〇 |
| 七六 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 七五 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 七四 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 七三 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 七二 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 七一 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 七〇 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六九 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六八 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六七 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六六 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六五 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六四 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六三 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六二 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 六一 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 〇 | 一 | 〇 |
| 合計 | 一三五 | 一四四 | 九八 | 二八 | 一六 | 二 | 二 | 一八 | 一 | 二 | 二 | 一九 | 一 | 二 | 二 | 一九 | 一 |

| | | | | | | |
|-----|----|---|-------|---|---|---|
| 計 | 五五 | | | | | |
| | 〇 | 〇 | 〇 | | | |
| 一三五 | 〇 | 〇 | | | | |
| | 〇 | 〇 | | | | |
| 一四四 | 〇 | 〇 | | | | |
| | | | 二 | | | |
| | | | (2%)二 | | | |
| 九八 | | | (2%)二 | | | |
| | | | | 〇 | | |
| 二七九 | | | | | 二 | |
| 二四二 | | | | | | 二 |
| 三七七 | | | | | | |

の数はBとCを加えた二四二人で、父親よりも遙かに多く、父母全体を合せると三七七人となる。

但し以上の外に、調査洩れの遺家族が五〇数家族あり、見舞金支給後に判明した遺家族もあるので、遺家族数では三〇〇、生存中の親の数は、恐らく四〇〇人以上となるであろう。

二、見舞金支給後に他界された方々

見舞金を戴かれた後今日までの四年間に他界された方が二八人ある。茲にお名前を記し、謹んで御冥福をお祈り申し上げます(名簿順、敬称略)。

西トワ、脇川ホウミ、白井保、池西秀二、奥村ユワ、林重雄、中村チカ、河村萬平、生島健蔵、田中末治、武内トミ、村田四郎、浦上幸夫、浦川福次郎、奥野ワカ、片野スエ、川頭サダ、摂津盛徳、隆杉正孝、竹原土地男、松本松子、三島広助、三宅儀七郎、牟田正夫、森又之助、山崎キミ、吉村安雄、宮本彦次郎、(昭和四十五年十二月十日現在)

以上のように父親が一八人、母親が一〇人であるが、これは遺族代表者のみであるから、その配偶者の死亡を加えると、更に多数となるであろう。右の中一一人の父親の逝去後は、母親が未亡人となって遺族として遣られたが、他の七人の父親と一〇人の母親、計一七人の逝去後は、最早親がなく、死亡学生の兄弟姉妹の方が、或いはその他の縁者が遺族代表者となられたのである。

死亡者はこれだけでなく、調査洩れの遺族の中にも居られることと思われるので、毎年七、八人の方が亡くなられる勘定となるが、この年間死亡数は年毎に増加し、数年後にピークに達するものと考えられる。

三、現在の年齢(第二表参照)

私が想像していた通り、高齢者の人がその大半を占めている。父親の中には満九〇才の方もあり、八〇才以上の方が一九%、約五分の一で、七〇才以上となると一三五人中一七人、即ち全体の八六%にも達する。

父親より一般に年下の母親でも、八〇才以上が一二%、七〇才以上を加えると六一%で、半数を遙かに越えている。

この方々にはどうか九〇才までも一〇〇才までも長寿を保たれるよう、心からお祈り申上げる次第ではあるが、人命には自ら限度があるので、一〇年後、二〇年後には一人も生存者が居なくなるであろうことは、易く想像されるところである。悲しいことではあるが、萬止むを得ないことであろう。

四、現在の健康状態(昭和四十五年十二月現在)

上記三七七人の方々の健康状態調査では、二四人の方が何とも記載されていないが、頑健乃至強健と記された方が九人、健康或いは健在と書かれた方が九五人、良好が二〇人、普通が四三人、異常なしが五人等で、これらを一応皆元気に過して居られるものと仮定すると、合計一七二人(四六%)が先ず健康であると思つて差支えないと思う。また謔にも「便りのないのは達者な証拠」という譬えがあり、記載のなかつた二四人も健康と見做すと、計一九六人(五二%)、即ち約半数の方々が、大した障りもなく余生を送つて居られることが想像される。

私が拜見した中で最も印象に残つたのは、「健康、時にメスを持つ(手術を行う)こともあり」と書かれた満九〇才の老医の方や、「非常に健康、家事手伝や旅行など若い人と変らず」と記された七四才の未亡人の方の御返事で、心からお慶び申上げた次第であるが、何分御自分の判断で頑健と思われ、或いは健康と自覚され、或いは又良好、普通、異常なしなど考えておられても、皆老齢の方々ばかりで、抵抗力は若い人のように強くない筈であるから、暑いにつけ寒いにつけ、呉々も御自重御自愛のほど、念願して罷まない次第である。

次に、残りの約半数の方々の御返事は区々まちまちで、皆何らかの異常があり、中

には二つも三つも病氣を持って居られる方もあって、分類が甚だ困難であるが、病氣を一々数えあげると凡そ次のようになる。

一、老衰（老齡で全身が弱り、寝たり起きたりの状態）
一四人

二、病弱（病氣勝ちを含む）
一二人

三、心臓病（心臓衰弱、心筋硬塞、心不全、低血圧など）
二二人

四、高血圧症（簡単なものから、服薬中のもの、動脈硬化症を含む）
五九人

五、喘息（氣管支喘息、肺氣腫によるもの等）
五人

六、神経痛（リウマチ、関節症を含む）
四七人

七、肝臓病（肝硬変、胆石症を含む）
六人

八、糖尿病
一〇人

九、老人性白内障（身体は比較的健康であるが、視力障害が強い）
一四人

一〇、通院治療中
二五人

治療中の病氣は種々で、前記の病氣の一つだけでなく、二つ以上を同時に治療中の人もある。但しこれはアンケートに記載された方だけであるから、実際はもっと多いのではないかと思われる。

一一、自宅療養中及び病臥中
三三人

この中には脳溢血後の半身不随四人、脳軟化症三人、癌病二人、その他心筋硬塞、スモン病、肺結核、肝硬変症、原爆症、交通事故等があり、通院治療中の人達よりもずっと重症の人達ばかりである。

一二、入院治療中
一二人

前者と同じく重症の人で、家庭の事情によって入院されている向きもあるようである。結局重症者は前者と合せて四五人ということになる。而もこれらの人達は皆高齢者であるから、何時不慮の事変が起らないとも限らず、甚だ寒心に堪えないところである。

五、お子様方の現況（昭和四十五年十二月現在）

先に述べた二七九遺家族（アンケートの返事を頂いたもの）のお子様方（原爆死亡

学生の兄弟姉妹）の現況を調べたのが、この統計である。但し二七九家族の中、六家族の分は記載がなかったので、実際に調査したのは二七三家族であった。

(一) 独り息子を亡くされた家族

外に兄弟姉妹のいない本当の独り息子を原爆で亡くされた家族が一三家族（全体の五%）あり、女の子はあるが男としては独り息子であった家族が四三家族（一六%）、両方を合すると五六家族（二一%）、即ち五家族のうち一家族が独り息子を原爆で喪われたことになる。まことに悲しい極みである。

(二) 長男を亡くされた家族（独り息子を除く）

長男にも二通りあり、初めて生れた第一子としての長男と、上に女の子がいる第二子以下の場合の長男とがあるが、何れにしても長男を喪うということは悲しいことである。

この調査では前者の場合が九五家族（三五%）、後者の場合が五八家族（二一%）、合計すると一五三家族（五六%）で、半数以上が大事な長男を原爆で喪われたことになる訳である。

(三) お子様方の現況

各家族の子供の数は、最も少いのが一人（独り息子）、多いのは十人の子を恵まれた家族もあるが、今日までに病死された方も多数あり、現況を分類すると大凡そ次の五通りである。

(イ) 独り息子が原爆死して現在子供なし
一三家族（四、八%）

(ロ) 他に子供があつたが、爆死・病死等で現在子供なし
七家族（二、六%）

(ハ) 現在男の子のみ残っている家族
三九家族（一四、三%）

(ニ) 現在女の子のみ残っている家族
六一家族（二二、三%）

(ホ) 現在男の子も女の子も生存している家族
一五三家族（五六、〇%）

(四) の場合のように、男の子も女の子も共に生存中の家族は、不幸な中でも最も恵まれた家族と云えよう。実際の不幸はケース、バイ、ケースによって一概には断定出来ないであろうが、少くとも(イ)、(ロ)より幸福であることは、間違いないと思う。

(イ)、(ロ)では男か女の子が残っておられるので、(ハ)、(ニ)よりは少々よい条件の下に過しておられるようであるが、(イ)では両親のどちらかが欠けた場合、饑々娘の嫁ぎ先に寄寓しておられるケースが見受けられる。親としては本意ないことと思われるが、年老いた身では萬止むを得ないことであろう。(四五、一一、二〇)

原爆被爆直後の日記断片

調 来 助

戦時中の日記は、「忘れな草」第三号に、私(第五頁、当時医大教授)の外、秋口明海君(七頁、医専一年)、治村広三君(九五頁、医大二年)、中山喜昭君(一七一頁、医専二年)、杉山克巳君(二二二頁、医専一年)、田吉正英君(二一六頁、医専一年)、藤原元輔君(二二二頁、医専一年)、三島清和君(二三八頁、医専一年)たちのものが掲載されているが、被爆後の日記は学生達が死亡したため、僅かに私の「原爆遭難記」(九頁)と、故村田直輝氏の「原爆受難の追想」(一三頁)が掲げられたに過ぎない。

私の「原爆遭難記」は、私が当時簿記帳の補助簿に「備忘録」として書いていたものから、八月九日の分だけを「追憶」誌上に転載していたものであるが、その記録は私自身が間もなく原爆症に侵され、生死の間を彷徨ったために、八月九日から十二日まで一旦中断され、病気が小康を得て、大村海軍病院に収容された九月二十六日から、十月二十六日までの一カ月間が、再び丹念に記録されている。

この一部ブランクになった帳簿は、そのまま書棚の奥に放置されていたが、四十二年七月十三日、アメリカのリーダーズダイジェストの記者 Chinnoch 氏が、「埋もれた長崎被爆の実態を世に公にしたい」と云って拙宅に来られた折、通訳の中村巖氏が借りて、持ち去ったまま行方不明となって困っていたのを、仁科記念財団の加納龍一氏が東京の日本リーダーズダイジェスト社で発見され、昨四十五年七月、三年振りに私の手許に帰って来た由緒付きの古い日記である。当時の長崎新聞に、「調長大教

授の『原爆日誌』東京で見つかる」という見出しで、この事が紹介されたが、それは永井隆博士の「原子爆弾防護報告」が、偶然に発見された直後のことであった。

被爆当日の日記は、すでに「忘れな草」第三号(九頁)に詳しく記載されているので、ここでは要点のみを略記し、その後の日記をやや明細に発表したいと思う。

【八月九日、木、晴、午後一時驟雨】

八日夜は防空直中で病院に泊る。九日は午前七時に空襲警報発令、全員警備につく。九時解除、そのまま警戒警報に入ったが、規定により直ちに講義や実習が開始され、学生達は警備予備員を除き、講堂、病棟、外来診察室等に分散す。

十一時二分、松山町上空で原子爆弾炸裂、近距離にあった長崎医大は勿論、全市が修羅の巷と化し、死者数を知らず、多少とも余力のある負傷者は、穴弘法の丘に這い上り、友の名を呼び、水を求めつつ一夜を明したが(約三〇〇人)、その半数は翌朝動かぬむくろとなっていた。

ここで姿を見かけたのは、角尾学長、高木医専部長はじめ、長谷川教授、祖父江教授、清水兼専教授、篠島助教授、木戸助教授、永井助教授、石崎助教授、その他学生、看護婦たち大勢で、午後には三〇分間ほど驟雨が降り、皆ずぶ濡れになって寒そうであった。

私は救護所から届いた乾パンや、学生達が焚いて作った握り飯を被爆者に配給した後、放射線科の急造バラックに横たわり、滑石に疎開している家族の身を案じながら不安な一夜を過した。

【八月十日、金、晴】

今日も快晴、一片の雲もない。永井君たち放射線科の団は、朝まだほの暗い中に起き出で、東方に向い整列して、壮厳な朝の行事をすませ、永井君を先頭に、隊伍を整えて兼専の防空壕へ出かけた。僕は一人で学長たちの露営所に引返したが、学長が意外に元気なのを見て安心した。高木教授は相変わらず元気がない。学生を集めて担架二ツを用意させ、学長には西山の官舎にお帰りになるようお勧めしたが、どうしても聞き入れられないので、止むなく担架に乗せて丘を下り、調理所裏の横穴防空壕に収

容した。

その後僕は一人で学内を巡視したが、通路には大木が、或いは折れ、或いは根こそぎ倒れて、通り抜けるのに少なからず難渋した。到る処に屍体がごろごろ横たわっている。歩いている学生もいたが、まるで夢遊病者のようだ。自室に行ってみると、すべて焼け落ちて、何一つ残っていない。一面は灰の山、書棚の洋書は、まだブスブスと燃えていた。

病院を抜けて基礎へ行ってみると、一抱えもある大木が無残に折れ、一メートル四方、高さ二メートルもある石の門柱が、あわや倒れんばかりに傾いている。本館の焼跡には山事務官らしい屍体があり、法医学教室の焼跡にも、国房教授と思われる黒焦げの屍体が横たわっていた。僕は思わず駭然となって瞑目合掌し、更に進んで次男弘治の受講中だったという解剖講堂を探したが、すっかり様子が違って発見出来ないまま、グラウンドに出てみた。そこには看護婦らしい黒ずんだ屍体が、数個散在していた。折から来合せた放射線科の施君が、「これは○○君だ、あれは○○君に違いない」と、しみじみした口調で看護婦の名を呼んでいる。ここでも世紀の悲劇がまざまざと演じられ、僕は何とも云えない暗い気持ちで、病院に引返した。その途中、重傷を負って防空壕の奥に寝ている山根教授を発見し、治療を施した上、学長のいる防空壕に運ばせた。

巡視の結果判明した医大の被害状況は、次の通りである。

全焼 基礎教室の殆んど全部。焼け残ったのは図書館書庫の二階の一部と、生化学教室の地下室のみ。

病院では外来本館、薬局、内科病棟、耳鼻咽喉科、調外科東病棟、古屋野外科手術場、産婦人科手術場、結核病棟、南講堂、中講堂、第二中講堂、北講堂、看護婦寄宿舎、美瓊館（看護婦会館）、売店、門衛、汽罐室等。

半焼 両外科病棟（三階の図書室、教授室、一階の一部が焼け残る）、産婦人科病棟、皮膚泌尿器科、調理所等。

焼残り 眼科、小児科、精神科、伝染病棟（但し天井・壁は全部落ち、調度品はす

べて倒壊破損す）

巡視の道すがら、どうしたら学内の重傷者を安全に、且つ十分に治療できるかを考え、それには僕の疎開先の滑石で、適当な救護所を開設するのが最善の方法だと思つた。そこは大学からも近く、多少の治療材料は疎開してあり、幸に僕も木戸助教授も元気で、看護婦も七、八人無傷で生残っていたからである。

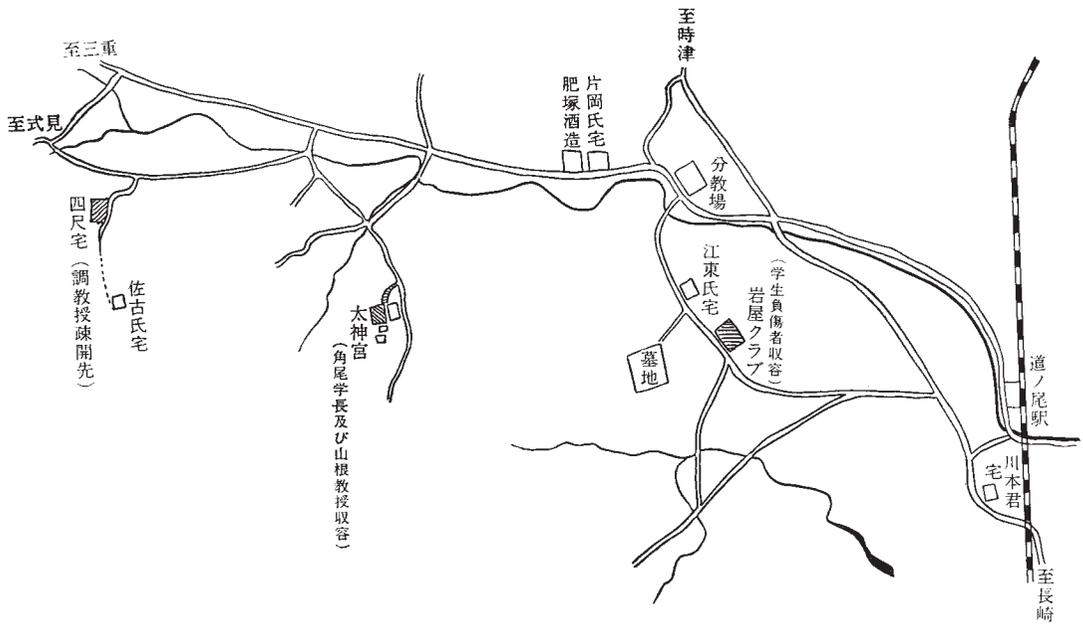
角尾学長から後事を託された古屋野教授に相談し、佐藤調理所主任の作ってくれた朝食をすますと、すぐに病院をとび出して、四キロの道を滑石へ向って歩きだした。山里町の通りは焼けた瓦の破片で埋まり、熱くて靴が焦げそうだ。路傍には黒焦げの屍体が幾つとなく横たわっている。山里小学校裏のコンクリートの橋は半分折れて落ち、川岸には老幼男女の生々しい屍体が累積している。昨日から見馴れた光景ではあるが、僕は到底直視するに忍びず、目をそむけながら道を急いだ。

滑石に着くと、先ず町内会長の片岡舜一氏を訪ね、予め考えていた太神宮の社務所を相談したが、既に昨日から兵隊が入っているとのことで駄目になり、小学校の分教場も破損がひどいので使用に堪えず、結局岩屋クラブと太神宮の拜殿を借り受けて、クラブに重傷の学生や看護婦たち約三〇人を、太神宮拜殿に角尾学長と山根教授の二人を収容することにした。

用がすんで疎開先の家に帰ると、家族一同が泣きながら出迎えてくれた。長男の精一は全身を白い包帯で包まれ、「こんな姿になって御免なさい」と謝っていたが、そのいじらしい姿を見ると、又新しい悲しみがこみあげて、胸が詰まった。

僕等が疎開していた四尺家は、大きな旧家で、市内から四キロ離れた山陰に建ち、家は極めて頑丈に出来ていたが、それでも瓦が落ち、天井が浮き上り、障子は棧が折れ、ガラスが割れて、壁土はばらばらに落ちていた。聞けば強い爆風が谷間を伝ってやって来たとのことであった。火災の起らなかつたのが、不幸中の幸と云えよう。

台湾人の呉源泉君夫婦と看護婦の村上君が訪ねてくれたのは、この日の夕方であった。呉君夫婦はすぐに帰つたが、村上君は救護班に参加することになり、そのまま家に泊つた。



【八月十一日、土、晴】

今日の予定は、(一)収容者の人選、(二)輸送法の確定、(三)薬品材料の運搬、(四)その他看護婦を大学から連れて来ること等であった。

部落の佐古氏にお願いして、リヤカーを曳いて行って貰い、村上君を連れて大学に行った。古屋野教授に事の顛末を報告し、午后三時頃までに患者の人選はほぼ完了したが、その輸送法が中々決まらずに閉口した。夕方近く本学出身の赤峰、松永両軍医が、被爆者の診療に来ている由を聞いたので、早速会って交渉すると、明日軍のトラックを出すことを確約してくれたのでホッとした。

看護婦の件は木戸助教が引受け、木田、阿部、本田、出口、笹川、酒井、矢口、宮崎の八人を集めてくれたので、村上を合せて九人となった。医者は僕と木戸君の兩人だけで、仮卒業の佐藤、日高の両君は、共に郷里に帰ったので困っていたところ、医専三年の上野、片山、小林の三君が協力を承諾してくれ、まだ外にも希望者がある由を聞いて、大いに力を得た。

古屋野教授と仕事の打合せをしていると、学部四年の松瀬寿良君が、「婦人科の廊下に内藤先生らしい屍体があります」と報告して来た。その屍体にあつたという手帳を見ると、内藤教授の電車の定期券だったので、早速駆けつけてみると、建物は火災を免かれ、屍体の側に大きな梁が落ちていて、それが内藤君の頭にあたつたらしく、上着、ゲートルのまま、海老のように曲つて死んで居り、傍の白壁には、赤黒い血の手型がついていた。顔は黒ずみ、体はブクブクに肥つて、生前の内藤君とはすっかり形相が変わっていて、見るも痛ましい有様を呈していた。早速奥様にお知らせしたのは云うまでもない。

夕方、重症の高木教授をお家にお連れしようと、元気な学生に担架の用意をさせたが、佐野教授の診断で、途中死亡の危険が想像されたので、その担架では祖父江教授を佐野教授宅に運ぶことにした。山根教授と石崎助教は、古屋野外科裏の防空壕に収容されていたが、二人とも瞑目したまま物も云わず、極めて重態のように見受けられた。その他乞われるままに、医専一年生の頭部外傷の患者を診たが、頭蓋骨折によ

る硬膜下出血で、とても助かりそうになく、小児科医局員の横山君も診察したが、内臓破裂による急性腹膜炎で、瀕死の状態であった。

大学に居ると、悲惨な光景の連続で息がつまりそうだったので、まだ構内に約七〇名の負傷者がいるとのことだったが、あとは木戸助教と木田看護婦にまかせ、医療品を積み込んだリヤカーと一緒に、残りの看護婦達を連れて滑石に引揚げることにした。途中薬局勤務の川本君宅に立寄り、救護所への協力をお願いして、疎開先の四尺家に辿りついたのは、秋の日もとつぷり暮れた午後七時頃であつたらう。

僕の借りているのは回り縁付の八畳と六畳の二間で、八畳に重傷の長男精一の外、母、僕等夫婦、娘三人が寝み、六畳には薄団を隅々まで敷きつめて、八人の看護婦がごろ寝することにした。木戸、木田の両人は、十時頃まで待ったが、とうとう帰つて来なかつた。

【八月十二日、日、晴】

今日の予定は、救護所の清掃と負傷者の収容である。朝早く被爆者の山下国夫君宅へ往診に行く途中、木戸・木田の両君に会ったが、聞けば昨夜は遅くなつたので、分教場で夜を明かしたとのこと、真暗で而も硝子破片の散在する中で、よく寝られたものだと感じた。

朝食後、二人には患者受取りのため、又大学へ行って貰い、川本薬剤師には、米配給の交渉のため、井樋の口の救護本部まで御足労をお願いし、僕は看護婦を二手に分けて、岩屋クラブと太神宮拜殿の清掃にあつたが、この時滑石警防団の四名の方が、破損個所の修復に協力して下さつたことは、洵にありがたく、感謝の外はなかつた。

午後四時頃までに清掃も終り、見違えるほど綺麗になつたが、長崎からのトラックは到着せず、折から来合わせた学部四年の田中、谷本、石神の三君と、焚出しのお結びを食べ、クラブに泊めて欲しいという石神君を残して、家に帰つた。

木戸君達も夕方大学から帰つて来たが、いつまで待っても患者運搬のトラックが来ず、収容は多分明日になるだろうとガツカリしていた。然し疲れた体を夜具の上に横

たえた時は、空襲以来初めて夜具に寝るのだと云つて、さすがに嬉しそうであつた。

【八月十三日、月、晴】

今日だと思つていた学長初め負傷者の輸送が、昨夜の中に行われたそうで、定めて心細く思われたらうと、慙愧に堪えなかつた。早速二人分の夜具を、調宅から太神宮に運び、学長と山根教授を収容して、北側の縁に近く、学長を奥に、山根教授を手前にして、南枕に寝かすことにした。床は畳、障子も雨戸もなく、小高い丘で、あたりには大木がこんもりと繁り、下界に比べると大変涼しく感ぜられた。学長からも、「ああ、いい所だ。お蔭で気分がさっぱりした」と喜んで頂き、これでよかつたと安心した。

付添は角尾内科の前田婦長が、初めからつきつきりで勤めていたが、これからは二人のお世話を一人でやらねばならぬので、何とかしてやらねば体が持たぬだろうと思ひ、出来るだけ外科の看護婦を一人手伝わせることにした。

太神宮の収容が片付くと、今度はクラブだ。行つてみると、床の上に席を敷き、その上に三〇人程の負傷者がざらりと並んでいる。看護婦も学生達も、甲斐々々しく立ち働き、傷や火傷の処置は勿論、食事や大小便の世話まで、手際よくやっている。いつもの看護婦とは思えないほどだつた。

注射器やピンセットの消毒には困つたが、窮すれば通ずる道はあるもので、洗面器に井戸水をいれ、これを七輪にかけて煮沸することにした。ガーゼはそのまま使うほか仕方がなかつたが、幸にたいいていの傷は化膿していたので、大した支障はなかつたようである。

救護所を開設すると、すぐに往診の注文が殺到した。町内の民家にのがれた負傷者たちは、皆重傷なので止むを得ない事だ。代る代る看護婦をつれて行き、治療してやつた。学生をやつても文句をいうものがなかつたのは、さすがに非常時だと思つた。

夜は学生達がクラブに泊り、看護婦は全部僕の疎開先に引揚げた。皆くたくたくに疲れている。電灯がつかず、小皿に種子油を入れた灯心の暗い火で、粗末な夕食をすまずと、欲も得もない着のみ着のまま、折り重なるようになって床についた。

【八月十四日、火、晴】

朝太神官を見舞うと、学長には大した変りがなく、ただ熱が高いだけで、意外に元気がよい。山根教授は昨日から少しづつ起っていた牙關緊急が、更に高度となり、全身の痙攣発作も見られるようになった。太神官にお参りに来た人が鈴を鳴らすと、その度毎に強度の後弓反張（背中をそらす痙攣）が起つて困った。どうして持つておられたのか、学長が「これを注射してやり給え」と云いながら、破傷風血清の瓶を僕に渡された。すぐに用意して静脈内と傷の周囲の皮下に注射したが、これだけでは急に快方に向いそうにも思われなかった。かと云つて外に手段もないので、暫らく経過を見ることにした。

とても困つたのは、山根教授が自ら死期を自覚されたのか、酒を執拗に所望されたことだった。教授が酒好きな事は知つていたので、何とかしてあげたいと思つたが、戦事中の統制で清酒はなく、止むを得ずアルコールを薄めて差上げたが、口に含むとすぐに痙攣が起つて、どうしても飲むことが出来ない。ネラトンを食道内に挿入して流し込んでくれと云われるので、木戸君にやつて貰つたが、ネラトンの先が咽頭に届くと、直ちに痙攣が起つて、自分でそれを引抜かれる始末で、「どうしても駄目かね」と、弱々しい声で嘆かれるのを聞くと、まことに痛ましい気がした。

クラブの方では、多くの負傷者が激しい下痢を起していた。しかも血便である。赤痢かも知れないというので、用心のため部屋の片隅に隔離（〇？）したが、熱が高く、四〇度を越すような有様で、容態は刻々と悪化して行く。今日も二人の学生が死亡した。看護に従事していた学生達は、友の死を悼みながら空地に材木を集め、敬虔な姿で火葬の火を見つめていた。

【八月十五日、水、晴】

山根教授の容態は刻一刻と悪化するばかりで、最早食事もとられず、意識も朦朧としてきて、今は死を待つばかりとなった。身内の人はまだ誰も姿が見えない。午後七時過ぎ、一人淋しく異郷の地で鬼籍に入られたが、臨終に立会いながら、全く人事とは思えないような悲しい気持がした。学長も傍の病床で、感無量の思いをされたこと

と思う。

岩屋クラブでは、今日も三人の死人が出て、火葬に多忙を極めた。主としてやつてくれたのは医専三年の蛭崎君はか学生諸君で、材料集めから屍体を荼毘に附する仕事まで、懸命にやつてくれたので大いに助かった。

午後三時頃道を歩いていると、町内の人が僕を見て、「調先生、もう戦争は終りましたよ。正午に天皇陛下の放送があつたが聞きましたか」という。僕は何も知らなかつたので、ただ晒然として答えることも出来なかつた。嗚呼、何たることだ。もう一週間早かつたら、こんなに大量の犠牲者を出さずにすんだのに。恐らく無条件降服に違いないと思うと、暫らくは何をする元気も出なかつた。夕餉の膳についた時も、看護婦達は急に気抜けがしたのか、将来のことを思い廻らしているのか、浮かぬ顔をしながら、ただ黙々と箸を運んでいた。

夜になると、長男の精一の衰弱が目に見えてひどくなり、背中が痛むのか、胸が苦しいのか、絶え間なく呻き声をあげ、繰り返して繰り返して、母の名を呼んでいた。余命もそう長くはないだろうと思うと、止め度なく涙が流れて、慰めの言葉さえ与えることが出来なかつた。

【八月十六日、木、晴】

夜が明けると精一の容態も少しは持ち直したように見えたが、脈の状態は極めて悪く、顔の色は黒ずんだ貧血状態を呈し、死相とはこんなのを云うのだろうと思つた。しかし意識だけはまだはっきりしていて、僕等に謝辞を述べたり、早く死んで申訳ないとか、今度生れかわつたら必ず仇をうってやるとか云つて、軽度ではあつたが不安状態を呈するようになった。

学長や岩屋クラブの学生達のことにも気になつたが、精一の容態が極めて悪く、今にも死にそうなので、離れる訳にもゆかず、どうせ駄目だとは思つたが、じつと側についてやつた。純子はおろおろしながら励ましの言葉をかけていたが、精一の声も次第に小さくなり、最後は眠るように正午ごろ息を引きとつた。時に満十八才八カ月、短い生涯で、定めて無念に思つたことであろう。

遺骸は裏の山に運び、多良氏の御好意で、手厚く火葬に付することが出来た。火葬がすむと又太神宮や岩屋クラブに行つて患者を診、乞われるままに往診にも出かけた。一私事にかまけて家に引籠ることの許されない状態だったのである。

今日も亦数人の屍体を焼いた。あとでは火葬用の材木に困つた程である。

後に聞いた話であるが、精一と同じ建物に居た福田由郎工場長は、顔に大怪我をしながら助かり、精一の友人某も同じ部屋に居ながら、窓と窓の中間にある狭いコンクリート壁に遮られて助かつたそうだから、生と死は全く紙一重の差と云わざるを得ない。これも持つて生れた運命と謂うべきであろう。

【八月十七日、金、晴】

角尾学長の容態は次第に悪化するようだ。学長の御令弟角尾滋氏（当時の昭和医専の薬理学教授）が、東京から来られて付添われることになり、学長の体温を測つておられたが、「何度か」と聞かれた時、「三九度です」と答えながら、検温器を僕に示された。見ると四一度を示していた。本当のことを云うと、学長が心配されると思われたからであろう。学長は、「汗でも出れば熱が下るだろうが、ちつとも出ないので困る」と嘆いておられた。さすがは内科の泰斗だと感心した。

奥様が来られた時、「美代さん、病気が癒つたら次城に帰つて開業でもしようね」と弱々しい声で云われたが、大学者がこんな弱音を吐かれたのは、長崎医大、吾日本帝国の将来に望みが少いと悟られたからではないかと思うと、真にお可憐な御心情だと、つくづく考えさせられた。

昼間は例の如く岩屋クラブの診療と往診とで、寸暇もない程の忙しさだったが、夜家に帰り、精一も弘治も居ない淋しい夕食をすました午後七時頃、大久保という近所の家から往診の依頼があつた。疲れていたが一人で行つてみると、豊二枚が真赤な血で染り、血の海の中に老人が倒れている。左の頬に大きな刀傷があつて、少しづつ出血しており、虫の息の有様だった。聞くと米の配給のことから喧嘩となり、日本刀で切られたのだという。取りあえずガーゼで傷口を圧え、急いで救護所から縫合の器械と包帯材料を持ってきて貰うことにした。往復に一時間は充分かかる。

八時頃だったか、町内会長の片岡舜一氏が庭先に来て、「調先生、その患者は放つておいて、早く逃げないと危ないですよ。米軍の上陸騒ぎで、住吉の駐在所には巡査が一人も居ませんよ」という。親切に教えてくれたのであろうが、外科医として瀕死の患者を放置するわけには行かない。「このままでは死ぬかも知れないから、止める訳にはゆかない。縫合がすんだら考えてみます」と返事して、材料が揃うと一人で縫合をすませた。

これなら大丈夫と見当がつくとすぐ家に帰つたが、既に情報を耳にしたとみえて、女ばかりの我家では、皆心配顔にそわそわしている。家の者には大丈夫だと云い聞かせ、看護婦たちには、「明日の様子を見て態度をきめる。それまで騒がないように」と諭し、一同ひとまず眠りにつくことにした。

【八月十八日、土、晴】

四尺家では母親、娘、孫娘の三人が、岩屋山に避難すると云つて、朝早くから準備していた。我々にも逃避を勧めたが、僕は、「大丈夫だから僕が帰るまで其のまま家にいるように」と家内や子供達に云い残し、看護婦をつれて岩屋クラブに向つた。途中片岡氏の門前を通ると、大きな大八車に荷物と人を乗せ、これから村松方面へ逃避するとの事であつた。

岩屋クラブに着くと、看護婦たちが、「こわいから家に帰して下さい」と泣くようにして願ひ出た。考えてみると、折角空襲で助かつたのに、若しもの事があつたら親御さんに申訳ないことになるので、救護所の閉鎖を決意して、収容患者達の転送にとりかかった。

送り先は時津、諫早、大村などである。中には歩いて行つた負傷者もいたが、多くは担架で道ノ尾駅まで町の若者に運んで貰い、それから汽車で諫早、大村、川棚方面へ送つて貰つたのである。

看護婦たちは皆思い思いに立ち去つて行つた。喜々津へ帰るもの、その友の家に一夜寄寓するために一緒に出かけたもの、五島へ帰る人達は山を越えて式見、三重方面に去つて行つたが、多分途中何処かで一泊し、便船を見つけて故郷へ帰る積りである

う。

夕方までに患者の片がつくと、木戸君初め学生達は、分散会をやるために僕の疎開先へやって来た。町の人達は皆岩屋山に逃げて、僕の身内五人だけが淋しく家を守っていた。死んだ息子が飼っていた鶏二羽をつぶし、肥塚酒造所から清酒一升を分けて貰って、町の一人も居ない静かなこの家で、盛大な慰勞会を行ったのである。

夜も更け、酒がなくなると、木戸、上野、片山の三人を残して、他は皆自分の家に帰って行った。この三人は都合により暫らく泊めて貰いたいという。息子二人が急に居なくなり、看護婦達も引揚げてしまった我家では、娘達は却って彼等を歓迎するように見受けられた。

【八月二十二日、水、晴】

十八日に救護所が閉鎖されてからは、学長の治療と、依頼を受けた町の患者の往診だけで、気分的には大変楽になった。学長の硝子傷も大半は癒って、寧ろ下痢、発熱など内科的の病状が主となり、この方は箴島助教授に指図されて、御自分で治療しておられたようである。これが普通の熱や下痢だったら、訳もなく癒ったであろうが、何か違ったところがあるらしく、学長はいつも、「今度の爆弾は普通と違って、何かプラスXがある」と首をかき上げておられた。僕もそう思ったが、さてどう違うかということになる、全く見当もつかなかった。

二十日頃だったろうか、末娘の倅子が上野君の髪毛を引張りながら、「ぞろっと抜けるので気味が悪い」と云っていたが、その理由も僕には全く不可解だった。

学長の下痢は軽快したが、熱は一向に下らず、常に四〇度を超過して食欲もなくなり、十九日頃から口内炎や皮下溢血斑を生じ、全身倦怠が強く、二十一日午後からは意識も少し混濁し始め、遂に二十二日午前十時に鬼籍に入られた。枕頭に侍っていた学長夫人、令弟、古屋野教授、箴島助教授、ほか数人の教室員や、僕等夫婦も皆一同に暗涙にむせび、暫しはただ茫然と遺骸を見護るばかりであった。

「巨星地に墜つ」。これはその時の僕の偽らざる感想であった。実に学長は敬虔な学者としても、敏腕な政治家としても、又と得がたい偉大な方で、我が長崎医大ばかり

でなく、我国の教育界に於ても、実に惜しい人を亡くしたものだと言感した。

遺骸は間もなく一同に付添われて大学に運ばれ、外来本館の玄関ホールに安置された。今夜しめやかなお通夜をなし、明日告別式が行われる予定である。

【八月二十八日、火、晴】

学長の告別式は予定通り二十三日に行われた。古屋野学長代理の弔辞は、切々として参列者の肺腑をつき、在りし日の学長の英姿が偲ばれて、又悲しみを新たにしたり。式がすむと学長の遺骸は裏の丘のテニスコートに運ばれ、うず高く積まれた材木の檯やぐらに安置されて茶昆に付された。今は一片の白骨と化された学長も、魂は永遠に我が大学にとどまって、医大の復興と発展を静かに見護って下さることであろう。

木戸助教授と二人の学生が僕の家を去ったのは、告別式の翌日、二十四日の朝であった。家は急に淋しくなったが、被爆者の救護事業も一段落ついたので、僕はその日から約三週間を経た今日、初めて純子及び三人の娘を連れて大学に行き、次男弘治の消息をたずねた。医専一年生は解剖学の講義中だったと聞き、講堂を探し求めて行ったが、基礎教室のあった丘一面は全くの廢墟と化し、木造家屋は皆焼けて、土台だけがポツンポツンと残っており、空には何百羽と知れぬ鴉が腐肉を求めて乱舞し、その声は死霊の怒号とも呪詛とも聞えて、二云い知れぬ不気味な情景を呈していた。

講堂の土台の内側には、三つ四つの白骨の小山が築かれ、その他に人らしい形をした遺骨は何処にも見られない。これでは誰が誰だかさっぱり判らないので、仕方なく各々の小山から白骨のかけらを二片づつ拾っていると、末娘の倅子が何かを見つけたりしく、大声で家内を呼んだ。皆で部屋の中に行ってみると、鉄の扉が倒れていて、それにズボンのホックの部分が裏返しにこびりついていて、白い裏布に「山本」と墨で書いた字が見える。家内は咄嗟に、「アッ、これは弘治のズボンだわ」と叫んだ。それは僕の長姉の独り息子の山本文男（九大医学部卒）から貰って着ていた、紺サージの学生服である。全く奇蹟と云うより外はない。

弘治の死亡が確認され、ひよっこり帰って来るのではないかという望みの綱が切れて、がっかりしたような、半面本人の遺骨が拾えて嬉しいような、複雑な気持ちで大学

を辞し、そのまま家路を急いだ。

【九月二十六日、水、雨】

八月二十九日から昨日まで日記はブランクになっているが、この期間は僕が急性放射能症におかされ、滑石の疎開先で生死の間をさまよっていた期間で、書こうにも書けなかったのである。

弘治の死が確認され、二人しかいない男の子が二人とも死んだかと思うと、何をするにも張合いがなく、急に元気がなくなつたようだ。然し考えてみると、その頃から原爆症が起つたらしく、何をするにも大儀で、特に歩くのが大変苦しかった。

九月三日に大学本部から連絡があつて、緊急会議の召集を受けた。一人で行くのは不安で心許ないので、高女二年生の朝子を伴つて滑石を出た。道ノ尾駅まで二キロの道をそろそろ歩き、汽車で長崎駅に行き、本部のある商工会議所まで又一キロの道を歩いたが、小川町あたりで七、八メートル先に箆島助教の姿が見えたので、追いつこうとしたがどうしても追いつけず、声をかけようとしても大きな声が出ず、とうとう同じ間隔を保ちながら、やっとの思いで会議所に辿りついた。箆島君も僕と同じように弱っているんだなと思つた。

会議は二時間余りですみ、又朝子に付添われて帰つたが、家につくと起きていることさえつらくなつたので、すぐに病床に横たわつた。それっきり三週間余り、一時は死を覚悟した程の苦しみを味つたのである。

九月四日の朝床の中で、僕は上腕と大腿に無数の小さい溢血斑のあることを発見した。これまで多数の患者に見たのと同じ色である。そんな人は皆死んで行つたので、今度は僕が死ぬ番だ、と急に不安になつて来た。死ぬのは何日後になるか、それまでどうしたらよいか、遺言？ 誰かに相談した方がよくなるか、など種々思い感つている時、近所に疎開していた北村包彦教授が、大学再建の話でやつて来た。僕は縁側まで起きて行き、そつと溢血斑を見せたが、教授は意外に平気で、「僕にもあるよ。ホラ」と、腕をまくつて自分のを見せてくれた。僕のと大きさや数は同じだが、色は却つて濃いようだ。然しとても元気で、僕とは比較にならない。そのうち純子もやつ

て来て、「それは蚤の食つた跡でしょう」と、力ずける積りで自分の腕を見せていたが、それとは全く違つていた。

僕は半信半疑で又床につき、朝子を呼んでビタミンCの注射をやって貰つた。幸に熱は殆んどなく、食欲もそれ程衰えていないので、それが唯一の頼りだつた。

溢血斑は数こそふえないが、色は急に消えそうにない。死の妄想は常に頭の中を往來して、不安は益々つのるばかりだつた。僕はなるだけ溢血斑を見ないようにし、静かに眠ることに努めた。近所の農家で鶏を飼つていたので、好きな卵が自由に得られたのは倅せであつた。

一週間はどして溢血斑をよく見ると、数が少し減り、色も幾分淡くなつたように思われた。「助かるかな」と思わず^{つぶや}いた時は、無性に嬉しかった。

十六日だつたと思うが、教室の藤井君がやつて来て、血球計算をやつてくれた。赤血球数三五〇万、白血球数二、四〇〇だつたが、溢血斑の最盛期には、恐らくもつとずつと少なくなつたに違いない、と思わず慄然とした。又藤井君は牛骨のスープをビール瓶につめて持つて来てくれたが、それはとても美味しかった。

二十日頃だつたか、医専三年の香田金朝君が来て、一晩泊めてくれという。息子達^が死んで淋しい時だったので、快く承諾したが、色々とうるさく話しかけて来るのは弱つた。衰弱している僕には返事をするのさえ物憂く、早く寝てくれたらと思つていると、香田君は土間に置いてあつたアルコール瓶を見つけ出し、これを飲んでいいかと云う。死んでも知らないよと返事したが、彼は「これはメチルでなくてエチルだから大丈夫です」と云いながら、小さなブドウ酒のコップに半分程入れ、それを糖液で薄めて僕に飲めと勧める。僕は肝臓を痛めているのでそれは毒だろうと、初めは躊躇したが、余り執拗に勧めるので嘗めるようにして飲んでみると、とても口触りがよく、とうとうみんな平げてしまった。すると不思議なことに、何となく体が温まり、いくらしゃべつても疲れないようになった。その後は、彼が帰つた後も続けて朝夕薬と思つて飲んだが、ぐんぐん力がついて、間もなく起き上れるようになった。多分ア

ルコールがこの病気に利いたのであろう。

少し元気を回復した二十四日の夕方、北村教授が長崎からの帰りに立寄り、「長崎医大は暫らく大村海軍病院に本拠を置いて、再建策を講ずることになったから、明後二十六日に大学に来て、皆と一緒に大村に行くように」と古屋野教授の指令を伝えた。長い間病床に臥して、まだ足許はフラフラだったが、何分大学にとっては危急存亡の非常時なので、何をおいても必ず行くという返事を与えた。夕方森俊夫君が来て同行を希望したので、是非そうして欲しいとお願いした。

今日(二十六日)は九時頃森君が来たので、大村への所持品を整え、十時出発、道ノ尾駅で北村教授と一緒にになり、長崎へ向った。新興善国民学校に着いて、影浦教授の話を知ると、大村への移転の経緯は次の通りであった。

『大村海軍病院の院長泰山弘道海軍々医少将は、大正六年の長崎医専卒業の古い先輩なので、医大の将来を痛く憂慮し、屢々海軍病院を文部省に移管して、大学が使用することを古屋野教授に建言されたが、教授は米軍に接収されることを惧れて、逡巡されたそうである。然し同じ長崎医大出身の原清軍医少佐が大いに力説したため、若し米軍の接収から逃れた場合は、是非長崎医大に移管出来るよう、九月十四日に保利医務局長(大正元年長崎医専卒業、海軍中将)宛に請願書を提出されたという。

一方影浦教授の同期生石川千福氏(厚生省科学研究所員)が二十一日に長崎、教授と会見の折、「じつとしては埒があかぬから、一刻も早く当方から働きかけたがよい」との注意があり、依って教授は古屋野教授と相談の上、二十二日に大村に行き、泰山院長と会見。その結果、「出来るだけ多くの被爆患者を収容し、医大の教授以下、職員、学生達が沢山院内にいた方が得策だ」という結論に達し、その準備中、二十四日には早くも泰山院長が自らトラックに乗って来崎、影浦、高瀬両教授と共に高尾克己氏(長崎市医師会長、当時新興善小学校に収容された被爆者達は、医師会の人達が主として診療していた)に面会し、大村海軍病院における長崎医大再建につき協力方を懇請したところ、氏の快諾を得たので、早速午後一時に大村から廻送されたバスで、患者一〇数名と、楠井賢造助教、学生四人(中村謙二、土山、長井、田

尻)が大村に行くことになった。

この時大村から、米国軍医が来院しているとの連絡があり、泰山院長は急遽大村に引返して米軍医中佐ディクソン(Dickson)と会談したが、その際彼は、「米国はこの病院を接収しないから、医学センター(medical center)にして一刻も早く新興善の患者を移して治療するように」と述べたそうで、院長も「古い歴史を持つ長崎医大が原爆で全滅したから、医大にこの病院を提供して再建させたい」との希望を述べ、両者の意見がほぼ一致したという話である。

同日夕方楠井助教がこの朗報を携えて帰って来たので、昨日は患者二〇数名に看護婦二人(山下絹枝、吉武マサ子)をつけて大村へやり、今日は更に大勢の職員が乗り込むことになったのだ。』とのことだった。

今日大村に行ったのは、影浦教授、北村包彦教授、調教授、佐藤純一郎助教、森俊夫(調外科)、二木忠実(産婦人科)、古賀達也(影浦内科)、小柳光久(影内)、中村匡邦(角尾内科)、黒木重徳(皮膚科)、須山弘文(学部仮卒業)、橋本長久(学部四年)、岸浦ケイ(眼科看護婦)、以上十三人のほか患者一人で、午後四時頃雨をつけて海軍病院に着いた。夕方には小児科の図書を満載したトラックも着いて、次第に医大色が濃くなるように感ぜられた。院長の計らいで、当時院内に滞在していた米国原子爆弾研究団のバーネット(Barnett)外数名に紹介され、将校食堂で夕食を馳走になり、夜は影浦教授の寝室で九時頃まで話し込み、日記を書いて、病後の疲れた体をベットに横たえたのは、十時頃だった。

【九月二十七日、木、雨】

朝食後学生達と協議して、病舎の受持を決めたが、まだ日本の軍医がいるので、その指揮の下に諸種の検査を行うように申し渡した。

| | | | |
|------|-------|------|------------|
| 第一病舎 | 被爆患者 | 約二五名 | 森、中村(謙)、田尻 |
| 第二病舎 | ク(内科) | 約二〇名 | 古閑、小柳 |
| 第三病舎 | ク(内科) | 約三〇名 | 黒木、橋本 |
| 第四病舎 | ク(外科) | 約三五名 | 須山、長井 |

第八病舎　ク（外科）約四〇名　森、中村（謙）、田尻

第十五病舎　ク（内科）約二五名　中村（匡）、土山

第十一、十三病舎　伝染病患者約一〇〇名　受持なし

次で福原医官（少佐）の案内で、病舎を一巡した。瀕死の重症患者は少いようだ。ベットが綺麗で、病舎も実に気持よさそうだ。中には手術を要する患者も、数人いるようだった。

廻診後、北村教授と共に院長に呼ばれ、バーネットに面会した。感じのよい男で、医大の状況を色々聞きたいと云う。院長の通訳で、当時の教授数二〇、その中の死亡数一二、学生数約七五〇、その死亡数約五三〇、患者は外来を合せて約三〇〇、死亡約一五〇などと答えた。北村教授と僕の罹災状況も聞かれたので、詳しく説明し、序に角尾学長の死亡までの症状や経過、又あとで爆心地に来た人にも、同様な症状の現われたことなど話してやった。

午後古屋野教授が来られたので、北村教授と一緒に、院長室で留守中の報告をしていると、廊下で泰山院長が外人相手に大声で口論しているのが聞えた。後で聞くと、米国の軍艦から銃剣を持った兵隊をつれて、病院を接収に来たのだそうだ。院長は一切を説明して追いついてやったと、得意になって云っておられた。

【九月二十八日、金、晴】

今日はからりと晴れた秋日和で気持がよい。朝古屋野、北村両教授と一緒に散歩。朝食後病棟標本を見せて貰ったが、米人がその中から、よいのを持って帰ると云って運び出していた。物理学者のシェルバー（Shelber）が会いたいと云うので、北村教授と行ってみると、原子の作用について色々説明し、それは瞬間的で残留作用はないと云う。我々が早期の入市者に被爆者同様の症状の起ったことを話すと、彼はびっくりしていた。

午後バーネットは、「原子作用は瞬間的だが、塵埃などについてガンマー線が風と共に移動するから、長崎では東の方に病人が出たかも知れない。調査してみたらわかるだろう」と、面白い示唆を与えてくれた。又ウラニウム、ネプチニウム、プルトニ

ウムなど、新原子の名を教えてくれ、広島ではウラニウム、長崎ではプルトニウムの同位元素が、爆弾として使われたことを教えてくれた。

【九月二十九日、土、晴】

土曜日なので、古屋野教授ほか七人のものが長崎に帰って、急に淋しくなったが、代りに浜田助教授、箴島助教授、野口恭一（学部三年）、園田侃義（学三）、河村要（医専三年）の五人が来たので、又賑やかになった。

朝須山君と包帯交換、藤原昌君の開放骨折が、大変よくなっていたので嬉しかった。交換がすんだ後、須山君に被爆患者のリストを作り、受傷した場所、傷病名及び部位、症状、血液所見、尿所見等を調べるようお願いした。

午後院長に呼ばれたので行ってみると、珍らしく東大の都築教授が来ておられた。原爆傷害研究のため、若い医局員を大勢つれて来られたとのこと、又其処には米国人の研究者も数名居て、バーネットがその中のワルレン（Warren）大佐を僕等に紹介した。大佐はこの度の日米共同研究につき、将来の研究方針など、こまごまと話してくれた。

【十月二日、火、晴】

九月三十日（日、雨）には、泰山院長の伝言を古屋野教授に伝えるために、長崎に行ったが、教授には会えず、仕方なく影浦教授に依頼して、久し振りに滑石の自宅に帰った。翌十月一日（月、雨）は昨日濡れた服や靴が乾かないので、休養することにして、終日家に引籠った。

今日（二日）は雨もあがったので、十時五十分の下りで長崎に行き、本河内と鍛冶屋町で自分の用をすませ、午後のバスで、佐野教授と一緒に大村病院に帰った。

留守の中に古屋野教授が知事に会われたそうで、「大浦の陸軍病院は、都合によって赤十字に譲ることになったから、残念ながら大学へは渡すことが出来なくなった」という嫌なニュースを耳にした。

尚学部一年及び医専一・二年の教育を、十月八日から九大に依頼すること、今度復員する陸海軍学校の生徒を、医大及び医専に受け入れることなど、今日初めて聞き、

大変なことになったものだ、少々不安になって来た。

【十月三日、水、晴】

泰山院長の提案で、明後五日から一般外来患者を診察することになり、僕にその運営方が一任された。建物は第五病舎ということだったので、一応検分して、一階に外科、皮膚泌尿器科、精神科をとり、二階に内科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科、婦人科を入れることにし、ちゃんと図面に書き込んで院長に渡した。

米軍の進駐が噂に上った時、急に四五七人の被爆者が本院から退院させられたようで、その生死の調査を泰山院長が影浦教授に頼まれ、教授は又それを僕に依頼された。住所がまだ一定していない今日、この調査は極めて困難であろう。

【十月四日、木、晴】

影浦教授が長崎に帰られた後、突然高瀬教授が嬉しいニュースを携えて来院された。その一つは、大浦陸軍病院の古賀院長から、「陸軍病院はこれまで赤十字に渡すように話が決っていたが、知事の話によると、赤十字へはやらぬことになったので、若し大学が希望ならば市長と相談の上使ってもよい」という通達が出来たことだった。

今一つは高尾医師会長（中山衛生課長同道）が本部にやって来ての話で、「進駐軍は新興善国民学校を接収するから、それを市民病院として私（高尾会長）に経営せよ」と云っているが、私にはとても出来ぬので、大学病院を推薦したところ、明日午前八時半に責任者に会いたいと云っているから、是非影浦教授に進駐軍本部へ行ってほしい」とのことだった。協議の結果、その旨を手紙に書いて、夕方長崎に帰られる高瀬教授に届けて頂くことにした。

明日バーネット達がアメリカに帰るといっているので、夜北村、横山両教授と共に彼等を訪ね、煙草など度々頂いたお礼に、能面や日本画の色紙、舞扇などを進呈したら、皆大変喜んでくれた。これで何だか日米親善の役目を果たしたような気がして、僕も嬉しかった。

【十月五日、金、晴】

朝九時頃帰国の途に上るバーネット一行を見送ったが、さすがに皆嬉しそうだった。之に反し、交替でやって来たワルレン大佐の一行は、これからという緊張した顔をしている。一団の顔ぶれは Eibert De Coursey, Shields Warren, Sinclair, George Le Roy, Samuel Berg, Robert H. Ebert, Harold Schwartz, Herman Tarnower, Thornton Tayloe Perry 等々、数名の技術員であった。我々は今後これらの米国人や東大の人達と共同して、原爆傷害の解明に全力をつくすことになったのである。

今朝の新聞に、「長崎医大の大体の方針が決定し、医科の低学年は九大に、薬専は佐賀高等学校に、医科高学年は大村に来て講義を開始し、外来診療も始めることになった」という記事が掲載され、それを見た大村の長崎新聞支局長の多島氏が訪ねて来て、「大村としても大学と協力し、是非この病院が大学に貰えるよう尽力する」旨を述べて帰った。

愈々今日から外来診療所を開所したが、患者は僅かに三人で、皆内科の患者だった。今後バスでも来るようにして貰ったら、次第にふえるだろうと思つた。

【十月六日、土、晴】

昨日の新聞記事が祟ったのか、今日泰山院長は佐世保海軍病院に出頭を命ぜられ、夕方帰って次のような話をされた。

佐世保へ行ったら長官から、『大村病院は軍我保護院とする。大学などにはやらない。何故学生を泊めたり外来をやったりするか』と叱られたが、自分は、『原子爆弾研究の為に来ているので、外来を始めたのも原爆の影響調査の為である。この研究は東大、九大、長大の三大学でやるので、東大、九大からも来ているが、人数が少いので長大の学生が協力しているのだ』と答えておいた。なお長官は『医学校など不要だ』とけしからぬことを云うので、『一体大村病院が米軍の接収を免れたのは誰のためか。日本海軍では軍医を一カ所に集め、軍人を治療しようとするのが既に間違っている』と云ってやった。自分は軍をやめたら代議士になって、大いに闘ってやる積りだ』と、大気焔を吐いておられた。泰山少将の長崎医大に対する献身的な奮闘

には、全く頭の下る思いがする。

夜になって、影浦内科の森沢君が私宛の教授の手紙を持って来院した。「新興善小學校を大学で貰うことに決定したから、明後日高尾医師会長と一緒に、計画書を進駐軍本部に持って行くように」とのことであった。嬉しいことだ。

横山教授は、八月から大勢の学生が来るというので、須山、中村、土山、長井の諸君を督励しながら、宿舍の整備に大童になっていた。北村教授と僕と三人で検分した結果、第九病舎の二階小室を教授室、大室を講堂兼食堂、階下を教室員及び学部学生の宿舍とし、第十病舎の二階小室を助教授室、階下を医専学生の宿舍とした。

【十月七日、日、晴】

八時半のバスで長崎に行き、高尾医師会長と新興善移管問題につき協議し、影浦、高瀬兩教授が描かれたという図面を貰って家に帰り、図面を検討しながら大幅に手を加えた。

【十月八日、月、雨】

雨の中を新興善に行き、岡田市長及び高尾医師会長と連れだって、進駐軍本部のある出島税関に行った。会ったのは公衆衛生士官のホーン大尉 (Captain Horne)。新興善の計画図を見せたところ、大体よいがと云いながら、待合室を作れだの、記録室をここにせよだの、手術室はこんな風になど、いろいろ新しい部屋を作るので、病室が少くなり、ベッド数がずっと減って二四五になってしまった。開院期を聞くと、早ければ早い程よろしいと云うので、僕は大学のベッドが皆焼けて一つもないこと、若し大村海軍病院が大学に貰えたら、そのベッドを持って来てすぐにも開院出来ることを述べ、移管の件を尽力してくれるように頼んで辞去した。

税関からの帰りに、東大から来ている卜部君に会ったら、顕微鏡が足りなくて困っているから貸してくれという。僕の家に疎開してある二台を貸してやることにして、日本語の上手なブルーナー少佐の車で滑石に帰った。

【十月九日、火、雨】

十一時の汽車で大学本部へ行ったら、今度医大の事務官に決った白方君が来てい

た。新興善の計画図を見せ、事務所を新興善に移すために高尾会長に会いに行き、其処にいた橋本、有富兩氏に訳を話し、折よくやって来たブルーナー少佐をとらえて、大村海軍病院を大学に移管する問題につき、協力してくれるよう要望した。彼はおとなしい男で、「この喧嘩は大変むずかしいですね。心配していることは、時々成功しないことがあります」と、教訓めいた言葉を残して帰って行った。

【十月十日、水、暴風雨】

風雨の烈しい中を、ずぶ濡れになりながら大村の病院へ行った。新興善のことを泰山院長に話すと、院長の方も今日は大村の進駐軍司令部に呼ばれ、長崎医大のことをどう考えるかと聞かれたので、自分は大村海軍病院を medical center にして長崎医大に提供し、ここで診療、研究、教育を行い、伝統ある医大を再建するのが最良の策であると述べた。軍政官も全面的に賛成したとのことであった。尚、薬品材料のことを聞かれたので、一七〇〇名の患者を一年間治療するに足る量が保管されていると告げたら、Oh! very good と云って喜んでくれたさうである。それは没収する積りで聞いたのでなく、足りなければ寄付する積りだったということである。嬉しいニュースと想って差支ないであろう。

【十月十一日、木、晴】

| | | |
|----|-------|------------|
| 曜日 | 八時—九時 | 一二三時—一四、五時 |
| 月 | 産婦人科 | 内科 |
| 火 | 外科 | 小児科 |
| 水 | 内科 | 精神科 |
| 木 | 皮膚科 | 外科 |
| 金 | 内科 | 外科 |
| 土 | 泌尿器科 | 外科 |

九日(火)から左の時間割によって講義を初めたが、第一回は小児科の佐野教授、僕は今日の午後の講義をした。先ず感想を述べ、次で原子爆弾傷害について一通り話した。聴講者は学生と医局員を合せ約五〇名。少し変だが、そのうちに馴れるだろう。

午後三時過ぎに白方事務官が来院した。泰山院長に紹介すると、十六日に米國軍政官が来るから、その時は事務官も居た方がよいだろう。なお海軍の軍医達には一斉に休暇を出すので、今後医大の方で全責任をもって患者の治療にあたって貰いた

い、とのことであった。どうも喧嘩の仲間引込まれるは嫌だが、長崎医大再建の為には、萬難を排しても闘わねばならぬだろう。

【十月十二日、金、晴】

今日の講義では「外科から見た胃潰瘍 (ulcer of stomach on the surgical standpoint)」という題でお話した。午後四時頃影浦教授が来院されたので、北村教授と三人で院長を訪ねたところ、二、三日中に軍医達には登院を停止させるから、なるべく多数の職員や学生を、病院に呼びよせて欲しい、とのことであった。

【十月十三日、土、晴】

九時第四病舎廻診。外来に手術希望の胃潰瘍患者が来ていたので、診察して入院させた。午後は大村市内に行き、先ず保健所の板坂氏に挨拶し、次で陸軍病院長の藤沢正中佐（京城帝大時代の教え子）を訪ねたが、海軍病院とは雲泥の差できたなく、病床は三〇〇床あったが、入院患者は五〇人ぐらい、軍医はまだ一五人ほど確保してあるとのことだった。帰りに西川病院に入院中の福田由郎氏を見舞い、折よく市内を走っていたシュオート (Schwartz 海軍病院滞在中) の車で病院に帰る。

夕食は外人や東大の研究員達と共にとり、その後原爆傷害の研究報告会に移った。出席者は De Coursey, Warren, Tarnower, Perry, Ebert, Berg, 泰山院長、都築教授初め東大研究員、九大貝田君、長大側は影浦、北村、佐野、調の四教授。

この席上で De Coursey が、「原爆の影響を解明するためには、少くとも五千人以上の被爆者の実態を調査しなければならない」と提案し、都築教授は我々に向って「この調査は相当長い時日を要するだろうから、長大の方でやって貰いたいと思うがどうだろうか」と、相談を持ちかけられたので、四人で話し合った結果、その場で承諾の返事をした。

【十月十四日、日、快晴】

今日は院長から次のような嬉しいニュースを聞いた。De Coursey が長崎の進駐軍本部へ直通電話をかけ、Horne に大村海軍病院の話をしたところ、先方からは長崎軍司令官の発表として、「大村海軍病院は長崎医科大学に移管し、西九州地区におけ

る医学センターたらしむべし。以上はマッカーサー (Mc Arthur) 司令部に上申済み」という返事があったそうだ。僕は思わず快哉を叫んだ。新興善と大村、舞台は急に大きくなった。活躍だ、活躍だ、男の腕の見せどころだ。

午後東大の吉川助教授と卜部君が来て、新興善の善後策につき協議した。長大側としては早く患者を大村へ移し、新興善には原爆患者の外来診療だけを残し、他の部屋は片付けて修理改造したい旨を告げると、東大側でも凡そ一段落ついたので、今後の米国軍医への協力を、長大にお願いしたいとのことであった。

午後四時ごろ白方事務官が来て、諸種の件案 (新興善、大村海軍病院、合同慰霊祭、卒業式等) を協議している最中に、突然東京から林東大名誉教授 (科学研究会々長)、木下工大名誉教授 (学研会員) が来られたので、大騒ぎとなり、我々には原爆当時の様子を聞かれたので、一部始終をお話し申上げた。

泰山院長の所には佐世保鎮守府長官が来られたそうで、Warren, Sinclair 二人の立会の下に、長崎進駐軍司令官の意向を伝えると、「止むを得ない。この軍医達には川柵にでも行って貰うことになるだろう」と云い残して、帰られたそうである。

【十月十五日、月、晴】

大村病院の患者の診療は、医大が全面的に引受けることになり、次の受持を決定した。

| 病舎 | 教授 | 主任 | 診療員 |
|------|----|-----|---------------|
| 第一病舎 | 北村 | 一ノ瀬 | 本多、二木、蕪、金子 |
| 二 | 影浦 | 森沢 | 古閑、黄、林、中村 (匡) |
| 三 | 調 | 森 | 敏先、岩永、松本 |
| 四 | 調 | 木戸 | 須山、藤井、中村 (謙) |
| 八 | 北村 | 笹島 | 大倉、大坪、早田、野田 |
| 十五 | 影浦 | 笹島 | 高橋、中村 |
| 十一 | 佐野 | 浜田 | 高橋、中村 |

本院の入院患者は男九〇、女七四、合計一六四人で、今日二人死亡した。Warren が病理解剖を行ったが

実に鮮やかだった。

午後東大、長大、九大の研究員を集め、Le Roy と泰山院長から、今後の方針に

つき説明があった。長大の責任たるや実に重大である。

【十月十六日、火、晴】

本日長崎から軍政官 Horne が来て泰山院長と会見し、「大村海軍病院を長崎医大に移管し、この地区の医療センターとする」旨の文書をタイプライターで打ち、之をもつて佐世保第五艦隊の軍医長 Young の所に行つたそうである。

僕と北村教授の二人は、新興善病院整備のため、二、三日長崎に滞在する旨を告げて、午後四時の汽車で大村駅を出発した。

【十月十七日、水、晴】

五十日振りに浦上の大学の焼跡を訪ねてみた。学内は荒涼雑然として、昔日の面影はどこにも見られない。眼科では小笠原長秋君が、学生や看護婦と一緒に、焼残りの書物の整理をやっていた。調外科東病棟にはびしょ濡れになつた Kriegschirurgie があつたので、戦災記念に持つて帰ることにした。

歩いて新興善に行くと、古屋野教授が東京から帰つておられたが、交渉はうまく行かなかつたそうで、如何にも淋しそうだった。Horne の方も Young との会談が不成功に終り、「自分の権限ではどうにもならぬ」と、泰山院長にこぼしていたそう。折角好転していた問題が、又暗礁に乗り上げた形で、本当に嫌になつた。

【十月十八日、木、晴】

高商にある本部から新興善に、机、椅子など事務用調度品を運んで来た。一階の部屋に搬入して事務所を造成し、門に「長崎医科大学本部 NAGASAKI MEDICAL COLLEGE HEADQUARTERS」と看板を掲げた。

午後 Horne に呼ばれたので行つてみると、「大村海軍病院の件は、自分の権限外だからどうすることも出来ない。今日長崎と佐世保の軍司令部のものが、知事室で連絡協議会を開くことになつたから、高尾会長も古屋野教授も一緒に出席するように」といので、大村に行かれて留守中の古屋野教授の代りに、僕がオブザーバーとして出席した。

知事室には永野知事、岡田市長、高尾医師会長と僕がいるだけで、佐世保からは誰

も来ず、Horne だけが居て、「この事件は長崎と佐世保の連絡委員長（知事と鎮守府長官）が協議して、その結果を連名で長崎の軍司令部に云つてくれれば、それをマッカーサー司令部に上申するから、その通りに決定するだろう。」と述べて帰つて行つた。そのあとで知事は、「Horne の言葉をそのまま連絡委員長会談で述べると、鎮守府長官は是非でも軍戎保護院にする主張するだろう。ここは多少修飾して、アメリカ側では大村病院を医療センターにすることを極力熱望しており、その通りを連名で上申すれば、事は簡単に運ぶと云っているがどうか、とでも云うことにしよう。」と云つておられた。

市長は「医大が全面的に大村に移つてしまつては長崎も困るが、新興善があれば又帰つて来る絆ともなるだろう」と云われたので、僕は次のように述べて大学の立場を説明した。

「長崎医大は創立以来、長崎市とは切っても切れない縁があるので、古屋野教授は極力当地で再建するよう考慮されたが、適当な建物がなくて当惑されている折に、医大出身の大村海軍病院院長泰山少将から話があり、病院を米軍の接収から防衛すると共に、米国側に対しても之を医大に移管して医療センターにするよう、承認を得られたのである。但しこれは飽くまで暫定的で、将来長崎が復興したら、大学も必ず長崎に帰つて来る考えであるから、この点御諒承の上、現在困っている教育のため、大村病院が大学に移管されるよう、皆様の御援助をお願いする次第である」。

この点では誰も異論はないようであつた。

【十月十九日、金、晴】

昨日 Horne から頼まれた長崎医大建物の被害図を描き、赤（焼失）、青（倒壊）の色彩を施して持つて行つたら、大変喜んで何辺も謝辞を述べていた。

その後高尾医師会長に会つたら、新興善の引継ぎは二十三日にやりたいとのことだった。薬品のことを種々弁明しておられたが、どうせ無一物から出発する積りだったので、いい加減に聞いておいた。

事務官は看護婦のことを心配していたので、待機中のものへ手紙を出して、至急集

めるように手配させた。宿舍は学生寮を一つあけてそれに収容し、足らぬ場合はお寺を借りるように云いわした。

午後四時大村病院へ行く。佐野教授が学長（古屋野教授）推薦の件や、厚生省との交渉のため上京されると聞き、長崎医大は大村病院を描いては今のところ再建の道がないことを、よく説明して頂くよう依頼した。

昨日古屋野教授は、交渉のため佐世保に行かれたそうだが、長官とはただ挨拶程度の会見に終り、日本側で Young に会うことを極力とめたというが、僕にはその訳がどうしても判らない。

【十月二十日、土、晴】

泰山院長の後任が柿坂氏に決り、十八日に事務引継のため一度来院したそうだが、院長が拒否して追り返した為、昨日は佐世保から出頭を命ぜられ、愈々今日退官することになったのだそうだ。夕方古屋野教授を送って玄関に行くと、病院の総員が玄関前の広場に輪を作り、泰山院長は彼等に対して拳手の礼をなしつつ一巡し、静かな足どりで振り返りつつ官舎に向って帰られた。

その直後柿坂新院長は職員一同を集めて、「本院は近く軍戎保護院の病院となる。皆もその積りで大いに頑張つて貰いたい」と、一場の訓辞を述べたとか。このことは泰山前院長からの電話で判明した。

【十月二十一日、日、晴】

明後二十三日に新興善の引継ぎがあるので、長崎に帰った。新興善には古屋野教授が来ておられたが、聞けば永野知事は、大村問題交渉のため佐世保に行かれた由、教授自身は福岡・佐賀へ旅行の予定と聞いたので、僕は今が最も大切な時と思い、暫らく出張を延期して頂くようお願いした。

【十月二十二日、月、晴】

大村の北村教授から、「都築教授が長崎に来て居られる」との連絡があり、永野知事からは「午後三時に古屋野教授に会いたい」との手紙が来た。

午後都築教授が来られ、古屋野教授と二人で次の話を聞いた。

「日本には復員海軍々人の患者が約三万人あり、その中一万五千人は入院させねばならぬが、接収を免れた海軍病院にはベッドが二万二千しかない。それで大村病院を長崎医大にやる訳には行かないが、その一部を使うことは当地の事情から許されるだろう。然し海軍病院である以上、基礎教室を作ることは絶対に許されない。そのうち海軍病院は厚生省に移管されるが、そうなくても復員軍人の治療が主であるから、それがすむまでは大学が全幅的に使用することは出来ない。大学は今暫らく辛抱して、復員軍人の治療が完了するまで、我慢して貰わねばならぬだろう。若しそれが出来なければ、この話は打切るより外はない。」

僕はこの話の途中一二回反駁したが、要するに都築教授は海軍々人であつて、我々の味方ではない。少なからず腹立たしさを覚えた。

【十月二十三日、火、晴】

今日は新興善病院移管の日、午前中に庶務（日方事務官と柴田君）、薬局（谷薬局長）、調理所（佐藤主任）等を集め、午後一時頃からそれぞれ手分けして、引継ぎを行った。種々円滑を欠く点も多かったが、無理もないことと思ひ、午後四時頃いい加減に打切った。これで新興善は全面的に大学側で運営することとなったのである。

今日の長崎新聞に『長崎医大の再建』という題で次のような記事が載った。

「長崎医大の再建に就ては、医療施設の完備せる大村海軍病院を利用することによって、漸く復興の見透しがつき、医大側は勿論、文部当局も大乗気となり、殊に進駐軍側においても、国民の保健衛生と医学研究の大乗的見地より、同病院の接収を敢て行わず、医大再建に心からなる同情と援助を与えている秋に於て、曾て同病院に職を置き、現在復員軍人でありながら、これを傷痍軍人療養所に転換せしめ、以て自己一身の保全を計らんと、醜き策謀を企図するものがあるため、今後の成行を憂慮されているが、大村市内有志を以て組織する大村研究会では、二十一日開会の総会に於て果然問題となり、此際県民に呼びかけ与論を喚起して、医大再建に最善の努力をなすべきであるとの意見に一致した。」

同会の意見としては、『此の機会に長崎医大を大村にという様な醜い考えでなく、

一部の策動者のために傷痍軍人療養所に転換されることによって、医大の再建が不可能ともなれば、県民の不幸計り知るべからざるものがあるので、譬え大村存置が暫定的としても、飽くまで医大再建に協力すべきである』というにあり、今後目的達成に積極的運動を開始する模様である。」

夕方東大の卜部君から、原爆傷害調査の件について話があった。このことは昨日古屋野教授と都築教授との間で纏ったことだそうで、十一月十日までに五〇〇〇人を調査する。僕が団長におされ、卜部君はスタッフとして僕を助けるとのこと。学生五〇人を使えば一人一日一〇人づつで一〇日間ですむ訳だが、どうも困難な仕事だ。来週月曜から始めるそうで、急げば調査用紙の印刷も間に合うだろうが、学生を説得して支障なく調査を完了することは、院長として新興善病院改造という大事業を支持している僕には、ちと荷が重過ぎるようだ。然しここが男の腕の見せどころ、暫らく大村問題を古屋野教授や北村・佐野教授達にまかせて、大いに奮起することにしよう。

【十月二十四日、水、晴】

八月二十四日から郷里に帰って静養していた木戸助教授が、元気になってひょっこり長崎に帰って来た。彼も一時生死の間を彷徨^{さまよ}っていたそうだ。

夜は僕の家泊り、一別以来の四方山の話をさかせたが、彼が手伝ってくれば、原爆障害調査も案に達成出来るだろうと、大変嬉しかった。

【十月二十五日、木、晴】

八時の汽車で木戸君と一緒に大村に行く。昼間は診察、手術、講義などで急がしかったので、夕食後に学生達（学部三、四年と医専三年）を集めて、原爆災害調査の事を話し、長崎医大の名著にかけて、どうしてもやらねばならぬことを告げ、一同の奮起を促した。学生達は毎日汽車で長崎に行けるので、万更でもなさそうな様子だった。

【十月二十六日、金、晴】

午前廻診、午後臨床講義（腸狭窄の原因 cause of the intestinal stenosis、胃潰瘍と米粒体粘液囊腫の切除標本示説）。

本日の新聞に『医大再建、大村を米軍も希望』の見出しで左の記事が出ていた。

「大村海軍病院を利用しての長崎医大再建問題につき、進駐軍長崎地区衛生官ホーン大尉は、二十三日大村海軍病院に來り、彼等^{その}以西の各町村及び大村市内開業医全員集合の席上で、『大村海軍病院を利用することによって、長崎医大の再建を計るべく長崎県知事より佐世保鎮守府長官宛に許可方の申請書を提出したところ、許可相成り難しとの回答に接したので、進駐軍長崎地区司令部としては、同病院を利用して長崎医大の再建を計り、以て県民の保健衛生と医学研究の機関たらしむることが最適策なりと考へ、マッカーサー最高司令官の指令を仰いでいる』旨の発表をなし、近く同司令官より何分の指令に接すべく、茲に長崎医大再建も略々確定的とみられる。」

Horne の好意的活躍の様が痛いほど窺われる。それなのに、どうして早く長崎医大のものにしてくれないのか、齒がゆくてならぬ。

X X X

私の日記はこれで終っている。どうして続かなかったのか、その理由は判然としないうが、泰山弘道氏が大村海軍病院長を退職されたため、書く張合いのなくなったことも、一つの大きな理由だったろうと思う。

古屋野教授は、角尾学長が亡くなられた翌日の八月二十三日付で、長崎医科大学長事務取扱になられたが、正式に学長に就任されたのは、同年十二月二十二日となっている。大村海軍病院移管問題で大変苦労され、折角落ち着いたかと思うと、またマッカーサー総司令官の命令で諫早に逐われるなど、敗戦後とは云いながら、本当にお気の毒であった。

私は爆死された内藤勝利教授の後を継いで、八月九日付で長崎医科大学付属病院長を拝命したことになるが、実際は医大が一部大村に移った後の、九月末か十月上旬からで、しかも初めの間は泰山院長の陰にかくれ、その下働きのような形で、病院の弱体を引きずりながら、東奔西走させられた。泰山院長退官後に、漸く院長らしい仕事にありついたが、終戦直後はすべての制度が急激に米国式に変貌した時代で、豪傑頑強だったデルノア司令官や、やかましやのパーカー看護婦長に散々いじめられ

た憶い出は、今でもまざまざと脳裏に焼きついて離れない。一方、苦勞を共にした古屋野学長を初め、高瀬、影浦、北村、佐野の諸先輩教授の温い御援助も、ほのぼのとした嬉しい思い出として、終生忘れることは出来ないであろう。

調臨時救護所での思い出

東京都北多摩郡清瀬町野塩三二八
当時 付属医専三年生

山 本 雅 文

調教授が岩屋町に開設された臨時救護所（岩屋クラブ）には、大学関係の被爆者が大勢収容されていましたが、殆んど皆下痢、血便に悩まされて居られたようで、救護班の私の仕事は、赤痢のような被爆者の排尿排便の始末に、明け暮れていたように思います。赤痢の疑いが持たれた当座は、蠅の駆除も一仕事でした。

「山本君、俺は絶対に死なないからね」と、級友に念をおされたその翌日、その級友があえなく死んでしまう様な日が、数日続きました。

屍体が増加するにつれ、その処理のために付近から松の木を集め、地面に並べてその上に屍体数人を、頭と足を交互に積み重ねて茶毘に付しましたが、家族の人が来られて遺骨を求められた時、骨片が混在して姓名の区別がつかず、本当に申し訳ないことになったという後悔の記憶が、その後夢にも見るようになって苦しみました。然し二回目からは、ちゃんと見取図を描いて火葬したので、ほぼ正確に遺骨をお渡すことが出来たように覚えております。

さて救護班に参加した数日後の事と思いますが、木戸先生から、「角尾学長が危篤のようだから、学長官舎に行つて奥様をお迎えして来るよう」に命ぜられました。

敵機の爆音のする中を、二里ほど離れた学長官舎に辿りつき、早速その旨をお伝えしましたところ、奥様は、「さぞお疲れでしょうから、一休みして昼食をたべていらつしやい」とおっしゃられ、学長の病状については余りお聴きにならず、チャンポンやお茶を御馳走して下さいました。

食べ終つた頃、佐賀方面に原爆が落ちたかと疑われるような雷鳴が轟き、奥様は直ちに私だけを自宅の防空隊に避難させて下さいました。私は一刻も早く道ノ尾の救護所にお伴するようお願いしましたが、奥様は「あとからすぐに参ります」と云われるので、私だけ先にお暇致しました。

私の記憶は不確かですが、その帰途ある民家で、敗戦のラジオ放送を聞いたように思います。その夜は級友の上野謙吉君と、敗戦に関して激しい議論を戦わせたことでした。

それから数日後（実際は八月十八日）、米兵の上陸騒ぎで救護所が閉鎖されることになり、救護班の全員が調先生のお宅に招かれて、当時としては考えられもしなかつた、心のこもつたお手作りの御馳走を、蠟燭の灯の下で戴きました。その席上調先生は、私の左肘や顔面に刺さっていたガラス破片のことについて、「山本君が今まで大事に仕舞っておくものだから、中々取り出し難かつた」と冗談を云われ、また一座を見渡しながら、傍のお嬢様を指さして、「誰かこの子の婿になってくれるものは居ないかね」ともおっしゃつて、お笑いになりました。

御令息を二人も原爆で亡くされた御自分の悲しみは隠されて、私達の気持を引立たせようとなされる調先生の暖い、有難いお気持、そして又、学長の安否を氣遣つておられる等の奥様が、御自分の心配を押えて、伝令にお伺いした私を先ず色々とお構い下さったことなど、後になって考えてみますと、この様な思遣りの深い大学の先生方や奥様方に、如何に戦争とは云え、原爆攻撃という非人道的な手段がとられたことが悲しく、広島の原爆記念碑に刻まれているという『私達は二度とあやまちをくりかえしませんから』の碑の文字を、『私達は二度とあやまちをくりかえしませんから』と書き改めることが出来ないものかと、思う昨今でございます。（四六、七、二五）

【調附記】 岩屋町の臨時救護所を手伝つて頂いた学生は、皆医専三年の諸君で、山本雅文君の外に上野謙吉君、片山和男君、小林栄一君、蛭崎武徳君等が居られたが、終戦後に書いた日記にその記載を漏らしたので、或いはこの外に一、二名居られたかも知れない。

長崎原爆災害の回顧

調 来 助

かけがえのない御令息や御兄弟を亡くされた遺族の方々は、もはや原爆災害の実態を充分ご存知のことと思いますが、本誌もこれが愈々最終編だろうと思っております。私達が当時調査した被害情況のあらましを記載して、御参考に供したいと思っております。

長崎に落された原子爆弾は、広島よりも強いプルトニウムの同位元素で作られたもので、これが爆発すると何千度という高熱を発生し、ひどい爆風を起すばかりでなく、放射能をもったガンマー線や中性子を放出して、これが人体にあたると、色々な重要な組織を破壊して、遂には死に致らせるような、恐ろしい作用を持っているのであります。でありますから、原爆で起る災害を大きく分けると、(一)爆風による災害、(二)高熱による障害、(三)放射能による障害の三つがあり、これらが種々に組合わさって、建物にも、生物にも、また人体に対しても悪い影響を与えた、と云うことが出来るのであります。

私達は大村海軍病院に居た頃、昭和二十年十月から十二月までの間に、生存者六、六九一人、死亡者一、三二六人、計八、〇〇七人の調査を行いました。生者からは怪我や火傷や放射能症の状態を調べ、死亡者からは、主として死亡率や死亡の時期などを調査しました。調査に当った人達は

調来助教授、木戸利一助教授、佐藤純一郎助教授、一瀬賢吾助教授、高橋庄四郎助教授、亀井照見講師、藤井浩副手、石丸允正副手、須山弘文副手、佐藤武正副手、赤羽格博士、久保田正医員

以上の外、学部学生及び医専生徒たち合せて、約五〇名でした。

八千枚に及ぶ膨大な調査票を集計したのは私で、これを論文に纏めるのに一年以上を要しました。論文の総合題名は「長崎に於ける原子爆弾傷害の統計的觀察」で、

第一編 原子爆弾による死亡率について

第二編 受傷者の死亡時期について

第三編 原子爆弾による外科的損傷について

第四編 原子爆弾による放射線病について

一、爆風による災害

この時の爆風は、想像も出来ない程の強さで、大地震のような震動を生じ、家が倒れたり、一抱えもある大木が折れたり、根こそぎ倒れたり、病院の煙突は中途で折れて「く」の字形に曲り、大学正門の門柱は、一米四角で高さ一米半、土台はコンクリートで固めてあったのに、三〇度ほど傾いて、今にも倒れんばかりになりました。街ではガスタンクの鉄塔も、工場の鉄柱も、ペシャンコに倒れて鉛のように曲り、穴弘法の丘では墓石が全部倒れ、四〇種ほど伸びていた甘藷の茎が、根もとからちぎれとんで、甘藷が地肌に出していました。窓のガラスは一〇キロ以上の遠隔の地でもちんじんに割れ、瓦もとんでしまったということです。ただ爆心地の近くに立っていた大きな木は、真上から爆風が来たためか、枝が少し折れただけで、幹はそのまま立っていました。この事が爆心地を決めるのに大変役立つたそうです。

爆風が人体に加えた傷害は、みな二次的に起った怪我で、最も多かったのはガラス傷でした(六〇%)。小さな破片が何百となく体にささったり、大きな切創が出来たり、中には頭蓋骨を貫いて脳がやられ、尺骨神経の本幹が切れて、手がぶらぶらになった人も数人いました。次に多かったのが打撲傷(二〇%)や挫創(二三%)で、幸に骨折は比較的少なかったようです(二%)。それでも中には腰椎骨折を起して、足の立てなくなった若いお嬢さんもいて、本当に可哀想でした。

二、高熱による傷害

これは云うまでもなく火傷です。但し普通の火傷と違って、非常に範囲が広く、背中一面とか、顔・首・胸一面とか、ペラッと焼けているものが多かったのです。半数以上は半身又は全身に火傷を受けていました。従って、その症状もひどかったのですが、同じ程度の火傷でも、助かったものと死んだものがありますから、これだけが死亡の原因になったとは、思われないのであります。

次に原爆火傷の特徴は、その瞬間に少しも熱いと感じなかったこととあります。それは高熱の作用時間が、何千分の一秒というような極めて短い時間だったからだ、と説明されています。

それから今一つの特徴は、火傷が癒ったあとで、殆んどすべての人にケロイドを生じたこととあります。これは普通の火傷にはなかったことで、我々外科医も初めて経験したので、一時は学界で大変問題になりました。その時私は、これは熱の外に、原爆放射能の作用が加わった為だと考えました。幸にこのケロイドは、其後時間の経過と共に、自然に癒って行きましたので、あの当時は確かにそうだったと、今でも信じております。

三、放射能による障害

放射能を有する物質が、人体の組織や細胞を破壊することは、昔から知られていたことで、レントゲン線やラジウムが、病気の治療に使われるのはその為であります。原爆はそれよりもずっと強い放射能を持っておりまして、たとえ瞬間的に作用しても、破壊力の強いことは云うまでもありません。

放射能で最も侵されやすいのは、血球、骨髄、性細胞、性腺、内分泌腺、粘膜などと云われています。白血球が減ったり、貧血を起したり、或いは血便が出たり、汗が出なくなったりするのは、皆そのためであります。

原爆症の症状としては、嘔吐、下痢、発熱、出血、脱毛、口内炎などがおもな症状で、その他、頭痛、眩暈、意識障害、腹痛なども挙げられています。この方は余り重要でなく、死んだ人達に目立っていた症状は、嘔吐、下痢、発熱、出血、口内炎の五つだったように思えます。

各症状について、生存者五、五二〇人と死亡者三三三人の間の発生率の差を調べてみると、次の表でわかるように、四〇%以上の発生率を示した上記五つの症状は、皆生存者との間に大きな差のあることがわかります。換言すると、この様な症状が強かった被爆者は、大半が死亡したと云えるのであります。

嘔吐は被爆直後か、遅くとも翌日まで起るものが多く、ショックによるもので、

第三表

| 症状 | 生存者 | 死亡者 |
|------|-------|-------|
| 嘔吐 | 一五、〇% | 五一、六% |
| 下痢 | 三三、三% | 六七、六% |
| 発熱 | 二一、五% | 八〇、〇% |
| 出血 | 一四、七% | 四八、六% |
| 口内炎 | 一七、八% | 四三、六% |
| 脱毛 | 一一、八% | 二九、一% |
| 頭痛 | 二〇、四% | 三九、〇% |
| 眩暈 | 一〇、五% | 二一、三% |
| 意識障害 | 六、六% | 二一、〇% |
| 腹痛 | 一〇、八% | 二六、一% |

部死んでしまいました。

発熱も下痢と並行して、一週間以内に起りました。而も焼けるような高熱（四〇度以上）で、汗が出ないので少しも下らないのです。本当に苦しうでした。この高熱は、全く無傷の人にも高率（七一、六%）に見られましたので、怪我や火傷や下痢などで起ったものでなく、放射能の作用によるものだとということが、はっきり判ります。

出血も原爆症に特有な症状でした。中でも皮下に出血して斑点を生じたものが最も多く（四五、一%）、次は血便（二三、三%）、歯齦出血（二七、八%）、鼻血（二〇、四%）、吐血（二八、五%）等で、この外血尿（九、三%）、咯血（八、六%）結膜出血（四、三%）などもありました。出血も早く且つ大量に見られたもの程、予後が悪くて死亡したようです。

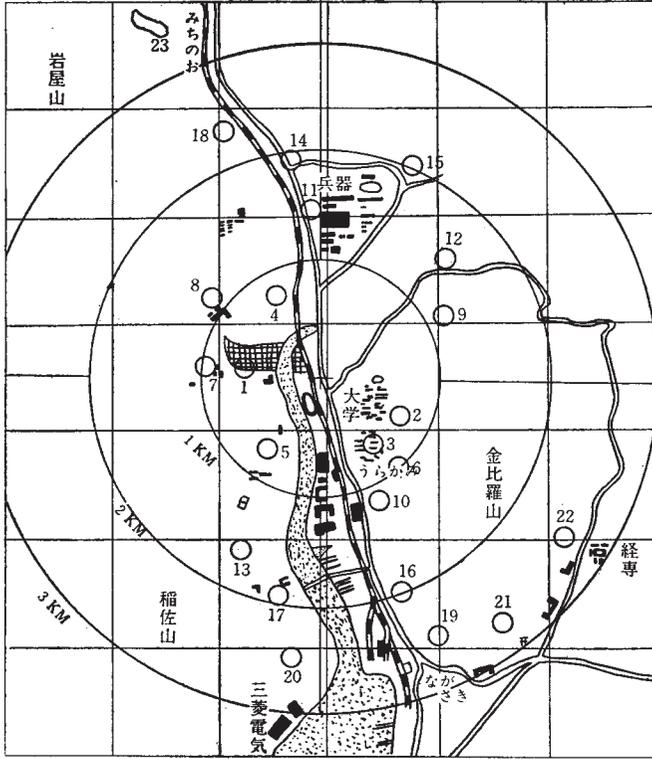
口内炎は口の中が爛れる病気で、歯齦炎、扁桃腺炎、咽頭炎等もこの中に含まれ、食物をとると痛くて、嚥下が出来なくなります。これのひどい人も矢張り重態で、死亡者も多く出ました。中には頬がくずれ落ちた人もあつて、全く悲惨な有様でした。

脱毛も重要な症状の一つでした。レントゲンを頭にかけて、その部分が禿になり

従って放射能の影響が大きかったことを現わしています。

下痢は被爆当日から一週間以内に起ったものが大部分で、早く起れば起るほど予後は悪かつたようです。ひどいものになると、丁度赤痢のように頻繁に水様便を出し、しかも中には血便を出すものも見られたので（二五%）、私達はてっきり赤痢だと思い、部屋の隅に隔離したりしました。今から思うと笑止千万の至りでした。この様な被爆者は、数日の中に全

第一図 死亡率を調査した隣組

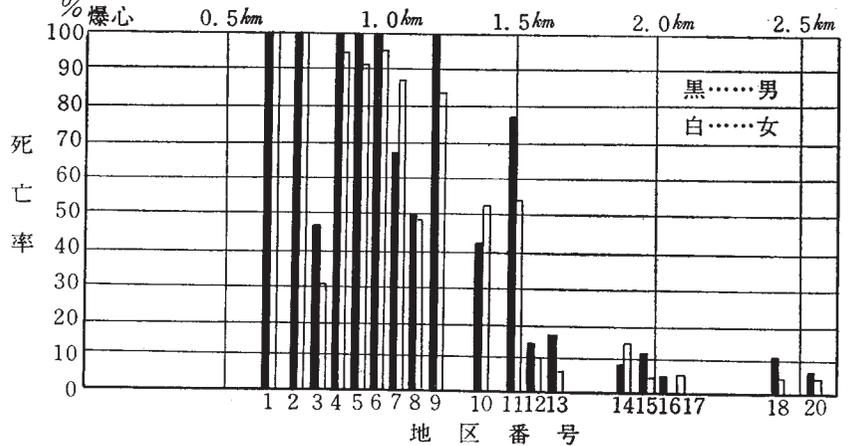


ますが、それと全く同じ様に、頭髮が沢山抜けました。光線を多量に受けて丸坊主になった人もあります。若い女の人など可哀想でしたが、幸に死との直接の繋りがないので、死ぬこともなく、今では元通りに綺麗に生え揃ってあります。死亡者の脱毛率が低いのは、脱毛がすぐに起らず、通常二、三週後に起ったので、脱毛の起る前に死亡した為と思われる。

意識障害は大変少くて、生存者では六、六%、死亡者でも二二%に過ぎませんでした。それは放射能に対する脳神経の抵抗が強かったためで、或いは肉親に別れを告げたり、或いは自分の不運をかこちながら、心では敵国の爆弾攻撃を憤慨しつつ、死んで行ったのであります。

四、原爆による死亡率

第二図 距離別および男女別の死亡率



ていますが、それは抵抗力の差によるものではなくて、男が多く屋外にいた為ではないかと思われる。

屋内と屋外とは勿論、屋外の方がずっと高いのですが（屋外七〇%、屋内四三、七%）、一キロ以内の木造家屋では、屋外（一〇〇%）も屋内（九七、六%）も殆んど差がないのであります。

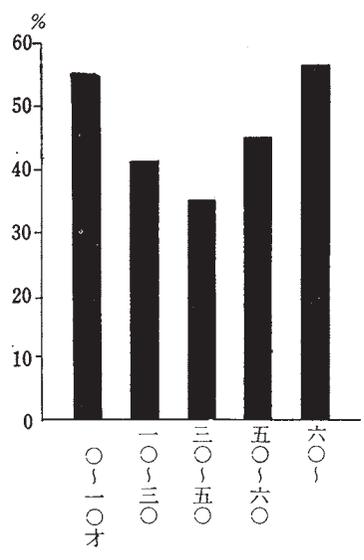
長崎原爆の死亡率を、種々の方面から検討してみました。

先ず第一が、「爆心からの距離と死亡率」の関係です。その為第一図に示すような二十三の場所で、合計一、五〇二人の被爆者を調べましたが、その結果は第二図のように、一キロ以内では殆んど一〇〇%に死亡しました。ただ三番の大学病院だけは、建物がコンクリートで出来ていますので、半数以下の死亡ですみ、八番の油木町は山陰になっているので、死亡率が低くなっています。九番の高尾町と十一番の家野町が高くなって居るのは、家が爆心地に面した丘の中腹に建っていた為と思われる。

次に男女の差は、一般に男の方が女よりも死亡率が高くなっています。

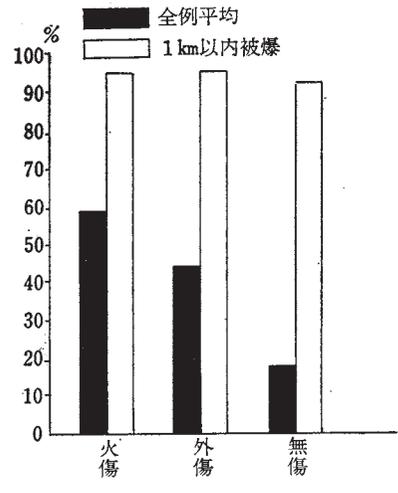
年齢との関係を調べてみますと、一〇歳以下の幼児（五六％）と六〇歳以上の老人（五七％）の死亡率が、三〇及び四〇才代の壮年（三六％）よりも高くなっておりま
す。即ち壮年者は老幼年者よりも、抵抗力が強いと云えると思います。（第三図）

第三図 年令別死亡率

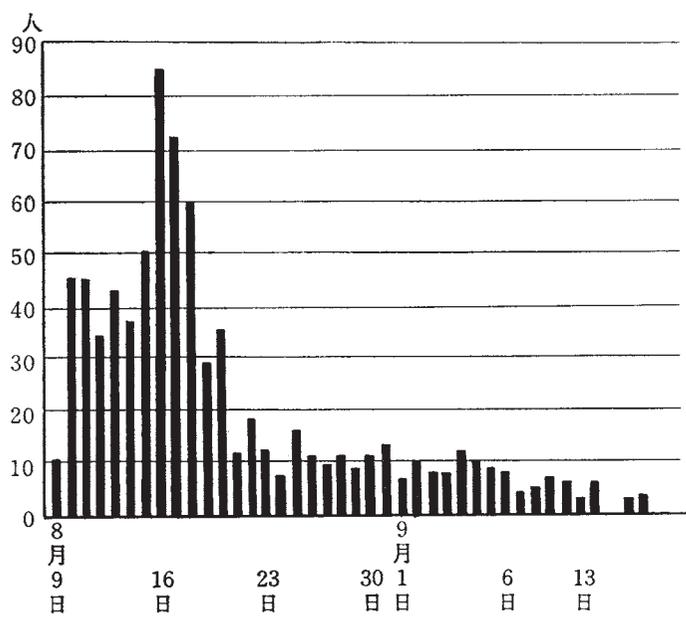


火傷や外傷と死亡率との関係は、火傷六〇％、外傷四四％、無傷一八％で、傷のないものよりも、傷のあった者の方が余計に死んだと云えるのですが、一キロ以内では火傷（九六、七％）も外傷（九六、九％）も無傷（九四、一％）も殆んど差がないので、これは火傷や外傷だけで死んだのではなく、何か強力な障害が加わって死んだものと云わざるを得ません。この強力な障害が即ち、放射能による障害であります。（第四図）

第四図 損傷別死亡率



第五図 死亡の時期



五、被爆者の死亡した時期
原爆で死んだ人達は、被爆後どれくらいで死んだかを調べてみますと、第五図のような成績が得られました。これは長崎市内の民家、大村海軍病院、川棚共済会病院、時津国民学校、時津方行寺などに収容された後に死んだ人達七九七人の統計でありま
すから、当日の死亡者はまだ沢山ある筈ですが、それは含んでおりません。
死亡者の多かったのは初めの十日間で、その後は急に少くなり、一カ月半後からは殆んどなくなりました。だから一カ月半生きのびた者は、合併症のない限り、心配はないと云えると思います。私の調査では、一週間後の八月十六日の死亡が最も多く、その前後二、三日の間が、特に目立って多くなっております。

このうち長崎・時津の死亡者と、遠距離へ運ばれた大村・川棚の死亡者を比べますと、速くに運ばれた方が、早く死んでいることが判りました。死亡者の被爆後の平均生存日数を調べても、長崎（一四、八日）よりも大村（二〇、八日）の方が短くなっております。それは被爆者にとつて最も大切な、安静を守れなかったことが、悪かったのだと思います。

六、原爆の後障害

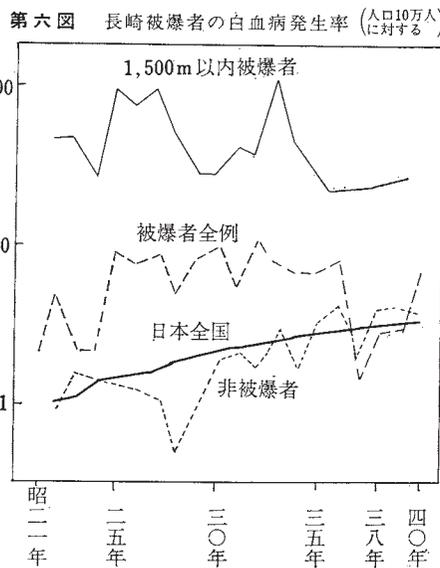
被爆者に起つた色々な傷害（外傷、火傷）や放射能症状は、三、四カ月後、即ち昭和二十年十二月頃には、一応治癒したように見えたが、その後になって、又色々な後遺症が新たに起りました。後遺症の中で目立っていたのは、ケロイド、白内障、白血病の三つであります。

(イ) ケロイドというのは、火傷や外傷の癒つた瘻痕が、もりもりと隆れ上り、色は茶褐色で、ゴムのように硬く、痒みや痛みを覚える一種の腫物で、原爆の瘻痕でなくても出来る場合がありますから、原因は体質の異常によると云われています。このケロイドが火傷瘻痕には七〇%以上の人に、外傷瘻痕でも二〇%に発生しましたので、その当時は「原爆ケロイド」と云つて大変騒がれました。

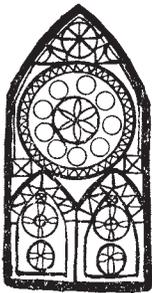
普通のケロイドは自然には中々癒らず、切つてとると又再発するので、次第に大きくなるのが特徴とされており、次第に小さくなるものがわかりましたので、私は、これは放射能によって、一時的に体質が変化したために出来たものと考え、その後は手術せずに自然治癒を待つことにしました。今では背中一面に出来た大きなケロイドも、すっかり癒つて、普通の瘻痕になっております。

(ロ) 白内障は眼科の病気で、水晶体後囊に混濁を生じ、その結果視力が低下する病気です。老人になるとこの病気になって、眼が見えなくなる人も時々ありますが（老人性白内障）、被爆者では沢山人にこれが出たので、一時は「原爆白内障」と呼ばれて、大騒ぎとなりました。然し幸に進行がおそく、盲人になる人もないので、今では殆んど問題とされなくなつたようです。

(ハ) 白血病は一種のがん病で、血液中の白血球が異常にふえ、これにかかると必ず死ぬという、恐ろしい病気であります。普通の人にも起りますが、被爆者では沢山人がこれにかかつて死亡し、近距離被爆者ほど発病率が高かつたようです。然し今では発病率も殆んど普通の人と変わりがないようですから、少しは気分も楽になりましたが、未だまだ安心の出来ない、恐ろしい病気であります。（第六図）



(ニ) 以上の外、被爆者の血液疾患（再生不良性貧血、その他）、肝臓疾患、肺癌、卵巣癌、内分泌臓器疾患、骨髄疾患、骨髄悪性腫瘍などは、原爆放射能と関係があるとして、白血病と同様、国費によって治療される恩典が与えられています。原爆のような悲惨事は二度とあつてはならないと、つくづく感じさせられます。



旧長崎医科大学卒業生並に被爆生存者の体験手記

亡き先生方の想い出

台湾省南投県南投鎮民族街一〇〇号
長崎医大昭和十九年卒業

葉 国 慶

記憶は過去を美化すると云われているように、四分の一世紀たった今では、原爆に関する無残な、恐ろしい悪魔の戯面とでも形容すべき、数多の光影の想い出は、一年一年と年が経つにつれて朦朧たる追憶の背景となり、追憶そのものは逆に年と共に、より懐しく、より親しいものになってゆくようである。原爆で亡くなられた先生方についての想い出も、勿論例外ではない。

当時は、入学早々から毎日明けても暮れても解剖学と云つてよいくらい、解剖学では実に鍛えられたもので、従つて解剖学の先生に関する想い出は特に多い。

第一解剖の高木教授は、背の大層低い、横ぶとりした、目つきの優しい、そして何処となく威厳のある人で、非常に真面目な方であつた。実習の時は時間一杯、絶えずぐるぐる歩き廻つて各人を指導し、決して坐つて休まれたことがなく、真冬の寒い日など全く感激させられた。実習中よく側によつて来られては、ラウベルの原書の一行一行を指さしながら、各部のラテン名称を頭に刻み込ますといった具合をこめて、ゆつくりと、時には何度も読ませられたのを、今でも何かにつけては思ひ出す。

第二解剖の池田教授は、明快な調子で、割合早い口で講義され、実に綺麗な図を早く描く方で、講義は常に流暢で、絶対に遅滞したことはなく、講義中にめつたに書物を見られたことがないので、大学教授とはこんなにも頭のよいものかと、入学第一回目の講義から衷心敬服したものだ。真面目に勉強するものには、大概合格点をつけるが、ただ頭よきに頼る要領主義者は、よく油を絞られた。中背、やせ型で、精悍な感じの方だった。

青葉に囲まれた木造の階段教室や、実習室のアルコールとホルマリンの臭いは、三十年後の今でも、両先生の面影と共に、昨日の事のようによく憶えている。

生理学の清原教授は長崎医大の出身で、先輩でもあり、先生でもある訳で、年も若く、一般からは兄貴分のように親しまれていた。講義は非常に熱心で、ひたむきで、時間が惜しくてならないように必ず時間一杯講義され、内容を強く印象づける必要があると考えられた時には、時々わざと突飛なことを云つては皆を笑わせたものだ。当時は出席をつける教授は、先生唯一人であつたが、学生間の人気はいつもよかつた。御住所は原爆中心地に近い城山町で、偶然私が一年生の時下宿していた家で、御家族はそこで亡くなられ、先生自身は教室で亡くなられた。お年は四十才位であつたから、生きておられたら、恐らく今でもなお第一線で活躍しておられることと思う。

運命の八月九日正午前、私は竹ノ久保の長崎病院に行つていたが、細菌学の内藤教授からお電話をいただいた。それから約五分後に原爆が炸裂したのである。教授のこの世での最後の声を聴いたのは、或いは私ではなかつたかと思う。

教授には卒業後も引続き教えを受けていたが、無口な地味な方で、生きておられたら今は八十才近いお年と思う。教室に籍をおくことを許されて間もない頃、或る日教室によばれて行つたら、文献を机の上に二、三尺程高く積み上げて、お一人で夕方まで待つていて下さつた。私は大いに驚き、すっかり恐縮して心から感激した記憶がある。戦争末期の頃は極端な人手不足で、研究資料の乏しい中を、色々と苦心しながら一同を指導され、研究を進めておられた。かねて命ぜられていたテーマの成績を電話で問われた時も、何もかもがピカドンと共に霧散するとは、当然ながら知る由もなく、「何れ御報告に参ります」とお答えした。

× × ×

原爆が落ちた時、私は丁度長崎病院の医局で、今村君という女医と机を挟んで対坐していたが、物凄い閃光と衝撃、四囲が突然真空になった感じで、これは焼夷弾の直撃をくつたのだと、倒れながら「自分は今死ぬのだ」と思った。自分の上にある重いものは今村君で、まわりには無数のガラス片や色んな物の破片が、熱風と共に渦を巻いていた。しかしそれに気付くまでには、一、二分はかかつたらしい。

時間が経つにつれて、少しずつ周囲のことが近い方から次第に判つてきた。被害が

原爆体験記

台湾省嘉義市中正路五九六
長崎医大昭和二十年卒業

王 文 其

調恩師のお手紙を戴いて昔日を思い出し、今でも恩師の御講義のお姿が目に見えて来ます。感慨で胸が一杯です。

私は長崎医科大学医学部を昭和二十年に卒業、同期生には須山弘文君、岡本直正君、高木聡一郎君等がいます。在学中私は長崎市山里町三五〇番地に居りました。大学のすぐ近くで、向側には教室の恩師内藤勝利教授、外科の松崎先生のお宅、後側には病理の吉田富三教授のお宅がありました。

思い出も深い原爆の日は、私は外来本館の産婦人科の新患室に居ました。午前十一時過ぎに仕事を終えた瞬間に、原爆の閃光を見ましたが、その時は既におそかったのです。雷動、物凄い音響と同時に重傷を負って倒れました。勇気を出して同室の学生二人と病院の玄関まで逃げましたが、玄関前では重傷を負った物療科の永井先生が、毅然として医療隊集合の命令を発して居られました。先生の勇敢な人間愛のお姿が、今でも私の胸に深く刻みこまれて居ります。

角尾学長は、私の居た産婦人科新患診療室の向い側にあった内科新患診察室で、原爆を被爆され、産婦人科の内藤教授や菊池講師は、婦人科の病室で被爆されました。原爆で亡くなられた角尾学長、内藤教授、その他の教授方、同学の方々、数万人の長崎市民の方々の御冥福を、心からお祈り致します。

全身血だらけだった私は、命からがら穴弘法山まで避難しました。即死したものの、重傷を負ったもの、悲痛な叫び声、長崎市の殆んどの家屋は破壊され、浦上一帯は火の海、空では原子雲、原子風が威力を發揮しています。

穴弘法まで避難した私は、右胸部及び右手の重傷で多量の出血を来し、意識を失いました。穴弘法には数百名の遭難者が居て、その場で息の絶えたものが相当ありました。その悲惨な場面は、今でも私の臉に浮んで来ます。意識を失って倒れていた私は

広範囲過ぎるので、噂にきく列車爆弾とかの攻撃を受けたのかと思ひ、この調子なら近くにある医大にも波及している筈で、今先き電話して下さった内藤先生はきつと吃驚されたであろうし、階下の研究室にいる筈の三谷君や山田女史達は、定めて慌てて飛び出しただろうと思ひ、また隣りにある解剖学教室からは、背の低い高木教授がフルスピードで防空壕へかけこまれる姿を想像したりしたが、まだ亡くなられることどころか、負傷されることさえ考えに浮んで来なかつた。そのうちに事態は急速に明瞭になって来て、三十分もしない中に、これは未曾有の大惨事であり、想像に絶する残酷な出来事であることが判つて来た。長崎病院が少し小高い所に位置しているので、四方がよく展望され、なぜ医大から救援隊がやつて来ないのか、説明されるまでもなく、眼で見ただけでもよく判り、暗澹たる気持になった。

X X X

上述の教授方の外、角尾学長先生、衛生学の大倉教授、附属病院では眼科の山根教授、婦人科の内藤勝利教授が亡くなられたが、被爆後は終戦を知らず、少数の学生や職員と共に、外部との連絡不十分な原子野で、怯えながら生活していたので、かなり後になってから初めて判明した。

あれから四分の一世紀、いつしか自分も、亡くなられた先生方の当時の年齢にも年をとってしまった。唯徒らに老いて何の成就もなく、顧みて真に慚愧に耐えないものがある。嘗ての先生方の真摯な御教導を憶ひ、甚だ申訳なく、心からお詫び申し上げます。名利を離れ、不撓不屈、一生を一筋に學術に献身された先生方の御生涯は、永遠に長崎医大と共に記憶されねばならないと思ふ。嘗て病理学教室の前庭にあつたアッシュ先生の記念碑の文字 Beharrlich zum Ziel の如くに、永劫変らぬ長崎の美しい海と空のように、

(一九七二、二、二五)



原爆無念

長崎市新大工町七一
当時 医学部四年生

浅 沼 桂

肥前長田尾首部落の二人の娘さんに助けられ、海軍の車で肥前長田へ運ばれて、皮膚科の蕭秀河先生（長崎医大昭和十六年卒）の手当を受け、それから学部四年生の林子雄君が、車で尾首まで護送してくれました。尾首は当時私が住んでいた部落で、二人の娘さんは高等女学校を卒業した後、三菱造船所で働いていた方で、毎日汽車で通勤していた関係で、私が大学に居ることを知っていて救ってくれたのです。その御恩は一生忘れません。惜しいことに今ではその住所が判らず、名前も姓だけ憶えており、お礼も出来ずに残念に思っています。

尾首に帰った私は、高熱、血便、脱毛、皮下出血、白血球減少等の放射能症状を経、一カ月余り生死の境を彷徨い、辛うじて一命をとり止めました。その間近くで開業の林雲川先生（長大昭和十三年卒）、楊瑞麟先生（長大、十九年卒）が毎日空襲の危険をおかして往診して下さい、部落の方々は色々栄養品を下さいました。これらの方々の御恩情は、全く感謝の外ありません。

昨年古屋野教授が台湾に來られ、一緒に高雄の寿山に登り、台南の赤嵌楼に遊びましたが、元氣なお姿を見て非常に楽しく思いました。同期生の須山弘文君も五年前に來ましたが、大変懐かしく思いました。台湾での同期生には黄耀宗君（現在潮州で開業）、陳新賜君（現在美濃で開業、原爆で陳君は助かったが、奥さんと二人のお子さんが亡くなられた）等が居ります。学部四年生だった林中鳳、戴懷徳、蘇百齡の三君は、その日十時頃まで私と一緒に婦人科の実習室に居りましたが、その後浦上天主堂近くの下宿に帰り、そこで原爆を受け、蘇百齡君は行方不明、他の二君は肥前長田で十数日後に亡くなりました。徳山達人、和泉哲朗、陳克振の三君は台湾北部の方で、遺族の消息は判りません。

三日前に張嘉英先生から「忘れな草」第三号を買いました。深く感謝致します。先生、どうかいつまでもお元氣にお過ごし下さい。（四六、一、一六）

【調附記】 王之其君からは、私も一度台湾に來るようにとお誘いのお手紙を戴きましたが、まだその目的を達することが出来ず、遙かに「忘れな草」で記憶を新たにしたい旧友の御健勝と、御多幸を祈っております。

昭和二十年八月九日、原爆一閃、長崎医大が八百の尊い生命を失ってから、二十有五年の歳月が流れましたが、何故長崎が原爆の第二撃を受けるに至ったかということ、大東亜戦争で国難に殉じた英霊の死が、無意義であったとなす妄説を反駁し、判明した事実就て、尊靈に御報告申し上げたいと存じます。

第一は、如何なる理由で長崎が原爆第二撃を受けるに至ったか。これに明確な答を与えてくれたのが、当時の大統領トルーマンの回顧録（恒久社発行、堀江芳孝著）であります。

それによると、戦略航空司令官のスパーツ將軍は、一九四五年七月二十四日付で、「第二〇空軍第五〇九混成連隊は、天候の許す限り成るべく早く、広島、小倉、新潟、長崎のうちの第一に特殊爆弾を投下するように」との命令を受け、実施されたのが八月六日の広島爆撃であった。第二の目標は小倉或いは長崎となり、先ず飛行機は小倉上空に達したが、曇りで市街地が見えず、上空を三回飛んだが目標が見当らず、ガソリンが少なくなったので長崎へ行ってみようということになり、そこでも曇っていて市街地は隠されていたが、雲の切れ間から爆撃手は目標をつかむチャンスを得て、長崎の原爆投下に成功したのであった。これが原爆第二撃の真相であります。

第二に大東亜戦争の意義についてであります。この戦争が無名の師で侵略戦争であったという妄説が、主として占領軍と左翼陣営の間から、いかにもまことしやかに盛んに唱えられ、日本を風靡したかの感があります。この謬論を覆すことなく、いつまでも漠然と、「日本は敗戦国であるばかりでなく、侵略国である」と考えていれば、国民の卑屈劣等感に到底抜き去ることが出来ないし、大東亜戦争戦没者の大死論も生じ、かくては医大八百の英霊に、何の顔あつてか相見ゆることが出来ようか。

大東亜戦争は日本歴史の続く限り、最大事件の一つとして、永久に残るであらう。

もしもこの戦争が日本の侵略によってではなく、逆に強要されて起ったことが明らかになれば、日本の名誉は救われるのであります。

第二次世界大戦の原因に関するアメリカの研究は、すばらしく進展しています。日本の名誉を救う数冊の著書をあげ、八百の英霊が大死でなかったことを立証したい。

一、極東国際軍事裁判における印度パール判事の「日本無罪論」

一、チャールス・ベアード博士著「ルーズベルト大統領と一九四一年戦争の到来」

一、フレデリック・R・サンボーン著「戦争の陰謀」

一、チャールス・キャンラン・タンシル教授著「戦争への裏面」

(一) パール判事の判決文

この判決文は英文で千二百七十五頁、日本語にして約百万語に及ぶ龐大なものである。戦勝国が敗戦国を裁く法律はどこにもない。法は一つであって、この一つの法であくまでも守り抜かねばならぬという思想が、パール判事の論述の全文を貫いている。これに関し、判事はカリフォルニア大学ハンスケルゼン教授の見解を引用しているが、教授によると、国際正義の名において行う国際裁判の構成は、戦勝国だけでなく、戦敗国もこれに加わるべきだ。負けた国の、而も個人が処罰されるのは公平でないというのである。そして戦争という行為は、果して個人の行為か国家の行為か、偶々高い地位にあったというだけで、刑事上の罪に問われることが正しいかどうかを疑っている。これに対する検察側の応酬は、カイロ及びポツダム宣言に、戦犯の処罰を規定してあるという。しかしパール判事は、「これらの二つの宣言は、単に連合諸国がその意向を声明しただけで、法律上は何等価値あるものではない」と突込んでいるのである。

もう一つの問題は、「法はさかのぼらず」という法の不遡及問題である。この裁判は法の根本的原則である不遡及をあえて犯している。つまり、戦勝国が集って新たに国際軍事裁判所条例を設け、戦犯の定義や範囲を決定しているが、ここまではいいとして、それによって過去に犯した諸行為にまで遡り、これを処罰することは法の不遡及性を犯すものである。

パール判事は極東国際軍事裁判に、情熱的な言葉に満ちた勧告文を提出している。

「戦勝国は敗戦国に対して憐憫から復讐まで、どんなものでも施し得る。しかし戦勝国が戦敗国に与えることの出来ないものは正義である。この正義が実は強者の利益に外ならないというような、歪められた正義であってはならぬ。この裁判は法律的外観はまともまっているが、実は或る政治目的を達成するために設置されたに過ぎない。若し人類の正義を守る裁判所が、法に反して政治に根ざすものであるならば、遂に正義は地球上から影を没するであろう」と述べ、更に、「時と理性とが、やがてこの裁判を裁く時が来るであろう。その時には正義の女神は、過去の賞罰の多くにその所を変えろことを要求するであろう」と結んでいる。

アメリカにおける第二次世界大戦の研究は、パールハーバー襲撃の直後、大統領がロバーツ最高裁判所判事を委員長とする査問委員会を設け、ハワイの陸海軍司令官の責任を審査させたことに始まった。アメリカ国民はこの委員会の報告に満足しなかった。後日議会は自ら上下両院合同査問委員会を設置した。その時間原因に関する莫大な資料が集った。この資料は、個人の日記とか回顧録というようなものでも、皆議会在証人を喚問し、これを篩にかけたので、確実と見做されるものが沢山出来上った。こういう史実は、学者の著述にすこぶる役立った。日本の名誉を救う上述の大著も、こうした中から生れ出たのである。

(二) ベアード博士の学説

アメリカ歴史学会々長チャールス・ベアード博士は、ルーズベルトが大統領選挙の度に、また平生も国民に向って、「戦争はしない」と公約しながら、実は国民を欺き、アメリカ憲法を無視して、まっしぐらに戦争に向って走ったこと、いわばイギリスの為に火中の栗を拾ったこと、そして日本に戦争を強要したことを、一連の事実として論証している。

ルーズベルト大統領が如何に巧妙にアメリカ国民を欺き、アメリカ議会の権限もアメリカの伝統も無視して、大西洋では極力ドイツに戦争を強要せんとして失敗し、極東では遂に日本に開戦を強要して成功するに至ったかを、一纏めの議論として、一

判決の文を書いているのである。

(三) タンシル教授の意見

タンシルは有名なジョージタウン大学の外交史の教授である。彼の著書『戦争への裏戸』の最も注意すべき特徴は、国務省の外交機密書類を沢山引用し、自分の意見を曲げることなく、思う存分自由に書けるように、どの方面からも補助金を受けなかったことにある。彼は一九三九年の欧州開戦の責任は、ルーズベルトにあると確言している。この点はそれ自身、外交史上の大問題である。

若しルーズベルトが英仏を駆り立てて、ヒットラーに宣戦させたことが事実とすれば、英仏敗戦の場合、彼は自分の蒔いた種子を刈らねばならず、一刻も早くヒットラー打倒のため、一切の努力を傾けねばならない羽目にあつたことは、よく理解出来るのである。セオポルドははつきり、日米戦争が米独戦争を意味するから、ルーズベルトが日本に戦争を強要したといつた。タンシルが彼の著書を「戦争の裏戸」と名付けたのも、その為であろう。

タンシルは、一九〇〇年頃から一九四一年の日米戦争に至るまでの日本外交を叙述し、国務省や議会議事館その他の方面からの公文書などで裏付けを行っている。極東問題に関しては、日本を侵略国と呼べざるようになった二つの重大事件、即ち満洲事変と日華事変(蘆溝橋事件)を極めて公平に取扱ひ、殊に蘆溝橋で日華の本格的な戦争となつたのは、全くソヴェエトの仕組んだ芝居であると断言している。

X X X

ヘアード等の学者達の説明により、アメリカ国民は、吾々日本人よりも一足先に、且つ全般に行きわたつて、第二次大戦が何であつたかを覚り、失うところだけ多く、得るところがなかつたことをよく知つたのである。

第二次世界大戦は、意識的にも計画的にも、アメリカ国民が挑発したものでなく、ある二、三の政治家の野心の犠牲になつたものであり、被害者たることに於て、日本国民と同じ立場にあるものと云わねばならない。驚心愕目の事実は、日本人の手によつてではなく、寧ろ外国人、殊にアメリカの良心的な学者の努力によつて明らかになつた。

れた。

今や、日本国民は完全に自信と勇気を回復しなければなりません。大戦に捧げられた二百萬の英霊の名誉は、かくして救われたのであります。原爆に散華された八百の御霊にこの事実を御報告し、この小論のペンを擱きます。

原爆直前の学生生活

鹿兒島市中央町三一―一九
当時 長崎医大四年生

尾 立 源 和

原爆当時のことは「追憶」に書いたので、今度はそれ以前の学生生活を振り返つて書いてみたい。

私共の級は高等学校が半年短縮されたので、昭和十七年の十月に大学に入学した。約一年間は何かか食べ物もあり、街に出ても楽しかったが、急速に統制がきびしくなつて、目に見えて食糧事情が悪化した。下宿の飯を食つた途端に腹が減り、駅の食堂に並んでランチにありつけば幸いだった。仕方なく大学の近くの汚らしい食堂で、ソボロとかいう殆んど野菜ばかりの料理で、空腹をまぎらせていた。

煙草も配給ではとても足らず、朝七時頃の売り出しに一時間程並んで、やつと一箱を手に入れていた。それを教室で友達からたかられて、やらぬ訳にもいかず、何とも情ない気持がしていた。

或る年の級会は茂木のピーチホテルであつた。ヒワ一籠と魚料理といった奇妙な取り合せだったが、玉突きをする連中もあれば、留学生を主にしたマージャンの一卓もあり、楽しい一日を過して、帰りはヒワ籠をかついで走つた。

卒業前のクラス会は網場の肥前屋、魚は豊富だったが、飯無しではそうよけい食えるものではない。級の会に酒がはいつたのは此の時が初めてで、三々五々何時間もかかつて、夜更けの日見街道を走つて帰つた思い出がある。歩いている中に段々と空襲がはげしくなり、螢茶屋あたりからは浦上まで走つて行かねばならず、空腹をかかえ

重たい脚を引きずって、漸う下宿にたどりついた。

我々の学年から急に、医学部の課程が一年短縮されることになった。臨床にはいる頃から土曜日は普通並み、日曜も午前中授業、冬休みなどもほんの数日といった詰め込み教育が行われていた。それでも同じ年頃の学生は、学徒出陣などで戦場に命をかけているのを思い、我々も精一ぱい頑張つて勉強した。

このような生活の合い間に卒業試験でしぼられ、原爆までには略々八割方終了して、あと二週間位で完了する予定だった。皆んな九月仮卒業、十月軍医学校入学を期して、張り切っていたのである。我々の級は各科を廻っていた関係上、或いは外来棟、又は病棟といった具合に、全くバラバラに被害を受けることになったのである。

八月一日、病院内に数発の爆弾が落された。火事も起つたが皆んなで消し止めた。

死者は医専の生徒三名に留つたが、外部から沢山の負傷者が運び込まれて、野戦病院並みの忙しさであった。然し歩けるような患者は殆んど退院させられたので、難に遭わずに幸いだった。自分達も、鉄筋の建物だから爆弾ぐらい大したことはない、若し直撃が来れば仕方がない、と諦めていた。

八月六日の広島島の惨状は、八月八日の大詔奉戴日にグラウンドに集つた全学生に、そこを歩いて通つて来られた角尾学長によつて語られた。大変な新型爆弾があるものだなあと驚きはしたが、まさかその翌日に長崎に落とされるとは、神ならぬ身の知る由もなかった。

原爆の日の八月九日は、本来ならば夏休み中なので学生は居なかつた筈であるが、戦時体制下なので、交替で一週間か十日位休んでいた。だから帰郷していて助かつた運の良い人もあれば、出て来たばかりに難に遭つた運の悪い人も居たわけである。

四年生になると患者を持たされて（今のインターン位か）、或る程度責任もあつたので、帰郷出来ぬ組もあつた。それに防空当直といつて各教室に配置され、代り代りに病院に泊らねばならなかつた。しかしその時の唯一の楽しみは、握り飯にありつることだった。

当時の長崎は要塞地帯で、カメラも持てず、又自由に撮影も出来ない状態だったの

で、記録写真がないのは残念である。青春の楽しみもわずか、苦しみのみ多かった其の学生時代の背景を、回顧したわけであるが、卒業間際に若い命を奪われた亡き友を思い出しながら、筆を擱く次第である。（四五、一〇、五）

追憶

次城県土浦市敷島町三九五四
当時 長崎医大四年生

小杉正義

原爆が一闪した時、耳鼻科病棟二階の図書室に居たのは、五島和夫君、小島隆保君、沢田稔君、正義之君、それに私の五人のグルッペであった。古賀典志君は一寸前に図書室を出たので、爆死したことが後で判つた。若し古賀君が図書室に居たら無事だったのに、逆に我々もあの瞬間に他の場所に居たらどうなつていたか、今思えばあの瞬間、すべての生命がその居場所に賭けられていたのである。

それは爆弾と云うよりも、大地震が大龍巻の感じであつた。私は一瞬うずくまって目を押えたが、それよりも早く眼鏡が飛散したので、近視の目には辺りの光景が一層物凄く映つた。四人は裏山に脱出すると云う。私はまだ原爆とは知らず、下宿が心配になつたので四人と別れた。私の下宿は浦上天主堂の隣りにあつた。一步外に出ると想像を絶する変りようで、あらゆる建物は倒潰し、道という道は塞がれ、すべての色彩は消えて灰色に一変し、まるで幽界に迷い込んだようである。その上眼鏡がないので方角がさっぱり判らぬ。そのうち五十坪程の、畑とも空地あまちともつかぬ所に来た。

その空地には井戸があつたが、その井戸から一人の男が忽然と現われ、物も云わずに空地の中を駆け廻る。ショックで気がおかしくなっている様子だ。そこへ五年生位の小学生が一人で迷い込んで来た。洋服がポロポロで、両前腕の皮膚が手袋を逆にぬいだ様に、手の先にぶら下っている。しきりに水を欲しがすが、どうする術てもない。その間に空地の周囲も火に囲まれて了つた。突風が起りトタン板が宙に舞う。男は再びヤドカリの様に井戸の中へ隠れてしまった。私と小学生は火を避けて空地の中をあ

ちこち逃げ廻った。東から猛火が吹きよせると西の隅へ、今度は南から火焰が大蛇の舌の様に迫ると、北の隅へといった具合だ。焰の舌が頭上を飛ぶ時は、大地に腹ばって避けた。然しお蔭で三人の生命は、この五十坪の空地によって救われた。

黒い驟雨が降り注いで、夕方近く猛火は収まったが、私は下宿へ帰るのを諦めて、再び大学に戻ることにした。この有様では下宿屋も灰燼に帰したと判ったからだ。道が隠れて判らないので、一步誤るとズブリと膝まで灰の中にもぐる。底にはまだ火が残っていて熱い。もう薄暗くて眼鏡のない近視の身では、もとの空地への方角もさだかでない。折角ここまで助かったのに、愈々駄目か、先ほどの空地にじっとしていればよかったのに、と恐怖と後悔の念にかりたてられたが、それでも必死になって大学のグラウンドに辿りついた。ズック靴はすっかり焦けてしまったが、代りの靴などある訳がない。このグラウンドで一夜を過すことにした。此処に来るまでにかんりの数の遺体を見たが、生きている人は一人も居ない。グラウンドの境のコンクリート塀は、跡もなく吹きとび、その外側の広い溝に、黒焦の死体が数限りなく折り重っている。森閑としたグラウンドの真中に、医専の学生が一人居た。彼と一緒に地面にごろりと寝たが、ショックのためか碌に口もきかね。天空には何もなかったように、美しい星が輝いているのに、グラウンドの外は果なき焼野原で、処々に火がまだ燐のように燃えており、さながら大海原の漁火の様である。朝からまだ何も食べないのに、ショックのためか腹は少しもへらず、咽だけが焼けつくように渴く。グラウンド裏の小川へ行き、膝まで水につかかって、委細かまわずがぶがぶ飲んだ。独特の刺激臭を不思議に思ったが、もうどうなってもよかった。

夏の夜は短い。いつの間にか夜が明けて、目が覚めると、横の医専の学生は既に冷くなっていた。私はふと夏空を仰いだ。そこにはただ一片の白雲が流れている。動いているのは雲と私だけだ。私は人が恋しくなり、大学裏の穴弘法へ向った。丘の上には大学の紫紺の大旗が風にはためき、その下に角尾学長の一行が屯して居られ、学長の横には高木教授が寝て、「誰か私のプルスをみてくれ」と、弱い声で云っておられた。

学長には忘れぬ思い出がある。入学試験の面接の時、学長室で光栄にも学長と差してお話を伺ったが、学長は呵々と笑って、「君の茨城弁を聞いてとても懐かしかった」とおっしゃるのだ。後で学長の奥様は茨城県にゆかりのある方と判った。「忘れな草」第三号に、学長のお写真が載っているが、これ程威厳のある顔はやたらにあるものではない、と固く信じている。

穴弘法で今村喜人君に出会った。一見して元氣そうである。今村君は海軍の依託学生なので、「諫早海軍病院に行つて治療を受けたいのだが、一緒に行つてくれないか」と云う。私も下宿が丸焼けで、目下天涯孤独の無宿者だったので、「よかろう」と、今村君に付添つて諫早へ出かけた。

病院では私達を、ベットが二つある個室に入れた。その一つに今村君を寝かせ、も一つに私が転がって、過ぎこし方や行末をあれこれと考えている間に、疲れがどつと出て、不覚にも寝込んでしまった。どれ位時間が経ったか、突然となり声で叩き起された。目をあけると偉そうな軍医とその部下が立っている。廻診なのだ。軍医は大佐ぐらいの貫録がある。六尺豊かで栄養たつぷりな堂々たる体軀の上に、きびしい顔が乗っていた。「付添の分際でのうのうと寝かされて、とんでもない奴だ。ここは海軍病院だぞ」。罵声が私の顔に向つてとんだ。殴られないのがまだ幸せであった。その後、軍医が廊下で部下に命じている声がきこえた。「あの付添に飯をやる必要はないぞ。やつてはいかんぞ」。今村君は悲しそうな、気の毒そうな顔を私に向けた。それから兵隊が持つてくる飯は、いつも一人分である。それでも今村君は本当に食欲がないのか、或いはわざとするのか、半分は残して私にくれた。飯運びの兵隊も、三度目には同情したのか、時々残飯をこっそり持つて来て、目顔で私に食えと合図した。私はごみ箱をあさる野良犬のように、がつがつと残飯を口に入れた。病院に居る間に今村君から金を貰い、諫早の街に出かけて待望の眼鏡を買ふことが出来た。

諫早病院に三日ぐらい居て長崎に帰った。別れる時の今村君の淋しそうな顔は、今も彷彿として私の記憶に生きている。後日今村君が亡くなった旨を聞いて、意外な気がした。私も我慢してもう少し一緒に居てやればよかつたのにと後悔したが、あの情

勢ではどうしようもなかった。

大学に戻ってみると、相変らずの焼野原に、夕方になると遺体を焼く煙が、狼煙のように幾条も空に伸びて、何ともわびしい眺めであった。大学の横穴防空壕に入ってみたら、青木武君が幽鬼の様によく立ち上って、「バカ、バカ」と叫びながら寄って来たので、思わず退いた拍手に何かにつまづいて手をついたら、私の手はぐにやりとしたものにめり込んで、ぬるぬるした。薄暗い中でよく見ると、それは誰かの腐りかけた遺体であった。

焼けただけた外来本館の土間には、幾十人もの負傷者が枕を並べて齧っていたが、その中に新名清隆君が居て、新婚早々の若夫人が必死になって看護しておられた。その有様が今も目に浮ぶ。この若夫人の生んだ新名君の御長男が、すでに医大生とのことである。亡き新名君も以て瞑すべきか。さりとて軋た今昔の感にたえない。

(四五、九、二六)

原爆忌

福岡市住吉四丁目二八一三
当時 長崎医大四年生

小 島 隆 保

- 承らへて命寄せあふ原爆忌
- 再会すその日の如き夕風に
- 蠅憑きぬ柘榴の如く頭蓋割れ
- 総身に蛆のたかれる生きながら
- 裸子の檻樓の如くに皮膚垂らし
- 炎帝と炎火の下の阿鼻地獄

亡き友の思い出

長崎大学医学部第三解剖教授
当時 長崎医大四年生

瀬戸口 孝 夫

原爆後二十五年、十年ぶりに岐阜より還り、再び母校の教壇に立つこととなった。私の部屋の正面には、手入れの行き届いた庭園が開け、その側に白亜の記念講堂が漣酒なたずまいを見せている。時は春、門の傍には桜が咲き始め、緑の山々は暖かい春の日を浴びてまどろむが如く、往時の原爆の惨状を物語るものは、傾いた古い石の門柱と、ゲビロが丘の慰霊碑以外には見あたらない。しかし、ここに散ったわが同級の犠牲者三十六名の一人一人の面影は、明瞭に私の臉に焼き付いて、永遠の生命を保っているかにみえる。がしかし、彼等についての記憶は、横断として今や夢幻の彼方にあるのを如何ともし難い。

恩師調名誉教授より、友人の思い出について書けとの再三の御要請に応じ、多数の亡き学友の中より、私と同じ第七高等学校から来た諸君のことを、一ことづつ綴って責めを果したい。

【今村喜人君】 短軀ではあったが、七高時代から水泳の選手で、敏捷にして行動力に富み、明朗闊達、クラス随一のハリキリボーイであった。二年生の頃はクラス総代として活躍した。何時だったか、学校帰りに日高和郎君と一緒に、立山の私の下宿へ、郷里から届いた菓子を食べに来てくれたことがある。生存していたら、同級生の中でも、社会的に最も活躍する人材だったと思われる。

【岩切 達君】 姿勢の正しい、ひきしまった体軀の持主で、七高時代から野球部に属し、医大の鹿児島県大会の野球大会では、名ピッチャーとして鳴らした。

【上原利之君】 彼は私より一年前に入学し、鹿児島一中も一年先輩であったが、病気休学で二年から同級となった。真面目な努力家で、七高の卒業成績はクラスで三位であった。私の解剖実習用具セットは、彼から譲り受けたもので、卒業後も使用して来たが、古くなって箱の蓋が抜け、岐阜から引揚げる時に教室に置いてきた。今に

して想えば、貴重な彼の遺品であったのに――。休暇中に鹿児島彼の家を訪問し、西郷南洲が好んで散策したという武岡に、連れて行ってもらったこともある。

【清崎裕之君】 七高理科出身の唯一の人。温順な性格で、稀にみる好人物であった。下宿が螢茶屋に近く、大学からの帰りはいつも電車で一緒になった。やさしく微笑しながら話している彼の姿が、目にちらつくようだ。

【新名清隆君】 色の浅黒い瘦軀長身で、天衣無縫の性格。何時も鹿児島弁丸出しで、愉快に話していた。中学も私と同窓であったが、同じクラスのこととはなかった。岐阜大学の赤星教授（整形外科）は、中学時代から彼と親しく、大学時代も休みのたびに、赤星君宅を訪ねて談笑していた由、「よい人でした」と、赤星君はしみじみと述懐していた。

【昇平雅夫君】 温厚寡言、真面目な努力家。やや蒼白い顔。黙々として勉強していたように思う。池田吉人教授が初めて出欠をとるときに、昇平君と呼ばれたのが、妙に印象に残っている。

【調 追記】 瀬戸口教授の文中に、「昇雅夫」を「昇平雅夫」と書かれているのを不審に思い、昇君の実母であられる昇マツ様に、手紙を差上げて真疑を確かめたところ、マツ様の四女嘉山和子様から、次のような御返事を頂いた。

『亡父^{のりひらまさむね}「昇益川」は大正より昭和の初めまで、台湾総督府林業試験場に勤務しておりました。その頃現地の人々から「昇益川」と呼ばれ、現地人と間違われるのをとても嫌がっていたそうです。長男雅夫が生れた時、子供にこんな嫌な思いをさせたくないとの父の意志で、「昇平雅夫^{のりひらまさむね}」、次男は「昇平昭二^{のりひらあきつぐ}」と改姓しました。

雅夫が成人して高校生になった時、御先祖様から貰った「昇^{のりひら}」という名前が何故恥かしいか。「昇平^{のりひら}」などと読める人は誰も居ないから、是非「昇^{のりひら}」にして欲しい、と父に要望したそうです。

父の死後昭和十九年六月頃、村田弁護士に依頼し、裁判所を通じて、再び元通りに改姓することが出来ました。それで雅夫兄が医大の一年生だった昭和十七年頃の名簿では、「昇^{のりひら}」ではなく「昇平^{のりひら}」となっていたかも知れません。』

原爆と人類の将来

長崎県北高来郡小長井町みさかえの園
当時 長崎医大四年生

久野 文次郎

原爆が長崎市浦上の上空で炸裂してから、二十五年を経過しました。その時の悲惨な模様は、多くの方により書かれました。私自身は当時長崎医大の四年生で、大学病院で患者を診察している時に被爆し、左手の三指を失い、今も多数のガラス片があとに残っております。このことは、それからの私の人生に大きな影響を与えました。それはあくまで個人的の体験でしかありません。それで今回は、原爆と人類の将来ということについて、私なりの考えを述べてみたいと思います。

有史以来、人類は戦争と平和の時代を繰り返してきました。どの民族の歴史も、戦争によって彩^{いろど}られていないものはありません。そして戦争の内容をみますと、各民族の、或いは国家の、或いは帝王の勢力拡張、利権増大、制覇の欲望のための戦争が、一番多かったのではないのでしょうか。イスラエル民族が、エジプトからカナアンの地に到達するまでに、数多の戦いをしましたし、イスラム教の勢力拡大には、殆んど戦争を伴っていました。又三十年戦争が、カトリックとプロテスタントの両陣営に分れたドイツの諸侯達によって戦われたのは、周知の事実です。

このように戦争は、人間の持つ際限のない欲望、又宗教戦争に見られるような、真理に対する考え方の相異などから起ったことを思いますと、人間と戦争は切離すことが出来ないものだという、絶望的な気持になります。そして科学の進歩によって、兵器の破壊力はだんだん強力となり、原爆も大した破壊力でしたが、水爆は桁はずれに大きな破壊力を持っておりますし、核保有国が漸次ふえてゆく傾向にあることを考えますと、暗澹とした気になります。

人類の将来は絶望ではないと思います。それではどうすればよいのでしょうか。私には二つのことが根本的に重要であると思います。

第一は、各民族ないし国家のエゴイズムを、適切に抑制する方向にむけることです。これには国連の強化、世界連邦化、国際警察軍の創設、各国の軍備を極力制限して、各国内の秩序維持の目的にかなった程度にすることだと思ひます。

第二は、平和を愛し、戦争をしない人間をつくらせてゆくことです。これからの時代にふさわしい人間に、教育してゆくことだと思ひます。

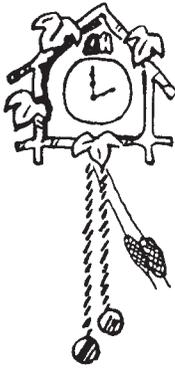
二つの点とも大変難かしいことです。しかし人類がこれから明るい未来をつくらせてゆくには、どうしてもこの二つの課題を解決してゆかねばならないと思ひます。

それでは具体的に、どうしたらこの二つの点を実現してゆくことが出来るでしょうか。それには全世界の民族や国家から、人類の過去と未来を展望し得る能力を持ち、人類を正しい方向に導く指導力を有し、現実と理想に対する考え方にバランスのとれた人物を選び出し——例えばトインビー教授のごとき——、これらの人物によつて構成された会議に権威をもたせ、各国家がその人間最高の叡智を傾けた勧告に従つてゆくようにすれば、必ず実現出来ることだと思ひます。

既にこのような方向で、幾つかの運動がなされております。私たちは、これらの運動がもつと盛んになり、全世界で枢要な地位を占めている人にも理解されて、支持をうけるように働きかけてゆくことが、大切であると思ひます。

原爆の惨苦を経験した私たちは、現在も将来においても、この様なことが如何なる民族の上にも起つてはならないという、切実な願ひを持っております。原爆の犠牲になられた恩師、先輩、学友、後輩、その他広島・長崎の多くの方々の痛ましい死を、私共は決して忘れることなく、人類の未来のために努力奮闘しなければならぬと思ひます。人類の未来を暗黒でなく、輝かしいものにするために——。

(四五、一〇、二四)



暑い夏の悪夢

大阪府吹田市垂水町一丁目七一—五
当時 長崎医大三年生

新 田 一 郎

その日も油照りの酷暑を予告する真夏の太陽が、朝から輝いていた。本土決戦が叫ばれてはいたが、何か末期的な喘ぎにも似た、重苦しい日々が続いていった。

私は当時大学三年生、海軍々医依託生であった。大学の先輩から、「貴様らが軍医になつても、先ず艦に乗組むことはあるまい」と聞き、戦局の不利なことはひしひしと感じていた。

午前七時頃、空襲警報発令、急いで大学本部に馳せ参じる。九時頃に警報解除、警戒警報のまま私達の大学は、診療に、講義にと正常機能を果すべく、それぞれ本来の姿にもどつた。事実あの頃は、常時警戒警報下にある状態であった。

私のグループ六名は精神科のポリクリであったが、戦時であり、交通事情も悪く、尚朝からの空襲警報のせいもあつてか、外来患者なしとの事であった。午後の講義まで時間はあつたが、下宿にもどるのも億劫だし、調外科の傍の第二中講堂で、運命の十一時二分が刻々と迫っているのも知らずに、だべつていた。若し高台で別棟になっていた精神科でポリクリがあつていたら、又大学に近い学友の下宿にでもへたり込んでいたら、今日の私は存在していないだろう。

突然、B9が急旋回するような爆音、何か鋭い金属音を耳にした。私達はとっさに急降下爆撃(?)を予測したのか、一斉に反射的に、臨床階段講堂の机の下に伏せ、眼を覆い耳を押える姿勢をとつていた。その瞬間、ピカッ!! 臉に映る真紅の閃光、鉄筋コンクリートの講堂がうちひしがれるような爆風による大衝撃!! 然し気は確かだ。どこも痛くない。大丈夫だ。直撃弾でも喰つたかなとも考えた。でも鼓膜がガーンとして何も聞えない。息苦しく、熱風を膚に感じる。何かの下積みになっていたが、やっと這い出る。何も見えない。出口が何処やら皆目見当がつかぬ。一、二分経

つたろうか、僅かの日射しが出口を示したので、慌てて外に跳び出した。既に病院の
あちこちから火の手が上っている。兎に角裏山に駆け登った。

そこで見た光景は、我が目を疑わせた。空には巨大な茸雲が立ち昇って陽の光を遮
り、地上では浦上一帯の街々が、紅蓮の炎に包まれている。正しく生地獄絵図であっ
た。「あっ、これは角尾学長の云われた、八月六日の広島のパカドンや」と理解出来
た。見ている目の前で、わが愛する大学も、長崎の街も、一団の炎となっていた。
全く手のつけようがない。地獄に突き落とされたような絶望感に打ちひしがれた。同時
に何とかして逃げたいという逃避本能が湧いて来た。

火の手を逃れて裏山中腹まで無我夢中で這い上り、ドッと地面にぶつ倒れた。咽が
カラカラに渴き切って、吐気さえ催す。仰げば原子雲が空を覆い、雨さえばらつかせ
て、東方へ流れてゆく。B29の爆音を聞き、また必死に逃げる。

金比羅山を越えて下宿のある西山町に戻って来たのは、私が一番手だった。確か午
后二時頃である。薬専生徒のお母さんから、「二年生の何某は大丈夫ですか」と尋ね
られても、答える術もなく（薬専は木造で爆心地に近いため、教授も生徒も殆んど全
員死亡であった）、「元氣なら私のように帰って来られるからお待ちなさい」と答え
たが、半狂乱のこのお母さんには、納得がゆかぬようであった。

下宿の小母さんに云われて、やっと右肩にガラス破片創があり、学生服に血糊がべ
っとりとくっついてるのが判った途端、急に痛みを感じ始めた。傷の応急処置をし
てもらったが、西山水源池の横穴壕前の芝生で、極度の緊張からの解放感と疲労感で
ノビてしまった。

午后四時頃、隣の下宿の同級生大池未知生君が、重傷で戻って来たとき聞き、同じ海
軍依託生である彼を捜しに、伊良林小学校へ行った。臨時救護所の講堂内はごった返
した大混雑で、名前を連呼しても喧騒にかき消されて、全然通じない。半ば諦めて
いると、何処からか力のない声で私を呼ぶ。はっとしてそこら辺りを見渡しても見当
らない。再度呼ばれて足下を見ると、全く変り果てた彼の姿に、私は思わず息を呑ん
だ。紅顔の美青年だった彼は、髪が焼けぢぢれ、上半身が真黒に焼け靡れて、床の上

に転がっているではないか。

幸い、諫早海軍病院から派遣されて、治療に当たっていた先輩山田軍医を見つけて、
是非彼を何とかしてくれるよう交渉した。「兎に角、重症だからお前も一緒について
行け」と云われ、担送バスに乗せて行くことになった。西の空は劫火の如く真赤に燃
えていた。

諫早海軍病院については、午後八時を廻っていた。その夜次々に運び込まれる被
爆者で、大広間（演芸慰安場）は埋めつくされた。彼のひっきりなしに訴える口渴
に、下宿の小母さんの持たせてくれた水筒が空になる。

午後十時頃また空襲警報サイレン。軍医、看護婦、看護兵は一斉に防空壕に待避、
あとは数百人の被爆者の呻き声、叫び声が充滿する。窓から無情に射し込む月の光は
冷たかった。渴を訴えもだえる者の一人が、フラフラと処置台に近づき、蒸溜水の
フラスコを口にあてて飲み、フラスコを持ったままぶつ倒れる姿が、真暗な室内でも
月の逆光で、はつきり眺められた。異様な不気味さを漂わせる大広間でも、次々に死
んでゆく被爆者を搬出する看護兵の足音が、慌しく朝まで続いた。

翌朝、私達二人は士官待遇で、四人部屋に転入された。同室には、三菱兵器製作所
々長の登原剛三氏と、同総務部長の久米氏が既に入っていた、やっと人心地になり、
士官並みの食事や看護兵の丁寧な扱いに、彼の顔にも微笑がみられたが、それも数日
余を残す儂い生命の残照であった。

八月十三日夜半、大池君は遂に逝った。夕刻からの病状悪化を察して、私はそれと
なく彼から遺言らしいものをメモしようと努めた。彼も既に死を自覚したのか、苦し
い息使いで両親への言伝を喋ってくれた。柘榴のように服れ靡れた口元を通して、両
親への切々たる最後の便りになった。喘ぎながらの口述は、かすれ声で聞きとり難い
ものであったが、結びに「天皇陛下万才」「大日本帝国万才」を明瞭に唱えた処で、
疲れるから暫く眠るように勧めた。私もベッドに身を臥せ、まどろんでいると、「お
い、新田！ 水だ。水を呉れ！」という彼の声に起きた。腹痛と下痢を訴え、便器
を入れるのが間に合わず、血性下痢便を垂れながら、最後に錯乱状態で息絶えた。悲

惨な臨終を私独りでも見とってやったことは、せめてもの慰めになっただろう。後日名古屋から阪大に入院中の私に、感謝して挨拶に来られたお父さんにも、悲惨な臨終のことには触れず、言葉を濁した。

翌朝、同室の登原、久米両氏に別れを告げ（二人とも数日後に逝去された）、大池君の後事を病院当局に託して、私は又長崎に戻ることにした。ソ連軍の満洲侵攻も伝えられ、暗澹たる気持は覆うべくもなかった。

八月十五日、西山の下宿から歩いて大学に行く。片瀨町、諏訪町、勝山町と、山裾を回って長崎駅前に出る。そこから浦上、道ノ尾に向つて一望千里、全くの廢墟と化している。頭上から真夏の太陽が情け容赦もなく照りつける。太陽を遮る陰は何処にも見当らず、全くの原爆砂漠である。荒蕪たる焦土のあちこちでは、肉親縁者の遺体を捜し求めて、瓦礫を掘り返す人々の姿が散見される。疲れた体を励まししながら、大学病院に辿りつく。病院は建物の外部のみを残して全焼。私のいた第二中講堂を覗いてみた。焼けただれた私の鉄兜が、まるで身代りのように転っていた。

仮本部には、古屋野教授の指揮する職員、看護婦、学生二十数名がいて、焼跡に臥せて死期を待つ被爆者の看護に当たっている。大池君と同じように、血便をたれ、うめき、のたうち回りながら、一人また一人死んでゆく。屋前に大村からやと届けられた握飯と沢庵を頬張っていると、県庁に伝令に出ている医専の生徒の報告で、終戦を知らされたが、一同信じかねていた。玉音放送を聞いたという別の学生の言葉で、やつと事実を確かめることが出来た。

ああ、日本は遂に負けた。古屋野教授が一応救護隊を解散する旨告げられ、一同東京に向つて遙拝し、君が代を唱ったが、涙が澎湃として流れ、嗚咽の声は、焼跡のコンクリートの建物の内に共鳴した。

五日前、一瞬にして一大修羅場と化し、今は被爆前の美しい街並みを偲ぶ縁りもない。全くの焦土に変わり果てた息たえだえの長崎の廢墟に、私は呆然と立ちすくんでいた。余りにも悲惨無残だった犠牲の大きさに、戦争の重圧からの解放感を味わうにはほど遠かった。

(四五、八、一)

寮生諸君の思い出

島根県飯石郡赤来町
当時 長崎医大一年生
河 合 満

当時私達の住家であった里仁寮には、医学部学生と医専生徒とが仲よく生活していた。何彼と不自由な生活の連続であったが、皆それによく耐え、結構面白おかしく暮らしていた。それも恐らく、希望に満ちた青春期の若者たちの集りであったからだろう。だが、その若者達の大半が原爆で死んでしまった。あれから既に二十数年の歳月が経った今日、なお私の記憶に残っている彼等の面影を偲び、粗文を呈して御冥福を祈りたい。

医専二年の武内健君は、何となく体が弱そうであった。恐らくどこか患っていたのだろう。人なつこい性格で、好感のもてる男だった。眼鏡越しに見える眼は柔和で、人を引きつけるものがあった。話すこともしつかりしていて、同級生の諸君から、「さん」の敬称をつけて呼ばれていた。彼の人が柄が自然そうさせたのだろう。

石井立夫君は武内君とは反対に、はち切れそうな元気な男だった。実に愉快な男で、二云うこともやることもスバツとしていて、あまり物事にこだわらぬ性格であった。何事かあると、「九州男子ばい。くよくよするな」とか、「こまかことば云うな」とか云って、面白い冗談を飛ばして皆を笑わせた。童顔で、その上丸い縁の眼鏡をかけていたので、殊更愛嬌があった。彼が深刻そうな顔をしているのを、一度も見ることがなかった。終戦になって寮に帰った時、初めて彼も原爆の犠牲になったことを知り、私はしばし暗涙にむせんだ。

並木輝夫君にも記憶が残っている。前記の武内君や石井君達と同級であった。きれい好きで、身なりもいつもきちんとしていたし、彼の部屋はいつでもよく片付いていた。たまたま同級生が彼の部屋で話しこんで散らかすと、大声で文句を云っていた。そうすると石井君が例によって、こまいことを云うな、と笑い飛ばしていた。並木君は鼻をかんでいた。

以上の三人のことは、今でも記憶の底に残っているが、年を経るにつれて少しずつ記憶が薄れて行くので、ここに書き止めておきたい。

堀家潤君の思い出は、前回の「忘れな草」にその一端を書いたが、彼についての思い出はあまりにも多く、その一つ一つがまことに鮮烈であり、私の胸に深く刻まれていて忘れることが出来ない。多感な青春時代に得た貴重な友の一人であった。前回に書き得なかつた思い出を、再びここに書き止めて置きたい。

南国とは云つても、長崎の冬の夜は身を刺すように寒い。天井板を剥がしているので尚寒い。そんな或る夜、彼は何と思つたか、うすい掛布団を一枚持つて廊下に寝たので、私が驚いて「どうしてそんな無茶なことをするのか」と聞くと、「若し戦場に行くようになれば、何時どんな所に寝なければならぬか判らない。そのような時に備えて訓練しておくのだ」と云う。そういう彼の態度には、何の気負いも銜いもなく、私の心に実感として響いた。

吾々寮生の行きつけの銭湯は、大変きたない湯屋であつた。銭湯から帰ると必ずシラミがついていて、毎晩かゆいのに悩まされた。真夜中になると、体中がモゾモゾしはじめ、とても安眠出来ない。私も彼もどちらからともなく寝床から這い出すと、フンドシ一つになつて寒さにふるえながら、下着のシラミを取つた。大の男が夜中にシラミをとつてはポツポツとつぶしている様は、まことに滑稽でもあり、また他びしくもあつた。

寮にはタイル張りの立派な風呂があつたが、風呂の中にはいつも配給宇が投げ込まれてあつた。一度その風呂を沸かそうということになつたが、長らく使用していないのでうまく燃えない。それでも長い時間をかけて、やっと入れそうな湯加減になつた。誰もが久しぶりに吾家の風呂に入ったように喜んだ。私は遅く入つたので、底の方が冷たく、首までつかつて身を縮めるようにしていた。堀家君が焚いてくれた。彼は火を焚きながら低い声で歌を唱っていた。小節がよくきいて哀調を帯びた歌い方で、湯の中で聞いている私に遠い故里を思い出させた。後であの歌は何という歌かと尋ねると、熊本の高木時代に覚えた五木の守唄だと云つて、その歌詞や節を

教えてくれた。今でこそこの歌も有名になり、多くの歌手達によって唱われているが、私にはやはり、あのぬるい風呂の中で聞いた彼の歌声が、一番懐しい。

七月下旬(昭和二十年)ともなると、真夏の太陽が焼けつくように照りつける。前年まではどうにか夏休みも出来たようだが、既に敗戦色の濃いその頃は、夏休みも返上し、毎日学校には行つても講義を受けることが少く、空襲に備える作業が多かつた。或る日私は突然堀家君に、「四、五日休暇をとつて故郷に帰つて来ようと思う。父母兄弟にも、或いは最後の別れになるかも知れないので、会つておきたいと思う」と云つた。その時彼は、「自分も丁度そのような気持でいたところで、勝手を云つて済まないが、四国へ渡る連絡船のこともあるので、自分を先に帰らせてくれなやか」と云うので、それもそうだと思つたし、私の帰省は別に急ぐこともないので、それではよからうということになつた。その翌日は故郷へ向つた。

彼と私は共に寮の責任者で、寮は勿論、寮生達の万一の場合の保全の任を持つていたので、同時に二人とも寮を留守にする訳にはいかなかつた。

彼が帰省している間に長崎に空襲があり、大学もひどくやられた。それから間もなく、彼はとても元気で寮に帰つて来た。「随分早かつたではないか。もっとゆっくりして帰ればよかつたのに」と私が云うと、「我が儘云つてすまなかつた。今度は君が帰つてくれ」と、彼は済まなきような顔で云つた。

その夜は、彼が持ち帰つたいくらかの故郷の土産を、分け合つて食べながら、彼の故郷の話などを聞いたり、彼の留守中にあつた空襲の話をしたりして寝た。そしてその翌朝私は長崎を發つた。八月四日だつたと思う。それが彼との永劫の別離にならうとは、思いもしないことであつた。私は生ある限り、彼のことを忘れまいだろう。

(四五、一二、六)

【調 追記】 私は昨四十五年の秋、大阪府高槻市の旅館に一泊した時、運よく堀家君の令妹山下通様にお目にかかることが出来たが、承れば令兄の遺志をつがれて近くの向日町で開業中とのこと、元気なお姿を拝見して、何となく堀家君に申し訳が立つたような、ホツとした気持になつた。

原爆体験記

佐世保市田原町一七一一七
当時 長崎医大一年生 牟田 広 公

毎年八月九日になると、原爆の事を思い出す。この日は長崎市民にとつても、私にとつても、運命の日であり、生死を二分した一生忘れることの出来ない日である。

原爆被爆後滿二十六年になるが、ここで當時を回想してみることも、真に意義深いことと思う。又そうすることによって、原爆の恐ろしさを日本人に知らせ、今後二度とかかる惨事が起らないように皆に協力させることが、原爆生き残り者としての任務であり、且つ不幸にして犠牲となられた恩師、先輩、友人、隣人たちの死に報いる道でもあると思う。

私が熊本旧制第五高等学校理科甲類を卒業したのは、昭和二十年三月で、大学の第一次募集では工学部を志望したが、不幸にして不合格となった。当時は多数の軍医を養成するために、各大学に臨時付属医専が設置された程で、医科へ進むのは必ずしも理科乙類からばかりでなく、文科からでも工科からでも差支なかった。その頃は戦争が最も耐な時で、いづつどうなるか判らない状態だったので、余り希望ではなかったが、第二次募集で、佐世保に最も近い長崎医大を選んだ次第である。

かくて四月に入学はしたが、直ちに報国隊に編入され、講義中でも空襲警報が発令されると、すぐ講堂を出て各自の部署につかねばならなかった。しかも修業年限が短縮されて、元来は四年で卒業するところを、三年で全課程を終え、すぐに軍隊に送られるというので、日曜もなく、夏休みもなく、当時の「月月火水木金金」そのままの厳しい状態が続いた。自宅から近いというので長崎を選んだのに、週末の帰省さえ許されない有様であった。

四月、五月、六月と過ぎる中に、戦局は益々緊迫の度を加え、七月には沖繩が陥落し、敵機の来襲は愈々頻繁となり、本土決戦の日も、目睫の間に迫った。

こうなるともう勉強どころの騒ぎではない。学校の防衛と被爆者の救護に追われ、

それでも学習を怠っては、国家が要請する軍医にもなれないので、空襲警報が解除になると、寸暇を惜んで学習に励んだ。

七月末になると、敵機は長崎攻撃を始めた。二十九日には三菱造船所、三十一日には端島・高島の炭坑を狙い、八月一日には、よもやと思っていた我が医大病院にまで投弾して、学生に死者三名、建物にも多大の損害を与えた。八月八日の大詔奉戴日には、東京出張中の角尾学長が帰学され、途申実地に見聞された広島の新爆弾襲撃の模様を、つぶさに話され、我々は驚異の眼を見張りながらも、死守防戦の決意を新たにしたのである。

然るに一夜を明かしたその翌九日、話を聞いたばかりの我々の頭上で、広島と同じ新爆弾（原爆）が炸裂しようとは、何たる皮肉、何たる運命であろうか。

私はその朝、解剖の講義を聞くために、家を出ようとしたが、七時に空襲警報のサイレンが鳴ったので、家で解除を待つことにした。九時の解除と同時に家を出て、螢茶屋で電車を待ったが、停電なのか一時間待っても来ない。歩いて行けないこともないが、それには一時間以上かかるので、到底講義には間に合わない。仕方がないので友人の市丸君と、お盆休みに帰る汽車の切符を、浜屋の交通公社に買いに行った。漸く切符を手に入れ、下宿に帰って市丸君とラジオ放送を聞いていると、十一時少し前に、「B29が島原の上空を通過」という報道が入った。すると間もなく、異様な閃光と共に大きな爆音がして、家がグラグラと揺れた。私達は無我夢中で大便所の中に跳び込んだ。

暫らくして正気を取り戻し、部屋に帰って見ると、障子は破れて吹きとび、窓のガラスは目茶々に割れ、前の煉瓦塀は横倒しに倒れていた。私達は再度の爆撃を避けるために、近くの防空壕で、暫らく様子を見ることにした。

暫時の後、防空壕を出た時は、既に長崎駅方面の市街地は、濛々たる煙に包まれ、街の人は大声に叫びながら右往左往していた。

大学のある浦上方面は、金比羅山に隔てられて様子が判らないので、先輩の松永豊太さんと一緒に出かけたが、長崎駅から先は煙と熱気で全然通れない。仕方なく高部

水源地から本原を経て医大近くまで来たが、大木が根元から折れて倒れ、芋畑や南瓜畑では葉も茎も吹飛んで、芋や南瓜だけがごろごろと転がっていた。天主堂付近では靴の底が焼けるように熱く、歩くのも容易でない。病院裏の丘に辿りつくと、被爆した学生や看護婦たちが一杯いて、「熱い、痛い」と喘ぎながら、しきりに水を求めている。よく見ると毛髪が焼切れて丸坊主になっているもの、顔をペラッと火傷して目ばかりきよろつかせているもの、両眼失明のもの、さては半身或いは全身火傷で真黒になっているもの、前後の区別がつかなくなっているものなど、世は正に地獄絵巻のようである。私達はこれら無数の負傷者に対してなす術を知らず、ただ茫然と手を拱いて眺めるより仕方がなかった。

やがて日は暮れかかり、穴弘法や穴弘法寺跡など、被爆した学生や看護婦達が大勢集っている所を、励ましながら歩いている中に、角尾学長と高木教授が寝ておられる丘の上に来た。お二人とも怪我はさほどない様にお見かけしたが、日頃の元気は全く見られなかった。周囲には教人の教室員の方が看病して居られたが、学長は側にあった真白の握り飯（調註、これは私が学部四年の安東君達と、穴弘法下で作って配給したものの、「忘れな草」三号一二頁参照）を、弱々しい声で皆に勧めて居られた。この部下を劣^{いた}られる温情は、未だに私の脳裏にありありと刻まれている。このお二人共原爆の尊い犠牲になられたことは、お気の毒の至りであり、真に痛惜に堪えない。

やがて日もとつぷりと暮れたので、金比羅山を越えて西山に出で、新大工町へ降りることにしたが、途中でも数々の痛ましい光景に遭遇した。中でも学部四年の方たちで、この方々は間もなく卒業（九月の予定）して戦地へ赴かれるので、子孫を残す意味から学生結婚の人が多かった。中には奥さんが妊娠中の人もあり、勇気を鼓舞して山上まで辿りつきながら、力尽きて倒れている人もあった。そのような教人から奥様への伝言を頼まれたので、私は家を捜しては伝えて廻ったが、この方々も皆他界されたと聞いた。痛ましいことである。

下宿で一夜を明かし、翌十日再び医大を訪れた。病院前の坂道には、大きな馬が丸焼になって石畳の上に倒れており、玄関の前には四、五人の同級生が、どこをどう抜

け出して来たのか、呻きながらごろごろと横たわっていた。その中に石橋君や松浦君もいて、羨ましそうな、恨めしそうな声で、「君は学校にいらなくてよかったね」と云った。私は何とも返事の仕様がなく、唯元気を出すように励ますのみで、名前は知らないが一番寒そうにふるえている学友に、新調したばかりの学生服を着せかけてやったのが、せめてもの友情であつたらうと、自らを慰めている。

伊良林小学校の講堂には、まるで野戦病院のように被爆者達がごろごろと横たわっていた。この人達も皆次々にこの世を去って逝った。又医学部の学生で、ホウホウの態で漸うに下宿に辿りつき、そこで息を引取ったものも多ういた。又肉親の手で涙ながらに荼毘に付されている悲惨な光景も、目のあたりに見た。

私自身も、原爆投下直後から数日間長崎で過したので、その為か下痢が数日間続いたが、僥倖にも死を免れることが出来た。物凄い高濃度の放射能の中を歩いて、よく生き長らえることが出来たと思うと、今でも思わずゾッとする。

私の家では、長崎に落されたのが特殊爆弾であつたことなど少しも知らず、息子は大丈夫だろうと思っていたらしいが、被害が甚大だということや、その状況を次々に知らされると、つっきり死んだものと諦めていたらしく、元氣な姿で帰った時は、涙を流して喜んでくれた。

今は二十六年前の原爆当時をふりかえり、尊い犠牲となられた恩師、先輩、同輩の死を無駄にすることなく、与えられた天職を通じて、世の人々に奉仕すべく努力しなければならぬ、と思っている次第である。

(四六、九、一〇)

亡き米谷襄君のことども

島根県松江市南田町一四四一三
当時 長崎医大一年生

吉 岡 照 晃

米谷襄君は、眉の濃い男らしい容貌のうちに、何ともいえぬ人間のやさしさを秘めていた男でした。

高校の時私たちは、勤労働員ということで尼崎の工場に行き、その寮で米谷君と同室になりました。それまでは唯の同級生というだけだった私たちの、本当の友人としてのつき合いが、そこから始まりました。

仕事が終り夜になってから、それも屢々警戒警報や空襲警報のもとで、戦争の話を少しばかりと、戦争以外の話を沢山しました。あの頃話し合い、議論し合ったことの内容は、はつきりとは記憶しておりませんが、「これで自分もどうやら生涯の友というものが得られるな」と感じたことは、今も忘れることが出来ません。

妻君に連れられて彼の家にも行きました。途中の静かな風物と、米谷君の落ちついた雰囲気は、今でも想い出せます。妻君も高校卒業のとき私の家に寄ってくれ、長崎での再会を約して別れるとき、「先に長崎に行ったものが、二人一緒に入れる下宿をさがし、駅の伝言板にそのことを書いておこう。後から来たものは、それを見て其処に行くことにしよう」と話し合いました。

ところが実際には、私は入学式の前日に長崎に着き、高校先輩の、当時眼科助教だった土江乾一先生のお世話で、榎津町の大学の寮に入りました。

入学式の時、私の顔を見つけた彼が、「なんだ、来ていたのか。どうしたのかと思つたよ。待っておつたんだ」という言葉を聞いた時、「アッ」と松江での約束を思い出したのです。松江での彼との約束は、実にサッパリとその時まで忘れ果てていたのです。私のとんでもない物忘れのため、「同じ下宿で一緒に」ということは実現しませんでした。大学の教室で、校庭で、そしてお互の下宿で、話し合い付き合う時間は、結構充分にありました。そして真摯な医学生となってゆく彼と、とかく気まぐれな私と、生活態度の差はありながら、奇妙にウマが合うという状態だったのです。

大学入学後二カ月位してから、と記憶していますが、私は医学に倦意を感じ、「俺は医大を止める」と友達に宣言して、帰郷したことがあります。その時彼は、「そうか。帰るんか」と云つただけでした。帰郷した私は、十日ばかりで又気が変わり、再度医大に舞い戻りました。正午過ぎに私が大学の坂道を上って行きますと、彼は午前中の講義が終つて下りて来ました。彼は云いました。「なんだ。戻つて来たのか。何を

しに戻つて来たんだ」。私は答えました。「昼飯を食いに戻つて来た」。彼はにっこり笑いました。

その後私は、榎津町の寮から中川町の下宿に移りましたが、その下宿を訪ねてくれた彼は、「机を持って来てやる」と云いました。何度来てみても、私が机なしで居つたからでしょう。大学に入って数カ月も経つのに、机を持たぬ私のズボラさを見かねたのかも知れません。それから数日後、彼は本当に机を持って来てくれたのです。大学の近くの道具屋で見付けたと云つて、かなりの距離を電車にのせて、わざわざ運んで来たのです。それは朱色に塗られた、少しばかり古風な坐り机でした。

原爆が落ちて何もかも混乱に巻き込まれ、あの机も行方が判らなくなってしまいましたが、私の心の中にいつまでも残っている机です。(四五、一〇、二五)

追 想

広島大学原爆放射能医学研究所教授
当時 長崎医大一年生

渡 辺 孟

私たちは学部一年生は、入学後わずか四カ月を経た時の被爆であるため、級友を十分認識するに至っていなかった。私たち松山高校から来て、顔を出していたのは飯尾(二十三年病死)、児玉望(原爆死)、高尾(大阪に健在)、福井(高南病棟で被爆、大洲に健在)と私であった。

私は児玉が既に前から入っていた浦山寮に、一応七月から籍は置いたが、やはり松山高校から来た一年上の黒田省作先輩(原爆死)の勧めで、近くの山里脳病院の留守番を二人ですることになり、空襲が毎夜のようになった後は、患者保護の必要から、寮に帰つて泊ることはなくなっていた。そして大学での講義、実習、警備(本部詰)、脳病院での患者対策等のため、ゲートルをとく間もない日夜が続き、遂に健康を書した。

黒田先輩のすすめと、影浦内科菊野助教授（松山高校先輩、原爆死）の診断と指示により、クラス主任の池田教授（原爆死）代理の佐藤助教授（現医学部長）の許可を得て、松山の自宅で療養することになったのが、これら諸先輩や友人との永遠の別れとなったのである。

潤達で優しい黒田先輩や、喘息に悩みながら常に真摯な児玉らの姿と声は、当時そのままに鮮かに私の脳裏によみがえる。また我々がその当時、特に接することの出来た角尾学部長をはじめ、池田、高木、小野、清原、内藤の各教授、並びに諸先生方のお姿は、決してうすれることはない。

運命とは云え、生き残った私たちが、母校の復興に努力すべき大きな責任を感じ、困難な時には先輩、友人の多くの御霊が見守り、応援して下さっていることを肝に銘じつつ、進んで来た四半世紀ではあった。

そしていま、広島大学原爆放射能医学研究所の疫学社会医学部門において、被爆者に関する仕事をしているのも、深い因縁と思っている。（敬称略）
（四六、一、二二）

原爆体験の記

兵庫県尼崎市生津字住吉前一番地
当時 付属医専三年生

小林 栄 一

あれから二十五年、段々と薄れていく記憶の中で、私の一生を変えてしまったであろう原爆の事だけは、書きとめておかねばと思いつつ、つい時が流れてしまった。

あの当時からみると、八月九日、丁度私達は卒業試験の真最中であった。八月一日の空襲で大学病院に爆弾が落され、親友永見君がその犠牲になった。八月八日は大詔奉戴日で、広島を通過して帰られた角尾学長が、新型爆弾の威力について驚異的なお話をされ、愈々戦局の重大さを身にしみて感じた。

十月に入隊予定の私達には、兎に角、卒業試験を終了することが先決であった。

九日に空襲警報が出た時、私達は産婦人科病棟で本を読んでいたが、解除になって愈々試験が始まるというので、グルッペのものは外来二階の婦人科に行き、本田先生から口頭試問を受けていた。片山、香田、川上、川崎の諸君と一緒にいた。試験が終わって雑談をしていた十一時二分、写真のマグネシウムが光ったような感じがして、一瞬私は前にあった大きな机の下にもぐり込んだ。爆発の大きな音、天井などの崩れる音が静まるまで、私はじっとしていた。やっと静かになったので這い出したが、崩れ落ちた天井の梁が邪魔になって、仲々外へは出られない。室内を見渡したが誰もいない。やっとのこと廊下に出たら、レントゲン室の方で永井先生の姿がちらっと見えた。薬局の方では髪をふり乱した女の人が、大声で叫んでおり、木造の長廊下の方では、既に火が出ている。早く外へ出なければと、廊下に横たわる色々な障害物乗り越えて、やっと外へ出た。病院下の街は既に火の海で、トタンや何かゴウゴウと吹きあがっている。堤君達が負傷者を運んでいるのに逢い、私も手伝って病院の裏山へ運んだ。着ていた白衣やシャツは止血や包帯代りに使って、真ッ裸になってしまった。丘の上では黒い雨が降り出し、寒い寒いとふるえている人もいた。

負傷していない者は、私を含めて少ししかない。調先生が活躍しておられる姿が見える。永井先生も頭に包帯をして頑張っておられる。水を飲みたいと叫ぶ人が沢山居たが、呑んではいけないと我慢させた。そのうち学長が水をと云われるので、長井君と二人で玄関の防火用水まで汲みに降りた。鉄兜に汲んで持って行くと、真青だ。しかし仕方がない。我慢していた私も少し飲んだ。

香田君が、落ちていたと云って国防色の上着を持って来てくれた。県警察本部へ食糧の交渉に行くようにとの永井先生の命令で、元気な長井君と二人で金比羅山を越えて行く。負傷者がどんどん逃げて行くのが見える。警察本部への連絡をすまずと、留められるのをふり切って大学へ引き返した。市内を通過して帰ったが、まだ火が残っていて地面が熱い。駅前の下宿はすっかり焼け、小母さん達はどうか心配だが、どうにもならない。街は瓦礫の山、所々に死体が横たわっている。アメリカ軍の落した

ピラも方々に見える。肉親を探し廻っている人も大勢いた。病院の裏山に帰ってからは、負傷者の手当、然し皆茫然としている。暗くなってから、乾パンが到着した。

永井先生を中心とするレントゲン科の人達や、長井君、堤君等と甘藷を掘り、南瓜をとって鉄船でたいて食べた。おいしい。病院の図書室が一晚中燃えていた。時々敵機が飛んで来る。その時どんな事を考えていたか、今はさっぱり記憶がない。

翌十日前、握り飯が届いたので配ってまわった。穴弘法まで行ったが、負傷者が沢山呻いていた。高木君らしい姿も見える。元気を出せ、後で助けに来る、と云い残して山を降りた。院内の薬を探して廻ったが、救急薬品など全くなく、サルバルサン等が残っているだけ。山里小学校の方まで大学関係の職員を探して廻り、こうしてこの一日も過ぎてしまった。夜は薬専の防空壕に永井先生たちと泊る。眠れない。

十二日の正午前、大学関係の負傷者を道ノ尾に運ぶトラックが来た。片山君と一緒に行く。岩屋クラブに負傷学生達を運んだが、誰がいたか今は記憶にない。私は午後皆と別れて長与村の親戚の家に辿りついた。下宿の小母さんも峯保泉さんもいた。皆で無事を祝う。私が帰って来ないので諦めていた由。

翌十三日より岩屋まで自転車を通い、負傷者の手当、死体の処理などで多忙の日を過す。上野君等と死体を空地に運び、丸太を並べてその上で焼く。内臓は仲々焼けない。嫌な臭いがするが仕方がない。こうして毎日々々が虚脱したような、充実したような、訳のわからない日が続く。

十七日頃新聞でやっと終戦を知った。然し何の感慨もわかない。こうして調先生の救護隊が解散するまで過した。その後体を休めるために野母の親戚宅に行き、魚や蠅をたらふく御馳走になって、一週間後に再び長与に帰った。

十月初旬頃だったか、釜山から姉と父が私の安否を尋ねて来たが、間もなく私も一緒に船で釜山に帰った。皆は私の無事を見て喜んでくれたが、母は顔色が真青だと心配していた。引揚の準備で忙がしい中を、ゆっくりと御馳走をたべ静養した。

十一月になると、残っている青年を徴兵するという噂が出たので、小学校の同級生だった市谷君と二人で、先に日本に引揚げることにした。仙崎に上陸、市谷君と別れ

て長崎に帰り、その後大村病院、諫早病院で懐かしい友人と再び勉強を始めた。

昭和二十二年四月、医専が廢校されたので東京大学付属医専に転校し、二十四年に卒業、国立大村病院でインターン、長崎で国家試験を受け、どうにか医者になることが出来た。その後は国立大村病院で内科に勤務、家の都合で二十六年五月から九年間、飯塚市日鉄二瀬中央病院内科に勤務し、炭坑閉鎖のため、三十五年五月に大阪に出て、今日まで現在の此花診療所に勤務している。

尚、三十九年頃から此花区内に原爆被害者の会を結成し、四十三年には大阪市原爆被害者の会の副会長となって、月に一回この会の被爆者相談室で、医療相談を担当している。

四十四年には近畿在住の同窓生、堤、中山、前田、大川の諸君と私で同窓会を開いたが、話は原爆の事ばかりであった。原爆が私達の一生にとって、どれ程大きな比重を占めるか、実に測り知れないものがある。

私達と同じような運命を、二度と世界の人た味わしてはいけない。私たち原爆生き残りの者は、原水爆禁止のために、その生き証人とならなければならない。

(四五、一〇、二二)

原爆被爆の体験

北九州市小倉区井畑町五丁目
北時 付属医専三年生

松 永 信 之

昭和二十年八月九日午前十一時二分、落下傘に吊されて投下された新型爆弾は、松山町の上空約四九〇米で炸裂、一瞬にして全市を粉砕、死者七三、八八四名、負傷者七四、九〇四名を出したが、傷者の一人として当時の惨状を偲ぶ時、身のひき縮る思いがする。

受傷後、意識を恢復したのは既に夜半であったろう。真暗な中にワッというような、異様な騒音が重く広く、而も深く持続的に聞える。あれこそ傷者の苦痛の叫び、

阿鼻叫喚というのであろう。附近でも、「助けてくれ」、「水をくれ」、苦しそうな呻き声が、悲痛な響きでまじる。

うつぶせに倒れていたのだろうか、頭を一寸動かしても頭部に激痛がはしる。頭をかかえ、膝を曲げて苦痛に堪え、幾何の時がたったものか、顔をあげると、浦上駅の方面に当って、大小の火が点々と燃えている。眼鏡をなくしたので、ただボンヤリとしか見えない。爆音を立てて飛行機が近づいても、動く気力はない。

この日の朝下宿を出る時、何か予感があったのか、ズボンを二枚もはいて、三角巾と包帯を腹に巻き、大事な書物はリュックに入れて、防空壕に入れておいた。――後に書物は雨にぬれて出てきた。

当時は卒業試験中で、調外科の担送患者は前日に建物の地下室に移され、被爆の瞬間には、丁度木戸先生について、この部屋の廻診を見学していた。北窓を背にして吉川高賢君と一緒に立っていたが、爆発の閃光はおぼろげに覚えているものの、次の瞬間から意識恢復までは、全く空白である。吉川君は殆んど外傷を受けなかった由、材木の下敷になった私を助け出し、病院の上の芋畑まで運び、後頭部や背部から出血するのを見て、傷に応急処置をするために、背中の大きなガラス片を取除こうとして、指を入れたところ、人差し指の根元まで入ってしまったとのこと、この創では一緒に逃げられないと判断して、彼は山を越え、諏訪神社の方に逃れたと、後日聞かせてくれた。又顔見知りの看護婦さんが、私が死んだものと思って、席をかけてくれたとのものである。私に気がついた時の場所は、芋畑よりも更の上の野原だったので、私は下の方から火に追われるままに、或いは人々が上へ上へと移動するのにつれて、這い上ったのかも知れない。

翌日夜が明けてみると、すぐ側に学友の芳賀久君（原爆死）が、上半身焼け爛れて横たわっていた。何処か治療してくれる所はないものかと相談し、二人でトボトボと坂を下りかけたら、途中で学友の大浦治君（原爆死）に出会ったが、彼は元気で、負傷者に食物を与えるべく、飯盒でジャガ芋を煮ていて、僕等にすすめてくれたが、全く食欲がない。彼は乾パンの入った袋を腰にぶらさげてくれた。

更に治療所を求めて、燃えている浦上天主堂の横を通り、松山方面に向ったが、道路は跡形もなく、燃え尽きた灰燼や瓦礫を踏み、路傍では真黒焦げの死体を見たが、何等の恐怖心も憐憫の情も湧かなかつた。恐らく突然自失の体だったというのが、真実であろう。

漸く線路に出た所で、家族を探しに来たと思われる数人の人と出会い、全市が潰滅に帰して救護所どころではない事、汽車は道ノ尾までしか来ていない事などを聞き、遂に二人は家に帰ることを決心し、枕木が焦げ、胎状に曲った線路伝いに歩き出した。道ノ尾まで三、四時間もかかったような気がする。そして駅につく頃、また爆音に追われ、橋の下に避難したのが思い出される。

道ノ尾からや々と貨物列車の片隅に乗ることが出来た。乗ると云っても貨物列車のことだから、床にしゃがんでいたのだろう。その様子は全く記憶にない。

諫早駅で芳賀君と別れ、大村線に乗替えたわけであるが、偶々傍にいた五十年配の婦人が、血にまみれたボロボロのシャツを見て、「古いけれど洗ったばかりですか」と云って着替えさせ、着ていたシャツはくるんで腰につけて下さった。このシャツは洗って、長い間母の箆笥の引出しにあったようだ。私は当時この婦人の名を聞かずに別れたのが、如何にも残念でならない。

佐世保で更に柚木線に乗替えたが、同じ列車に叔父や姪など、数人の親戚が乗り合わせていたので、私が誰だか判らなかつたとのこと、頭から顔、手、シャツ、ズボンに至るまで、凝血と埃にまみれ、杖をついて放心状態を呈していた姿は、まさにこの世の者とは思えなかつたさうである。

汽車を降りて病院に立ち寄り、背中の創から数個のガラス片を剔出された由であるが、今でもレントゲン写真を撮ると、母指頭大の異物が数個見られる。

その後三十分の坂道を上り、漸く我が家にたどりついたが、その時飲んだコップ一杯の砂糖水の味は、今も忘れることが出来ない。家に上るとそのまま床につき、激烈な頭痛と嘔気に悩まされ、呻吟の一カ月を送った次第である。

帰宅後数日たった頃であったか、四十度の高熱と扁桃腺肥大、白色の舌苔を発見し

で、デフテリーではないかと大騒ぎになり、血清を注射して全身に発疹を生じたり、下痢を来したりした。脱毛は著明でなかったが、一カ月後でも白血球数は三千、赤血球数は二百五十万であった。

八月の末頃、島原で入院治療中の松本勉君から、「全身に皮下溢血斑が出たので、もう長くないだろう」との便りがあり、私は頭や胸に包帯をしたまま、島原まで出かけたが、出血斑は蚤に刺された跡だと判り、泣き笑いたことがあつた。

十月から大村の海軍病院で講義が再開され、死亡者名簿の中にあつた私は、幽霊ではないかと学友にからかわれたが、再会はとても嬉しく、皆で心から喜び合つた。

併し残念ながら昭和二十二年三月、「付属医専は長崎医大の復興に支障を来す」との理由で廃校となり、学友は全国に分散を余儀なくされて、見知らぬ土地で食糧事情の悪条件と戦い、辛酸を嘗めさせられたのである。一緒に東大付属医専に転校した和田政太郎君は、六月に結核を発病して咯血し、国立大蔵病院で肋膜外充填術及び横膈膜神経捻除術を受け、東大物療内科に移つて胸廓成形術まで受け療養に専念したが、二年遅れて卒業後、間もなく中野区江古田の聖母病院で亡くなつてしまつた。

私は核爆弾の筆舌に尽し難い残酷性を体験し、二度とあるまじきを強調すると共に、平和な現在が、幾多の戦争犠牲者によつて獲得されたものであることを銘記し、病める隣人の健康回復に、微力を捧げている次第である。

最後に、謹んで原爆の犠牲となられた角尾学長はじめ、諸先生、並びに先輩、後輩の諸兄の御冥福を祈つてやまない。

(四五、一〇、一九)

閃光の瞬間より

東京都北多摩郡清瀬町野塩三二八
山本雅文
当時 付属医専三年生

原爆当時、私は医専三年生で、運命のあの日には、戦時中の繰上げ卒業のため、皮膚科北村(包彦)教授の臨床試験がある筈でした。

その日の前日は、例の大豆粕玄米食で腸を害い、下痢のため下宿で休養してしまつた。その日も腹痛のため登校を危ぶみましたが、それでも試験が午前十時に行われることになつていたので、元氣を出して、大学外来本館の四階にある皮膚科外来診察室に出かけました。既に同じグループの高杉、田川、芳賀、西村君等が来ていて、診察室の向う側の部屋で、ノートの立読みをしていたようです。

午前十一時になると私の番が廻つて来て、試験を受けるための患者を伴つて、怖る怖る北村教授の前に立ちました。先生は患者に向つて二、三の質問をされ、それがすむと私の方を向かれて、診断名をお訊ねになりました。私は簡単に、「エクツェーマです」と答えますと、先生は重ねて、「エクツェーマの中の何かね」と聴かれました。私が用意した答えを申上げようと、膝をのり出した丁度その時です。閃光がピカッとひらめきました。続いてヒューンという急降下爆撃の時のような金属音が聞えたので、これは直撃弾だと、とつさに眼と耳を手の平で押え、床に伏せようとした時に耳をつんざく轟音がして、暫らくは全く視界のきかない褐色の世界となり、方向も判らぬ儘に立ちすくんでいました。

そのうちに眼前が急に明るくなつたので、光を求めてその方角に走りました。その方向は丁度三階に下る階段のある辺りだった様です。階段の壁を手で摩りながら、漸く玄関ホールまで駆け降りますと、戸外はまだ薄暮のような暗さでしたが、無意識に左の方角に向つて逃げました。その時はまだ人影が余りなかつたように記憶していますから、今考えてみると、自分が逃げ遅れた最後の一人だと思ひこんで、必死になつて穴弘法へ向つて逃げたようです。

穴弘法の岩屋に辿りついてみると、そこには既に十人ほど民家の人々が隠れていました。十分程すると、同級生や学部の学生達が登つて来ましたが、皆蒼白な顔をして、激しく嘔吐している人もいました。

午後になって被爆者の救護のことを思いつき、山を下り始めた間もなく大粒の雨が降つて来ました。吹き飛んだトタン板を頭に乘せて、山の中腹まで来ると、同級生の李(集鏞)君が斃れており、更に下には五、六人の学生達が、石崎助教を囲んで介

同宿者三人の憶い出

佐世保市相浦町一六二六
当時 付属医専二年生

井 手 一 郎

拘っていました。その中の一人が、「おい君、水はないか、探して来い」と云いましたので、頂上の寛の水が水槽に溜っていたのを思い出し、逆戻りしてつぶれたお寺の屋根の下から、柄のついた三合杓を見つけ出し、水を汲んで石崎助教のところへ運びました。更に山を降りて行くと、あちこちに看護婦養生所の生徒達が倒れており、しきりに水を求めて叫んでいましたので、また山を登り降りしながら、水を運んでやったり、日射しを避けて木陰や岩屋まで背負って行ったり、小用がしたいという人のために、坐らせてやったりしました。

同級生の話で、病院には這入れないとの事だったので、丘を更に進むと、角尾学長が寝ながら介拘を受けておられる所に行きました。学長は私の顔や背中の中を血糊を認めて、「君は大丈夫かね」とおっしゃったり、又周囲の者を見渡して、「誰か落下傘を見たそうだが、君達は見なかったかね」などとお訊ねになりました。

その後も患者の運搬と水の補給で日が暮れて、その夜は山の中腹で、民家の人に分けて貰った生胡瓜を囓りながら、市街の大火災に映える夜空を眺めて眠りました。

翌十日は、肉親を求めて山に探しに来られた大学の職員、学生、患者の家族の方々の道案内に追われ、夕刻になってやっと、気にかかっていた城山町の下宿の安否を、確かめに帰りました。家は目茶々に倒壊して、下宿の奥さんは瀕死の重傷でした。そして私の介拘の甲斐もなく、その夜亡くなりました。残された子供二人（姉と弟）も、外傷のために弱りきっており、その夜はこの二人の姉弟と一緒に、母親の屍体の傍で一夜を明かし、翌朝二人を背負って実家に送り届けましたが、そこでも祖父は危篤、祖母は既に亡くなられ、家も焼けて無く、子供の叔母に当る人に後事を託して、大学に帰りました。

その後の高木教授のこと、国房教授の事、そして又当時元気で居られた永井助教の事など、思い出は山程ありますが、胸に迫って筆を進めることが出来ません。

(四六、七、二五)

(前略) 当時医専二年生だった私は、西山の青木教授のお宅の少し奥の方の、永原ヨシ様方に下宿して居りました。同宿者には学部四年の古賀典志さん御夫婦、肥後実さん、それに入學したばかりの同郷の医専一年奥野昭君、私を合せて四名の学生の外に、渡辺という三菱勤務の若い夫婦がいました。

古賀さんは学生結婚中で、いつも「俺は五高時代に恋愛結婚したので、随分苦労したよ」とこぼして居られました。奥さんは熊本のお寺のお嬢さんとの事でした。

妹さんを送って、十日ばかり鹿児島に帰省しておられた肥後さんが、八月八日の夜下宿へ帰って来られました。その夜、古賀、井手、奥野の三名が肥後さんの部屋に集り、夜を徹して駄弁ったのが、最後になってしまいました。

肥後さんは鹿児島はえのさきの空襲の話や、軍中の話などを面白く聞かせ、帰りは早岐経由で南風崎に途中下車し、針尾海兵団に配属中の兄上(名古屋帝大医学部卒)を訪ねられたそうで、その時兄上が「お前ももうすぐ軍医だ。海兵団の中を案内してやるから、軍服を着て俺の後からついて来い」と、肥後さんに軍服を着せて案内されたとのことです。肥後さんは、「兵隊が皆俺に敬礼して、大変楽しい一日であった」と、得意になって、さも嬉しそうに話して聞かせました。

針尾海兵団では、当時、士官も外出禁止となっていたが、肥後さんが帰られる時、兄上は衛兵に一升瓶を渡して、内緒で外出を認めて貰い、駅まで送って来られたそうです。

古賀さんは、五高時代の恋愛結婚の話、医大受験のとき高等学校の本を売って長崎までの旅費を作った話、医大入学後、満蒙开拓拓託生に採用され、七十円程の収入を得て初めて奥さんを長崎に呼びよせた話など、身の上話をこまごまと話して下さいました。そして「俺は九月に愈々軍隊へ行く。井手君、君は勉強して立派な医者になっ

てくれよ」と云って、その夜大半の医書を譲って下さいました。その本を空襲で焼いては大変だと思い、翌日佐世保へ持ち帰る決心をしたのが、皆さんとの運命の別れ目でした。

古賀さんは九日朝、奥さんに送られて元氣よく登校、肥後さんも久し振りの登校第一日目、奥野君は私の帰省勧誘に笑いながら、「新入生はまだまだ休まれませんよ」と答えて、三人とも元氣よく登校したのでした。

九日の午後十日の午前中でしたか、裏手の金比羅山を越えて帰って来る古賀さんを、奥さんが最初に見つけて、下宿の二階に連れて上りました。

肥後さんは、針尾海兵団の軍医中尉の兄さんが、早速駆けつけて来られ、私は同郷の奥野君を探すために、毎日大学へ出かけました。

その後、古賀さんは奥さんや私達の看病も及ぼさず亡くなられ、肥後さんは放送局下の横穴で死体となっているのを、お兄さんに発見され、私は遂に奥野君の遺体を発見することが出来ず、後日母上がグラウンド近くで発見された由を耳にしました。

肥後さんの遺体は、お兄さんに手伝って現在の東高校前の空地で焼き、下宿でお通夜をしました。お兄さんは前夜の肥後さんの話のように、実に機知に富んだ方で、物の適確な判断とその実行力には、ほとほと感心致しました。お手伝している間、いつも何処からか銀飯のお握りをザル一杯入れて持って来て、「さあ食べろ、食べろ」と沢山食べさせて頂きました。一下級士官が公用の外出でもないのに、何処からどうして入手されるのか、学生の私には不思議でなりません。今は御母堂と御一緒だと思いますが、是非一度お目にかかりたいものと思つて居ります。

肥後さんはお兄さんとは反対の性格で、おとなしい、割に無口な、実直な方であったと記憶して居ります。古賀さんは小兵ながら、既に「肥後モッコス」の片鱗の見える熱血漢であったように覚えて居ります。考えてみますと三人とも、肉身よりも長く最後まで起居を共にしたのは、私一人だったのであります。

奥野君は佐世保市中里で、相浦の隣りではありますし、同君の母上は私の小学校の恩師でございますので、いつもお会いすることが出来ます。（調註、奥野ワカ様は昨

年三月に御他界の由、御遺族から通知がありました）

古賀さん、肥後さんの両先輩が、若し御健在であれば、私の人生行路も違っていたに相違ないと思うと、御二人の靈の安からんことを、祈らずには居られません。

（四六、六、一四）

八月一日の爆弾被爆体験記

東京都世田谷区世田谷四一七一一三 江 口 有 一
当時 村属医専二年生

昭和二十年八月一日、南講堂での授業も終り頃であつたらうか、折からの警戒警報が俄かに空襲警報に変わった。つい油断して衣類を緩めていたので、慌ててゲートルをつけ直し、上着をつけたりしている中に、早くも轟々たる爆音が頭上に迫つて来た。しまったと急いで階段を跳び降り、裏の崖沿いに走り出した。壕がとびとびに掘つてあつたので、万一の時はとの心積りだった。チャリと見上げた頭上には、B29の編隊が裏の山を起えて、轟音を響かせ飛行中である。凄まじい高射砲や機銃の音を耳にしながら走っていると、急に頭上に松風の音にも超音波の響きにも似た、ゴーという不気味な音がした。危い!! 本能的な感じで、二三歩足がもつれたが、咄嗟に左側に向けてペタリと地に伏した。と同時に、轟然たる爆音と地鳴りを発して、土砂がバラバラと身体にふりかかった。後頭部に何やら微細な破片がつきささる。息もつけぬ土埃りと硝煙の匂い、一瞬の出来事だった。助かったと思ひ、手足を動かしてみる。動いた、無事だ。ふと気がつく、左手首の筋肉がアングリと口を開いている。指は動く。しめた、と立上つて土煙の中を壕に向つて駆け出そうとした時、左胸がゴロゴロと鳴ったかと思うと、熱いものがこみ上げて来てパツと吐いた。鮮血だ。やつ、胸をやられた。次から次にこみ上げてくる血を吐きながら走り出すと、幸運にも目の前に黒々と壕の入口が見えた。助かったと壕内かけ込み、奥に入って横になった。壕内には四、五人の人が既に避難していたが、上級生が一人、頭から血だらけになつて

いながら元氣そうに坐っていた。

空襲は尚も続く。ヒュル、ヒュルという不気味な落下音を立てて、轟然たる爆発音が遠近に起る。その度に壕内に揺れる。爆撃の合間をみて二人、三人と、壕内に走り込んで来る。この壕外の状況とは拘りなく、私は内出血から来る快い睡気が、次第に頭の中に霞のように拡がり始めた。耳がガーンと鳴って来る。全身がシーンと痺れて来る。意識がボーッと霞んで来る。これはいけない、頑張るんだ。親兄弟のこと、大や友人達のこと、国や戦争の事など次々に思い浮べては、意識がなくなるのを防いだ。壕内でも友人やら職員やらが、色々と励してくれる。

空襲も遠ざかった頃、私の負傷を聞きつけて、同級の友人達が次々と姿を見せ、安否を氣遣ってくれた。既に呼吸異常が出ていたのだろうか、皆の顔には気の毒そうな表情が浮んでいる。保野先生の診察によつて、左肩甲骨の下方に創傷が見つかった。それに一致した上着の部分に穴があいている。胸部官管創である。警戒警報の解除を待つて、外科処置室に移された。もうこの頃には、周囲の様子がさっぱり判らぬようになつて仕舞つた。

間もなく夜になつた。友人達が傍に待機しているのだから、急に心細くなつた。その一晚の長かつたこと、苦しかったことは、未だ嘗てなかつた。次第に呼吸困難が激しくなり、左胸部が締め付けられるように痛い。呼吸の度毎に左鎖骨の下で、ゴトゴトと骨がすれ合い、激痛が胸部に放散する。苦痛に耐える中に意識がかすんで来る。と、暴漢が白刃をふるつて私の左胸をグサリと突刺す。はつとして目が覚めると、左胸部に激痛がある。又うとうとする。今度は首を締め上げられる。夢中ではね起きようとする。左胸部の苦痛が尚激しい。

この痛みと苦しみの闘いの中に、漸く夜が明け始める。早く誰でもよいから、此の胸を切り開いてくれと切なる願いをする。待ち遠しい時間が過ぎて、診療開始時間となつた。やれやれとほつとする。処置室の台の上におかれた。自分の小鼻がはげしく動いているのを感じながら、どうなることやらと思つていたら、高木教授の見舞があつた。続いて国房教授も来られた。「ご心配かけました」と、やつとのことと云

う。

間もなく二階の特別室に移された。午後になつて大和田野先生が、二三人の学生と一緒に入つて来られた。種々検討の結果、穿刺が施され、空気二〇ccと血液八〇ccが排除された。すると急に呼吸が楽になつた。しめた、助かりそうだと思う。私の声を聞いて先生も安心される。出血は止つたらしく、この穿刺をきつかけに、どんどん恢復して来た。あとは下り坂をおるように、苦痛も急速に減退消失して行つた。

三、四日目までは、友人達が病床に付添つてくれて、警報が出ると、先ず私を担架にのせて壕内に運んでくれた。警報解除になると持場から帰つて、私をベットまで戻してくれた。日頃身体を鍛えていた故か、日に日に体力は恢復して来た。

三日目にはベットの周りをそつと歩けた。この日、父が友人に案内されて、佐賀からとんで来たが、大分よくなつていたので、安心して帰つて行つた。六日目には、一人で壕まで歩いて行けるようになった。六日目だつたと思うが、大和田野先生が、「もうあんたは死ななばい」と云つて、笑われたのを覚えている。

この期間中に警報の合間をみて、大学の合同慰霊祭が行われた。幸なことに、私はこの慰霊祭から除外されたのであつた。

被爆現場にも行つてみた。爆弾の抉つた大きな穴の縁から、僅か一メートルの所に身を伏せていたのだ。そのため爆風の直撃を受けずにすんだ訳だ。私のいた地点から一、二メートルの所で、学友益田君が壮烈な最後を遂げたと、後で聞いた。私と並んで走つていたのだが、一瞬伏せ遅れたのだろう。八月八日に角尾学長が、広島市の被爆状況を詳しく話されたことを、友人達から知らされた。

私の健康状態は順調そのものであつた。早く友人達と共に戦線に参加したい、そう思つた矢先であつた。運命の八月九日を迎えたのは――。

(四五、一〇、二六)



長崎の原爆被爆体験記

東京都世田谷区世田谷四七一一三
当時 付属医専二年生

江 口 有 一

昭和二十年八月九日の朝を、病院裏の防空壕で迎えた。九時過ぎに空襲警報が解除になったので、古屋野外科二階の特別室に戻り、ベットに横たわった。八月一日の空襲で至近弾を浴び（前項参照）、左背部から肺を貫く盲管創を負い、辛うじて九死に一生を得て、今日は九日目である。幸い私の経過は順調で、二、三日前からは警報の度毎に一人で壕に避難し、又夜は壕内で寝泊りすることにしていた。

一寸顔を見せた友人達も、すぐ授業へと出て行った。室内は私一人だったが、いつでも避難出来るように上着を身につけ、ソファに坐って小説を読んでいた。

すると急に爆音が聞えて来た。一機のようなだったが、次第に頭上に近づいて来る。もしやと思った時、急にシュルシュルという爆弾の落下音に変わった。一瞬の中にソファの上にピタリと這いつくばった。ソファの背はベランダ側に向いていた。まさにその時猛烈な衝撃と共に、ソファごと揺れたと思う間もなく、床にたたきつけられた。瞬間眼を射る閃光、続いて暗黒、同時に何やら重たいものがグイグイと背中の中のしかかって来た。アッ、ウッ、声も出ない。圧死——と覚悟した瞬間、背中の中の重荷がふと止った。何が何だか全然判らぬ、一瞬の間の出来事だった。

暗黒の中に瓦礫に押えつけられて、身動き一つ出来ない。硝煙の匂が漂って来た。身体は幸い無事なようだ。最悪の場合、一昼夜も我慢しておれば、救援隊が来て掘出してくれるだろう。そう思っていると、外部で何やらパチンパチンと燃え上る音が耳に入った。と同時に焦げ臭い煙が隙間から入って来た。

しまった、火事だ。慌てて身体を色々動している中、フト前の方へずってみた。おお、身体が抜けて行く——有難い。丁度その頃闇に目が馴れたか、頭上のあちこちに隙間が明るく見え出した。しめたと頭上の最も大きい隙間めがけて這い寄り、頭を出してあたりを見廻した。室内は目茶目茶に破壊し尽され、天井も壁もパイプもベッド

も、一しよくに絡まって床に積み上っている。隙間からやつと抜け出し、ベランダ越しに外を見て、二度びっくり。視界一面に広がっていた市街地がない。一瞬の間に廢墟と化しているのだ。一つとして形を止めている建物はなかった。

稲佐山の青々と茂った山肌は、茶色にくすんでしまい、市街地にも山にも、煙が各所から立ち昇り、土砂の煙と入り混って、赤に橙に茶に黄色に、あらゆる色彩を交え、浦上二帯は焦熱地獄となり、空一杯に垂れこめた煙雲に地上の劫火を映して、赤々と、しかも薄暗く、この世のさまとは思えぬ光景であった。その上地鳴り様の異様な騒音が、一帯を覆っている。——逃げる、逃げるんだ。火に囲まれぬ中に山を越えてしまおうのだ——そう思うが早いか、ベランダにとび出した。此処も瓦礫の山、行き止まりだ。瓦礫の彼方には、学友（？）が松葉杖を両脇にかかえた形で、仰向けに倒れている。次で廊下側に出てみた。建物が崩れて何処に階段があるか判らぬ。隣室と思われる瓦礫の中から、「先生ノ先生ノ」と呼ぶ看護婦の悲痛な叫び声が聞えて来る。どうしようもない。煙は立ちこめて来る。後髪を引かれる思いで、瓦礫をすべるように階下におりた。階下の破壊、乱雑も凄じいものであった。コンクリートの大小の塊、ベット、戸柵等が無残にも積み重なり、人の呻き声もどこからか声えるようだが、どこがどうなっているか判らない。

外に出て煙を避けながらウロウロとさまよひ、やつと大学正門に通ずる道に出た。ただ逃げるのに夢中だった。潰れた家の前で血だらけの男に、「この下に家族が埋まっているんだ。手伝ってくれ」と頼まれたり、同級の犬塚君が三宅君に支えられて、ヨロヨロと歩いて来るのにも出会った。一時も暇をとるのが恐ろしいので、無情にも一人で山の方へ逃げて行く。道には大木が、すべて地上二メートルの所から薙ぎ倒されている。凄まじい爆風だ。ふと気がつく、市街地の廢墟から火を逃れて山へ山へと避難して行く人々が、蟻のように見える。途中で見る老若男女は皆、外傷か火傷を負い、衣服も或いは破れ或いは焼け焦げて、おびえ切り、疲れ果てた様子で、路端に横たわったり、うずくまったり、或は呆然と、残した家族の方を見やっている。ゲ—ゲーと嘔気に苦しんでいるものも大勢いた。外傷も火傷もなく、キチンと上着までつ

けているのは、私一人だったようだ。

やがて風向きが変わって、煙が此方にびいて来た。人々は力なくゾロゾロと移動する。友人の永島君と出会い、励ましながら一緒に歩いてたが、とうとう弱り切って路端に倒れてしまった。そうこうする中に、どうやら火の手から逃れて山を越えることが出来た。山上で古屋野教授ほか二三人の職員に会えたのは、大変嬉しかった。

小憩の後私は先生方と別れ、市外へ市外へと歩き続けた。途中咽の渴きに拘って飲んだ水が、異様な味がしたので覚えている。その日は日暮までかかって、日見トンネルに辿りついた。七、八時間も歩き続けたことになる。空襲の再来が怖わかったからだ。トンネルの中央に来て、今日初めて心から安堵した。

ここで一晩ぐっすり寝てしまったが、この事が今後の症状にどれ程よい影響を与えたかわからない。翌日は諫早の知人宅で、又一晩熟睡し、三日目に帰宅したが、既に諦めていた家族一同の喜びは、譬えようもなかった。

八月末までは、罹災者の中で後発症に斃れる者が多かった。私の村でも、この頃まで生き残っているのは私一人になってしまった。九月に入って、もうこれで大丈夫だと思い始めていた時、あの恐るべき第二期症状が、既に身体を蝕んでいたのだ。

九月五日、私は大学の様子を知らたいと思つて、長崎に出かけた。道ノ尾駅から一面の廢墟の中を、長崎市内に通ずる一筋の道をトポトポと歩いて、ただ一人で大学の焼跡を訪れた。誰も居らぬガランとした焼跡は、黒々として異様な臭気に包まれていた。友人川床君の遺体を認めただけで、大学を後にしたが、まだあちこちに白煙が立ち昇り、焼野原のそこ此処には、焼死体や白骨などが、そのまま放置されていた。途中でふと金比羅山を見上げ、負傷の身で、而もハダシで、よくもあの山を越えたものだ、我ながら呆れたり感心したりした。

寮についた頃からその夜にかけ、異常な悪寒と咽頭痛を覚えた。風邪をひいたかなと思つてその夜は寝たが、翌朝は更に咽頭痛が強く、起きぬげにふと自分の脚を見た時、一瞬心臓が凍りついた。見よ、左大腿部に椿の葉のような溢血斑があるのではない。絶望の心を押えて尚よく見ると、大小の溢血斑が更に七、八個認められた。やら

れた。急に居ても立っても居られなくなり、早速新興善の大学外来診察所に駆けつけ、誰彼かまわず診て貰ったが、当然の事に、誰も否定してくれる人は居なかった。私は早々に帰宅したが、その日から高熱が続いた。咽頭が腫れ上った。咽頭膿瘍である。それから四〇度の高熱が四、五日続き、手足がもげそうにだるく、呻って寝ているだけであった。注射は勿論、薬も飲まなかった。さしもの私もすっかり諦めていたのである。この症状の行きつく運命を、余りにも鮮明に目撃していたからである。唯一つ努力したのは、食事をせせと摂ったことだった。

五日目頃に排膿があり、熱型が動いた。以後段階的に解熱してゆき、十日位でどうやら無熱となった。すっかり恢復するには更に十日以上かかったが、しかし治つたのだ。勝つたのだ。この時の喜びは、もう二度と味わえないだろう。それから後は漸次元氣をとり戻して来たが、倦怠感のとれたのは、まだ半年も先の事だったし、貧血の無くなったのは、更に二年も先の事であった。

八月一日の爆弾被爆以来、何度も生死の境に陥りながら、不思議に何れも危機一髪の所ですり抜けて来られたのは、まことに幸運であった。この一カ月半の体験ほど、数奇を極めたものはなかった。

今日こうして健康な生活を送っているが、慎んでこの幸運を神に感謝すると共に、不幸な運命を辿られた数々の英霊に、心からの冥福をお祈りする次第である。

(四五、一〇、二六)

原爆前後の追想

大分県南海部郡宇目町千束 前 田 利 磨
当時 付属医専二年生

(前略) 当時私は昭和十九年入学の医専二年生でした。原爆は後述のように、偶々帰郷して赤痢に罹患し、重態になりましたので難をのがれ、九月になって復学、初め主として遺骨採集などに明け暮れ、次いで大村、諫早へ移転し、昭和二十二

年四月、廃校となって郷里の鹿兒島医専に転校、卒業後は、大分県佐伯市の社会保険病院に勤務したり、鹿大に帰ったり、宮崎県立病院に勤務したりして、只今は現在地で開業しております。幾多の変遷を経過しましたが、その中でも原爆を中心とした前後の時代が、最も多感な青春の時期に、そして余りにも激烈な変動の連続だっただけに、痛烈な印象として残っております。次から次に走馬灯の如く浮び上りますが、二十五年は余りに長く、時には不確かな点もあろうかと思いますが、その点は御訂正下さい。長い間長崎を思い続け、思いつめて来た私にとりまして、この時代の憶い出は、殆んど神格化されております。以下は当時の回顧断片であります。

× × ×

入学した昭和十九年はまだよかった。毎日きっちり八時間授業が行われ、街にはチャンポンもあった。混乱した終戦後の時期も合わせて、この年が最も充実した学生生活ではなかったらうか。

高木教授の鞭にコツキ廻され、池田教授の発生学に泣き、内野教授の生化学が全く解らず、病理実習で組織標本を見せられて、疾病の本態が顕微鏡的所見まで解明されている以上、誤診などあり得よう筈がないと早合点し、法医の猿や山羊の動物園が珍らしく、解剖実習で佐藤助教授から御自身の学生時代の脳組織のスケッチを見せられて、その緻密精巧なのに驚嘆したり、或る時は角尾学長御不在で、病理の竹内教授が教育勅語を代読され、何回か読み違えられたのに驚いた。

清原教授の生理学、寺坂教授の薬理学、国房教授の法医学、内藤教授の細菌学等を終えて、軍医速成が目的だったため、早くも一年の後半には、楠井教授の診断学、石崎助教授の外科総論の講義が始まった。

昭和二十年二月頃、同郷の松元武紀君が脳膜炎で入院した時は、諏訪神社にお百度を踏んだことがあったが、あれはきつかった。あの石段にはこたえた。戦局が逼迫して食糧事情が次第に悪化した、軍人は勿論のこと、徴用工でも動員学徒でもない一般学生の我々には、何の恩典も特配もなく、特に他県からの下宿学生は、悲惨なものであった。浦上駅で被爆したという菅原三善君と、片瀧の街をほつき歩き、とある

垣根で日向ぼっこ中の猫を苦もなく抱きこんで、竹藪の中で処理して食べたこと、グロッパ会の肉は赤犬だったし、放射線科に進まれた山本先生等が世話された、県人会の動物性蛋白源も猫だった。蛇もたべた。日曜日になると、帰省する友人の食券を貰い、大豆入りの丼を二杯もたべては、猛烈な下痢を起す始末。稲刈や麦刈の奉仕は、銀飯がたらふく食べられたから、とても有難かった。

昭和二十年六月頃になると、連続空襲警報の出っぱなしで、授業は中断また中断、各教室に配置されて防空壕掘り、終戦後に生理学教室の壕を掘り起して、アルコールとお米を頂戴したが、申訳ないような、有難いような……。でもその飯はまずかった。放射能の影響だったのだろうか。

永井助教授が、「お前達は作戦は出来なくてもよい。飛んでくる弾丸を背にして後退すること程難しいものはない。よく憶えておけ」と云って、担架輸送の実地訓練があったのもこの頃。北村包彦在郷軍人会長（皮膚科教授）の指揮で空襲訓練もあった。

毎日毎晩、B29が大村方面へ空高く飛び去っていた。ある防空当直の夜、味方の高射砲が打ち出され、その曳光弾の美しさに見とれていたら、破片がパラパラ降り出して、あわてて病理教室に跳び込んだこともある。全く授業どころではなかった。毎日何処で寝て、何を食べていたのかも、今はさだかでない。

七月になって一学期の試験が終り、今年夏休みは返上とのこと、それでは各自それぞれ計画して帰省しようではないか。沖繩も陥落して何れ米軍は九州に上陸する。我々学生が最前線にかり出されて、真先に討死することは間違いない。真剣に死をみつめ、死を考えていた。鉄砲がないことは判っていたから、故郷に帰って日本刀を持って来よう。親父に最後の別れもしよう。亡母の墓の土をお守袋に入れよう。特別に悲壮がった訳でもなく、自然にそういうことになった。そんな時代だったと思う。

ずたずたになっていた鹿兒島本線を、歩いたり、泊ったり、乗ったりして、やっと鹿兒島に帰りついた。ところが久し振りに食べたおはぎがあたった。赤痢である。感染経路は密輸入先の軍隊の砂糖である。裏急後重が激しく、親父の古典的な硫苦療法も悪かった。ところが当時の新薬トリアノンが劇的に奏効した。五分おきの下痢がピ

タツと止った。でも治った時は足腰が立たなかった。

この頃八月八日にソ聯参戦。八月十日に次の弟がひよっこり帰って来た。医専一年生で、七月に入学したばかりである。余りの食糧事情の悪さに耐えかねて、八月八日に長崎を出たという。兄弟二人とも助かったのだから、独り息子を亡くされた方が多いのに、全く申訳ない気がしたものである。

八月十三日頃、長崎は新型爆弾で全滅したという噂を風の便りに聞いた。新聞はなく、ラジオは故障していた。八月十五日の終戦は村の駐在が教えてくれた。当時流行の密殺の牛肉をたべて、若い体だったから病後の恢復も早く、九月下旬に長崎へ出発した。道ノ尾を過ぎ、長崎に入ってアッと驚いた。完全な廃墟、死の街。迷彩をしてある大学だけが、黒々と無気味にそびえ立っている。後は何も無い。製鋼所の鉄骨は無残にひん曲っている。瓦礫また瓦礫。

幸い下宿は新大工町だったから、被害はなかった。全く申訳ない。商工会議所に大学本部があるというので出頭したら、名簿には「死亡」として抹殺されていたので、慌てて生かしてもらった。何もする事はない。毎日大学の骨拾い。本部に出ていて遺族の方が来られた時は、学年を聞き、その学年の教室跡から採集されて分けられている骨箱から、骨片二、三片をとり出し、封筒に入れて差上げたりした。病院は新興善にあつたが、低学年のものには用はなかつた。

十月になって大村海軍病院に集合、コスモスが綺麗だった。一六〇名近くいた級友が、僅かに一〇―二〇名。鹿児島県人九人のうち、助かったのは山下大藏君と二人だけ。時々病院から車が出て長崎へ行き、大学の焼け跡整理。こんな或る時、今は解剖教授になられた内藤君が中心になって、衛生講堂跡でお坊さんにお経をあげて貰った。瓦礫を掘り越すと、遺骨と共に見憶えのある友の徽章が出て来た。噫!!

高商の大講堂で行われた全学合同慰霊祭には、遺族の方々が大勢出席されており、全く泣かされた。また此の時の永井助教授の髪ぼうぼうも、非常に印象的だった。

大村海軍病院時代は楽だった。給食もよかつたし、病舎の一階が宿舎で、二階が講堂。丹前姿で受講したものである。時々アルコールをかつぱらって来て、ドンチャ

ン騒ぎ。

諫早に移転してからは講義も軌道に乗った。然し食糧事情は悪かつた。昼の弁当は唐辛が二切れ、それも束の間。医専のA級B級問題が起り、昭和二十二年四月、四年生になったところで廃校。生き残り組も全国にちりぢりに散っていった。夕闇せまる衛生講堂の焼跡で、最後の別れをした時の情景は、今でもありありと目の前に浮ぶ。

X X X

【追記】毎年八月九日がめぐって参りますと、遙かに亡き友の冥福を祈り、思い出を新たにしていますが、転校したため、慰霊祭があるとか、招魂碑が出来たとか、何にも知らずに今日に至りました。「忘れな草」を拝読するに及び、これらの学友が決して忘れ去られている訳ではなく、あまつさえ、靖国神社にまで合祀されていることを知り、洵にありがたく厚く御礼申し上げます。

古屋野先生の巻頭の辞に、「みな遙かなり夢漠々」とうたわれておりますが、時は移り世は過ぎても、私達にとりましては最も多感な青春の時期に、しかも強烈な体験の連続でありましただけに、今も鮮やかに脳裏に焼きついている一駒一駒であります。今後も戦没学生の顕彰に御努力賜わらんことを、切にお願い申し上げます。

私も高校一年、中学一年の二人の男の子がおり、出来れば長崎医大に入れと、叱咤激励している今日此頃であります。
(四五、一〇、一六)

本誌第三号読者の読後感

鹿児島市上福元町四二三 四 山下大藏
当時 付属医専二年生

二十五年ぶりに亡き学友の遺稿に接し、唯々感無量、万感胸に迫り、夜を徹して読ませて頂きました。
(四五、一〇、二)

京都市南区八条通大宮西入 蛭川親正
当時 医学部一年生

「忘れな草」を拝見致しますと、過ぎし日の事ども思い出されて、涙の浮ぶことです。あの時代学生だった私達の子供が、今では大学生になっている年頃となり、子を持って知る親心、その親御達の文章を読んでいると、今の子供達の幸福は、この人達の犠牲の上に築かれていることを、痛切に感じます。

私はあの当時、所用で京都に帰っていました、長崎へ帰るために駅まで行きました。が、広島に爆弾が落ちて汽車が不通とのことで家に引返し、数日後に開通したので汽車に乗りました。佐賀を過ぎて初めて長崎が全滅だと教えられ、灰燼の長崎で二、三日過ぎ、終戦日の翌日帰宅して助かりました。犠牲となった学友には、洵にすまないような気が致します。

長崎県西彼杵郡時津町 藤 山 実

「忘れな草」を拝見させて頂き、当時を偲んでは涙で目頭の曇るのを覚えました。私だけでなく、ただ生きるためにその日の糧に明け暮れている子供達にも、当時の方々がどんな想いをして生きぬかれたかを、言辞でなく、夫々の方の切なる願いをこめられた手記によって、知らせてやりたいと思っております。

大阪府箕面市箕面七―五―一三 服 部 和 子

本日「忘れな草」を頂戴致しまして、新たに又涙した次第で御座います。立派な若人達の写真や手記を拝見致しまして、戦争の残酷さをつくづく感じました。

高知市知寄町一丁目五三―二 毛 山 寿美子

先日は「忘れな草」をお送り下さいまして、早速読まして頂き、私は涙をポロポロこぼしながら読み耽りました。やはり我が子を亡くした親は、そんなにあるだろうと心に泌みました。主人も交代に読んで、顔にこそ出しません、心は私と同じようでございます。

広島市中広町二―四―九益田方 原 剛 巳

先生も御多忙の中に早速送って頂き、誠に有難う存じます。私も長兄を亡くしましたが、この本によって私のような若輩も得る点が沢山あり、貴重な本だと思います。今後この本を見ながら、勉強して行く積りでおります。

宮崎市広島二丁目七―一六 角 野 智恵子

お送り下さいました「忘れな草」、有難く拝見致しております。皆様の切実なお氣持が、活字の一つ一つに現われていて、涙で文字も霞んでしまうことが多く、当時の学生の雄々しい魂の声にふれ、今更ながら素晴らしい若人達のありし日が偲ばれて、悲しみも一人でございます。

先生方の尊い御努力が稔って、亡くなられた方達も靖国の神となられましたとか、本心に慶ばしいことでございます。唯漠然と戦争を悲しみ、原爆を呪って過した自分が、今更のように恥じられます。そしてひたすら平和を願い、永遠にこのような悲惨なことが起りませんように、努力して行かねばならないことを痛感致します。

長崎県北松浦郡佐々町口石のぎく学園 近 藤 えい子

「忘れな草」第三号を拝見し、口絵の写真を見て驚きました。大浦舎監は私の平戸高女時代の恩師です。先生がお亡くなりになったとは少しも知らず、思わず涙を新たに致しました。そして止むに止まれぬ気持で、去る五月三十一日に、諫早市長田町の上にある原爆墓地へ、当時を偲びに参りました。

私の長男あまらはここに埋められていましたが、焼いてほんの少し分骨して参りました。又当時の長田国民学校や青年学校の跡を眺めて、感無量でございます。

諫早市長田には当時台湾の康嘉音やなかねんという若い先生が、病院を開いておられましたがそこに出入りされる若い医大生達も、五人ほど亡くなられました。今では「やすかおん」先生の病院と尋ねても、知った人はなく、原爆墓地さえ知らぬ人が多く、この坂道を薪を負うて上り、火葬した昔をふと思い出しました。

(四五、六、二)

原爆死亡職員並に学生の遺稿と遺族の手記

一、教職員遺族の手記

(一) 学長兼内科教授 角 尾 晋

遺族 東京都台東区谷中五―二―一四

角 尾 美 代 (妻)

台風が関東地方に來られても、六〇年前のボロ家ですから困りますし、また九州地方へもどうか行かないようにと、虫のいいことを念じて居ましたら、とうとう北九州へ上陸してしまいました。長崎の御被害は如何かと、お案じ申上げて居ります。

毎年の事ながら、慰靈祭のことで大変お世話様に相成り、お忙しい中に細々と、九日のグビロが丘の御様子などお知らせ下さいまして、洵にありがとうございます。また献花のお写真も拝見致しました。皆様の御手数を厚く感謝申し上げます。

この暑さがいつまで続きますことか、どうぞお体をおいとい下さいますよう、お祈り申し上げます。
(四五、八、一八)

(三) 病理学教授 梅 田 薫

遺族 東京都東久留米市学園町二―一六―一二

梅 田 花 枝 (妻)

(前略) 私事、今年のお正月に長男(原爆当時三才)に連れられ、二十五年ぶりに長崎の土地を訪れました。あの当時の、余りにも悲惨な有様を思い出すのが辛さに、二度と長崎の土地をふむまいと思っていました。が、当時三才だった長男が社会人になり、是非一緒に行こうと云ってくれましたので、寒かったのですが、正月休みに行くことになり、久々振りに長崎大学医学部を訪れました。

新しく出来た校舎や研究室は、原爆直前とすっかり面影も変わっていましたが、多分この辺りが前に病理学教室のあった所、この辺がお父さんが学部二年生に講義をして

いらして、沢山の学生さんと一緒に殉職された辺りと、長男と話し合いながら、ぐるりと一廻りしてグビロが丘に上りました。殉職者名入りの銅板はとりはずされて、拝見出来なかったのは残念でしたが、立派な慰靈碑にゆっくり二人でお詣りし、また写真にもおさめて参りました。

私も既に六十二才、もう二度と来ることは叶いませんまいと感無量、後髪を引かれる思いでございました。生憎くお休み中で、門衛(原爆当時と同じ場所のように記憶)の方に尋ねましたが、名前を刻んだ銅板は校内にしまつてあつて、毎年八月九日の命日にだけ慰靈碑の前に飾る由、諦めて長崎駅前のホテルに帰りました。

国際文化会館も拝見しましたが、あの当時そのままの焼跡の写真は、私の眼の底に残っているままで、忘れようとしても終生忘れることのないものばかりでございました。しかし観光バスが着くたびに、ぞくぞくと沢山の人が入つて来て、中には鼻歌まじりに見ている人もあり、ゆつくりと感慨に耽れることも出来ず、早々と退散いたしました。沢山の人にあの悲惨な光景を見て頂くことは、本当に必要なことですし、それによつて将来の危険を少しでも防ぐ役をするであろうとは思いますが、あまりにも観光的に扱われていることは、夫を喪い、父を亡くした私達にとつて、誠に淋しい限りでした。それでも当時三才で、大草の伊木力村に疎開して助かった長男は、初めて自分の目で見える数々の悲惨な光景に、大きなショックを受けたようで、「いつもお母さんから話には聞いていたが、こんなにひどいとは思わなかった。本当に来た甲斐があつた」と申していました。

もう絶対に戦争に招集されることのない長男を見る度に、あの戦争中に無理やりに大切な夫を、また息子を戦争にとられ、又折角医業を志しながら、志半ばにして原爆の犠牲にならなければならなかった若い人たち、まして後に残された父上や母上の、何時までもいつまでも尽きない悲しみを、誰が慰めてくれるでしょう。驚異的な経済の繁栄が続いている今の日本で、彼等はただ世間から忘れられ、ひっそりと暮すより術がないのでしょうか。

今年の夏には、永井先生の救護活動報告の記事が二十五年ぶりに偶然に発見され、

新聞紙にも、週刊誌にも詳しく報道されましたので、私も一字一句残らず拝見させて頂き、改めて当時の非道さに、怒りを新たにしました。あの永井先生の記事で、私の主人はやはり病理学講義中に、学生多数と共に即死したことが明らかにされ、何となくホッと致しました。

実は私は、主人がどこかへ逃れて家族の名を呼びながら亡くなったのではないか、或いは早く適当な手当をすれば助かったのではないか、と思ひ惑ったこともありましたが、永井先生の手記で、はっきり講義中の殉職と判明したことを、ありがたいと思っております。あの混乱の中ですから、どこでどう亡くなったかが、一番心にかかっていたことだと思います。

永井先生も御重傷の中で、立派な救護活動をされましたことを知り、本当に頭の下る思いでございます。調先生も、角尾先生やその他多くの学生を看護され、又御自身も一時は重症になられながら、今日この様に犠牲者のために日夜御尽力下さいまして、衷心感謝いたします。

私達二人は、原爆当時疎開していた大草の駅で下車し、伊木力村を訪ねましたが、二十五年前と少しも変らない山々と、大村湾の海に暫らく心を休め、当時小学三年生だった次女が通学していた伊木力小学校、また伊木力役場などを懐しく眺めて、もう二度と再び来ることもないであろう土地に、別れを告げて帰京いたしました。

現在私は長男との二人暮らしで、長女も次女も医業を職とする主人に嫁し、両家とも二人づつ孫がございます。二人の娘が二人とも、父と同じ医業にたずさわる者に縁がありません。不思議なめぐり合せと存じます。

この二十五年は、私にとって長いような、短いような、時には辛い時もあり、また張合いのある充実した時もあり、その他色々な事がありました。六十二才の今日、やっと心に平安を与えられ、日々感謝して余生を送らせて頂いて居ります。

(四五、一〇、二六)

(九) 解剖学教授 高木純五郎

兼医学専門部長

遺族 岡山県井原市井原町船石内

高木福子(妻)

(前略) この度また御多忙中にも拘らず、「忘れな草」第四号を編集されます由、何か書き送りたいとは存じますが、私は唯今軽い白内障になって居りますので、眼が疲れやすく、ふだん新聞・雑誌などあまり読んでおりません。このような訳で、この度は原稿をお送り出来ません。あしからず思召し下さいませ。

先日は、長崎の知人が旅行の途中お立寄り下され、長崎のことや当時の事など、思い出したことでございます。「忘れな草」第四号が出来ましたら、どうぞ読ませて下さいませ。

(四五、一〇、一四)

(一〇) 産婦人科教授 内藤勝利

兼付属病院院長

遺族 東京都杉並区永福二丁目四六一一五

内藤幸子(妻)

秋も深く、夜長の季節となりました。

夢で暮している間に、二十五年の月日が経ちました。当時幼なかつたわが子も、母親となり、毎日何かと多忙に過しております。内藤が健在なら、屹度良いおじいちゃん振りであろうと、ふと淋しくなります。私も年をとり、子供達からそろそろ還暦の赤い着物の話も出るようになってしまいました。

二十年間の月給生活を打切り、昨年夏から小唄の稽古所を開き、次第にお弟子も増しましたが、近頃は体も順調で張り切っております。先き頃高血圧に悩まされて閉口致しても若く、いつまでも元気で、故人の分までも長生きしたいと思っております。

現在の私の健康も、頑張りも、吃度どこかで内藤が護って居り、力ずけて居るものと信じております。ほんとに何もかも感謝でございます。あのショックで当時は一時

強度の衰弱でしたが、皆にはげまされ、子供達に助けられて回復した過去何年間が、夢のように感じられます。再びあの様な怖しい事が決して決して起らぬよう、心から念じております。

先年長崎を訪問し、完成した立派な銅板名碑を拜見して、原爆犠牲者への、何とすばらしい臚か^{はなむけ}と存じ、ありがたく感謝で一杯でございました。

今夏八月九日の慰霊祭に参列させて頂くつもりでしたが、残念ながら参られませんでした。どうぞ皆様によくお伝えの程、お願い申し上げます。(四五、一一、七)

(二五) 生理学助教 芦 塚 陽

遺族 長崎県南高来郡小浜町

雲仙有明ホテル内

芦 塚 ウ タ (母)

栗 原 貞 子 (姉)



陽は五男二女の七人兄弟のうちで、一番の末子で、私は陽と二才違いのすぐ上の姉でございます。小さい時から同輩のように、「アキちゃん」「テイちゃん」と呼びあつて、特に仲よかったです。

陽は新町小学校から、長崎中学校、福岡高等学校と順調に進みましたが、小さい時から学科に興味を持ち、数学が好きで、東大か阪大の物理に進学するために、受験勉強に一生懸命になっていましたが、残念なことには、入試間際にふとしたことから風邪をひき、それを^{こじら}せて肋膜炎になりましたので、半年ばかり大病院に入院致しました。

その間に弟はフランス語を勉強し、また「菜根譚」を読んだり、諫早の天祐寺(菩提寺、禅宗)で参禅したりして、仏教の方も学んでおりました。随筆「柿の種」なども読み、散歩したり、読書したり、思索したりして、多感な若い日を、闘病の中に過

しておりましたようです。「風たちぬ、いざ生きめやも」の「風たちぬ」の本も、弟の本棚にございました。

戦前でしたので、ラジオ位でテレビもまだなく、今のようにも氾濫してないし、交通戦争もない、公害もない、静かな穏やかな時代でした。ドーデの本を読み、プロオパンスや南フランスにも憧れ、よくシャンソンのレコードをかけて一緒に聞きました。翌年元気になりましたので、長崎医大に入学致しました。

卒業後は保健所にはいり、乞われるままに、理想派の弟は一年ほど無医村の黒崎村に赴任し、山道を馬に乗って往診していたようです。その後大学に戻り、清原先生の生理学教室で研究し、独学で学んだフランス語で博士論文を書き、助教役になって大学に勤めている時に、原爆に遭ったのです。

その頃数学の好きな弟は、パリのソルボンヌ大学に行きたい、とよく云っておりました。今生きていたら海外に行くのも易いのに、と残念でなりません。時には「多良嶽の麓に結核療養所を造り、軽い患者さんには花畑を造らせたり、蜂を飼わせたらいいね」と、彼の夢を申しておりました。

戦争も末期になった頃には、「竹槍でアメリカの科学兵器に立ち向うなんて、もう日本も負けるよ」と云って嘆いておりました。戦争中雲仙に来た時は、甘い物の好きな弟に、取っておきの砂糖で「ぜんざい」など作ってやって喜ばれたのも、遠い思い出です。弟が病気の時、アイスクリームが欲しいとか、色んな物を欲しがると、どんなに遠くても一番美味しい物を買ってやり、母と力を合せて一生懸命に看護してやりました。そのためか、弟も母と私を大切に、初月給の記念にはコンパクトを買ってくれ、今も弟の形身と思ひ大切にしております。

私が自分の家と違った環境のホテルに嫁入りした時は、蔭ながら非常に心配して、「テイちゃん、余り無理しなさんなよ。働き過ぎんでもいいよ」と云って、よく母のことづけ物を持って来てくれました。

弟の遺していった二人の子も、すくすくと育ち、弟の亡くなった時三才だった上の子は、早や慶応大学法科を出て、今オランダ大使館の文化部に勤めており、弟の死後

十一月に生れて父の顔も知らない下の子は、武蔵野音大の作曲科を卒業して、昨年からドイツのミュンヘンに音楽勉強のため留学しております。道こそ違え、弟が憧れていたフランスの近くで、自分の息子が今勉強しているので、弟も地下でさぞ喜んでいられることと思います。

戦前のよき時代に育ち、今のように公害や喧嘩な険しい時でなく、戦時中は勿論大変でしたが、好きな勉強に身を捧げつつ原爆でみまかった弟に、私は純粹なものを感じます。早く亡くなる宿命を感じてか、夜遅くまでよく勉強をしていました。時折は随筆のようなものも書いていたのに、それが坂本町の家で原爆の時焼けてしまったのは、返すがえすも残念です。

原爆の後十年ぐらいは、浦上あたりに行くのが本当に辛く、弟の事を思っては胸が一杯になりました。幼い日から青春の日までの思い出に、必ず弟の面影が浮びます。

私の活水の英文科時代の友達や、弟の医大の時のお友達と、よくお正月など集っては楽しくカルタ遊びをしたものでした。「何よ、英語ぐらいでキュウキュウして」と私を叱咤激励した弟が、今生きていたら、「何よ、それ位でクヨクヨしなさんな」と、きつと私が色々な問題で悩む時、力づけてくれることと思います。

母も今年で八十八才になりましたが、弟の死後、その二人の孫にとっても、戦後二十五年の歲月は決して平坦なものではありませんでした。時には父のない淋しさを辛さを、何度も感じたことでしょう。それにもまして、母はその淋しさを子供達に出来るだけ感じさせないように、弟の代りになって子供達をひがませないように育てるために、陰になり日向になりして一生懸命でした。今は弟孫の陽二君が、勉強を終わってドイツから無事に帰って来る日を楽しみに、暫らくは長生きして父の代りに待つてやらねばと、自分の身の養生を致しております。又三月には兄の隆君が結婚して、可愛いお嫁さんを連れて来るのを、首を長くして待つております。

調先生の御親切なお葉書を頂いてから、今度こそは何か弟の思い出を書きたいものと思っておりますが、思い出しても懐しく、恐しく、辛い事ばかりですが、母が書くには余りにも老い過ぎておりますので、母の代りに、これも故人の供養にもなろう

かとペンを執りました。何分にも多忙なものと、雑用が多くて、少しも纏ったことを書くことが出来ませんでしたことを、お許し下さいませ。(四五、一〇、三〇)

(二七) 影浦内科助教授 菊野晴二郎

遺族 広島県佐伯郡五日市町中地八九七

菊野 美代子(妻)



こちらの街角が賑って居りました。

主人は根っからの勉強好きで、朝は必ず五時に起き出し、机に向かって難かしい原書と取り組んで居りました。夜中なども寒い中を急に起き出して、研究中の犬が死んでとは、竹ノ久保からわざわざ大学へ出向いたことも、度々でございます。しかしお仕事の合間を見て、知人の少い私を散歩につれて歩いて呉れました。

私から申しておこがましい話でございますが、主人の兄弟や親戚の人達の話では、小学校や松山一中(今の松山高校)の頃から、成績がズバ抜けて良く、おとなしい上々の人だったとの事でした。それだけに学者として、両親や一族の者の期待も大きかったのでございます。そんな話を聞きますと、至らぬ私と子供二人が生き残りましたことが、身を切られるように悲しいのでございます。長男の出産ということがなく、二人が離ればなれにならなかつたら、主人も死ななくてすんだのかも知れないのです。

主人が八月八日に投函した手紙を、死後に手にしまして、一日中声をあげて泣き続けました。それには、長女の下痢止めの薬を近日中に送ることや、その他細々とした

諸注意がしたためでございます。主人は当日朝食もとらず、警報上の非常態勢に入り、解除と共に、お願いしてあった朝食と昼食を取りに、栗原医院にお寄りしたとのことでした。その時私も見覚えのある、カキ色の風呂敷包みを手にしていたとでございます。竹ノ久保の自宅の押入れの前の遺骨は、荷造りしていた主人のものと思われます。

国破れて山河あり、先日見ました長崎は、外観は違っても、昔のままの懐かしい長崎でございます。海も丘も、昔と同じでございます。

八百余名の医大の方々も、何万からの市中の方々も、きつとそれぞれ、友よ、恩師よ、教え子よと、空高く昇天されたことと思います。成人した二人の子供達は、昔のあの長崎のことをいくら話しても、よくは判らないのです。この思い出は私だけのものです。然し二人の子供が、小さい時、どんなに沢山の方々の写真の中でも、一度も見ぬ父を、「これ、うちの父ちゃま」と、指さして居りましたのには、びっくり致しました。やはり血は争われないものと、つくづく思いました。

長女は広島女学院から日本女子大学の家政学部を卒業しました年に結婚して、今では満二才の子供の母親となりました。「とうとうお母様にとっては、お父様は絶対的な神様の存在ね」と笑います。長男も修道高校から慶応大学を卒業して、社会人となりました。いつの日にか、私の種々の苦勞も解ってくれることございましょう。

私も二十三年に始めました洋裁にとりつかれ、只今では広島県公認の洋裁学院の経営者となりました。色々の苦勞もございしますが、昼夜若い人達と一緒に生活して居ります。和裁、手芸、茶、花道なども致して居ります。命のある限り主人に代つて、主人の万分の一でも社会奉仕を致し、二人の子供の幸福をよく見届けて、そのうち私もあの世に参りましたら、必ず主人の所に行つて、諸々の積る話など致したく存じております。

とりとめもない思い出話など書き綴りましたけれども、終りに臨み、亡くなられた方々の御冥福をお祈り致しますと共に、御遺族の方々の御多幸を、心からお祈り申し

上げます。

(四六、一一、一五)

(二九) 眼科助教授 土江 乾 一

遺族 神戸市長田区高取山町一〇四一一

神戸市立青葉寮

土江 雅 江(妻)



突然のおハガキにて、驚きやら懐きさで一杯でございます。原爆の日二十五回目を迎えました只今、亡夫の想い出多い長崎医科大学からお便りを頂き、心から感謝申し上げます。

降つて、長女は当時上野町三七五番地で原爆のため死亡させましたが、当時五才でありました長男は、只今では二児の父親となりました。

私も昭和三十七年より、神戸市民生局の婦人保護施設青葉寮で、寮母を勤めさせて頂いておりますが、ひたすら亡夫乾一の霊を弔い、現任所に住み込んで、毎日を楽しんでおります。

當時を思い出すと、恐ろしい悲惨な事の連続でございましたが、今ではやっとな二人までも見せて貰える私になりましたことを、亡夫もさぞ口惜しく、草葉の蔭で喜んでくれていることと思ひ、自分を慰めている次第でございます。どうぞ原爆遺族会の会員名簿にお書き添え下さいまして、今後の御連絡をよろしくお願い申し上げます。又諸先生方にも是非お目もじさせて頂きます日を、楽しみに致しております。

(四五、一〇、六)

(二〇) 解剖学助教授 中村 定 八

遺族 長崎県南高来郡南串山町丙一〇三八六

竹下るき(姉)

(前略) お問合せの中村定八儀は、私の実弟で御座いますが、定八宅は本人夫妻と子供四人、合せて六人が全員爆死致したので御座います。今後御連絡上の用件は、私宅にお知らせ下さいませ。私方も長男正七(医専二年)が爆死しまして、色々とお世話になっております。私は中村家から竹下家に移したもので御座います。(後略)

(四五、一二、四)

(二六) 彰浦内科助手 吳 福 順



遺族 台湾省台北布広定路一〇二号二樓

吳 宗 賢(弟)

(前略) 四人の男兄弟のうち兄は二番目、小生は末子で年齢は十才違い、兄は中学卒業後、長崎薬専、長崎医大とずっと日本に留学していたので、あまり一緒になる機会がありませんでしたが、まだ戦争が激しくならない前は、毎年夏休みになると帰郷していたので、兄福順のことは今でもよく覚えています。

私共の父は教育に非常に力を入れ、偉くなるには学問がなければならないと、学業の為には如何なる費用も惜しみませんでした。四人兄弟の中で最も頭がよく、且つ勉強な兄に対して、父は最も大きい期待をかけていました。

当時まだ小学生だった小生には、毎年夏休みに帰って来た立派な兄の大学生姿が、非常に印象的でした。やや疲身で学究的な柔和な顔が、今でもありありと臉に浮びます。小生は偉い兄を持って誇りに思い、兄のように一生懸命に勉強し、是非留学したいと大きな希望を抱きました。親孝行の兄は、その後戦争が激しくなって帰郷が出来なくなっても、両親の健康をうかがい、自分の近況を知らせる手紙は、絶えたことはありませんでした。その後中学に入学した小生に対しては、学業に専念するよう常に

激動してくれました。

やっと戦争が終了し、その翌年小生も努力の甲斐あって、国立台湾大学医学部に入学することが出来ました。ところが終戦後に長崎の原子爆弾のニュースが入り、兄からの通信もすっかり途絶えてしまったので、深い不安に襲われましたが、多分終戦後の一時の混乱の為だろうと、一縷の希望を抱き、次々に帰って来る長崎在住の台湾人に、兄の消息を尋ねまわりました。最後に兄の同窓の方が帰台され、宿舎に残った兄の遺品を持ち帰ってくれた時も、すぐには信ずることが出来ませんでした。父はあまりに大きい精神的打撃に、とうとう病床に臥し、間もなくみまかりました。

兄のことを思い出しても涙にくれる母を慰め、亡き父と兄の霊を弔う一番よい方法は、小生が立派な医者になって兄の志を継ぐことだ、と覚悟をきめた小生は、勉学に精出しました。一部既に戻り返してあった解剖学、病理学、法医学、耳鼻科学、薬理学等の教科書は、大変役に立ちました。勉強しながらも、兄が傍で見守ってくれている気がしました。お蔭で一九五一年に医学部を卒業、厳格な審査を通過して、大学付属病院の小児科に入局することが出来、約十年間服務して主待医になりました。その後予防医学に興味を持ち、公共衛生学科に児童衛生を担当し、台北市児童衛生問題に関する研究論文を、慶応義塾大学医学部に提出して、一九六一年に博士の学位を授与されました。

翌年聯合國世界衛生機構の奨学金を得て、Harvard School of Public Health に留学し、Master of Science in Hygiene を取り、又一九六七年にロンドン大学に留学して Diploma of Nutrition を獲得し、爾来台湾の児童衛生と營養改善に力を尽しております。又現在台北公共衛生教学示範中心の主任として、医学生の公共衛生実習にたずさわっています。

幸にも国立營養研究所の大磯所長の御好意で、一九六八年ロンドンからの帰りに一カ月間日本に滞在し、各地の營養施設を參觀させて頂いた折、機会あって家内と共に長崎大学を訪れ、グビロが丘の慰靈碑に参拝して、兄の名を死亡者名簿に見し、自分の目で兄の死亡を確認することが出来ました。そして兄の墓碑の前に佇み、父母の

ことや小生のことを報告しながら、しばし涙にくれました。こんな美しい丘の上に眠ることが出来て、兄も幸せです。兄の霊を慰めるために一生に一度は長崎を訪れようと、かねて抱いていた願望を遂げることが出来たことを、深く感謝して居ります。

虫の知らせと申しますが、丁度書齋の抽出しを整理中に、兄福順の長崎医大卒業記念アルバムや、学生時代の写真が出て来まして、家内と二人で長崎の思い出や兄の事を語り合つて居りましたところ、その翌日お手紙が参り、非常に感銘に打たれましたので、ここに兄の写真を一枚同封致しました。(後略) (一九七二、三、一〇)

(二八) 小児科助手 佐藤 昇

遺族 宇都宮市南町七一〇

佐藤 ミツ(妻)

長崎に原爆が落されてから二十五年の歳月が流れ、すべての人々から忘れられようとしています。憎しみも悲しみも忘れられないのは、遺族の人達でありましょう。廻り来る慰霊祭の度毎に、愛しい我が子、我が父、我が夫を憶い、悲しみに打ち沈むのは、肉親の身であろうと思ひます。

私は来る十月上旬に、亡夫の遺児「崇」を連れて、長崎へ参ろうと思つています。二十五年経つた今日、やつとお参りが出来るかと思つと、長崎の地が一層懐しくなりました。そのうち王斌雄さんにも葉国慶さん(調註、二人とも台湾の人、昇君の親友、本誌第三号に手記を書いておられます)にもお目にかかれるだろうと、それを案しみに頑張つております。

又「忘れな草」第四号をお作り下さいますそうで、ありがたいことで御座います。この世に生き長らえている以上、どうか遺族会名簿に住所不明という記事のないようにしたいものでございます。私はあれを見る度に、亡くなられたお子様が可哀想に思われ、誰方が故人の御冥福をお祈り下さるか、わが事のように悲しくなりません。身をもつて体験した戦争の恐ろしさ、誰を憎んだらいいのでしょうか、誰に当たらないのでしょうか。平和な私達の家庭を目茶々に破壊してしまつたあの様な戦争は、

二度とあつてはならないと、暑い暑い原爆の日を迎える毎に、私は神仏に念じ訴えております。

然し今年には広島・長崎の原爆映画が、我が国でもアメリカでも上映され、人々に多大の関心を与えたことは、私達遺族にとつて大変嬉しいことだと思ひました。どうか地球上に永遠の平和が訪れますよう、祈念してやみません。(四五、一〇、一八)

【調 附記】 昨年四月下旬、私達夫婦は千葉県市川市在住の娘宅を訪れ、序に塩原温泉から日光へまわる観光旅行を試みたが、途中の宇都宮市に佐藤昇君の奥様が元氣にお住いのことを思い出したので、お手紙を差上げて、プラットホームでもお会いしたいとお願ひしたところ、原爆当時赤ん坊だった遺児の崇君が、二十五才の立派な青年に成長して居られて、西那須野駅で親子お二人のお手厚いお出迎えを受けた。

互に無事を慶び合いながら、御令息の車で乃木神社に参詣し、翌日は塩原から鬼怒川、川路を経て日光まで、知らぬ旅先の苦勞もみずに案内して頂いた。

昨年秋季の十月上旬には、佐藤様御親子が二十五年振りに長崎に来られたので、長女の方々御案内申上げたが、グピロが丘や銅板名碑を御覧になった時のお姿は、洵に感慨深げにお見受けした。しかし当時の御住居は遂に発見出来ず、御帰宅後のお便りにも、「長崎がすっかり変わってしまったので、何だか気抜けしたような思いが致しました。」と書かれていた。(四六、二、一一)

(三三) 影浦内科助手 古川 一郎

遺族 福岡市緑ヶ丘一二六九一—四

古川 哲二(弟)

(前略) 仰せの通り、一郎は私の実兄に当ります。女一人(姉)、男二人の兄弟で、どういう訳か私とは全く性質が異い、小さい時から喧嘩ばかりしておりました。原爆当時私は海軍々医で、山形の北の神町航空隊におりました。移動と当時の郵便事情のため音信不通で、両親は二人とも亡くしたような気持でいたようです。

父は昭和二十八年に心筋梗塞で亡くなりました。もともと強気一点張りでしたが、兄の死後急に老けこんでしまったようです。復員後まもなく両親と一緒に長崎を訪れ

たことがあります、兄の消息は全く不明でした。兄の骨董には、附近で拾った石が一つ入っていると思います。(四六、三、一九)

(三四) 細菌学助手 三谷 秀夫

遺族 東京都大田区南馬込四丁目三五―二

木原 シツ子(妻)

亡夫、三谷秀夫を偲びて

二月二日は流石に北鎌倉も寒かったが、常緑樹に囲まれた此処円覚寺の庭には、既に幾本もの古梅が高貴な白い花を見せていた。人気の少ない本堂前に立っていると、透明な空気が心に泌み透ってくる。ここから右の山手へ僅かの登り路ではあるが、三谷の墓地まで息を切らせながら漸く到着する。

十三年前にやっと自分で建てた黒御影の四角い墓標には、三谷、木原と両家の姓を刻んでもらった。その時既に私の旧姓木原を名乗っていた息子ではあったが、彼の同意を得て三谷の字を入れたのであった。

墓前に坐って凝つと見ていると、父も母も、そして夫も長女も、終戦後二年の間にほんとうに惜しく現世から消えて行ったこと等、種々な思いが大きく私の胸をゆさぶる。その当時の私は、泣くことすら許されない状態の多忙な生活であったが、二十数年後の今、此処では只静かな涙が遠慮もなく溢れて仕方がない。

私の家族はその頃十四人になっていた。幸い私が医者であったため、何とか食べてゆけたのであったが、吾が子の病床にすら落ち付いて座る暇を持たず、只機械のように働いていた。

五カ月もの長い冬には、腰まで入りこむ深い雪路を歩かねばならず、三キロもある重い靴を下げて、一步一步それこそ踏みしめながら、路を確かめつつ行くのである。手作りのズボン様のものを三枚も重ねてはき、マントで手はかくれていても、次々の患者でズボンを脱いで乾かさねばならない。

農村は朝が早く、そして夜は遅かった。夜の十一時も過ぎて往診を終え、はじめて

娘の枕元に坐ることが出来るような日々が多かった。このような惨めな事は、今もお、思い出すまいと努力に努力を重ねて過して来た。往診の帰りの日暮れ時、通り来る人影の見えない折には、雪の中に坐って泣いた――。

「お父様、お母様、そして御免なさい貴方。真理子を亡くして」と、心でつぶやきながら、伴をして来た人達と餅菓子を供えたり、美しいお花を飾ったりして、香煙の消えぬ間に私達もお相伴をする。

この墓地にある三谷の品は、最初三谷の下宿していた家の御主人が、大学内のどこにも先生らしい姿が見当らないからと云って、灰を送って下さった。二回目は大学からの死亡確證書を、三回目には戦地から帰られた先生が、これは確かに三谷先生の骨格だからと云って、白骨の一部を送って下さった。本当に皆様の御親切である。この何れが何でもよい。三谷は今も尚この私共の周囲に居ることを信じている。

長崎が最後の威大な爆撃をうけたと報せられた朝、私は既に三谷の死を知っていた。それは前夜の夢であった。「や」と来た。疲れた。でも会えてよかった。」と云った後、私が部屋へ招じようとした時、既に三谷の姿は消えていたのである。手に何も持たず、私が富山へ疎開する前に袴を作り直した軍服風の洋服が、いかにもくたびれていたことが目に残っている。そしてその朝、長崎が新型爆弾で爆撃されたことを新聞で見たのである。

富山での生活は遂に心臓衰弱を来し、昭和二十七年に、当時小学校一年生であった息子と二人で上京し、姉の家に落ち付いて約十カ月間静養することが出来た。やっと二人だけの生活となって、気が安まって来たのか、心臓は順調に経過して、その後ささやかな開業を始め、今日に至ったのであった。

昨年息子が医学部を卒業すると同時に、私の体はとみに衰えを見せて来た。弱身であった私の今までの過労が、一時に爆発して来たようである。息子の勤めている病院の特別室のあくのを、待機している現在である。息子の心配するような顔を見ると、一日も早く治るために――。

(四六、三、一〇)

二、医学部学生遺族の手記

(三八) 医学部仮卒業生 岩崎 誠彦

遺族 長崎市十人町五六

浜崎 チク(叔母)

今日は誠彦の靖国神社合祀のことをお知らせ頂きまして、本当に嬉しく存じます。地下で両親も誠彦も、定めて喜んでいてると思います。ありがとうございました。次にお尋ねの事ですが、私は陸軍か海軍か何も聞いておりませぬ。ただ大病院の小児科だと聞いただけで御座います。

(四五、一〇、一一)

【調 附記】 「お尋ねの事」というのは、軍の依託生であったかどうかの問合せの事で、「小児科」というのは、仮卒業生として、小児科に配属勤務していたことを意味する。

(四〇) 医学部仮卒業生 柴田 清

遺族 大分県佐伯市船頭町二六三

柴田 好右工門(兄)

(前略) 何分二十五年以上前の事で、詳細なことは不明の点多々ありますが、清は佐伯の鶴城中学から鹿兒島の七高に進み、東京農大を経て長崎医大を仮卒業しました。

二十年三月末頃、一度郷里に帰って来ました。が、当時私の家では、二里ばかり離れた山間部の村に、妻が母と子供に付添って疎開して居りましたので、本人も母を訪ねて四、五日其処に滞在しました。その間母の世話をし、時には母

を背負って附近の野路を散歩したりして、その喜ぶ顔や健康状態に安心して、長崎へ

出発しました。これが最後の別れとなりました。

清は医大在学中に結婚し、嫁の津代子は原爆の当時、長崎の幼稚園に保母として勤めて居りましたので、一度に二人とも原爆の犠牲となり、私ども一家は悲痛落胆の余り、何もする気になりませんでした。

清は長崎医大卒業後、軍属として佐賀県中原町の軍病院に勤務する積りだったらしく、色々な荷物を其処の友人宅に預けていたので、私は長崎に清を探しに行った帰途、中原に立寄って荷物の返送を依頼しました。

終戦後の混乱した時代から、早くも二十五年経ってしまいました。当時の悲惨な情景が眼に浮びます。焼け爛れた多数の死骸、今の浦上電車通りを数十台のリヤカーで運ばれて行く負傷者の呻き声、地球出現以来何億万年、世界初めての残酷な原爆の犠牲になったことは、何と云っても痛恨に耐えられません。

清夫婦の写真を同封致しました。よろしくお願い致します。(四六、二、二六)

(四三) 医学部仮卒業生 村上 吉作

遺族 松山市堀之内国立松山病院五階五十二号室

村上 慈光(妻)

(前略) 昨日使いの人が、家から「忘れな草」第三号を持って来てくれました。開いて見ている中に、又涙があふれ出て困りました。

私は唯今原爆症治療のため入院しております。この度は暫らくベッドに居なければならぬようでございますが、気分がよい時にゆくり拝読させて頂きます。(後略)

(四五、四、二九)

(四七) 医学部四年生 青木 武

遺族 鹿兒島県始良郡始良町平松 古賀方

青木 松代(母)

(前略) 私もお蔭様で、お天気の時気分まかせに、朝夕庭の草など取って楽しんで

で居ります。先般お送り頂いた「忘れな草」第三号は、毎日涙を流しながら拝見させて頂き、同僚の方々の痛ましい記事を読んでは、自らを慰めております。

田吉チエ様の記事を読んでもおりましたら、援護局長武藤塔一郎氏とありましたのでもしや武の友達の武藤さんではないかと考え、お手紙を差上げてみようかと思つて居る中に、武藤様からお便りを頂きました。

調先生から聞いて私が鹿児島に居ることを知り、お便りしようと幾度もペンをとつたが、却つて思いを新たにして悲しませはせぬかと、遠慮されていたそうでございます。しかし今度の「忘れな草」を見て思い切つて書く、と認めてございました。

武とは小学校も中学校も一緒で、また住居も近所でしたので、御家族の方ともお親しくして居りました。武の葬式を佐賀で致しました時は、丁度佐賀県庁に御在動中でしたのでお出で下さいましたが、その後はさっぱり音信不通でしたので、この度は実に嬉しうございました。去る四月二十二日の靖国神社百年記念祭の時も、武藤様が御参拝下され、武や弟の勝の冥福を私に代つてお祈り下さいましたそうで、お友達とは実にありがたいものと、心の中でしみじみお祈り申上げました。(四五、五、二三)

【調 附記】 厚生省の武藤援護局長は長崎市の御出身で、御父君は前長崎経済専門学校(現長崎大学経済学部)の教授だったそうである。従つて医大には中学時代の友人も多く、青木武君の外に谷口誠君(死亡)、鈴木四郎君(死亡)、加藤良明君(死亡)、五島和夫君(生存)、高野九州男君(生存)等がある。

(五二) 医学部四年生 上 原 利 之

遺族 鹿児島市西田町七一

上原 尚二(父)
上原 恵(妹)

(前略) 先日から度々御丁寧なお手紙を頂き、ありがとうございます。思い出だけに生きております父母にとって、「忘れな草」を戴きますことは、亡き兄に再会す

ような喜びとみえまして、幾度も本箱からとり出しては眺めております。一人しかいなかった男の子でありましただけに、また楽しみにしておりました親孝行な息子でありましただけに、兄はいつまでも父母の心の中に生き続け、物言わぬ子に対して語りかけているだろうと思ひます。拙い文ではございますが、父母に代り、私の心に残る兄の死を書き綴りました。

X X X

兄逝きて二十五年、死んだ人はいつまでも年をとれません。目を閉じますと、鮮かに若いままの兄の姿が臉に浮びます。

家に伝わる日本刀を撫でながら、卒業したらこれを持って入隊するのだ、と微笑んでいた男らしい姿、毎朝一緒に通学した七高時代、兄と一緒に見た映画など、昨日のように思い出されます。

命の短い人はすべての点で勝れています。一生の間に美しく咲き、それを知る限られた人々に惜まれながら、散つて行くためかも知れません。

禅を好んだ兄、文学を愛し、書物に埋れていた兄、如何なる環境にあつても本を讀むことを忘れるな、と論してくれた兄は、父母に対しては荒い言葉一つ云わない無類の親孝行者であり、私にとっては、優しく導いてくれた最上の人でした。

顧みますと昭和二十年八月九日、当時敗戦の色濃き頃であり、田舎へ田舎へと誰もが疎開していった鹿児島市では、住む人も少なく、新聞さえありませんでした。ですから私達が、「長崎に大きな爆弾が落ちて、多くの人が死んだそうだ」と伝え聞いたのは、終戦の詔を聞き、アメリカ軍の上陸を怖れて、山奥へ逃げる途中でありました。しかし原子爆弾の惨めさを知らない私共にとって、それが直接兄の死に結びついたとは、夢にも考えませんでした。

一週間たつても帰らない兄に不安を覚え、復員列車で窓から降りする混乱の中を、父は兄の衣服を整え、薬品を用意して、一人長崎へ向いました。鉄道も度々の空襲で寸断され、不通の箇所は歩き、列車を乗りついで、やっと二十日過ぎに長崎に辿りついたようです。しかし尋ねる兄の姿はなく、焼野原を駆けまわった父は、諦め切

れずに、大村、佐世保など、陸軍や海軍の病院まで尋ね歩きましたが、消息は不明のままでした。

兄は二十年四月から、三菱の工具寮に衛生担当員として移り任んでおりました、寮は爆心地の城山にありましたので、兄の遺品は唯の一つさえ残っていませんでした。みとられる肉親もなく、戦地ならばいざ知らず、目と鼻の先の同じ九州の地にながら、一人で死んでいった兄は、どのように淋しく悲しかったことでしょうか。

丁度父が帰ります夜明けのことです。夢の中で学生服に身を包んだ兄が、私の枕辺に立って、「恵、今帰ったよ」と声をかけました。ハッとして目が覚めますと、夏の夜は明けかけておりました。死んだ兄は迎えに行つた父より、一足先に魂だけが帰つて来てくれたのでしょうか。間もなく父は紙袋にはいった、大学から分けて頂いたという遺骨を抱いて、一人とぼとぼと帰つて参りましたが、玄關にはいるなり、出迎えた母と私に、「利之は駄目だったよ」と一言、気丈な父の目から涙が一瞬頬をぬらすのを見ました。「手や足がなくてもいい、生きてさえいてくれたら」と、ただ生きていてくれることを念じていた母も私も、悲しみのどん底に落ちたのは申すまでもありません。

人一倍背の高かった兄が、小さな袋の中の軽い骨になるなんて、想像もつかないことでした。高天原の神様になるなんて余りにもむごい、と幾度思つたことでしょうか。埋めたくない、一緒に暮したい、という私達の望みで、一カ月近く家の神棚にあつたお骨を、親戚の人々に諭されてお墓に埋める日、慣習に従つて父母は家に残り、私一人だけが兄の遺骨を抱いていった墓地で、骨箱に人々の手で砂がかげられた時、穴の中に飛込んでお骨を持ち帰りたい衝動にかられ、土をかけて下さる方々が無情に思われて、とめどなく涙が流れました。悲しかった私の思い出の一駒です。

父母にとって耐え難かつた悲しみは、兄の名前が死亡届によつて戸籍から抹消された日ださうです。愛する我が子が、完全にすべてのものから抹殺され、自分達の手で死体をだきしめることもなく、完全に死を悟らされた父母の気持を考えると、哀れでなりません。

兄の死を諦めきれなかつた父は、九月に入つて再び長崎の町を尋ね廻りましたが、

兄の消息は判りませんでした。ただ目にしみるような真赤な彼岸花が、田圃の堤に咲いていたと話してくれました。死後届いた兄の手紙で、当時産産婦人科で勉強中だつたことを知りましたが、病室は屋根が落ちたさうですから、その下敷になつたのかも知れません。

敗戦と兄の死を境にして、私の家の幸せはすっかり影をひそめました。そして二十五年、やっと平和になつた世の中で、世間の人はこのような尊い犠牲の上に得た平和であることを忘れ、楽しみを追究ことに忙しいようです。戦争を知らない若い人に、過ぎ去つた日のことを話しても通じないかも知れません。しかし日本の勝利を信じ、食べるものさえ満足になかつた不自由な中にあつても、なお文学を愛し、医者としての研鑽をつみつ、志半ばにして死んでいった兄の胸中を考えます時、何とも云われない悲しみに襲われます。

「俺が死んだら三途の川でよ、鬼を集めてすもうとるよ」と、笑いながら歌つていた元気な兄、あの原子爆弾さえなかつたら、今頃は立派な医師として、世の中のために働いていることでしょうか。すべては運命と諦めるには、あまりにも悲しい我が家の出来事でした。

苦勞に明け暮れた二十五年、父は数え年八十才、母も六十九才になりました。靖國神社に祀られることを知つた時、老いの目に光る涙を見て、兄の死が少しでも報いられたことを嬉しく思いました。原爆につながる私共の悲しい思い出は、私達の生が終りを告げる日まで、消えないことと存じます。

(四五、一〇、二七)

(五二) 医学部四年生 梅原正幹

遺族 兵庫県加古川市別府町別府四四一

梅原 こと(母)

【第一信】 (昭和四十五年八月二十二日付)

又々台風が御地に甚大な被害を残して去りました。人生もこの様なもの、安住の永遠の住家に辿りつきますまでに、幾多の憂き目に遭わなければなりません。私共は丁

度台風を真正面に受けたようなものでしょう。

八月十日付で御地の田吉チエ様から、私の発言に感銘した、向後共に手をとり、力強く頑張りましたよとの、御丁寧なおハガキを頂きました。

兵庫県遺族会の「被爆二十五年の歩み」の発行に当り、私にも何か書くようにと申し越され、私も一度は、「これまで各所に陳情したが、暖簾に腕押し、馬鹿くさいので嫌だ」と申しましたが、是非にと云われるので少し書きました。その本をお手許まで送りますから、田吉様にもお見せ下さいませようお願ひ申し上げます。

長崎では浅沼梓様（調註、正幹君の同級生、生存）に大変お世話になりました。懐しさの余り、正幹のような気がして、お手を握ったり、背中によりそったり致しました。その時詠んだ腰折れです。

- 手を握りその背なにより母泣きぬ 亡き兄に代れとしばし楽しむ
- はるばると迎えの母の手をとりて 帰り来にけむなつかしの家に
- 健やかに栄ゆる友の姿見て よろこびにけむ羨みにけむ

国際文化会館の痛ましき惨死者の絵を、為政者は見ないのでしょうか。生き地獄ふた目と見られぬこんな死に様にありましようか。また観光バスで永井邸へ行った時、バスガイドが「この兄を残して」の一節を朗読し、「やがてかやのが父のこの布団を押し入れより出し、お父さんの香いと懐しがることであろう」との悲痛な、死亡後の愛児への労わりの文句、田山花袋の「布団」と裏腹で、同じ布団の香の明暗を思つて泣きました。愛児いまいずこに健やかに幸多く居ますかと、兄を失つて泣く親、親を失つて泣く兄、何と戦争ほど残酷なものがありましようか。

私は長崎より帰り、お盆にて仏祭りに多忙を極め、今年は姿こそ見えね、母の手を曳いて帰り来たかと、感深く祭つてやりました。

【第二信】（昭和四十五年十月十二日付）

（前略）御多忙の中から「忘れな草」第四集を出版下さいます由、万謝致し居ります。私も帰宅後次々の台風襲来や、暑いのとて困りましたが、この節はほっと一息入られて元氣です。

長崎の様々の思い出は誠に懐しく、正幹が如何なる希望を抱いてこの学校に通い、如何なる楽しみを求めて街に出たかなど、今でも種々思い廻らしています。（中略）

正幹が軍の依託生であつたことは、浅沼様もよく御承知で、大阪で開業中の伊藤様（？）も、梅原と共に依託生であつたと話されました。次の手紙は当時私がリウマチにかかり、全身不自由で手足も変形し、痩せていつ他界致すかも知れぬと思い、せめて後継者を定め、家の面倒を見てくれる人を決めておきたい、と考へて出した手紙の返事です。

『拜復 六月二十二日付のお便り本日拜見、新聞では九州が毎日のように激しい空襲を受けているように書かれています、当地は至極閑散ですから御安心下さい。』

選りに選つて、最も親しくしていた青森の男は三月末に、今日また水戸の男が入管のため出発し、大いに淋しさを感じます。昨日はその男の別宴のため、魚市場へ交渉に行つて二尺ばかりのブリを分けて貰い、病院で工面したアルコールや配給酒で、盛大な別離の宴を張りました。

小測では現在二食ですが、小生は時々寮へ行くので三食です。下宿では七分搦ぎ、寮は五分搦ぎに大豆入りです。

さて、御申越の小生の結婚の件ですが、どうせ当分は家においておくのですから、結婚してもよろしい。但し九月に仮卒業し、十月に軍医学校へ行く際にも、連れて行くことは不可能でしょう。

十月から見習士官として、四カ月ぐらい山形の軍医学校で練えられ、それから各地の隊付になるわけです。年々制度が変わりますから、小生の時も少し変わるかも知れませんが、今度軍医学校を卒業した小生より二年上の連中は、大体原籍の軍管区に配分された由です。小生が軍医学校を出るのは、早くも明年一月か二月ですから、その時は更にどんな奇妙な状態を呈しているかわかりません。以上の事を御承知の上でお取計下さい。

卒業試験は八月中旬に終了の予定で、九月に仮卒業をし、来年三月には本卒業となります。五月、六月は勿論、多分七月も帰省は不能です。七月初めに一週間ぐら

い帰る余裕がありますが、往復に日を喰って大変です。六月の試験日割は、精神科（六月二日迄）、耳鼻科（四―十六日）、眼科（十八―三十日）、内科（七月二日―四週間）。耳鼻科は割合暇ですが、眼科は試験がむつかしく、後半では一寸手が離せません。尤も日曜なら勿論何時でもよろしい。電報でも下さる時の宛名は、矢張り次の通りです。長崎市山里町二三六小濑セイ方 正幹（二〇、六、二二）

【第三信】（昭和四十五年十一月二十三日付）

（前略）私も冬になりましたせいか、リウマチの持病が年と共にひどくなり、殊に左の膝関節が痛みますので、歩行も難儀ですが、立ったり坐ったりに大変痛み、困っています。それもその筈、来年は数え年八十才ですもの、先生が色々御尽力下さっています。実を結ぶ頃には、フランスのドゴール首相のように急死して、折角の恩恵にも浴することが出来ないのではないかと、というような気がします。

種痘禍で死んだ赤ん坊にさえ、即座に三百五十万円下付され、又水泳中に死亡した小学生にも一千万円与えられるほど、成長した日本経済ですもの、既に立派な教育を受け、将来の国家の重要人物でもあり、又各家庭の生活収入の中心人物であった医大生達が、祖国防衛のために精励中の原爆の犠牲となりながら、勲良学徒にも及ばぬ補償でよいものでしょうか？

私も今は誰一人面倒見てくれる者なく、物価暴騰にて生活は苦しく、次男のために建てた家を売って食っていますが、月々減る一方で心細い次第です。（後略）

（五三） 医学部四年生 大津昇久

遺族 北海道石狩郡石狩町樽川九八―八九

新札幌団地七一五

大津昇雲（父）

大津ヒサ（母）

【第一信】（昭和四十五年八月九日付）

暑中御見舞申上げます。今年も亦思い出の八月九日が巡って参りました。胸の痛み



主人ももう八十五才、私も七十五才、独立した生活も出来かね、次男の希望もありまして、こちらへ参ることになりました。

次男は只今札幌テレビに勤務中で御座いますが、自宅は広漠たる石狩平野の真中、色とりどりの文化住宅がポツリポツリと散在して、北海道ならではの感が御座います。こちらの夏は誠に快適で御座いますから、是非一度御来遊をお待ち申上げます。

【第二信】（昭和四十五年九月十四日付）

秋とは申せ九州はまだまだ暑いことと存じますが、当北海道はもう秋も深く、朝夕は大分冷え込みます。

この度は「忘れと草」第三号をお送り下され、誠にありがとうございました。月日の流れは、全く光陰矢の如しとの言葉の通り、もうあれから二十五年過ぎましたが、当時の思い出は忘れようとしても忘れることは出来ません。思い出す度に胸がうずきます。この度第四号の御出版に際し、私共へも何か物せよとのことで御座いますが、主人ももう八十五才にて頭の方も大分ぼけて参り、私も高血圧や老人性白内障のため視力も衰え、字を書きますことも不自由なくらいで、昇久の思い出は限りなく御座いますが、それを纏めてしたためだけの気が御座いませぬ。誠に申し訳なく存じます。何卒悪しからずお許しの程お願い申上げます。ただ昇久の在学中の写真が御座いますので、同封致しました。何分よろしく御取計のほどお願い申上げます。

お蔭様にて次男がこの度、私共のために集中暖房の家を求めてくれました。家の構造が九州あたりとは全く異なりますから、冬は却って過し易いかと思われれます。ただ雪の多いのが少々気にかかります。

終りに臨み、原爆犠牲者の御冥福を、遙か北海道の空からお祈り申し上げます。

(五四) 医学部四年生 奥 和夫

遺族 東京都杉並区南荻窪一―一三―八

奥 和子(母)

八月九日、忘れることの出来ない医科大学の校内におきまして、心ゆくばかりの慰霊祭をして頂き、今年は孫のお伴で思いきって参詣させて頂きましたが、本当にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。(後略)

奥 竜之助(弟)

先日「忘れな草」が御縁で、長崎の浅沼先生御上京の節お立寄り下さいまして、亡兄の学生時代のお話、調先生の長年の御苦勞など、色々伺わせて頂きました。

私共の家は只今建築中のため、母は神戸の娘の嫁ぎ先へ身を寄せておりますが、若し孫が連れて行ってくれば、長崎まで足をのばしたいと申して出かけました。七十才の老人のこと故、どうなるかわかりませんが、その節はどうぞ宜敷くお願い申し上げます。(四五、七、二七)

(五六) 医学部四年生 清 崎 裕 之

遺族 熊本市池田町稗田二〇二

清 崎 万代(母)

(前略) 裕之は海軍の依託生で、本人も大変喜んでおりましたが、ほんの一寸でお役に立てず、返す返すも残念でした。

宅では主人が海軍々医でしたし、長男は陸軍、次男は機関学校出身で、裕之は末子でした。兄達は二人とも出征しましたが、終戦後揃って無事復員しましたのに、裕之

だけが内地に居ながら、悲慘にも原爆でたおれ、あの当時は、母として本当に断腸の思いが致しました。然し世の中にはまだまだ私より苦しんで居られる方のあることを思い浮べて、その日その日を過しました。

早や二十五年も過ぎて、愈々老境に入り、朝夕祈りの内に長男の家庭に身を寄せ、安らかに過させてもらって居ります。

○ 原爆の悲憤ここに二十五年 今靖国の神と仰がる

目が悪くて中々字が書けませんから、どうか御判読下さい。(四五、一〇、一五)

【調 附記】 昨年五月二十日付の私へのお手紙にも、次の様に書かれていました。

「第三号の忘れな草、学友の懐かしいお写真、又御令息お二人様の御写し絵、御両親様は如何ばかりかと御胸中お察し致します。一人できえ、幾年たっても別れた当時のことが、眼前にちらつきます。ああ、あの恐しい原爆さえなかつたらと、遂々グチが老人になって一しお思い出され、只々冥福を祈るのみで御座います。

私も八十三才になりました。亡裕之の分まで長生して冥福を祈ります。」

(五七) 医学部四年生 久 保 哲 雄

遺族 大阪府吹田市千里山西三丁目二八―二一

久 保 紀代(妻)

橋 本 定 憲(岳父)

久保哲雄の思い出

いちどきに眼の前の天地を暗黒の世界につき落されたようなニュース、それは昭和二十年八月九日、長崎の原爆によって長女紀代の夫久保哲雄が、長崎医大で爆死したという知らせであった。

薬剤師として、別に不足を感じずに暮らしていた哲雄が、フト志を立てて医師になりたいという心情になった、その思いは理解できないことはない。篤信なキリスト教徒であり、既に一家の主人となり、一人の愛児を得ていた彼が、更に前途に光明を求め

深い志望を懐いて長崎医大に入學したことは、私は心から感動した。

自分の現職をすてて向上進歩のためとの一心に、あらゆる困難を排して医学に専念した彼、苦勞の甲斐あって、目前に嬉しい卒業の接近していた時、あの思いがけない長崎の原爆投下によって、一切のよろこびと希望がパッサリと灰燼に帰し、そこには悲しい「無」があるのみとなった。

彼の母も、彼の妻であるわが娘も、泣いて泣いて泣ききれない現実と直面したあの日のことが、眼の前に浮んでくる。それは、はや四分の一世紀も前のことになっていく。あの日が、まだ昨日のことであつたようにも感ぜられるのである。

幾百千と数知れぬ同じ悲しみに突き落された人達のこと、深く心におさめねばならない——こんな比類のない運命にも、そこに天の定めはあつたのであろうか。人生の長い旅路の上には、ただ神のみが知る道程があると思ふ外ないが、そこにはまた、神のみが人間に与え得る代償の存在をも、深く信じたいのである。

彼の長男も今は大学を卒業して、やがて一家を創設しようとすることになり、在天の霊も、さぞかしよろこんでいることであらう。(四五、一〇、一八)

(五九) 医学部四年生 蘇 百 齡

遺族 台湾省台北市吉林区中世路二八〇号

蘇 愛 恵(義妹)

お手紙只今拝見致しました。実は主人(蘇鶴齡—蘇百齡君の御令弟)は去年の九月に胃癌で他界しましたので、先生の御希望にお応え出来ませんことを、心から深くお詫び申し上げます。若し主人が居りましたら、きつと喜んで先生のお願ひにお添い出来ますものを、ほんとに残念でなりません。この様な次第でございますから、何卒御許下さいませ。かしこ (四六、二、一九)

【調、附記】 葉国慶君の御尽力で、蘇百齡君の御遺族蘇鶴齡氏の御住所が判明したので、思い出の手記をお願いしたところ、夫人から以上のような御返事が来た。ただお若いのにまことに痛ましいことである。蘇百齡君御兄弟の御冥福を祈つてやま

ない。

(六一) 医学部四年生 戴 懷 徳

遺族 台湾省嘉義市西榮街二六六号

戴 忠 徳(弟)



「長崎」、私達一家が永遠に忘れることの出来ない所であります。家族一同の愛と希望を一身に担っていた兄が、原爆のためこの地で昇天されたからであります。

二十五年前、台湾の新聞で、長崎が最新式爆弾の投下により、大きな被害を蒙つたとの報道を見た時、私達家族一同の心は、暗雲に覆われたように暗くなり、ただ一心にその無事を神様に祈つたのであります。ところが、終戦と同時に、台湾と日本との間の通信が一切断たれ、国も異つて参りました。それで何事も知ることが出来ず、半年を過しました。

或る日父が親戚の家から、私の従兄康嘉音さん(長崎医大卒、当時諫早市長田で開業中)が日本から引揚げて帰つて来たとの消息と、兄が原爆で既に昇天したということとを聞いて参りました。私達一家は深い悲しみに落されました。それから約二カ月の後、兄は白い遺骨となって従兄の家から届けられましたが、この現実を前にした私達は、本当に失望と苦悩の日々を過したのであります。

然しこの間に主イエス様は、私達に大きな慰さめを与えて下さいました。イエス様は云われました。「私のしていることは今あなたには判らないが、後で判るようになるだろう」(ヨハネ十三章七節)。又「神は神を愛するものたち、すなわち、ご計画に従つて召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さい」(ローマ八章二十八節)。これらの言葉によって、一同勇気を取り戻し、互に励み合い、世と戦いながら今日まで過して参りました。

それ以後、私は一度でもいいから日本の長崎を訪れ、在りし日の兄の面影を偲びたいと、日々希望をかけて参ったのですが、昨年九月、日本アジヤ福音宣教会の招聘で漸くこの夢が実現したのであります。九月九日、台湾の松山空港を立ち、韓国に三日間、それから憧れの日本の地を踏み、教会で伝導奉仕の仕事を終えて、十月十六日の早朝六時頃、長崎駅に到着しましたが、長崎の地を踏んだ時、感激と涙で一杯でした。色々と在りし日の兄の面影が目の前に浮び、「忠徳、よく来てくれたな、待つて居たよ」と、歓迎して下さったように聞えました。

早速、兄が昔よくお世話になった高原さんの家に電話をかけ、案内されて長崎医大附属病院を参観、それから遺族会長の調教授の家を訪れ、暫らく互に語り、「忘れな草」第三号をプレゼントして頂き、教授のお世話で長崎医大の原爆記念講堂を参観させてもらい、銅板の名碑に、兄「戴懐徳」の名前が明らかに永久に刻まれているのを拝見して、心から慰められました。

それから長崎市の名所旧跡を見物し、最後に原爆資料館、平和公園、原爆中心地、片足鳥居など見ましたが、本当に戦争ほど大きな罪悪はないとしみじみ感じ、心から真の平和が一日も早く来るように、祈らざるを得ませんでした。

兄懐徳についての思い出を簡単に申し上げますと、兄は我が家の兄弟姉妹十一名の最長男として生まれ、幼い時から聡明でよく勉強が出来たので、十三才の時に州立台南第二中学校（当時台湾南部で一番の秀才学校）に入學し、卒業後に長崎薬専、次いで長崎医大に進み、卒業寸前に原爆のためあえない最後を遂げ、一生を二十六年で終りました。

兄が最後に台湾に帰って来たのは、私が小学校六年の夏休みの時でした。一カ月余り滞在して、父の仕事を手伝ったり、私達の学業を指導したり、親孝行で親切な方でした。同年輩の友人からも大変尊敬され、教会の会友からも、前途有望な青年と好評を得ていました。然し神の摂理は知り難いもので、八月九日、原爆が長崎の上空で炸裂し、兄はガラス破片で少し傷を負い、肥前長田で開業の従兄康嘉音さん宅を訪れ、康さんの顔を見て、「よかった。無事に災難から逃れ、又顔を合わすことが出来たと

ても嬉しい」と云いながら、大変喜んだそうです。所が四日余り経って発熱し、ひどい下痢が始まりましたが、兄はそれが原爆の為だとは知らず、自分で診断して薬や注射を註文したとのことです。従兄はもう駄目だと思い、一切を兄の希望通りにしてやったが、終戦の知らせを聞いた五日後、八月二十日に、短い二十六才の一生を閉じて昇天しました。

兄は今、天の神様の前で私達を待っているでしょう。私は将来再び天上で再会出来る日のあることを信じながら、努力を続けております。（一九七一、三、一六）

戴懐徳兄が遺した唯一の手紙

お父様、お母様、皆様お変わりありませんか。私は毎日勉学に励んでいますから、御安心下さい。山田様方を出てもう二カ月になりますが、別に感情を害した訳ではありませんから、現在でも時々遊びに行っています。

四月二十七日に外科の試験があつたので勉強で忙しく、一週間以上も手紙を出しませんですみませんでした。今度は下宿の件で又忙しくなりました。

二十四日に久し振りに高原先生のお宅に遊びに行きましたら、先生は、「康さんから中学生を一人頼まれたが、一人では世話にも困るから、出来たら中学生と一緒に来てくれませんか」と云われましたので、早速康嘉音兄と相談しましたら、「食料の問題や世話の点では、高原先生の方が良いから行きなさい」との事でした。全く神様の御導きと感謝しています。昨日こちらへ引越して来ましたが、これからは下宿のように食事の心配もいらぬし、又中学生の勉強を見てやれば、幾らか宿代を得ることも出来ます。

五年前に天送兄が下さった国防色の洋服、もし出来たら送って下さい。又靴（十文半又は十文七分）、地下足袋、或いは下駄がありましたら送って頂戴、今履く靴も下駄もないので困っています。運動靴がありましたら、それでも結構です。

もし砂糖がありましたら少し送って下さい。長崎では砂糖があれば何でも買うことが出来ます。但し送る時の品名は別名を使って下さい。然しなければいいですよ。

忠徳は元気に勉強しているでしょうね。豊華は来年必ず中学校を受けさせて下さ

い。私の方は何処かの依託生になればよいので、私の事は心配しないで下さい。

改姓名の件ですが、私は「田井光一」でよいでしょうね。神の栄光のために一心に努力する意味もあるし、簡単によいでしょう。私達は六月中旬頃から患者をみることにになり、卒業は後一年半、来年卒業ということになります。

私は毎日神の御旨に合うように努めていますから、安心して下さい。私の信仰は別に動揺していません。日曜日も学校があるので、教会に行く時間がありませんが、クリスチャンの家庭に住んで勉強していますから、御安心下さい。

神よ、我が家を祝福し給え！ アーメン

(六五) 医学部四年生 中尾 守男

遺族 山口県大津郡目置村古市

中尾 トク子(母)

(前略) 又今年も慰霊祭にお参り出来なくて残念でしたが、八月九日にはお寺様に来て頂き、お経もあげて貰い、又お墓参りもして、在りし日のことども偲んだのでございます。来年は是非お詣りしたいと念じています。

時々新聞で西森一正先生の記事を拜見致しますが、亡くなった守男と同じグループで、大麥仲よしだったとか、いつも卒業したら家に連れて来るよう申しております。私も二十年六月八日に長崎へ行った時、お会いしたように思います。

(四五、八、二九)

(六七) 医学部四年生 新名 清隆

遺族 鹿児島市大黒町三十一八

若松 真須子(妻)

考えますと、もう二十五年になりました。子供が本年鹿児島大学を卒業して、今多良木の病院に研修に行っております。生きておりましたら、親子でどんなにか心強かったか、悔まれてなりません。



昭和二十年八月九日は十時頃、黒の学生服にゲートルを巻き、肩から帯心で作った救急用カバンを下げ、防空ズキンを首からぶら下げ、白い扇子を片手に持ち、間借りしていた家の玄関で、「空襲が烈しくなるから、先に鹿児島に帰るよう準備下さい」と、私の身を案じて学校に出て行きました。

私はその後、近所の方と配給当番で、松魚節を受取るために隣組の帳面を預り、軒下の縁台でそれをめくっております。「空襲警報解除なのに飛行機が飛んでいるが味方のかな」と思いながら見上げましたら、青空に二機飛んでいて、その後ポツポツと白い高射砲の弾雲が二つ三つ浮んでいたので、味方機にしては変だと思いがら、手許の帳面に目を落した瞬間、雷と太陽の塊が千も万も一度に爆発した様な衝撃を受けて、地面につんのめってしまいました。「空襲だ」と四、五間先の防空壕に飛込んだ瞬間に、天も地もひっくり返るような「ゴッッ」、「ドドーン」という音と共に、一緒にいた奥さんともども、防空壕の壁に叩きつけられました。「あっ、耳と目を塞ぐのだった」と、兼ての訓練を思い出し、目に手を当てて暫らたった後、そーっと指の間から覗いたが何にも見えず、何の音もせず、やがて砂塵が静まると、何処からともなく朝鮮の人が、「アイゴー」、「アイゴー」と泣きながら駆け込んで参りました。外に出てみると、今まで私の手にあった命より大切な配給帳面は一冊もなく、腰かけていた縁台も見えず、家は目茶目茶に壊れて形はありませんでした。

「若し空襲にあつたら、大波止を集会場所にしよう」とのかねてからの約束でしたが、待てど暮せど姿は見えず、家は瓦礫と化し、隣組の防空壕と港との間を、行ったり来たりしていました。「医大生は救護班として被災者の救護に当たっている」とのことです。一晚中燃え続ける火を見ながら、まんじりともせずに防空壕の中で待っていました。近所にお住いの佐藤様が、「新名君は元気だったらしいが、正午までに帰らなかつ

たへ行ってみなさい」と云われるので、翌日大学へ行ってみました。私共の町から大学までは約一里余り、隣の町を境に大学まで一面の瓦礫の町と化し、浦上一帯は焼野原となっていました。大学の裏山に行ってみると、やっと逃れた人達があちらこちらにうずくまり、髪はぢぢれ、服はぢぢれて、元氣なく蠢うごめいています。

私の顔を覚えて下さった看護婦さんが、「生きておられましたよ」と新名の名を呼びながら、先に立って山中を駆けめぐり、山陰で友達二人横たわっているのを見つけて下さいました。主人が被爆したのは、病院について間もなく、上衣をぬいで窓を背にして立っていた時だったそうで、背中一面ひどいヤケドで、ズボンも股からふっ切れ、ワイシャツもふっ飛んで、革のベルトの後半分が、腰のまわりに焼け焦れていました。これは今も涙の種の遺品として、家に残っております。

新名は大変弱っていて、殆んど虫の息でしたが、どうしても山から降りて治療して頂きたかったので、何回となく山を上り下りして、やっと兵隊さんの担架に乗せて貰い、下の病院に降りて頂きました。病棟は外廓が残っているだけで、床は瓦礫の山、漸く家から担いで来た布団が敷けるだけ掃除して、まだあたりは熱かったのですが、他に夏の陽をよける所もなかったため、そこに新名を寝かせました。

病棟の中も外もヤケドを負った人が一杯横たわり、前から光線を受けた人は、これが人の顔かと思われるほど焼け爛れて腫れ、生きている人は「水を、水を」と叫び、私は家から持って来たヤカン、オワンでそれらの人々に水を与えて廻りました。破裂した水道の所までは、寝ている人々をピョンピョン跳び越えて行かねばなりません。死んだ馬も人も豚も焼けふくらんで死んでいました。苦しみもがいたその儘の姿で死んでおりました。これ程の死者の中で、看病を受けて死んだ人は、果して何人だったでしょうか。一家全滅の家もあり、皆が一度に被爆したのですから、何とも仕方なかったことではありません。

気が狂い、竹竿をついて、何やら大声でわめいて廻る人、地べたに倒れてじっと動かぬ人、それらの人の間を兵隊さん達がコツコツと叩いて、既に息絶えている人は、どンドン後の広場に運んで焼いておりました。しかし私までが気が変になっていたの

か、その光景を見ても、恐ろしくも悲しくもありませんでした。

救護班の中には、医大の先輩の方も居られ、他の人達より手厚く看病して頂きました。十三日の午後、医大生の負傷者は道ノ尾の調教授の救護所に収容されることになり、トラックが来て、担架のまま乗せられたり、一人ごとび乗ったりしていました。若しそれに乗せて頂いたら助かるのではないかとお願いしましたが、意識が既に混乱していて、動かすに忍びず、淋しくそのトラックを見送りました。

先輩の赤峰様が、軍医として度々見廻って下され、その時も何やら心臓に直接注射して下さい、「しっかりせよ」と励まして下さいましたが、刻々と悪くなるばかりで、とうとう十三日の夕方息を引き取りました。

すぐに誰もいない二階に運んで頂き、胸に手を組んだ亡骸なきがらの横で、連日連夜の看病の疲れからか、ついうとうとと眠っている間に、同じ下宿に居られた同郷の村永様が丸い缶に蠟燭や線香を立てて、清隆の枕元に坐って下さいました。灯りもない建物の二階で、特別にお通夜までして頂いたのは、私共だけでございました。

翌日赤峰様もお出で下さいまして火葬をすまし、十五日朝、隣組の方から戴いた壺に骨を納め、涙の中に長崎に別れを告げました。あれから子供が翌年生れまして、生活たかひとの闘たたかいが大変でございました。母子二人の間に、父親が生きて加わっていらつと、いつもそののみ思います。

(四五、一〇、二七)

(六八) 医学部四年生 西 憲治

遺族 佐世保市花園町五十六

西 重男(兄)

先日は亡弟憲治のことでわざわざお訪ね下さって、誠に御苦勞様でございました。家内が申し上げました通り、母(西トワ)は二年前に既に死亡しております。

憲治は大学のころ海軍依託学生になっておりまして、軍刀を買って出征の日を待つて居りました。でも今は原爆で焼けて、関係書類は何も残っておりません。色々御迷惑をおかけして、誠に恐縮に存じます。(後略)

(四五、一〇、一二)

(六九) 医学部四年生 昇 雅夫

遺族 鹿児島県始良郡牧園町篠宮重吉方

昇 マツ(母)

(前略) 八月九日の原爆二十五周年忌には、是非出席したいと思いましたが、老年の事として独り旅には自信がなく、娘達もそれぞれ所用のため同行が出来ませんでしたので、本当に残念でございましたが、欠席させて頂きました。

私は来る十二月一日から娘婿の篠宮宅に住むことになりましたから、今後の御連絡は表記の宛名にお願い申し上げます。(後略) (四五、一一、二七)

福岡県直方市山部六七五 嘉山 和子(妹)

「忘れな草」を読ませて頂く度に、又只今は「東京被爆記」を読んでいます。こんな悲しい思いを抱いて生きている人々がいる限り、日本の戦後はまだ終わっていないという感じがします。世界のすべての人類に平和と幸福が訪れますようにと、思わずにはられない今日此頃でございます。

母(昇マツ)も八十才になりました。父や兄二人の分まで、長生きしてほしいと思います。そして廻り来る八月九日には、主人と二人で医大の原爆慰霊祭に参列したいと思っております。(四六、四、六)

(七二) 医学部四年生 服巻 勝之

遺族 佐賀市中の小路九一八

服巻 保正(兄)

前略 早速のお悔み状有難うございました。母は去る一月十六日に急性心不全で、外出先で急逝致しました。かねて病感もなく、平和な眠りでした。

小生は勝之の八つ違いの兄で、親の代より表記の所で、胃腸科医院を致しております。過ぎし二十年八月十五日には、弟と母と小生の三人で、勝之の死体を伊良林小学

校のグラウンドで焼き、骨にして持ち帰りました。

その後皆様の御尽力で、勝之達も鄭重な扱いを受けるようになったと、かねがね母が喜んで居りました。先ずは取り敢えず、御礼旁々お知らせまで(四六、二、九)

佐賀市中の小路九一八 服巻 光子(母)

【第一信】(昭和四十五年九月二十八日付)

猛暑続きのこの夏も、お彼岸と共に急変して、凄きよい秋となりました。

今頃になって故勝之の遺品が見つかりましたので、先生のお手許に小包でお送り致します。遺品は次の通りでございます。

- (一) 身分証明書
 - (二) 電車乗車券
 - (三) 中食券
 - (四) 帰省券
 - (五) 特殊郵便物受領証
 - (六) 服巻印、青木印
 - (七) お銭(一銭二枚、十銭一枚)
 - (八) ナイフ、フォーク、箸
 - (九) 大学ノート
 - (十) 血液型証明書(B型)
 - (十一) 耳掃除器(小型鋏、毛抜き、耳かき)
- その他小さい木の箱や紙の箱に、朱や墨などが入れてあり、箱の表にも裏にも、勝之の名が自筆で書いてあります。

【第二信】(昭和四十五年十二月五日付)

今年もいよいよ師走となり、寒さが一入加わって、老人にはなかなか凌ぎ難うございます。この夏以来、親戚のものに亡き勝之の思い出を書いて頂くようお願いしておきましたところ、最近お手紙と勝之の写真を送って来ましたので、原文のまま同封致

しました。まだ間に合うようでしたら、よろしくお願い申し上げます。

勝之さんの思い出

長崎市愛宕町一九四 薬師寺 慶子(義姪)

勝之さんが長崎医大に入學された昭和十七年には、私は活水の音楽科の三年に在學中でした。この頃のことはいささか記憶になく、私はピアノばかり弾き、勝之さんは西山の(青木)義勇叔父の所に居られたようです。

翌年私は卒業しましたが、引続き活水に残り、研究生として勉強しておりました。この頃、弟や西山の美代子ちゃんと一緒に、田上にハイキングに行ったことがありません。竹林の中に坐って港を眺めました。黄色いツワブキの花が咲いていたように思えます。話した事柄は覚えていませんが、勝之さんは學生服で、何だか楽しそうにニコニコしていて、佐賀弁が面白いと大笑い致しました。

十九年は勝之さんが医大三年で、私の父が亡くなった年です。山里町の春若屋さんに下宿していて、よく本紺屋町の父の病院に遊びに来られ、皆と一緒に茶の間で夕食など致しました。この夏に私も少し体を悪くして、影浦内科に入院しましたが、勝之さんがお見舞に来て下さったことを覚えています。解剖の話などして嚇かし、自分の手を嗅いで、「臭さか」など云っていました。十一月に父が死んだ時は、臨終に立ち会って下され、腰もかけずに私と一緒に、見守っていて下さいました。

二十年は淋しいお正月でしたが、よく遊びに来られて、村上孝さんと深町浩士さんと一緒に、母を慰めて俳句会など致しました。勝之さんも中々才能があられましたが、食べる方にもっと興味があったようです。

この頃から時々、医者は厭だと云ったり、田舎に引込んで隠者のような生活がしたい、精神科に興味があるなど話していました。私はそんなの真平と云って、歌ばかり歌っていましたが、戦況も末期に近く切迫していたのに、ドイツ語の助詞など暗記するのに忙しく、時々勝之さんとドイツ語の手紙など出し合って、勉強しておりました。足に魚の目が出来て、青木の祖父に手術して貰ったのも、この頃と思います。祖父も二十年のお正月過ぎに亡くなりました。

愈々原爆も近づく頃、私達は矢の平町十三番地に住んでおりましたが、勝之さんも昭三さん(医専一年、原爆死)も一緒に居られて、弟と三人で二階に机を並べて勉強しておりました。兄弟のように喧嘩もしました。楽しく遊びもしました。二階はとても賑やかで、勝之さんが兄貴株でした、大きなオナラをするので、私達は「天井尻響」という綽名をつけました。佐賀からお父上のお古というフクちゃんのような帽子をかぶって帰って来られたのは、たしか二十年の四月頃だと思えます、ものすごい角帽なので、私が笑うと、「そんなにおかしいかな」と、キョトンとして居られました。毎日がぶって通學して居られました。

勝之さんは絵も好きでした。音楽も一緒に聴いてくれました。囲碁もやられ、時々お友達と家で打っておられました。勝之さんは付き合えば付き合うほど面白い人で、お友達のように導いて下さいました。年は同じでしたが、矢張り私より位が上で、大変兄貴ぶっておられました。何と云ってもよく本を読んでおられたし、私も頭が上りませんでした。

原爆の前日は防空当直とかで、八日の夜は家に帰って来られませんでした。原爆の日も、多分被爆者の救護で忙しいのだろうと思っていました。十日夜、鹿児島の方(尾立源和さん?)が矢の平の家に来られて、勝之さんが負傷して医大の地下室で寝ておられることを、知らせて頂きました。

早速行って家へ連れて帰り、影浦先生にも診て頂き、背中火傷も快方に向って、私は絶対に死なないと信じていましたのに、信念も何も失ってしまった感じで、まるで夢を見ているようでした。あれから二十五年、今はすべてが遠い過去になってしまいました。私はただ心から勝之さんの御冥福を祈るだけです。

(四五、一二、一)

(七四) 医学部四年生 平井達也

遺族 大分県別府市亀川中央町一九一〇

平井ソヲ(母)



(前略) 達也の件につきましては、種々御配慮下され、恐れ入ります。私事、老年で高血圧のため臥床勝ちにて、今までもとうとう書けませず、浅沼様にお願ひ致しました次第で、申し訳ございません。

達也は非常に元氣者で、快活で頭腦もよく、小学校から五高までは優等で、欠席も殆んどしなかつたようです。人様の人氣がよくて、よく好かれ、今でもいい人を亡くしたと仰しゃって下さいませ。

二十年五月に、四、五日帰省したのが最後でしたが、日頃から宗教のお話を聞くのが好きで、老人の云うこともよく聞いてくれますし、本もよく読んでおりました。思えば残念で残念でなりません。

先生のお骨折りで、靖国神社からは度々御丁寧な御通知を頂きますが、県や市の慰霊祭には何事もないので、淋しく思っております。(後略) (四五、一〇、二〇)

【調 追記】 長崎県では、医大の原爆死亡学生たちは皆、県の護国神社に合祀されていますから、大分県でも恐らくそうだと思います。一度お問合せになったら如何でしょうか。通知はなくとも御参拝になるよう、おすすめ致します。

(七八) 医学部四年生 毛利元次

遺族 佐賀県佐賀郡大和町川上一一

毛利良 一(元)

(前略) 亡弟元次は、既に陸軍依託生に合格致し、卒業と同時に軍務に従事することになっていました。そのためか、本人は希望に燃えて、軍医になるための準備に、度々無医村に実地勉強に行っていたようにございました。

二十六才の若い命が消える時、どんなにか人生の儚さを嘆き悲しんだらうと思うと、身を切られるようでございます。(後略) (四五、一〇、一〇)

(七九) 医学部四年生 林 中 鳳

遺族 中華民國台湾省嘉義市民楽街一号

林 五 桂 (弟)



私は中鳳の末弟で、齡は十二歳も違う。兄が故郷の小学校を終え、異郷に師を求めて勉学の途に励んだのが昭和八年、それから昭和二十年に、平和の礎となって長崎の原爆で斃れるまでの十二年間、たまさかの夏休みには帰省しますが、^{おぼろ}艦に数えてみま

すと、屈指の度敷しかなかったようです。最後に帰って来たのが昭和十七年で、長崎医大附属薬専を卒業した時でしたから、私が十歳の時でした。私が物心ついてから、兄と一緒に暮した月日の、何と短かった事でしょう。

それでいて三十年後の今日、思い出の尽きないのは、兄が非常な弟思いだったからです。絶えず内地(当時台湾では日本を内地と呼んでいました)から、私の歳に適した絵本、物語集、参考書などを送って来ますし、「しっかりと勉強して、小学校を終えたら内地の中学校で習わせる。雪合戦は面白いぞ」と、励ましてくれました。常夏の子供達は、雪合戦は絵本で見ませんから、実に魅力的でした。

昭和十八年に私が小学校を終えた頃は、戦争が酷で内地へは行けませんでした、日本語に余り困らないのも、兄の送本に負う所が少くありません。思えば多読も語学学習の法で、中国の諺にも、「唐詩を三百首も熟読すれば、詩を作れずとも吟じられる」とあります。兄は本屋で自分の本を捜す外、弟の歳に叶った本を捜すだけの心の余裕があったし、また楽しみにもしていたらしいのです。

帰省した兄の夏休みの生活ですが、食事をすますと、家人と四方山の話しをしたり、附近を散歩し、それからは二階の書齋にひっこんで勉強、疲れるとハワイアンギターを弾きます。特に「雨のブルース」が得意でした。テニスも好きだと聞きました。夏に帰るせいか、兄のテニスは私には覚えがありません。

兄はちまきと蟹が大好きで、母の話に依ると、夏の頃足のひどいできもので臥床中に、「一週間続けてちまきを食べてみたい」と、無茶なことを云ったとか。蟹は七、八月がシーズンですから、夏休みで帰った兄達と一緒に、度が過ぎはせぬかと危ぶむ程、どっさり舌鼓を打って食べたものでした。物資缺乏の甚しい戦時中、熊本に住む弟の三楽を訪ねた時、食べたタクワンを「蟹にも匹敵する物」と、家への便りに書いてありました。たかがタクワンですが、戦後に生まれた方には、その嬉しきの程が理解出来るでしょうか？

昭和十九年頃、突然薬専及び医大在学中に愛用した使い古したペン軸を、古里の父に送って来ました。「戦局日に緊迫し、何時何処で誰が国に殉ずるか解らない。自分に万一の事があつた場合の形見に」と云つて——。このペン軸は其の後の父の涙を誘うものとなりました。父の嘆きの詩に、「緬想音容今已香 空余遺物使人哀」、及び「時觀愛筆添新淚」とあるのは、この事を指すのでしよう。

昭和二十年八月一日の敵襲で、二五〇キロの爆弾が身近に落下し、医大の横穴壕に駆込んで約二十秒後に爆発し、頭にコブを作つて危うく命を拾つたと、鳥原に住む弟の尚志にハガキで知らせていました。それでも危険を冒して、学校やポリクリは休まない。凡そ医者は初めから医務に命を捧げていたからこそ、医師は仁術だと尊ばれるのでしよう。

八月一日には命拾ひしたものの、九月の厄運を免れ得なかつた兄は、諫早の下宿で康嘉音様、王文其様（共に長崎医大の先輩）や、其の他衆多の同窓生、及び弟の尚志に看護され、見守られながら、十六日の正午頃神に召されたそうです。「頑張つて帰る」と名刺の裏に書いたのが、遺書になりました。

慶長二年、ペトロ・パプチスタ以下二十六人が、西坂で宗教に殉じ、ローマ教皇ピオ九世によって聖人の列に加えられた史実と、昭和二十年角尾学長以下八百余名が、浦上で医学に殉じ、陛下によって護国の神として靖国神社に合祀された史実は、相前後して長崎の歴史に永く残りましょう。

靈よ、やすらかに！

（四六、二、九）

× × ×
小生の手許に、亡兄が遭難前半年間に、先父へ送つた航空ハガキが十枚残っています。昔の学生は、如何に国や学間に忠実謙虚であつたかが偲ばれるので、左に抜萃します。

【昭和二十年二月四日発、三月十五日着】

時勢移り變つて、現在我等に退屈感を覚えさせないのは、学校に出ることだけです。然しながら研究の域に達せずして、習得の域を脱し得ない所に、落着かぬ所があります。相変らず元気で通つて居りますから、御放棄下さい。靴は修理不可能とて、靴屋から断られたのを、自分で縫いつけたが、長くはもたないでしょう。古い靴、又は新調出来たら、一足お送り下さい。

【昭和二十年三月三十一日発、四月八日着】

近年にない寒さも過ぎて、暮しよい頃になりました。大学に入学したのもつい先日の如き感がありますが、師に受けるべき授業も昨日で終了し、残るのは四月からの卒業試験のみとなりました。大学の課程として、もつと期間をかけて勉強したかったが、時局の要求で斯くも短期間になりました。然し御送金その他の父上の御苦勞からすれば、決して短期間ではなかつたでしょう。有難うございました。最後を飾る積りで、四月から八月末に至る卒業試験も頑張つて参ります。九州も漸く郷里のような敵襲を見るようになりました。空襲発令後学校まで五分しかかからない所に居ますし、又常に任務を達成しようとする学校の横穴壕内で待機していますので、どうか御安心下さい。

【昭和二十年六月十六日発、六月二十六日着】

漸く夏らしく照り始めたかと思うと、もう梅雨期に入りました。御両親初め桂五郎（小生のこと）達も達者で何よりです。卒業試験も半分終りました。何等障害なく元気で励んで居ります。八月下旬に終る予定です。仮卒業は九月でしたが、或いは九月が本卒業になるかも知れぬとの話もあります。

既に舞台も殆んど不可能となつた今日、色々将来の方針を研究してみました。縁の下の力になって励みたいと思つて居ります。奇蹟は世紀前には幾多ありましたが、

現下で奇蹟を頼りにすることは、滅亡を待つこととなります。戦局が重大化すると共に、我等は義勇隊として、醜敵に向つて玉碎すべく編成され、技術に、斬込みに、日曜を排して訓練して居ります。近代火器を有する敵に向い、竹槍を以て臨むは、牛車に向う蟻螂の如き感なきにしもあらずですが、線路上に爬い上つた毛虫が、汽車を顛覆せしめた例を知っています。万事が運命です。久し振りに余暇が得られてペンを持ちましたが、何時まで書けるやら、又届くやら、予想がつかえません。

【昭和二十年七月四日発、八月九日着、最後のハガキ】

愈々空爆に依る戦禍の苛烈を見せられました。僕等は町に、又は他の市にも動員されて、救急に努めて居ります。長崎も此処数日間は警戒を要するとの指令の下に、市民一同張切つて待機しています。敵の策に変わりなく、台北の如き都市に変化しつつありますが、我等は近代戦の特徴として認め、聊かも動ずることはありません。郷里との音信も、何時まで可能であるかどうか知れません。

愛子を喪つた嘆きの詩

林 溜 (父)

| | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 生前半世離家去 | 死後何曾入夢來 | 緬想音容今已杳 | 空余遺物使人哀 |
| 原于一丸斃太平 | 無端汝命供犧牲 | 充闔宿願隨流水 | 摺掌喪明淚血傾 |
| 從師萬里苦淹留 | 已告緩和一芸修 | 竟作洛陽邨上客 | 遺書滿架付誰收 |
| 愛兒非命獨悲傷 | 日日悲傷欲斷腸 | 極度悲傷生妄想 | 人間抑有還魂香 |
| 最高學府伴群英 | 立志堅強已達成 | 彈指蒼穹也有嫉 | 忍心造物太無情 |
| 時觀愛筆添新淚 | 每誦遺書墜旧聲 | 嗟謫譴言如大死 | 悔教求命莫求名 |
| 原子初声二戰休 | 災黎哭淚滿江流 | 長崎広島千秋後 | 莫解冤魂不了仇 |
| 郊外荒涼一瘞丘 | 愁雲彌漫籠山頭 | 十年孤詣成功日 | 遺恨扶桑萬古留 |
| 發明原子世稱英 | 我道斯人絕世情 | 敢問狹迦何所感 | 難消中鳳死魂縈 |
| 報刊刃戟又方縈 | 金馬軍情日日喧 | 独嘆長崎兼広島 | 一声原子幾冤魂 |

林中鳳君の墓碑銘は次の通りだそうです。

中埋千古恨 鳳上九州天

(八三) 医学部三年生 白井進

遺族 福岡県嘉穂郡碓井町飯田

白井梅子(母)

暑い夏が参りました。この度は慰霊祭の御案内を頂き、是非お参りしたいと思っておりますが、老齡のため体の調子が悪く、長崎までは行き兼ねますので、家からお参りさせて頂きます。どうか悪しからずお許し下さいませ。(後略)

(四五・八・三)

(八四) 医学部三年生 大池未知生

遺族 名古屋市昭和区汐見町一三九

大池小一郎(父)

(前略) 此度御照会に預りました亡未知生は、医大在学中に海軍々医学生を命ぜられておりました。死亡の際、佐世保海軍病院諫早分院に於ても、準士官待遇を受け、死亡診断書にも「戦病死」とありました。当名古屋市昭和区役所に死亡届を提出した時も、其の取扱いを受けました。

その後町内の遺族会役員の方から、「遺族の方々には弔慰金・年金等の沙汰があつて受領しているが、貴家のみそれが無いから、申請しては如何」との話があつたので、事情を具して援護法による届出を致しましたが、資料不備、援護法による規定外として却下されました。依つて今度は、亡息の学友秦野滋様(当時調外科の教室員)の御協力を得て、再度申請致しました。その申請内容は、

一、大池未知生は既に軍籍にあり、年齢も成年で、その一生を海軍々医として奉公致すべく、努力邁進中であつたこと。

二、海軍の委託を受けられた文部大臣の要請により、本分を全うするため、長崎医科大学における修練に服務していたこと。(これは前回の却下理由に、海軍の要請なく——云々とありましたので、私が附加致しました)

三、軍人の他の諸学校と同程度の取扱いを受けたこと。

等が主なものでした。但し結果は、却下又は取下げられるようにとのことでした。

その後長崎に於て、遺族会の方々の御奔走が始まりましたので、その御心情を偲び単独の行動を謹んで、今日に至った次第であります。先ずは不取敢、右御返事申上げます。
(四五・一〇・一四)

【調 附記】 陸軍軍医依託生及び海軍軍医学生の件については、三六頁に少し詳しく記載したので、それを参照せられたい。

(八七) 医学部三年生 片 山 道 生

遺族 福岡県築上郡築城町安武一八六

片 山 愛 而 (父)

【第一信】 (昭和四十五年四月二十六日付)

(前略) 今回は又々「忘れな草」第三号、偉大なる御功績は洵に敬服の極みです。いつもながら有難く拝受致します。

○ あわれども又なつかしく思うかな 見ぬ人わが兄と同じ運命

【第二信】 (昭和四十五年九月十八日付)

先日は御多忙中に参上、失礼致しました。辞去後、末男知之の案内で大学医学部にいき、原爆記念講堂の壁に安置された銅板名碑を拝見、続いてグピロが丘へと思いましたが、丘を登るのが苦しく、下から遙拝して大学を辞しました。

【調 附記】 片山様は明治十三年生れの本年満九十歳、嬰鑠としてとてもお年とは思われぬ程のお元気さ、アンケートの御返事にも「健康、時にメスを持つ事もあり」と書かれている。知之君(長崎大学医学部卒、目下佐賀大学保健管理センター所長で助教授、且つ長崎大学高岡内科講師併任中)の話によると、道生君の長兄は軍医でビルマで戦死され、次男と四男は夭折、三男は戸畑で開業、五男が道生君、六男は父上の跡をつがれて郷里で外科を開業、次の独り娘の長女も、人吉で開業の医師に嫁がれ、最後の七男が知之君だそうで、七男一女、夭折された二人を除き、全員が医師

でかたまられた、優秀な御家族との事である。思えば御長男と道生君は業半ばにして斃れられ、洵に惜しいことではあるが、共に国の為に殉せられた尊い犠牲者で、靖国神社に祀られ、男として生を全うされたものとして、御父上も定めて御満足のこととお察し申し上げる。片山家が益々榮えられるよう祈つてやまない次第である。
(四六・二・一七)

道生兄の回想 少年の日

片 山 知 之 (弟)

田舎の父から珍らしい毛筆の速達が届いた。急いで開封すると、「忘れな草の原稿を今回はお前が書くように」とのお達しであった。至上命令をうけて机に向つてみると、生活の奔流の中でもすれば忘れがちな少年の日の記憶と、それにまつわる道生兄の回想が、一筋の支流の源をたどるように、鮮やかな印象として甦って来る。

戦争も大詰めに近づいた昭和二十年七月下旬のことであった。中学生であった私達には、大局を見通すすべもなく、芋粥の空腹と連日の空襲の恐怖を我慢しながら、来るべき本土決戦に備えて、父親から譲られた刃渡り七〇cmの日本刀を握りしめて、毎日かけ廻っていた。友達の中には落下傘から降りて来た敵を刺すのに、少しでも打撃が大きいうようにと、塩を竹槍の先に詰めているものもいた。また町内の魚屋の親爺さんは、愛用の猟銃を持ち出して、火の見櫓の天辺に陣どり、低空で飛来する敵機に向かって顔を真赤にして対空射撃を試みていた。小さい子供の胸にも、周囲の総ての異常な緊張と、灼熱した太陽の中の土色の切迫感から、舞台が大きく変動して、真赤な滝口に向つて押し流されているような、そして舟の中に一緒に乗っている家族と隣人に対する共存意識のようなものを、かっけない程に強く意識していたように思う。

丁度その頃、前年ビルマで戦死した長兄の遺骨を受取るために、飛行場の基地のある築城駅に、兄弟で出向いたことがあった。駅に着いて待機していると、突然空襲警報が発令され、続いて敵機の爆音が聞えて来た。人の密集した駅よりも、近くの田圃のとうしやく(積み上げられた藁のこと)の影にかくれた方が安全だろうと、私達四人は駅から走り出して、一目散に畦路を伝って逃げ始めた。すると編隊を組んでい

た敵機の中の一機が、私達を見つけたらしく、急に方向をこちらに向け直して追っかけて来た。四人はとっさに一列になって畦路の上につぶした。一番小さかった私は、無我夢中で道生兄の大腿の肉に顔を埋め、下から両足をかかえておびえていた。敵機は頭上から急降下しぎまに、機銃掃射をあびせて来た。シュルツ、シュルツと無気味な音をたてながら、すぐ近くの土や木にロケット弾がつきささるのがわかる。一瞬背筋に氷を並べて行かれたような気持で、生きた心地はなかったが、爆音を追って怖る怖る首を上げて見ると、執拗にも敵機は遠くの方で、又こちらに方向をかえて追ってくる。

その後、どこをどう走って逃げたか記憶していないが、気がついた時には、四人もお寺のコンクリートの縁の下にもぐり込んでいた。飛行場の方は大分やられたらしく、土煙が濛々と上っている。やっと人心地に返ってみると、私は途中で川の中に跳び込んだらしく、下半身がびしょ濡れになっていた。その翌日だったか、道生兄は夜汽車で長崎に帰った。

それから一週間あまり経った頃であろうか、広島に新型爆弾が投下されたとのニュースが報せられたが、偶々道生兄の次の兄が、京都からの帰途、惨事の渦中にあつた広島を歩き、その言語に絶した凄惨さを目撃したそうで、家族の皆が暗い顔でその話を聞いていた。

しかしあの残酷な原爆を、一度ならず相次いで二度まで、人類の頭上に投下しようとは、どのような人間が、どのような狂った状態でこれを決定したのか、道生兄はその数日後に、運命のいたずらのもとに、還らぬ人となったのである。

八月十一日、道生兄の安否は尚不明で、兄達二人が長崎に赴くことになった。そして十三日だったと思うが、家族の一縷の望みも空しく、道生兄は遺骨となって、小さいリュックに背負われて帰って来た。続いて二人の息子の遺骨に接した両親は、一夜にして頭髮霜をなしたかのように、憔悴して見えた。しかし私的な感情をつとめて顔に出さず、老軀に鞭打って、負傷者や病人の治療に自転車でかけ廻る父の姿は、子供にも、手負獅子の強靱さを見る思いであった。

その父も今年は九十一才になるが、八月九日の慰霊祭には、遙々長崎に向向いて来た。道生兄の名前も刻まれた慰霊碑をじっと眺めていたが、その眼には、九十一年の星霜の中で、最も痛々しい思い出であろう道生兄を偲ぶ悲痛の色が、ありありと浮んでいた。

(八九) 医学部三年生 滝口 薫

遺族 福岡県宗像郡宗像町福元九六九

滝口 文子(姉)

(前略)先生には益々御壮健で、「忘れな草」第四号の編集に御尽力下さっています。誠に感謝の外は御座いません。「忘れな草」を拜読して、当時の模様を明瞭に知ることが出来ました上、皆様のお骨折りにより、靖国神社の合祀、並びに弔慰金の下賜、慰霊碑の建立、銅板名碑の建設など、並々ならぬ御苦労を、骨身を惜まず尽力して頂き、御礼の申上げようも御座いません。

次にお尋ねの件で御座いますが、薫は陸海軍の依託生ではありませんでした。主人が軍隊に入隊することを恐れていましたので、私が大学進学をすすめたのです。戦火が激しくなり、主人も軍に召集されました上に、頼る弟まで第一線にとられたら、後に一人で残される自分が心細くなり、医大を卒業すれば後方部隊で安心だと思つたのが運命でした。

(四五、一〇、二四)

(九二) 医学部三年生 花田 紀

遺族 福岡県嘉穂郡稻築町鴨生三三二

花田 静江(母)

【第一信】(前略)お送り頂いた「忘れな草」第三号を拝見致しますと、あの恐ろしい原爆当時の事が、まざまざと新しく胸をつく思いでございます。

また故人の一人一人の心情や思想を、ありのままに再現して頂きまして、在りし日の亡き子の一つ一つの言葉などが、髣髴として私の胸に甦って参ります。

「逃がした鯉は大きい」とかよく申しますように、本当に誰にでも思いやりの深い子でございましたので、今は地下でどんなにか感謝の熱涙にむせんでいることだと思います。本当に有難うございました。いついつまでも大切に、思いを新たに致したいと存じます。

世界は益々あわただしくなつて参りましたが、一日も早く多くの若人の死が、世界平和の礎となりますようにと、心から祈るのみでございます。

○ 友の名と吾子銅板に原爆忌

○ 碑にかくる慰霊の水や原爆忌

○ 原爆手記^{わづれなぐさ}勿忘草に吾子思ふ

生命のある限り、原爆忌には御参詣致したいと念願しております。

(四五、四、二八)

【第二信】

(前略) 原爆忌も愈々二十五年忌を重ねまして、年経るにつけ涙新た

になつて参りますが、先生の御真情の下に遺族一同心を一にして、亡き若人の霊を慰め、また亡き若人の霊に励まされて、残る生涯の一步一步を辿らせて頂いております。一日でも忘れることなく感謝致しますと共に、あたら前途ある青春を葬り、傷つき逝きし多くの若人の、ただ世界平和の礎とならばやと思ふ一途な心情を思う時、また現在の世界の状況を顧みる時、心重くなるようでございますが、どうか唯今の現状が、一筋に平和への道でありますように、心から祈るのみでございます。

亡子の友人もそれぞれに御発展遊ばし、社会の為にお働き遊ばしている御様子を拝しますにつけ、亡子もどんなにか喜んでいることかと思いつつ、どうか亡子の分までいついつまでも御健勝にお過ごし下さいますよう、心から祈らせて頂いて居ります。

○ 黙禱のしずかにすすむ原爆忌

○ 続経つづく原爆二十五周年

○ 傷つきて吾子も来し丘原爆忌

○ 吾子の友今副院長原爆忌

(四五、九、一一)

(九九) 医学部二年生 池 西 清

遺族 愛媛県西条市竹ノ巻

池 西 シツエ(母)

(前略) 毎年八月になりますと気にかかる事ですが、清の被爆当時の事をお知らせ致します。

清は原爆を受けた時、建物の下敷になりましたが、誰かが早く逃げようと手を引張つてくれますと、不思議に体がするりと抜け、そのまま手をつないで夢中で走って行きましたら、諫早からの救援バスが通りかかり、それに乗って諫早小学校に収容されたそうです。しかしその時は既に手を引いてくれた友の姿はなく、後で考えますと、西条市にある氏神様の、伊曾の神の神様が助けて下さったのに違いない、という気が致します。

諫早小学校では、畳のない床の上で、大勢の被害者が呻き苦しみ、まるで地獄のよう、この儘では死んでしまふだろうと思ひ、西条に帰るために駅に向つて歩いていく途中で、倒れてしまいました。幸にもすぐ前の家が、私方と同じ食料品販売店でしたので、お店の奥さんに助けられ、聞くとその息子さんも戦地で行方不明とかで、自分の息子のように親切にお世話下さいました。清は西条への打電を奥さんに頼んだそうですが、当時は個人の電報を受け付けてくれなかつたので、私共は何も知らずに過しておりました。

申すまでもなく、当時は食料入手困難な時代でしたが、その家が商売をしておられる関係で、欲しがるカルピスなどよく飲ませて下さいました。このまま家に置いて下さるよう頼みましたが、個人の家に置くことは出来ないとかで、又小学校へ収容されました。しかし毎日お見舞に行つて下さり、お医者さんも、唯一人の大学生で死なすのは惜しいと云われ、充分手当をして下さいました。

外觀は少しの傷もなく、立派な体をして居りましたが、内臓をやられているためか下痢を始め、他の人に伝染してはいけないので、隔離病院へ移されました。そこは昼

の上で、病人も少く、皆さんの手厚い看護を受けながら、最後は目が見えなくなり、八月十五日の朝四時頃亡くなりました。

それから一週間位過ぎて、諫早の市長さんの名で「清死亡」の電報を貰い、清の妹を諫早にやって事実を知ることが出来、遺骨も遺品も受取ることが出来ました。

帰ってすぐ御礼状を出しましたが、その後音信不通となりましたので、三、四年後の諫早の水害の時も、お世話になったお家の安否が案じられながら、お見舞のお手紙を差上げることも出来ず、残念に思っております。(後略) (四五、八、二八)

(二〇〇) 医学部二年生 糸山隼人

遺族 佐賀市中ノ小路八一二六

糸山綾子(母)

漸く秋らしい時節になりました。終戦後二十五年の歳月が過ぎましたが、いつになっても大学生姿の隼人が頭から離れ切れず、筆筒の中の久留米紵の着物を出しては、又仕舞い込むような繰返しをやりながら、在りし日の面影を偲んで居ります。女らしいこととは知りながら――。

さて此の度「忘れな草」の第四号をお出し頂きます由、別に変ったことも御座いませんが、終戦後私宛に届いた一葉の葉書が見つかりましたので、記してみたいと思えます。

『毎日空からの攻撃にて、戦も烈しくなつて参りました。勉強も研究も精一杯にやっていますので、安心して下さい。過日友人と下村湖人作の「次郎物語」の映画を見に行きました。大いに感ずるところがありましたので、是非見ておかれたらと思えます。義人(弟)も別に変ったこともないでしょう。どこも食糧事情が悪くて困ります。お互に我慢しましょう。次の土曜日には多分帰宅出来ると思えます。』

このような簡単な文でございますが、これが隼人の絶筆となりました。

(四五、一〇、二〇)

(二〇二) 医学部二年生 稲垣明彦

遺族 奈良市法蓮南町七一

稲垣正弘(父)

稲垣ヨシ(母)



度々「忘れな草」を拝見しながら、どうにも涙の方が先立ちまして、思い出の記も進みませず、とうとう締切り間際になりました。申訳なく存じます。

明彦は三人兄妹の中ただ一人の男子で、

幼い時から本人の希望のままに修学させました。幼稚園から大阪附属(階行社)小学校、中学四年から旧制高校に進み、本人は文科に入って、大学では経済を志望していましたが、戦雲が次第に烈しくなるので、卒業間際に理科に転向して、長崎に参ったのでございます。余り遠いので私共もすすみませんでしたが、散々迷いぬいだ場句、結局父と同じ道に進んだのでございます。

思い通りに進学が出来、早く学業を終えたいばかりに勉強しておりましたのに、いつも速い家が気になるとみえて、一寸の暇も帰阪して、家があつてよかつたと申して喜んでおりました。都会の方が早くやられると申しますので、「長崎は空襲もあまりなくて、本当によろしいなあ」と申したことでございます。

最後の帰阪は二十年七月末、丁度姫路駅の空襲の時で、朝到着予定の列車が夜十時頃になり、それに女学生を一人お連れして来たので、一寸驚きました。実は汽車の中で、汽車が遅れたので京都についても親類の家まで行けず、明日の府立女専の入学式にも間に合わず、泊る所もなく困っておられましたので、家に泊めて、翌日早朝の電車で京都に送ってあげたような次第でございます。

明彦は二三日滞在している中に、お友達から外科の試験の通知が参りましたので、帰りの準備をしながら、妹達に、「今度は何かしら長崎に帰るのが厭だなあ」とつぶやいたそうで、これも虫の知らせだつたか、と後で思ったことでございます。

帰校の日は、私が駅まで送ってやりましたが、いつもだと、送って貰わなくてもいいと押し返しますのに、この時ばかりは黙って送らせてくれました。

試験がすんだ後また郷里の熊本に参り、親戚知辺など残らず訪問しまして、叔母から長崎の方が安全だから早く帰るように云われ、しぶしぶ帰ってからすぐにあの惨事に遭いました。叔母からは、「なぜもう二、三日留めなかつたろうか」と、いつも悔しんで便りが来ておりました。皆に暇乞いに行つたように思われてなりません。

ここまで書きましたら、涙でどうにも続けられなくなりました。拙い文でお許し下さいませ。お蔭様で靖国神社にもお詣り致しましたし、御地にも昨年の春主人と参りまして、立派な慰霊碑や名碑を拜見し、心から喜び感謝申し上げております。

(四五、一〇、二五)

二〇三 医学部二年生 小川 三郎

遺族 大阪府八尾市東山本新町二二四

小川 千年 (母)

愛知県海部郡七宝町徳実

山田 妙子 (姉)

三郎は大正十五年三月十五日に、大連市ロシア町の満鉄病院で生れました。四十数年も前のことであり、しかも私は当時三才でしたのに、何故かその時の印象が鮮かに残っています。病室の様子や、母の浴衣の柄さえ覚えています。小さなベットに寝かされた弟を、恐る恐る覗きこんだりしました。

その後幼稚園へも一緒に、中国人のボーイに付添われて通いました。小学校時代はあまりぱつとした方ではなく、四人兄弟の末子で、三郎は兄達に押され勝な子でした。しかし時には、友人とスケートに行つた帰りに、タクシーで玄関に乗りついたりして、家中の者をアッと云わせたりする一面もありました。

やがて中学に通うようになりましたが、当時の中学校と女学校とでは進度が違い、私が五年生のとき三郎は三年生で、殆んど同じ程度の進度でした。私が英語や数学の

難問で困っていると、「なんだ、こんなもの」と、すらすらと解いてくれたことも、度々ありました。

その後私は東京の学校に進学しましたが、母から、「三郎も近頃は真面目に勉強し始め、夜中の二時頃まで頑張っている」と便りがありましたので、大いに励ましてやりましたところ、受験準備で忙しい中からも、「前途に希望を持っている」と、頼もしい返事をくれました。担任の教師から、「度胸試しに四年生から受験してみるか」と云われて受験し、見事に旅順高校に合格した時は、三郎の短い一生の中でも最も希望に燃え、幸福な時だったでしょう。合格の喜びを便箋五、六枚に、ぎっしり書いてよこしました。その後東京と旅順と、各々の寄宿舎の間で、度々文通が交わされました。戦時下における学生のあり方、旅順の町の様子、読書の感想、時には観念的な恋愛論等々。これらの手紙は奇蹟的にも私の手許に残っております。

いつの時代にも進路を決める時に、自分はその職業に適しているかという不安や、家族の理解が得られるかという悩みは多いと思いますが、弟の時代ほど自分の意志が制限された時代はないでしょう。戦局は愈々烈しくなり、法文系の大学生の徴兵延期は認められなくなりました。文乙にいた弟は、「東大の印度哲学に行きたい」などと云っていましたが、同じ進学するならば、卒業するまで研究ができ、卒業後も軍医として国家に奉公できる医科へ進むべきだと、家族の者も勧めました。弟はあまり強くも反対しませんでした。が、「僕のような運命論者が医者になっても、最善が尽せるだろうか」とか、「手先の無器用な僕に適性があるだろうか」と、悩んでおりました。しかし願書を出し、大学から入学許可の通知が来ると、非常に喜び、決心がついたようです。ある日「こんな本を買った」と云うので、表紙を見ると、「死とは」とあり、「又哲学書ね」と云うと、「違うよ、これは生理的な死について書かれたものだ。僕も医者になるのだから」と云ってました。

入学する日が近ずいた或る日、「旅順の町を案内しよう。姉さんだけではつまらないから、F姉妹を誘って行こう」と云い、四人で行くことになりました。日頃服装には無頓着な弟が、いつの間にか何処で手に入れたのか、国立大学の徽章のついた角帽を

冠っていました。満洲の秋は早く、九月初めでしたがすっかり秋で、コスモスが美しく咲いていました。美しいF姉妹を同行した戦跡巡りは、とても楽しいものでした。

三郎にとって初めての、日本への出発の日が来ました。黄海付近にも敵の潜水艦が出発し始め、日滿航路の定期船もなくなったので、陸路を朝鮮経由で行くことにしました。大連駅で大勢の親戚知人に見送られ、意気揚々と出発したのが、永遠の別れになるうとは、夢にも思いませんでした。

戦局が烈しくなるにつれて、日本からの便りも途絶え勝でしたが、「今日は死体解剖があつて、一日中食物が咽を通らなかつた」とか、「F嬢の写真を送って欲しい、机の上に飾るのにふさわしいから」などと、便りをくれました。

長崎市に新型爆弾が投下されたことは、大連の新聞にも報道されました。しかし半紙大の新聞には、何も詳しいことは書いてありませんでした。やがて終戦となり、内地に比べて平穩だった満洲も、八月十五日を境として一変しました。北滿に入隊した長兄や、南の最前線にいる次兄の安否が氣遣われましたが、日本にいる弟については左程心配しませんでした。その内に日本からの密航者の話や、かくれて短波放送を聞いた人の話から、広島・長崎の被害状況が明らかにされるにつれ、不安はつのる一方でした。

三郎は八月下旬に岡山の伯母を訪れて、写真を一枚渡し、「死んだら線香の一本も立てて下さい」と頼んだので、「そんなに危険なら当分こちらに居て、夏休みをしたらいいでしよう」と勧めると、「梅田教授の講義は是非とも聞きたい」と云って長崎へ戻り、梅田教授の講義中に被爆した模様です。

純粹に生き、死を覚悟して一生を終えたのですから、弟としては本望だったろうと思いますが、最近になって世に出た永井隆博士の「長崎医大原子爆弾救護報告」の中に、「患者の環境が予後を左右するのは、既知の事実である。何と云っても、住みなれた自宅で、親しい家族から看護してもらいに勝った環境はない。こうして絶望と思われた患者が幾人か助かつた」という一文を読んだ時、家族として看病してやれなかつた悔いが、新たに胸に迫って来ました。

戦後二十五年、長崎市の小学生で、原爆が落されたことを知らない者がかなりいることを知り、愕然としました。この悲惨な事実を、この尊い犠牲を、何故かくさなければならぬのでしょうか。恐ろしい戦争を再び繰り返させないためにも、私たち遺族は、大きな使命を担っていることを痛感します。

(四五、一〇、二六)

(一〇六) 医学部二年生 太田 祐司

遺族 兵庫県美方郡村岡町村岡四〇四

太田 晴造(弟)

本日は御信書を頂き、誠に有難うございました。突然のお知らせでびっくり致しました。兄祐司は幼い時に両親を失い、叔父音治の世話になり、遺産を学資として長崎の大学に学んでいました時に、原爆で死亡したものでございます。

兄の死後、私有家督を相続致しましたが、未成年で相続した関係で、何かと手落ちのあったことを遺憾に存じます。兄と運命を共にされた学友の人たちが、靖国神社に祀られたり、見舞金を頂かれた話も、私には初耳でした。亡兄も大死させたくありませんので、若し今からでも出来るようでしたら、靖国神社合祀のことをお願い申し上げます。また見舞金の方も、もう一度文部省に申請して下さいませう、お願い申し上げます。

西谷様のお宅にも近日中にお伺いする予定です。

(四五、一〇、一五)

芦屋市宮塚町八二 太田 音治(叔父)

過日は御親切にお手紙を戴き、原爆死亡学生の遺族会をこしらえて戴いております由、有難く御礼申し上げます。

祐司の両親は、子供が沢山居ましたのに早く死去致しましたので、私は祐司を子供の頃から育てました。家庭教師を入れて勉強させ、松江高校を卒業させて、長崎医大にやりました。祐司の死後は、弟の晴造が家を守って居りますから、その方に御連絡下さいますよう、お願い申し上げます。

(四五、二〇、二)

【調 附記】 太田祐司君の御遺族は最近まで不明だったが、松江市の吉岡照晃君から、太田晋治氏のことを教えて頂き、連絡の結果、御令弟の晴造氏のこと判明した次第である。

(一一〇) 医学部二年生 何 振 欽

(四六、二、一八記)



遺族 台湾省台中市南区福中街一七番二号

何 振 欽 (弟)

私は何振欽の弟です。家兄は原爆当時、長崎医科大学二年に在学中、不幸にも原爆に遭難してその犠牲になりました。最近林五桂さん(註、学部四年林中鳳君の令弟)からの通知で、既に忘れかけていた家兄の悲惨な被爆当時のことを思い出し、心から涙が湧きました。ところが林さんのお話によりますと、家兄の名前が医大の犠牲者名簿に載っていないようで、どうしたことかと吃驚しました。

家兄何振欽は、確かに昭和十九年九月に長崎薬専を卒業し、同年十月一日、医大に入学して在学中でした。この事を一番よく知っているのは、潮州の黄耀宗さんと台北の楊敏郷さんです。先日私は南投の葉国慶さんを訪れましたが、葉さんも先生に手紙を差上げることでした。調先生、どうか家兄の名前を銅板名碑に刻んで下さい。そして靖国神社にも祀られることが出来たら、在天の家兄の靈魂もきっと喜ぶことでしょう。呉々もお願い申し上げます。

終戦当時長崎の台湾同郷会や、康嘉音さん、黄耀宗さん、楊敏郷さん、楊友香さん、その他多くの方々から、沢山な手紙や通知が届きました。その通知によると、家兄が原爆の犠牲となられたのは確かで、生前毎月届いていた手紙が、原爆後は一通も来ず、二十数年間、消息が全く不明であります。

終戦後、康嘉音さんから初めて悲痛な便りがあった時は、家族全員が大きな打撃を受け、皆涙を流して泣きました。当時私は小学校六年でしたが、本当にこの様な事が

再び全世界に起らぬよう、いつも神様にお祈り致しております。

家兄の生前のハガキ、写真、死亡診断書等を同封致しましたから、御覧下さい。これらは家兄の僅かな遺品ですから、用がすみましたらお返し下さいませよう、お願い致します。

私は遙か台湾の空から、長崎医大原爆犠牲者八百余名の靈魂に対し、最大の敬意を表すると共に、安らかに眠られるように心からお祈り致します。(四六、七、二二)

兄何振欽から父何坤成へ宛てたハガキ

その一(昭和十九年八月二十四日付)

拜啓酷暑の折から、皆様には益々御壮健のことと拝察致します。父上様初め家族一同至極御多忙のことと推察、心から皆様の御苦勞に感謝しております。

大学は十月一日入学ですが、それまでは工場に勤勞作業に行っていますから、送金や送物は一切下宿宛にして下さい。学校にはもう行く暇がありません。

委託生の手続きは入学後ですから、採用されるまで送金を頼みます。どうか書物購入金、一学期授業料などを送って下さい。なお薬剤師免許証、中等教員免許証の請求に必要かも知れませんが、戸籍抄本も二通送って下さい。では皆様によろしく。御万福を祈ります。

その二(昭和十九年九月二十一日付)

(前略)委託生は十月一日正式入学後に手続します。改姓名のことお願い致します。

お祖母様には当分会えませんが、どうか御体に注意されて、小先生の帰郷を楽しみに待って下さい。母上様にもよろしく、又弟達はよく勉強しているかしら。数学、物理、化学を主にやるように云って下さい。最後に父上様初め、一族一同様の御幸福、御健康を祈ります。

追而、今日(二十一日)に卒業式がありまして、私は学力優秀、品行方正で賞品をもらいました。詳細は普通便で……。どうか喜んで下さい。

【調 附記】 何振欽君が原爆犠牲者名簿から洩れたのは、大学保管の連絡簿に「休学中」と書かれていたからで、種々調査の結果それは誤りで、実際に大学で爆死した

ことが判然となったので、今後は名簿にも入れ、出来たら銅板名碑にも追加彫刻する積りである。

(一一五) 医学部二年生 久保道也

遺族 東京都中野区東中野三十一・二ヴィラ・ルミエール
久保光子(母)

〔前略〕 去る八月九日は、又悲しい思い出の原爆記念日、二十五周年忌が参りまして、歳月の流れの早さに、千々の思いに耽るばかりでございます。

お送り頂きました「忘れな草」を繰返し拝見し、御遺族の方々の切々たる思い出の手記は、只々涙で御座いました。私は遠く離れており、殊に病身のため、ゲビロが丘の慰霊祭にも、遺族の方々の懇談会にも列席出来ませんで、何かと失礼のみで、ただ遙かの地より當時を思い浮べ、皆様の御冥福を祈っております。

此の度は又先生の並々ならぬ御配慮で、期限切れの息子道也が、靖国神社に合祀叶いました由お知らせ頂き、有難うございました。道也も定めし泉下で喜びおることと存じ、秋の例大祭には是非お参り出来ますよう、健康に充分気をつけたいと思っております。(四五、八、二二)

(一一九) 医学部二年生 後藤 祐碩

遺族 佐賀県有田町二〇二二
後藤 忠子(母)

〔前略〕 長い間失礼致しましたが、実は私六月より病気のため、久留米大学木村内科に入院致し、九月末に佐賀の娘の許まで帰り、二三日たって又々外の病気で、肥前山口の古賀和彦(娘婿)の内一カ月、佐賀の山口耳鼻科に一カ月お世話になり、先日半年振りに自宅に帰って、お葉書を拝見致したような訳でございます。

家には祐碩も主人も居らず、ただ一人暮りで淋しいのですが、いくら淋しくても、矢張り仏様の居られる所が一番いい様です。

申しおくれましたが、八月九日は丁度入院中でしたので、古賀敦子に代りに長崎へ行って貰いました。大学病院でも原爆の日が近づくこと、泣いてばかりいて、先生方を困らせました。また白衣の先生方を見ると、祐碩のことが思い出されて、却って病気が悪くなるような気が致しました。娘や孫達の所に居ると、皆がよくしてくれますので、一緒に笑うことも御座いますが、不思議に又矢も楯もたならず、仏様の側に帰りたいので御座います。

【二伸】 祐碩は海軍の依託生で、いつも「俺は二十五までしか生きないから、後は弟の年男に譲る」と申して居りました。その弟が医者にならないで、電気の方に参りましたが、孫に望みをかけて、楽しみに待って居ります。(四五、一一、二六)

(一二一) 医学部二年生 坂中 善視

遺族 和歌山県伊都郡九度山町河根
坂中 澄晴(父)

〔前略〕 お手紙を拝見した後、暫らく忘れていた「忘れな草」を取り出して、自分の手記を読みました。何ということなしに涙が溢れて来て、独りむせび泣きました。隣の部屋では家内が床に半身起して、さかんにお経をあげていました。

昨年、同僚十人余りと一緒に、長崎の国体の設備を見学に参りました。ゲビロが丘を訪ね、おつくり戴いた慰霊碑に参拝して、先生のお骨折りに心から感謝致しました。同僚も同行してくれたため、先生をお訪ねしたいと思っていた出発時の計画も、実行出来ず、心を残して帰った次第です。本当に立派な慰霊碑でした。

私も昨年九月、十五年の教育長生活を退任して、目下自宅で読書や野良仕事で楽しく暮らしています。教育委員長(非常勤)をやっておりますが、この春の叙勲で因らざるも勲五等旭日章を戴くことになって、来る十三日に東京の伝達式に参列する積りです。教員三十五年、教育長十五年、教育の道一筋に五十年生かしてもらって、感謝しております上にこの度の荣誉で、全く勿体なく思っています。

家内も床について十一年になります。病勢には変わりなく、毎日床に半身を起してやると、新聞を読んだり、テレビを見たり、お経をあげたりしていますが、精神的には衰えず、私も心安く見てやっている次第です。(四五、五、三)

(一二三) 医学部二年生 治村 広三

遺族 大阪市住吉区帝塚山中三丁目二二

治村 タメ(母)

昭和二十年七月末頃、大阪北方の西国街道を北へ一キロ余りの山中のお寺へ、当時七八才の母を連れて行くことになりました。物資に乏しく、毎日山へ落葉拾いに行き、炊事して居りました。

お寺の方へはラジオがあり、新聞も二日に一度配達されましたが、私は聞きませんでしたので、世の中の様子はさっぱりわからず、配給米は往復六キロの道程を、草鞋ばきでズックを背負い、時折り上空に敵機が来ても隠れる所もない。ある時は、配給所で爆音を聞くと、係の人が急いで米搗きを止め、居合せた七、八人の人達を集めて隠れさせ、敵機の去るのを見てホッとしましたこともあり。八月六日の広島島の原爆はすぐ知れましたが、九日の長崎の被爆はわからず、二三日後に人伝に聞いて吃驚しました。それからは広三の安否を気遣って心が落着かず、大阪の我が家に帰って色々尋ねましたが、八月末に長崎の知人から、「原爆投下後、すぐに四、五人の学生が逃げて来られたが、その中に治村さんは居られなかった」との通知を受け、広三はやっぱり死んだのだと思いました。

今は毎日、ただ静かに広三の冥福を祈って居ります。(四五、一〇、二六)

(一二四) 医学部二年生 新開 常弘

遺族 北九州市八幡区幸神三丁目三十一 村富方

新開 ヤスエ

(前略) 今年こそ是非お参りする考えで居りましたが、他人様の家にお世話にな

って居りますので、又とうとう参列出来ませず、残念で御座いました。亡き常弘がさぞ待っていたことだろうと思ひ、八月九日は一日中悲しい思いで過しました。(後略)

(四五、九、五)

(一二六) 医学部二年生 菅 道之

遺族 香川県綾歌郡宇多津町二一七

菅 和人(父)

(前略) 御申越の思ひ出の手記は、書きたいことが山々ありますが、何分妻の病気に手がかかり、お手伝二人を雇っても小生と三人で手一杯、日常寸暇もありませんし、また頭の中が混乱して、その意に任せず、甚だ勝手ながら、此度は休ませて頂きます。

道之は陸軍の軍医依託生を志望し、町役場からもそれについて、小生の身許調査に参りましたが、最早終戦間際でその必要がなくなったのか、その儘になりました。

(四五、一〇、一四)

(一二〇) 医学部二年生 田中 淳一

遺族 佐賀県藤津郡嬉野町大字下野

田中 淳直(父)

美代(母)

【調記】 御父君は本年満八十二才の老医で、アンケートの健康状態欄には、「老体、徒食徒為、臍甲斐なき昨今です。自覚症状何もなく、余日を送って居ます」とあり、御母堂は七十三才、「多年心疾患を病む、時々良好の時は庭の草花をいじることもあります」と書かれています。心から御両所の長寿をお祈り致します。

(四六、二、二〇)

遺族 大阪府貝塚市海塚三四一五

平良マツガマ(母)

原爆の八月——八月は原爆——と繰り返す二十五年間、苦しい八月が過ぎて、凌ぎよいという秋が来ても、却って今昔の色々の事が思いめぐらされ、恐ろしい、憎みてもたらない原爆が、一人心を痛めます。

戦争さえなかつたら、原爆さえなかつたら、あつてもそれを落さないで済んでいたら——と、湧き出る云い様のない怒りと苦しみを繰り返します。

戦争は、軍隊と軍隊が戦う事とばかり思いこみ、罪のない学生たちに、この様な残酷なことが起るとはつゆ知らずに居た私、何と馬鹿だったでしょう。空襲がひどくなり、兵隊達が食糧に飢えて、乞食みたいにボロ服をまとい、麻の袋を肩に小刀を持ち、毒草でさえなかつたら、と道端の雑草を摘みながら、「小母さん、何か口に入れるものを下さい」と、毎日何名となく来るのを見ては、目の届かぬ遠くに離れている我が子も、こうして居るのかと思えて、自分の口に入れるのも忘れ、兵隊達に食べさせて元気づけて上げたりしながら、「浩よ、私のような人様にめぐり逢って、少しでも飢を凌ぎなさいよ」と、手を合せて祈ったことは数えきれませんでした。

終戦になって、その兵隊達も喜んで元気に引揚げて行き、今度は我が子も無事に帰って来るものとはかり思い、いつかいつかと待ちわびて、時々来る船の入る毎に、「今度こそは、今度こそは」と迎えに行つては、姿の見えないのがっかりして帰つたりしたものでした。それでもやがて帰つて来るからと、田舎から貰ったアズキと、僅かばかりの米を、浩が帰つたら赤飯たいて食べさせようと、いつ迄もいつまでも大事にしまつて待つていた私——今でも、アズキや赤飯を見る度に思い出します。

現代の科学の世の中に、神や仏はおろか、ましてや人間の霊などある筈がないと、多くの人に笑われるだけとは思いますが、私は事実あつた不思議なことを忘れられないのであります。昼間の激しい空襲に引き続き、夜まで空襲があつて、疲れて防空壕

を出て、家に寝た晩のことでした。

床について一眠りしたかどうか、ウツラウツラしている時、「お母さん」と確かに特徴のある浩の声で、私の左手の中指と人差指の二本を握りながら、一声呼びました。ハッと飛び起きて見たが誰も居ない。はては、と急いで雨戸をあけて外を見ても、お月様だけが煌々と輝いて、人の姿はなく、浩に握られた指の温りが、いつまでも残っているように思われました。今日に至るまで、あの声あの温りは忘れられず、ただ夢のように、不思議に思われてなりません。

数日たつて、日本は負けたそうだが、草一本も生えない焼野原になったそうだが、という噂が流れ、広島とも長崎とも教えてくれる人はなく、原爆が何日に落ちたかも聞かず、知らず、ただ「終戦、終戦」と、皆喜びさわぎました。

来る日も来る日も空襲にうちのめされ、今日明日の命とも知れず、日にちもわからぬままに、それでも浩は学生だから必ず生きて帰つて来ると、そればかり信じていた私——思えばあの晩が、八月九日の晩だったに違いないような気がします。

父親の死後は幼いながらも、苦勞も悲しみも又喜びも共にして、ひねくれもせず、希望に燃えて長崎に旅立つた浩ですもの、病気で死んだのなら諦めもつきませんが、無残にも虫ケラ同様に死なされた無念さは、離れていても母と子の血の通いで、私の心にひらめいたのだと思います。浩はきっと死の瞬間に、「お母さん」と叫んだに違いありません。可哀想な浩！この悲しみを何処に向つて、誰に訴えましょうか。こんな無残なことをしても、平気で居られるのは、この世の常でしょうか？

○ 神の降らす雨は自然と慈しみ 美しく滝となり川となつて
生き物たちに 潤いを与える

○ 悪魔の造りし雨は 自然を破壊し 生き物を全滅し
生き残る者の涙の 泉となる

○ 水は低い所に 自然に流れる 悪魔はつくりしそのものを
わざと投下して 全生物を破壊させた

○ 火傷やけどを身に受けた経験のない人は 他人の火傷の痛さを知るまじ

ましてやはたの人々の苦しみは——

○ 悪魔の国のエラ方と 神の国のエラ方が

笑顔で睦じそうな ヒソヒソ会話は

しもじもの者にはわからねど 今度は何のたくらみ会談かと

幼き子等をふりかえり見 恐怖の念おさえがたし

○ 原爆落された広島と長崎の 痛ましい姿のかたわらに

今なお苦しみ悶える人々の 居るのも知らでか

原爆の実験に成功した手柄は

花咲き競い匂うを称えるが如し

○ 誠の平和は慈しみのある善意 持つ人と人との間に

遠き近きによらず 平和こそは生れると思う——

○ 国のため世のためにと 善意一すじに志ざした若者達も

悪魔の原爆受けて破滅した 破滅した一人のその母は夢を見ました

○ 白鳥がたくさん浮んでいる 澄みきつた広い岸の周辺には

毛色の違つたハトがたくさん集つて 己が羽をぬいては

向う岸のハトとハトと互に交換しあつて 楽しそうにしている——

やがて交換がすんだらしく たくさんのハトは入り乱れて舞うかど見る中

次々に帽子をかぶつた学生にvari 一部の行列は

グピロが丘に行くよ——と手をふりふり行つてしまふ

他の多くの学生たちはハトになつて 遙か彼方に飛び去つて行つてしまつた

夢を見たその母は思つてみる——

希望も果されず、人生の幸せも楽しみも知らず、哀れ原爆の犠牲になつて消えた長

崎大学の若き学生達の御霊は、続く世代に平和をのみと、全世界の学生達が平和を誓

い合つて、平和をもたらすハトの姿となり、その母に夢を見せたのでしよう。

二十五年も年が重なれば、もう二昔、嘗ては唯ひたすらに世のため人の為に尽すべ

く、希望に燃えて一生懸命だつたでしよう。原爆の犠牲になられた長崎大学の先生方

や、若い学生達は、最早世の人々にも次第に忘れられて行くでしょう。その御霊たち

は全世界の平和を護る神となつて、長崎のグピロが丘の森に、或いは講堂にとどま

て見護っていることを、世の人々はどうかお忘れなく——。(四五・一〇・二〇)

(一三二) 医学部二年生 高木 劉一郎

遺族 福岡県飯塚市西町二一五六

高木 みち (母)

(前略) 見事な花を沢山お供え頂き、花の大好きだった劉一郎が、どんなにか喜んで

いることで御座いましょう。皆様のお蔭で、あの子は永久に慰めて頂くことが出来

まして、私も残り少ない人生となりましたが、何も思い残すことは御座いません。

(四五・八・一八)

(一三四) 医学部二年生 谷村 新一郎

遺族 大阪市生野区林寺新家町一七三

谷村 又太郎 (父)

(前略) 慰霊祭後の遺族懇談会でのお話によりますと、医大学生と勤労学生との間

に、政府が区別した取扱いをしていふこと、甚だ残念至極に存じます。

実例として私の息子の場合を申し上げますと、私は神戸の空襲が二回も続いたため、

鳥取県の田舎に疎開しておりましたが、八月六日に突然息子が所用でその疎開先へや

つて参りました。久し振りのこととて、その夜は積る話でとうとう夜を明かしました

が、翌七日にはもう長崎へ帰ると申します。母の盆の法要を京都の墓前でやってから

帰つてはと申しますと、新二郎は、「普通の補習授業と違つて、一日も早く卒業して

足りない軍医を補充するために、文部省の命令で夏休みもせずに授業があつているの

だから、悠々閑々と休養する訳には行かない」と強く云い張りますので、私も尤もと

考えて帰すことにしました。ところが、広島原爆で切符を売らないことが判つたの

で、私は更に益まで待つように申しましたが、国の為に一日も早く医者にならねばな

らないと申して、山陰回りで七日に出発しました。多分九日の朝長崎に着いたと思います。そのまま登校して原爆にやられました。まるで死に行つたようなもので、その心情は、「母の法事を放つておいても、国の要求する勉強に努める」ことにあつたのです。勤労働員学徒と少しも變りがないと思いますが、如何でしょうか。

二伸、慰靈祭参列の折は、小曾根様に色々お世話になり、私の老後の手内職の話を申上げたら、長崎県は貝の名産地だから、一応県に話してみようとの事でしたので、本日見本の製品を送りました。よろしく願ひ申上げます。(四五・八・一七)

(一三七) 医学部二年生 豊田正倫

遺族 東京都目黒区平町二—一—一八

豊田シズ(母)

暑中御見舞申上げます。今年は例年になき長雨にて、日々鬱陶しく、梅雨あけを待ちわびましたが、明けますと同時に、猛暑に見舞われまして、老人には仲々凌ぎ難い季節でございます。折角二十五周忌の御案内を頂きましたが、何分にも老人且つ遠路のこととて、今年も又失礼致し、当日はこちらより謹んで遙拝させて頂き、諸霊の御冥福を祈らせて頂きとう存じます。合掌

二伸、過日は思いがけなく浅沼先生が遠路態々当方までお運び下され、仏前にお参り頂き、御芳情のほど只々有難く感謝致して居ります。

浅沼先生には、正倫死去の当日お逢い頂きました御様子にて、色々当時の模様を聞かせて頂きました。正倫の同級生の方に初めてお目にかかり、懐しい気持で一杯でございました。先生の御立派な御様子を拝見致しますにつけ、又思いは二十五年の昔に遡り、いつまでも亡き子の忘れ難いことでございます。(四五・八・三)

(一四二) 医学部二年生 林

喜保

遺族 大阪北区若松町二三

林キ又エ(母)

喜保は長崎医大入学以来、毎週一、二回手紙をよこしました。二十年三月までの分は、家の罹災で消失しましたが、その後の一部と、父より出した手紙を転載させていただきます。

喜保より両親への書簡

その一、生家の罹災を聞き(昭和二十年三月二十二日付)

お父さん、十九日付のお手紙只今読みました。十四日の敵機来襲により、遂に来るべき時が来ました。僕が二十年間住み馴れた懐しの家、今の僕にとって最も楽しい帰省先が、遂に敵弾のため、悲しや灰燼と化しました。

お父さんからの手紙を拝見した時、僕は気を静めようとしても静まらず、寝ようと思つても家の在りし日か思い出され、さらに一カ月前に帰省したのが最後であつたかと思えば——もはや書けません。大阪への最初の空襲によつて、懐しの我が家はなくなりました。何と傍いことでしょう。然しお父さん、お母さん、お祖母さん、よく無事でいて下さいました。そして今長坂の伯父さんの家に居られると承つて、僕は本当に安心しました。

お母さんは、お父さんが警察署に出勤の不在中であつたのに、少しも騒がず、慌てず、一番大切な身体に傷一つつけず、あの防空壕に無事避難されたことを知り、嬉しく思つて居ります。殊にお父さんの救護団副団長としてのお仕事、町内会長としてのお仕事、その後始末のお忙しき、目に見るようであります。今でもすぐ帰省出来ませんが、暫らくそちらに居れとお言葉に従つて、長崎に止ります。お手紙では僕の本がすっかり焼けたので、僕がどう思うかなど書かれていましたが、お父さん、僕はお父さんの子供ですよ。僕は習つた学問は頭の中にたたみ込んでいますから、今後本など余り参考にしなくても、困ることはありません。常に交る御筆蹟や文章など

から、お元氣な様子がよく判りますから——。私も弱気を起さず長崎で頑張ります。総夫伯父さんによるしくお伝え下さい。

その二、最後の帰省から長崎に帰つて（昭和二十年七月十五日付）

拜啓 無事下宿に安着、大学及び下宿は無事、僕の帰省している間は殆んど空襲ばかりで、授業は殆んどなかったようです。よい時に帰省せるものかなと、自分で感心しています。大学では今度から空襲警報でも授業することになりました。又防空当番と云つて、毎晩代りばんこに学内に宿直します。僕は本日（十五日）午後九時より、明日午前七時迄の分に當つて居ります。

今度帰学して吃驚したのは、この七月から臨床の講義が全部あることです。参考までに書きますと、診断、病理、薬理、外科、耳鼻咽喉科、内科、小児科、皮膚科、精神経科、泌尿器科、レントゲン、婦人科、眼科、衛生、法医学等です。随分ふえたので忙しくなります。そしてこれまでは午前八時から午後四時まででしたが、八時から五時までに延長されます。

学友中にも戦災者が増えました。長崎は暑いです。シャツを着替れば洗濯をせねばならず、家にいた頃の幸福が感じられます。家からこちらへ帰つた当座は、どうも腹が減つてなりません。お父さん、お母さん、お祖母さん、身体を大切にしてください。又お知らせします。

その三、大学の爆弾罹災後（昭和二十年八月五日付）

八月一日の空襲により、我が下宿及び病院の一部は遂にやられた。下宿より十米足らずの地点に投弾した。然し僕は大学の基礎の方に待避していたため、怪我一つせず元氣である。御安心下さい。

先頃より食事をしている西田宅へ下宿することとなり、本日漸く荷物を運びホツトしている所、幸に荷物は余り損失はなかった。ただ困ることは、フトンにゴミ及び木片等が深く附着していること、掛けておいた聴診器のゴム管が少々痛んだことである。然し穴は開いていないようだ。日本刀は無事、但し近所にまだ時限爆弾があるので油断は禁物、帰省しようかと思いましたが、只今汽車旅行は相当危険のようです。

ら、今少し様子をみてからのことにし、暫くは長崎に頑張る積りです。病院の方も後始末を終つた様子で、明日より授業開始、僕も明日から登学の予定です。市役所に行つた帰りに寮に立寄り、小為替、手紙、小包を受取りました。ありがとうございました。僕が長崎に来てからの八カ月間に、お父さんから来た手紙を整理したら、全部で五十八通ありました。只々親心に頭が下ります。お母さんに縫つて貰つた白衣を着ようか、着ないで残しておこうかと迷いましたが、矢張り勿体ないので当分着ないで、非常持ち出しにしました。

昨夜は非常な嵐であつた。気温も二十五度以下、朝は涼しかった。夕べはなぜか楽しい夢を見た。家に居て、父上、母上、祖母上と一緒に御馳走を戴いている所であつた。魚あり、酒あり、大変うまかつた。然し夢は夢である限りに於いて楽しい。夢から覚醒する時、悉く脆くも破壊し尽すのである。夢からさめて現実に戻つた時、悲哀を感じるのである。

四時頃空襲警報が出たがすぐ解除、では又後便にて、呉々も御安心の程を、弱氣を出さずに断じて頑張り抜かむ、我も日本男子なり。

父より喜保への書簡（昭和二十年八月十八日付）

八月十五日正午を期して大詔喚発せられ、大東亜戦争は茲に終結を見るに至つた。事既に茲に至る。噫！悲しい哉。されどこの上は徒らに過去を語るを避け、唯々承詔必謹、以て大御心に副い奉るようになすべきである。

八月六日に敵は広島に原子爆弾を投下し、更に九日には長崎にも新型爆弾らしきものを投下したとの記事が、十一日の新聞に掲載されたので、父はお前一身の安否に關し、実に生れて初めての非常な心配の日を送っている。そのため先日來、新下宿（西田様）宛に度々手紙を送り、お前の安否を尋ねた。然し未だ一度も返事を受取っていない。

その後毎日の新聞を仔細に見ているが、広島島の被害状況は度々報道されているのに、長崎に關する記事は少しも掲載されていない。十七日付の新聞に、「大詔を拝して」と題する首相放送が掲載された中でも、「慘禍は一回一個の爆撃により都市の大

半が破壊され、一挙に数十万の人命を殺傷した——とあったが、長崎については全然言及されていない。これらの点から考えると、長崎に投下されたのは新型爆弾ではなかったとも推察され、聊か愁眉を開くことを得た次第である。

但し右は新聞記事による父の判断であつて、敵は度々長崎地方を空襲しているらしいから、お前一身はこれで充分安心出来たという訳ではない。依然としてお前自身からの通信を、首を長くして待っている。

急転直下、この様なことになつたが、大学の授業は今後どうなるであらうか、このまま休学となるのか、それとも授業を継続する方針なのか、この事も知りたいと思つている。若し休学となれば、勿論お前は帰省するだろうし、仮りに今後授業が継続されるにしても、一時は帰省するかも知れないので、次に帰省に関する諸注意を書いて送る。

(一) 成るべく大阪方面の学友と連れ立ち同行すれば、万事に心強い。

(二) 旅行は当分徒歩連絡を覚悟せねばならぬから、リュックサック一個程度の軽装がよい。靴のみでは足に豆が出来るので、草履、下駄など用意すること。

(三) 食料が大切、米を持てるだけ持つこと、途中での炊事の用意、即ち鍋、マッチなど。水筒の水もこの場合必要。

(四) 若し夜間に徒歩連絡することになれば、月明の際に限り歩くこと、暗夜の時は危険であるから無理するな。

(五) 途中旅館に泊る場合は、弁当を作れるだけ作つて貰うこと。

(六) 葉書、封筒、便箋を少々持ち、萬一父に通知することがあれば、その所在地を詳しく書いて速達で出すこと。

(七) 門司、下関間はまた機雷の危険があるから、関門トンネルを利用すること。

(八) 雨天の時は近くの駅などで夜を明かすことがあるかも知れぬから、洋傘一本と、風邪をひかぬようにジャンパーを用意すること。

(九) 貯金は全部引出し、四つ位に分割して上衣のポケットや腹巻に入れ、必ず身につけておくこと。

(五) 世の中には利己的な不親切な人もいるが、又同情心の深い親切な人もいる。断られても決して失望落胆せず、待っていれば親切な人に必ず行き当るものである。

以上は休学による帰省の場合の注意を、氣着いたままに書いたのである。何分急転した世相になつたのであるから、途中はよく人々に注意して下さい。父はこの際お前の無事が最大の願ひである。この頃はお前の身の上以外に何も考える事が無い。郷里では父と母、そして祖母もお前の無事を祈り、且つ健全な顔を見ることを願ひている。帰省のことは学友とも相談して、誤りのないようによく判断して、困苦に耐えられるだけの用意をして帰らなさい。

【調附記】この手紙は長崎被災のため、発信先へ返送されたそうで、この文を書かれた林重雄氏は、昭和四十三年六月二十六日に他界されたとのことである。

(一四四) 医学部二年生 東 秀 昭

遺族 熊本市秋津町秋田二一九一五

東 国 造(父)

(前略) 私事老年にて心身共に限界に來ましたので、後は万事愚息に任せ、表記の処に転居致しました。

本年八月九日の二十五周年忌にも、心不全、坐骨神経痛などにて参上出来ず、自宅にて礼拝致しました。今年初め頃愚息が長崎に参詣し、慰靈碑の写真を撮つて参りましたので、これを引伸して仏前に置き、毎日拝礼して居ります。(四五・九・七)

(一四九) 医学部二年生 三 村 寛

遺族 岡山県新見市新見一八五八

三 村 仲 二(父)

泉下の兄への手紙

京都市北区衣笠赤坂町一

湖 海 妙 子(妹)

兄さん、こう呼びかけなくなつてもう何年になるでしょう。あなたと新見駅のホー

ムで別れたのは、昭和二十年の七月末でしたから、もう二十五年以上の年月が流れたのですね。あなたはあの時長崎医大の二年生、やっと二十才そこそこでしたのね。今うちの息子が十五才、そこらあたりで見かける大学生達が、恐らく二十才位でしょうか。あの人達と、私が「兄さん」と呼んでいるあなたが同じ年代だなんて、どう考えても変なのです。死んだ人は年をとらない。あれから二十五年生き延びた私が、「兄さん」と呼びかけるのは何だか変ですけど、やはり兄さんと云わせて頂きます。

兄さん、あなたが、あの忌わしい原爆で、私達の処から永久にいなくなってしまうから、私達の家も、日本の国も、世界のあちこちも全く変わりました。少くとも私の意識の中では、全く変ってしまいました。私は妹が大人になって、別々の家を持ったことなど小さなことです。それよりも大きなことは、兄さんが生れてから大学生になるまでの世の中と、昭和二十年八月以降、つまりあなたが亡くなってからの世の中とは、色々なものの価値観が、全く変ってしまったということなのです。

勿論一寸も変らないものだってあります。人の見方や受取り方も、干差万別でしょう。けれども私が兄さんに対する時、どうしても違ふと云いたいのです。

あの頃兄さんが嫌っていて、それを嫌うことが大きな罪悪であったもの、戦争や軍隊に関するすべてのもの、つまりあの頃美德であったものが、突然悪徳に変わったのです。それをあなたは全く知らないで、帰らぬ処へ行ってしまったことが、私にはどうしても一つの大きなひっかかりとして、いつまでも残るのです。

兄さん、あなたは軍人が本当に嫌いでしたね。あの戦時色華やかなりし頃にしてそうでした。今から考えると、あの頃そういう考え方は全く危険その物でした。生命がかかっていたのですから——。戦後続々と出て来た反戦思想や軍国主義批判、そんなものではないのです。そのあなたの大嫌いな軍隊が、あなたの死後数日にして全く否定し去られたのです。私が「兄」という語を頭に浮べる時、口に出す時、残念などという生半可な言葉で不満なばかりに、思い出されるのはその事なのです。もしあれ程の変化がなかったら、あなたの生きていた時代と同じ形の思想が、現在でも大手を振って通っているならば、私はこれ程までにあなたの死を悲しみ、憤らなかつ

ただろうと思います。勿論肉親の死を悲しむ情は人並にありますが。が私にとつては、もっと大きな感情として、それを思うのです。戦争のない、軍隊のない日本に、あなたが一日だけでも生きられていたら——と。

私は現在京都の某女子高校で、週四日国語の授業を受持っています。夏休みの前頃、三年生の教室で、昭和二十年の二月頃に作られた金子光晴の「しゃぼん玉の歌」という詩を読みました。

しゃぼん玉は どこにいった

かるがるとはかない ふれもあえずにこわれる

にぎやかなあの夢は どこに行つた

甘やかな踊りや歌の つれて行かれたさきは

どこなのだ (中略)

おまえたちはいま どこをどんでいる

おまえたちは どこを空を漂う

しゃぼん玉よ しゃぼん玉よ (下略)

という、荒廃した戦時下で、総ての美しいもの、尊いもの、人間的なものが失われていった悲しみをうたった詩なのですが、生徒達の疑問は、「何故その時、若者達は戦争反対を叫ばなかったのか、何故そういう暴力に対して、抵抗して立ち上らなかったのか」ということに尽きますのです。私は今と全く価値観の違ふ、反対の考え方の横行していたあの時代を、どう云って彼女達に理解させるのか、全く判らなくて口をつぐんでしまふと同時に、兄さんの事を痛い程悲しく思い出していたのです。そしてその悲しみは、「第二次世界大戦史」を読む事によって、何とも云えぬ憤りへと変つて行ったのです。

これはR・C・Kエンソーというイギリス人によって書かれたものですが、それによると、昭和二十年七月二十七日(それはあなたが新見に最後の帰省をして、例によって妹の私と陽気な兄妹喧嘩をしていた頃でした)に、日本は、降服を勧告する連合国のポツダム宣言を拒否していたのです。どう見たって勝目のないいくさ、国民に

は何も知らせないまま、どうしようとしていたのか。若しあの時勧告を受け入れていたならば、原爆を見ずに済んだのにと思うと、居ても立ってもいられない腹立たしさを覚えるのです。兄さんだけではなく、長崎・広島での多くのむごたらしい死を考える時、残念とか、憤りとか、そんなありきたりの云い方では表現出来ない、何物かに対する限らない憎しみが、フツフツと湧き上って来るのを、止めることが出来ないのです。そして生徒達の、或いは戦争を知らない世代の私達戦中派に対する、戦争を阻止しなかったという批判に対して、又安易に平和を説き戦争を否定する人達に、そしてイデオロギーの上だけで原爆を論ずる輩に対しては、口をつぐむ以外に道のないことを、益々深く感じるのです。

X X X

兄さん、私は今こんな時代に生き、こんなことを考えているのです。私と同じ次元であなたを考えることの不可能はよく承知して居ながら、やっぱり私はあなたの考えが、あなたの言葉が聞きたい。あなたはあの頃と同じように、「何だ、女の癖に生意気だぞ」と云って怒鳴るでしょうか。そうかも知れませんが、「死ななかつたら俺の世界だったのに、残念だナァ」と、溜息をつくでしょうか。ひよつとしたら、「ああ邪魔くさい世の中なんだナ、死んどいてよかったヨ」なんて云うかも知れませんがね。

音楽や野球が好きで、早くお嫁さんが欲しいって云っていた兄さん。「お前と俺と代ってたらよかった」と云い云いしていた兄さん。惨い事や猛々しいことが嫌いで、美々しいことが、やさしいことが好きだった兄さん。妹の事をいつでもポロクソに云いながら、しかし内心ではきつと認めてくれていた兄さん。あなたの事を憶い出す時、私は決して感傷的になつてはいません。むしろ私なりに冷静で、沈潜して行くような気分なのです。それは私が感情に乏しいからなのかも知れませんが、それよりもあなたの死が、あなたと同じようにそこで亡くなられた人達の死が、決して感傷の対象となるようなものではなく、個人的な悲しみに止まるような、小さなものではないからなのではないでしょうか。私達人間を叩きつぶす大きな力に対する限らない憎しみ、その犠牲となられた人達を傷む悲しみが、余りにも大きくて、安価な感傷などは

這入り込む余地がないのだと思います。

京の秋の夜も大分更けました。明かるい電灯の下で、暖いお炬燵にあたりながらこれを書いていきます。あの頃は電灯も暗くして、何も彼も物資は欠乏の極みでしたね。二十五年の年月はこうして私を変え、世の中を変えて過ぎて行きました。

仙界に居るのか、幽界に居るのか、ともかく私達この世の人間とは、全く境を異にする処にいる私の兄さん、あなたに向って私は二十五年ぶりのお便りを書きました。

こんな手紙のおしまいは、どんな風に書くのでしょうか。私にはわかりません。さよなら
(四五、一〇、二九)

(一五三) 医学部二年生 百崎 知次郎

遺族 佐賀市水ヶ江町三丁目一〇一二〇

百崎 フシ(母)
岸川 つゆ子(姉)

(前略) 今年の原爆忌も御案内頂きながら、母が病臥のため、心ならずも出席出来ませんが、残念に存じております。母も老齢ながら、何とか自分の事だけは致しておりましたが、この六月初めからとうとう寝つきまして、心臓病のため、今日明日と思う程でございました。二十日間位は水ばかりで、よく体が保ったものと、今でも不思議な気が致します。

最悪の状態にあります時、「知次郎さんが見えた」、「知ちゃん、知ちゃん」とよく申しますので、いよいよお迎えに見えたのではないかと思ひ、覚悟しておりましたが、お蔭様でまた食欲も出始めまして、今では起きておりました頃ほどに戴けるようになり、声も普通に出るようになりまして、記憶も意識もはっきり致し、少しも耄碌も致さず、ただ寝たきりではありませんが、この調子では寢床に坐れるようになるのではないかと、本人もそれを楽しみに養生致しております。

(四五、八、二八)

(二五四) 医学部二年生 森 芳 信

遺族 鎌倉市西鎌倉二一九一三

森 孟 芳 (兄)

残暑御見舞申上げます。早いもので原爆二十五年を経過しました。生きていれば私も四十八歳の働き盛りだった筈、と感無量です。
(四五、八、一一)

(二五六) 医学部二年生 山 田 邦 久

遺族 大分県日田郡天ヶ瀬町本城

山 田 邦 子 (母)

四方の山の紅葉も少しづつ色づいて来ました。私の家は久大線から入った大分県ですが、熊本県境の下釜ダムの近くの山村で御座います。

終戦後二十五年の間に急速に文化は進み、今は田舎でも軒並にテレビのある有様ですが、終戦当時は夜だけしか電気が来なくて、昼間はラジオ放送も聞かれず、二十年の春頃から、愈々敗戦の色が目立ち、毎晩のように灯火管制のサイレンが鳴るようになり、八月九日に長崎方面に大型爆弾が投下されたことはわかりましたが、まさかあんな恐ろしい原子爆弾が浦上に落されて、医大が全滅したということは、爆弾投下後十日目にやっと知り、夢かとはかり驚きました。

私の子供は上から三人続いて男子で、長男は学校卒業と同時に現役に取られ、八月初め頃は南方の戦地にいましたが、音信不通で生死も判らず、次男の邦久は医大二年生で長崎に居り、三男は現役で鹿児島方面へ行き、幼い弟と妹だけがまだ在学中で家に居りました。邦久は、兄も弟も出征し、自分も依託生に合格したので、軍医を目指して一生懸命勉強しておりました。

二十年五月に主人の母が病気で亡くなりましたが、その時邦久は帰宅出来なかったもので、お世話になった大切なお祖母さんの初盆には屹度お詣りに帰りますと、八月二十一日お盆の日付まで帳面に書いて行ったのに、お盆になっても戻らぬので、主人は

気にかかりながらも、多分負傷者の手当などで忙しいのだろう、と申して居りました。思えば可哀想に、それは死後十日も経った後のことでした。

お盆がすむと早速、主人と親戚の人と二人で長崎に行きましたが、想像以上の悲惨な有様で、浜口町の下宿にでもいたら、お骨も何も判らなかつたでしょうが、丁度授業中だったそうで、先生は教壇で、生徒は机にいたまま、立派に白骨となっていたとのことでした。どの骨か子供の骨が見分けもつかぬまま、皆さんの遺骨を少しづつ紙の袋に入れて持ち帰りました。「邦久が今帰ったよ」と紙袋を渡された時は、居並ぶ者みな、声を上げて泣いてしまいました。

今から思えば死の予感でもしていたのか、あと何回も帰れそうにないと云うので、帰った時は出来るだけ御馳走などしておりました。最後に帰った二十年六月には、下宿の小母さんが可哀想だと云って、味噌漬をお土産に喜んで出かけましたが、今もその時の後姿がありありと目に浮びます。

それから二十五年、主人は、母の死、子供の死、自分の追放等で、色々悲しみが重なり、その為か三年後に病気で亡くなりました。長男と三男は戦地から無事に帰り、幼なかつた弟も妹も恙なく成長して、今私は長男夫婦と孫達に囲まれた平和な生活を致しております。
(四五、九、五)

(二五八) 医学部二年生 山 本 克 弘

遺族 島根県安来市黒井田町一四三一

山 本 重 幸 (兄)

私は昭和十八年十月応召、浜田十一聯隊に入隊、槍部隊に編入されて、浙江省嘉興に補充要員として送られました。槍部隊の兵力は米軍の進攻に備え、杭州湾沿岸から上海附近の陣地構築に当たりましたが、八月五、六日頃、槍部隊に動員令が下り、俄かに騒がしくなつて、新しく被服が支給されました。驚いたことに、八月の猛暑だ

というのに、支給されたのは真新しい冬服なのです。我々は「きつと寒い地方に行くのだろう、満州かシベリヤか」など話し合いました。

そんな或る日（八月十日の朝だったように思います）、私が目を覚ますと、既に白々と夜が明けかかっています。その瞬間でした。遠い内地にいる筈の弟の顔をはっきり見たのは、何故か真赤に火照った顔をしています。何故だろうと気にはなりませんでしたが、軍務の忙しい儘に、いつとはなく忘れておりました。それから五、六日後、偶然現地の新聞の片隅に小さく、「長崎に特殊爆弾落つ」との記事が出ているのを見つけました。しかしこれだけでは、どうしても弟の被爆とは結びつかないので、今から考えると本当に迂闊でしたが、この事も軍務の忙しさやら、終戦の昂奮やら、長かった抑留生活の苛立たしさの中で、又忘れともなく忘れてしまいました。弟はどんなにか私に被爆の事実を知らせたかったことだろう、と後では思ったのですが――。

高校では文科だった弟が、志望を変えて長崎医大に行ったことは、妻からの便りで知っていましたが、夏休みで帰省中だと思っているし、どうしても弟の被爆とは結びつかずに、寧ろ私には、当時北鮮に居て元山に入隊したと聞いていた弟武敏や、仏印に征ったという弟の文彦の身の上が、案じられていました。

八月十五日の陛下の玉音放送は、司令部の営庭で、師団長以下最敬礼の下に聞きました。私には終戦の放送であることが、臆気ながら汲みとれましたが、戦友達は最後まで、何が何やう判らずじまいだったようです。兵室に帰ってから、私が「負けたんだ」と云ったので、激昂した戦友に袋叩きにあいかける一幕もありました。

終戦のどきどきで、十三軍から命令が届かないまま、四、五日して遂に部隊長の決心で、全部隊は嘉興駅に集結していた軍用列車に乗り込み、思い出多い嘉興を後に出発しました。揚子江を渡り、津浦線を北上しましたが、蚌埠で列車を止められてしまいました。翌二十一年二月まで蚌埠で抑留生活、三月上海に集結、やっと復員船に乗ることが出来、三月二十九日夜、夢にまで見た我が家に帰り着きました。復員途中もひたすら、未だ戦地に抑留されているであろう弟の安否を気遣いながら――。

人気がない家の様子を訝りながら、仏間に入ったところ、父が一人、白い包帯を頭にぐるぐる巻いて寝ていたので、先ずそれに驚きましたが、呼び起した父から、克弘の被爆死を聞かされた時は、体中の力が一べんに抜けました。

翌日、戦地で徒然に手造りした紫檀の箸箱と箸を、せめてもの土産のつもりで父に渡したところ、「折角だが戦争の思い出になるような物は持ちたくない」と云って、仏壇の抽出しの奥深く仕舞い込んでしまいました。私は父の心の痛手の深さを思い、心ないことをしたと後悔したことでした。

克弘の人となり其他については、「忘れな草」第三号に掲載の亡父の遺稿、親友深田氏や弟武敏の手記で詳かです。私は省きます。私が何より嬉しいのは、彼が良い友達を持ち、沢山の友から愛されていたということです。

昨年八月九日に、自宅で二十五年忌の法要を営みましたが、親友深田俊雄と西村紀一郎の両氏が、遠路わざわざ出席下され、弟と共に校歌や寮歌の吟唱で盛大な追悼会となり、賑やか好きだった克弘の霊も、さぞ嬉しかったことと思えます。

私は長兄で本年六十一才。今でも幻に見た真赤にほてった弟の顔を、忘れることが出来ません。被爆当時、深田氏が病理学教室の焼跡から、弟の遺品の数々を奇跡的に掘出して下さったこと、又私が遠く千里を隔てた浙江省嘉興で体験した事実からも、私にはどうしても、死によって一切が消滅するものではなく、生命の永遠の存続と我々の個性は、死後の世界まで及ぶことを、固く信じないではおられません。

いつの日か、私も弟克弘の待つ祖先の世界に迎えられるでしょう。せめてそれまでを私なりに、少しでも社会のためにお役に立つようになりたいと、常に念願しております。

弟は生きている 鳥取県米子市米原六八二 菅 田 貞 子（姉）

カコちゃん、貴方はいつまでも私の心の中に生きている。

幼い時から話上手だった。どんな事でも面白く話しては私達親子を笑わせて、家のマスコットだった。正子嫂さんが家に嫁られた時、二人で障子に穴をあけて覗いた時も、「ワァー、あげなハイカラさんが家に来たら、ヨーニ貧乏になってしまっ

に」と云って、母さんに窘められたことも忘れられない思い出。あの時小学三年の私と一年生ホヤホヤの貴方と、二人で仲よく並んで写真をとったね。母さんに連れられてよく床几山に遊びに行った。あの時も裏門から嬉々として飛出した貴方が、自転車にはねられて転んでも、泣かなかつたよ。スマイルを取ろうと崖から滑り落ちて、足に穴をあけて泣く私を連れて帰ってくれたのも貴方だったよ。未だに残るその傷跡をそつと撫でてみる。貴方の可愛らしいあの頃の頬を撫でる想いで――。

松江に行つても、貴方と六年間手を取り合つて通つた附属校が、今はないのが何より淋しい。兄弟三人で下宿した頃、山崎の小母さんにも「カコちゃん、カコちゃん」と何時も可愛がられたものね。友達に、「山本さんの弟さんは可愛い子ね。ホッペタに日の丸をつけてたよ」と云われ、赤チンを丸くつけて悠々と登校していた中学一年の頃、よく厳格なボクちゃん(兄)に叱られたね。貴方は少しズボラで簿記をつけなかつたから――。ボクちゃんに小遣いを貰つて一緒にセンペイを食べたのも、チョコレート紙が知らぬ間に缶一杯になって大騒ぎしたのも、あの頃の楽しい思い出だつた。そろそろあの珍事、私が一週間の家庭寮生活の留守中、お寝小が出て、これは大しくじりと次の晩から洗濯扱でとめて寝た、と私に報告して笑させた貴方は、大真面目だつた。見たら隣の部屋一杯にフトンを手干していたっけ。

嫁して二カ月足らずで、夫を戦地に送つた二つ違いの姉の私を、絶えず励ましてくれた貴方だつた。お酒の好きな貴方は、私の家に来るとドブロク呑むのが楽しみだつた。大好物のカニを肴にしては機嫌よく、俺は何時も何処でも食べはぐれんよ、若松の女性が皆タダで食べさせてくれるから――と面白く若松の話をしては、心沈みがちな私を勇気づけてくれたものね。

貴方の帰省が最後になつたあの日、私は貴方に会いに大好物のドブロクをさげて里帰りをし、一夜親子四人で話し興じた。その頃の貴方は、幼い頃のカコちゃんとは大分違つていた。あれほど雄弁家だつた貴方が、心なしか少し無口だつた。大人になつていたのね。出発の朝は、母さんの心尽しのカニの味噌汁に、貴方は舌鼓を打つた。珍らしく両親揃つて駅まで送つて行かれたのも、虫の知らせだつたのか。気丈な母

の顔、それに比べてゴム草履をはいた父、未つ子を送る淋しさからか、肩を落している。米子に帰る予定の私も一緒に、四人で和田原の長い道を無言であるいた。安来駅の近くまで来た時、向うからバスが来た。駅まで送つてやればよかつたのに、何であの時私はバスに乗ってしまったのか――。「カコちゃん、うちはこれで帰るけん、元気で頑張つてよ。又帰つて来ないね」。とっさに飛び乗つたバスが、貴方と私を永久に引離そうとは夢にも思わず、残酷な運命の足許に来るとも露知らず、手を振り振り東と西に笑つて別れたあの白い和田原の道は、いつ迄もいつまでも私の心に残る。カコちゃん、夫の戦死は覚悟していたが、あの時は既にヒ島で散華しているとは、二人とも知るよしもなく、貴方は「俺がついていてあげるけん」と云つてくれた。

貴方の悲報を受けてから、「カコちゃん、何で死んでしまったの」と、幾夜一人で枕を濡らしたことが。「克弘が死んだと思えば身の置き所がない。遠い所へ行つていゝ。又いつか帰つてくれると思わな」と、悲しむ母はめっきり老いた感じだつた。それから数年そう思い続けて、貴方の許にいかれたでしょう。

その秋、夫の戦死の報が入つた。あれだけ姉の身を案じてくれたのに、くじけちゃすまない。私は強く生きねば、散華した人の志を無にしてはと、大切な二人を喪い、崩れ落ちかかる心を取り直し取り直し、新しく一步一步踏み出した私でした。

カコちゃん、貴方は幸せ者だよ。皆から可愛がられた。そして亡くなった後まで、あの人もこの人も、貴方を慕つて来られた。いつかそつと貴方のお墓参りに来て下さつた美しい人に出会つた時、私は貴方の短い人生は、本当に美しいものだったと知つた。

合掌

(四五、九、九)

(二六〇) 医学部一年生 青山賢治

遺族 神戸市長田区五位ノ池町三丁目四一八

青山乙四郎(父)

(前略) 老人のこととて満足な御返事も出来ず、お手数をかけ申訳ありません。私は本年満七十八才、特別の病気はありませんが、老人ですので思うようになりま

せん。家内は七十七才、余り丈夫な方ではないので、注意している状態です。賢治は独り息子で、娘二人を他家へ嫁がせた後は、私共夫婦二人きりで、淋しく余生を送って居ります。(後略) (四五、一一、二二)

(二六一) 医学部一年生 浅井 明

遺族 名古屋市中村区名楽町二一五八

浅井 文子(母)

(前略) 七月初めに長崎の友達が参りまして、今年は二十五周年忌だから是非一緒に長崎へ、と申しますので、私もその積りで居りましたが、酷暑のこととて気分が勝れず、今のところお参り出来そうにございませぬ。どうか皆様によくお伝え下さいませ。(四五、七、二三)

(二六二) 医学部一年生 浅山 明生

遺族 兵庫県西宮市菊谷町六四

浅山 富雄(父)

【調記】浅山様は本年満七十五才、昨年十一月二十二日付のアンケートの御返事には、「まず良に近き状態、但し目下入院中」とあり、奥様はつい一カ月前の十月六日に御逝去と書かれていました。一日も早く御退院のほどお祈りすると共に、奥様の御冥福を心からお祈り申し上げます。(四六、一、一〇)

(二六三) 医学部一年生 伊藤 裕夫

遺族 鳥取県倉吉市下余戸

伊藤 しげ子(母)

(前略) 早くも今年は二十五周年忌に当たりますが、夏の暑さでは到底参列も叶いませんので、せめてもう一度裕夫の最後の地を訪れ、先生の御誠意のこもった銅板名碑も拝みたく、思い切ってこの春長崎へ出かけてみました。

グビロが丘へ参りますと、麓の学生会館で卓球をしておられた学生さんが、案内してやろうとのことでしたが、石段の修理のため、慰霊碑のある丘の上へは登ることが出来ませんでした。花屋さんで買った白桃の花は、丘の麓に立てましたが、家から持って行った線香は焚く場所がなくて、残念でしたがとうとうそのままになりました。

暫らく丘の下に立って、裕夫や学友の方々の御冥福をお祈りした後、銅板名碑の安置してあります記念講堂に行き、碑の前に立って、心残りのないまでに長々とゆっくり心経をあげて、御一同様の御冥福を祈願致しました。もう何も思いません。

その夜は長崎駅前的小林旅館に一泊し、翌日は予定の通り別府へ行きましたが、持病の喘息(?)で呼吸が苦しくなり、ただ一回地獄めぐりをしただけで、入湯もせず病に寝ておりました。私には以前からこの病気がありまして、或るお医者様は肺が萎縮しているからだと言われますが、この様に苦しくては、もう二度と長崎へはお参り出来ないと思います。どうか今後ともよろしくお願い申し上げます。

「忘れな草」の御本ありがとうございました。私はこの本を読みますと、又あの当時にひきもどされ、暗い気持ちになって泣かされます。私は靈魂の不滅を信じます。裕夫は天国へ昇って、楽しい楽しい世界で私を待っているだろうと、それを想像して自らを慰め、ただ冥福を祈ってやろうと考えて居ります。

人間は、死んだ後は例外なく幽界に入れられますとか、此処で人それぞれの罪をさばかれて、自分の位置がきまりますとか、未来は決して自由に自分の住所を定めることは出来ないとしてあります。私は先の世で、愚息と共に先生にお目にかかるのを、楽しみに致しております。(四五、八、二七)

(二六七) 医学部一年生 石橋 忠

遺族 長崎県南高来郡小浜町木場三二〇

石橋 ナガキ(母)

(前略) 去る八月九日、慰霊祭の後で催された遺族懇談会の席上で、あるお母様が申されましたように、唯今は生れたばかりの幼児の種痘禍にも、何百万という巨額の補償がなされる始末なのに、身命を賭して爆死した学生のみじめさが、如何にも気の毒でなりません。

忠は独り子でした。主人も十七年前に世を去り、今は私一人で淋しく念仏に生き、七十五才の長命を保っていますが、何のために生きているのかわからぬ有様です。

「忘れな草」第四号には何か一筆と思えますけれど、その当時私共は在鮮中で、親子別居致し、一年後に帰りましたので、忠の遺品は一物も御座りませんでした。

この様な訳で、この度は八月九日にグピロが丘に参拝した時の拙作二首をお目にかかけ、手記の方はどうかお許しをお願い致します。

○ 参拝の人は一様に年老いぬ 祭られし主は妻子なき学徒

○ うしないし子を思ふなり学びやに 年の頃似る正帽の友

(四五、一〇、二八)

(二六九) 医学部一年生 市川 幸男



遺族 福岡県久留米市梅満町九二七

笠 久恵(姉)

(前略) 一昨々年の夏、幸男の被爆現場を見たいと思ひ、長崎へ参りましたが、土地不案内のためお伺いもせず、慰霊碑にお参りしただけで帰りました。

幸男も亡くなりましたして早や二十五年、私共は終戦当時満洲に居りまして、内地の様

子は知るすべもなく、帰ってみれば、上の弟は戦死、下の幸男は原爆死、私共もまだ引揚前で生死不明、この間の母の心はどんなに辛かったことかと、しみじみ察せられ

ました。その母も今は亡く、私が幸男にとつて一番近い肉親となりました。

幸男は性質が至つて優しく、今生きていれば楽しい家庭をつくり、子供も二、三人は出来ていたであります。又私の力強い相談相手になっていただろうと、惜しまれてなりません。生々流転、生者必滅、会者定離とは云え、戦争のため、一発の原子爆弾で可愛いお子様方を亡くされた、年老いた御両親様方には、云い知れぬ悲しみであり、又そのために健康を害しておられる方々も、多いことで御座りましょう。どうか皆様が年金など戴けますよう、お祈り致しております。(四五、一〇、一)

(二七三) 医学部一年生 大西 俊夫

遺族 神戸市東灘区本庄町西青木本町

大西 ヌイ(母)

(前略) 俊夫は大正十五年八月九日の生れで、二十年目の誕生日に原爆を受け、あの世へ旅立ちました。これも何かの因縁でございましょう。

俊夫は独り息子で、外に子供はございませんでした。俊夫の死後は夫婦二人きりで淋しく暮しておりましたが、主人も五年前に他界致しましたので、今は私全くの一人ばつちでございます。しかしお蔭様で、今年七十一才なりますが、元気に過させて頂いております。(四五、九、二)

(二七八) 医学部一年生 川口 賢一

遺族 長崎県大村市寿古郷四八一

白木 コヨシ(実母)

(前略) 来る年も来る年も、八月になると忘れようとしても忘れられない、呪わしい日がやって来ますが、皆様のお骨折りで、永久に消ゆることのない名碑に吾が子の名を見ますと、生きているものに会っているようで、懐しさがこみあげ、涙ばかりでございます。名碑が原爆記念講堂ホールの壁に安置されまして、犠牲者達の御霊も冥土から、どんなにか喜んでいらっしゃることにございましょう。

大きな希望を抱きながら、彼岸に達せぬまま世を去った吾子たちが、余りにも可哀想なので、せめてお線香をあげて心静かに念仏を唱え、冥福を祈りつつ余生を送ることに致します。

合掌

(四五、八、二九)

(二七九) 医学部一年生 川崎 正之

遺族 鹿児島市真砂本町一一一五

川崎 栄之丞(父)

(前略) 去る七月九日の原爆記念日には、大勢の参列者にて、大変賑やかでありました由、私も心だけは長崎に飛びましたが、何分にも本年八十一才の高齢の上、一昨四十年十月より脳軟化症にて、右手右足の自由を失い、今日まで臥床中で御座いますので、参列出来ず残念に思っております。

不自由な右手で漸くペンを執りました。御判読下さい。(四五、九、一五)

(二八七) 医学部一年生 佐賀 章生

遺族 東京都杉並区西荻南一一一四二〇

佐賀 かほり(母)

佐賀 良平(弟)

一九六九年(昭和四十四年)八月九日、老母と私は医大関係の原爆慰霊祭に出席するため、この地を踏んだ。長崎は、母は二度目、私にとっては初めてである。最大の尊敬をばらう故郷生兄の最後の地に、今まで一度も来なかったのは何故か。その理由は自分でもはつきり云うことが出来ない。原爆が私の考え方に大きく影響したことはまぎれもない。その重みが逆作用して、もう見たくない、思いたくない、となったと云うべきか。兎も角私にはまだまだ生々しい。心には常に八月九日があったのだ。

慰霊祭にはまだ時間があり、大学の構内を浮遊した。建物は新しく、落ちつきはらっており、果して二十五年前、何かが起ったのだろうかと思わせた。守衛さんに聞くと、「もう当時の面影はありませんよ。あるとしたらあんなもんですかね」と、ほん

の一隅に整理された曲った鉄屑を指さした。

私は何となく、そんなつまらぬものを触ってみたくなくなった。故郷と時代を共にしたものの感触にうえていたのだろうか。だが時間とは恐ろしい。何もかも風化してしまつて、何も存在しない様にしてしまつてゐる。だが心は風化されたか。二十五年の流れに抗して、心は天に向つてほえ叫びたがっているのではないか。

受付を通つて教務室に通された。遺族会長の調来助氏はまだ来ておらず、細身の老教授(調註、これは筆者の誤認で、教授ではなく、補導係長の神谷宏太郎君)がひとり新聞をよんでいた。私達はどういうわけか連絡不十分で、七万円の遺族扶助料をもらえなかつた。

「新聞や官報にものせたのですがね。気がつきませんでしたか。でも、もう時効で文部省とかけ合つても無駄だと思ひますよ。」

「でも、受取らなかつた人に連絡をつける方法を取らなかつたのですか。」
「それがですね、住所を調べるのが大へんなのですよ。遺族の住所を倉庫からひっぱり出して、名簿に作つたのですがね。」

そう云つて老教授は、もう黄色くボロボロになつた当時の古い記録を持つてきて、自分達がどんなに苦勞して、この遺族会を組織して行つたかを説明した。その実直さは疑うべくもなかつたが、戦後もずつと住所の変わらない私達の部分が、なぜ欠落してしまつたのか。運命は最後まで冷たかつたなあと思つた。

慰霊祭は大学の裏手の丘の上で行われた。老母と同じ年代の人が、息子や孫に手をひかれて、丘の上へのぼつて行くのを見ながら、あらためて、二十五年間、どう思ひで生きてきたのかと思つた。

貧乏ならある程度がまんも出来よう。だが精神的な支えを失つた人々が、淋しさをこらえ、どんな苦しい思いで生きてきたかは、失つた者のみが知るものだろう。

読経の声を聞きながら、死んだ者と同じ様に、ここにこうして集つた生きた者も、何か哀しい存在の様に思われてならなかつた。

(四五、一二、二)

(一九〇) 医学部一年生 菅原 察 二

遺族 福岡県久留米市梅滴町九六三

菅原文彦(父)

菅原ちよ(母)

(前略) 二十五周年記念慰霊祭の式典に参列出来ましたこと、心から感謝いたします。共々に在りし日の儚を偲び、御霊に相まみゆる心地がいたしました。統いて御遺族の皆様と親しくお交りをおかし、御懇談出来ましたことも誠に貴い一時で、いよいよグピロが丘を立ち去り難き思いでございました。

殊に中村代議士の御努力を承り、田吉、大橋両夫人の切々なるお言葉を伺いまして、感激感謝でいっぱいでした。若くして尊き犠牲となりました霊に捧げんと御心境を承り、自らも蔭ながら微力を捧げたいと心に期しました。

何とかして久留米選出の石井光次郎先生にもお願いしたいものと考え、長崎から帰りまして早速、石井事務所に面会出来る日取りなどお伺い致しました。事務所ではすぐに東京の事務所へ電話して頂き、九月下旬に代議士が久留米にお帰りになるから、その折に会われたがよかるうとのことでした。

また久留米医師会員の中にも、長崎出身者が十二、三人居りますので、その方にもお話し致しました。最年長者で八十幾才の三橋先生を初め、北里勇三先生(同窓会の前世話人、夫人とは私も仲よしです)、笠豊治先生(現世話人)、久原孝夫先生(現世話人)、井出速見先生など皆様が、母校の恩師や後輩生徒のためならば、是非協力せねばとのこと、この助言を聞き、私共も大いに勇気づけられました。私の方は文彦が七十八才、私が七十四才で、最早や第一線から隠退しておりますが、長男和彦が九大を出て戸畑で眼科を開業しておりますし、三男篤彦は日航技術部の国際線に勤めて東京におりますので、そのうちは是非靖国神社にもお参り致したい、と話し合っております。(後略)

(四五、八、二五)

(一九三) 医学部一年生 高橋 浩 二

遺族 宮崎市南那珂郡南郷町

高橋萬二(父)

高橋たづ(母)

(前略) 私、病気で九月中入院しておりましたので、誠に失礼致しました。又々「忘れな草」第四号を編集して頂きます由、原爆のむごたらしき痛まじきを、世間の人に知って頂くためには、いつまでも続けて頂きたいと思ひます。

昨年の八月九日にはグピロが丘の慰霊祭に参列させて頂き、久しぶりに長崎の地を踏みしめて、悲しみとも喜びとも形容の出来ない、烈しい感情に捕われました。昨年の十一月からリウマチで困っていますので、再び参拝する日が訪れるだろうか、心細く思っております。(後略)

(四五、一〇、一七)

(一九四) 医学部一年生 竹本 文 亮

遺族 広島県豊田郡木江町字木江

竹本勇蔵(父)

竹本春枝(母)

その一(昭和四十五年四月二十九日付)

早速「忘れな草」第三号をお送り頂き、有りがとうございました。若い方達の儚を偲びますと、感無量でございます。お蔭様で当時の様子が手にとるようになり、何物にもかえ難い記念の本でございます。

その二(昭和四十五年九月一日付)

(前略) 去る八月九日には、大勢の参列者で賑々しくお祭り頂きました由、誠に感謝の極みでございます。実は私共三月に木江へ帰りまして、或る用件のため、七月十七日に再び西大寺へ参りましたが、四、五日で木江へ引返す積りのところ、十号台風に遭い、屋上の建物がペシャンコになりましたので、その整理をして帰るなど申し、

病気の身では何をするにも、中々涉りませんで困ります。(後略)

(一九九) 医学部一年生 中川二郎

遺族 島根県簸川郡湖稜村常楽寺

中川ヨシノ(母)

(前略) 二郎の想い出は尽きないほど御座いまして、到底手記などにする力も御座いません。幼にして父に死別し、母の手に育ちましたので、何かと物足りない事もあったであろうと、只々不憫に思つて居ります。永く長崎でお祭りして頂くことが、どんなにか有難く、嬉しいことごさいます。 (中略)

幼時より躰が弱く、養育にも一入骨を折りましたが、人並みに小学校に入学致し、意志が強く、小学校も中学校も一日も休まず皆勤致しました。常に躰を鍛えることに専念してましたのに——用なきことまで書き、親馬鹿とお笑い下さいませ。(中略) 仰せの通り、本年は二十五周年忌で御座います。御重なる御案内状を頂きありがとう御座いました。悲しみに耐えて参りました二十五年、想い出も一人で御座います。

この間、週刊朝日で永井隆博士の「長崎医大原爆救護報告」を涙で読ませて頂きました。当時の惨状を目のあたりに見るようで、感激只々涙で御座いました。

八十才に間もない私、書くことも後や先、恥じ入ります。今日まで亡児のため色々御高配を頂きました御恩、厚く御礼申し上げます。遺族会の皆様へも、よろしく御伝え下さいませ。(後略) (四五、七、二八)

(二〇一) 医学部一年生 中司和夫

遺族 滋賀県高島郡安曇川町北船木

中司文蔵(父)

(前略) 「忘れな草」第四号出版の趣き、有難く御苦勞様に存じます。何時も一筆書きたいのですが、事が死せる独り息子の思い出に關する限り、書けない心境になります。そこで和夫の遺書となった書簡をお送り致します。

亡き和夫からの最後の書簡

その一 拜復、お便り拝受致しました。故郷からの便りを受取る時、本当に嬉しい気持ちです。特にお母さんからのお便りでしたので、非常に嬉しかったです。(中略)

戦局の重大性は益々加わつて来ました。皆皇國の為に各々の職域に於いて、全力を傾注すべき秋が来ました。昨日には生意気にも、B29が当長崎市を爆撃しました。

私も身近く爆撃を体験しました。私達大学生にとって大切な病院をやられたのは、実に憤りの念を禁じ得ません。下宿にも機銃を見舞われました。幸い私は微傷だに負わず、至極元氣です。御安必下さい。

實際爆弾を落される度に、全身に血が逆流し、あの、敵のB29をたたき落してやりたくになります。今日は珍らしく、朝から一度も警報が出ません。

私も敵兵を十人ほど殺さない中は、死にきれません。

○ 世の人の余りのつれなさ身にしみて 転出証とりて帰らんとする

○ 静かなる木陰に父と二人して 並び坐りて写生したりき(大徳寺)

○ 父上は如何にますらむ母上も 如何にますらむ静かなる

湖畔の里の夜半の月影

(二〇、八、二)

その二 私も手紙には常に留意して居るのですが、空襲などで手紙がしばらく途切れても、決して心配なさらぬように——。

愈々重大なる秋、私もこの九州の地に於いて、敵兵を双手に迎えて戦う日の来ぬとは限りません。日本人たるの誇りの下に、常に行動する積りです。

では母上様、呉々も体を大切に下さい。こちらに居て心配なことは、ただ家の皆の健康です。では又暇があったらお便り下さい。さようなら (二〇、八、三)

(二〇三) 医学部一年生 西田英司

遺族 広島県双三郡君田村東入君

西田ラクヨ(母)

(前略) 毎年命日が近づく、今年は今頃かと思ひながら、暑さの折に暑い方に参

りますので、もう年でもあり、若し万一皆様は御迷惑をおかけする様なことでもあつてはと存じまして、未だにその意を得ず、本当に残念に思つて居ります。出来れば明年あたり、四、五月頃にでも慰霊碑におまいりしたり、英司がどんな場所でどんな死を遂げたものか、一度親しく見てみたいと思つていますが、如何なりますか——。

(四五、九、二二)

(二〇四) 医学部一年生 西谷 重

遺族 兵庫県美方郡村岡町福岡三九九

西谷 公(父)

(前略) 昨十六日、テレビにて先生の御雄姿に接しまして、誠に感激に堪えず、なつかしき恩師に接するの思い、愚息「西谷重」に再会の思いが致しました。(中略) 昨年補導係長殿より、靖国神社への合祀を取計い下さいます由のお便りがありましたが、其後如何進行して居りますでしょうか。御多忙中誠に勝手ですが恐縮であります

(四五、七、一三)

【調記】書類整備の都合で大変遅延したが、既に十七人の書類を纏めて上申中の由を返事した。詳細は別項を参照せられたい。

(四五、一〇、二)

(二〇五) 医学部一年生 新田 寿男

遺族 横浜市南区大岡町小谷戸新田郁夫方

新田 寿恵(母)



(前略) 私もあと数カ月で八十才になります。寿男が亡くなって二十五年の歳月がたちましたが、一日とてあの子を思い出さぬ日とはございません。然しもう何も彼も忘れねばならぬ、と云い聞かせて居ります。

幸い寿男の弟が苦学して大学を卒え、今は親子四人がとても大切にしてくれますので、余生は幸福でございます。でも戦争はあくまで避けねばなりません。

戦争は大反対です。世界の何処でも同じです。今戦争中で、悲惨な生活を送つておられる人々はお気の毒です。いやお可哀想です。どんなことがありましても、戦争をしてはなりません。私のような悲しみは、今後誰にも味わせたくありません。

これは私の切ない願いの一端を申し上げたのです。どうか皆様によくお伝え下さいませ。

(四五、一一、五)

(二一五) 医学部一年生 前橋 裕

遺族 大阪市阿倍野区晴明通一三一—一八

前橋 波江(母)

前橋 孝寛(兄)

(前略) 当方父重寿儀、三月二十二日に八十三才で他界いたしました。母(波江)はそれ以後一時病気のため弱りましたが、今ではまた元氣になりましたので喜んで居ります。今後は遺族代表者を母親名儀でお願い致します。

(四五、八、二四)

(二二〇) 医学部一年生 嶺 脇 秀雄

遺族 東京都文京区大塚四—四七—二

嶺 脇 イサ(母)



(前略) この度お便りを頂き、「忘れな草」寄稿のことを承りましたが、年老いた身で思考の余力もございません、又当時を思い出せば思い出す程、つらい思い出ばかりです。本当に身勝手でございますが、写真を同封いたします故、原稿の方は御勘弁

下さいますようお願い申し上げます。来春にでもなりましたら、是非お邪魔したいと考えております。

(四五、一〇、二七)

(二三) 医学部一年生 桃原敬太郎

遺族 鳥根県松江市古志原町一六一

岩宮豊子(姉)



(前略)あの恐ろしい原子爆弾が長崎の空の上で炸裂し、私共の一番愛して居りました敬太郎が連れ去られてから、もう二十五年の歳月が流れました。その間毎年八月九日が廻って来ます度に、在りし日の敬太郎の事を思い、何とも諦めきれない悲しきや憤りを、抑えることが出来ませんでした。

両親も昭和二十八年には父が、三十二年には母が他界致し、この度やっと私共姉妹三人、長年の願い叶って長崎へ参りました。ただ敬太郎の学んだ学校やその町へ、何とか面影を求めたく、集って参りました。そして伺いました医大で、「忘れな草」の名簿に敬太郎の名を見出した時の嬉しき、懐しき、そしてその名の下の遺族欄の空白を見た時の申訳なき、可哀なことをしたと思う自責の念で、涙はとめどなく流れ、どうすることも出来ませんでした。又「忘れな草」第一号で、敬太郎の遭難状況の記事を読みました時、あの子のいたいけな顔が浮び、声に出して「ごめんね、御免ね」と叫びたい悲しさに襲われました。

記事によると、八月十一日午前、病院の正門前で友人四人と共に、軍医さんの治療を受けたようございます。あの様な悲惨な状態の中であって、せめて友人と共にあり、又軍医さんの手当を受け得たという事は、どんなに心強かつたことかと思ひ、唯々感謝の外はございませんでした。

思えばあの八月九日、長崎に新型爆弾が落ち、医大の生徒は全滅らしいということ

を、敬太郎の佐賀高校時代の親友武藤様より連絡を受け、父は取るものも取りあえず、十六日にやっとの思いで長崎に駆け付けたのでした。(当時私共は鳥根県に疎開しておりました)。でもその時は既に敬太郎の姿はなく、敬太郎を看病して下さった看護婦さん(山口様だったと記憶しています)からお話を聞いて帰って参りました。

その時の様子では、玄関前で治療が行われた時、「医大の学生は居るか」という声に、拳をあげて「はい」と答えたそうです。その時は十二、三人の医大生が治療を受けたとの事でした。その後病院の地下室に運ばれて看護を受けたそうですが、外傷は一つもなく、ただ下痢、血便がひどく、高熱にうなされながら、下宿に帰りたいたと訴えたとのこと、そして十二日に死亡したと聞きました。

その後玄関前で十六、七人の遺体と共に荼毘に附されたと聞いて、父はその場へ行きましたが、誰の骨ともわからない遺骨を拾う気にもなれず、其処の砂を持ち帰ったと申して居りました。その後一カ月位して、その看護婦さんも亡くなったと伺い、父は大変悲しんで居りました。

三人の女の後に生まれた男の子とあって、両親の愛を一身に受けて育ち、又その愛に充分応え得る優しい心を持った弟でした。今その場を訪れ、こもごもの思いにただ胸が迫り、この玄関前が、あそこがと、悲しきと悔いと立ちつくしてしまいました。そしてあの記念講堂ホールの名碑の中段に、はっきりと「桃原敬太郎」の名を見出した時、もうたまたまなくただ涙ばかり溢れて、何もしてあげられなかったことを、詫びるばかりでございました。

御親切な一ノ瀬様の御案内で、ゲピロが丘の慰霊塔へ詣で、折しも咲きはるコスモスを手折って、その霊を慰めることが出来ました。医大を一望の下に眺めうるこのゲピロが丘で、今は安らかに眠る弟達への冥福を祈り、心安まる思いでございました。

その後夕方も追って参りましたが、調先生のお宅へお邪魔致しました。お忙しい中を私共の為に喜んでお時間を作って下さり、本当に嬉しうございました。先生は一人一人生徒の名前を覚えられ、その遺族達の消息まで御存知でいらっしゃる程に、御熱心に犠牲者のため、又遺族の為に尽して下さった事、本当に嬉しく有難く、又申訳な

く、頭のさがる思いでございました。

お蔭様で、私共はこうして悲しい裡にも慰められ、お互に励まされていることを思い、感謝の念で又涙ばかりとめどなく流れました。今日は天にある敬太郎の霊も喜んでくれたことと思います。二十五年の間、淋しい思いをさせた事を心から詫び、同時に調先生はじめ、一ノ瀬様、学校当局の方々の、心のこもった慰霊への数々の手筈を、唯々感謝致します。「忘れな草」に、同じ悲しみの中にある方々を思い、また今はこの友と共にあの世で楽しくやっているとある弟の姿を思います。(後略)

(四五、一〇、二八)

遺族 沖繩那覇市安里四一五—三 大森 文子(姉)

去る十月二十日、私は姉と妹と三人で、終戦後二十五年目に初めて長崎を訪れ、原爆で無残にも青春をもぎ取られた弟敬太郎の記念碑の前に顔つき、とめどもなく流れる涙をどうすることも出来ませんでした。

弟敬太郎は、父が東京在動中に、三人の女の子の後に生れましたので、亡き父母がとても可愛がり、文字通り手の中の玉の様に育てられました。その為か、男としてはやさし過ぎるくらい柔和な性格で、人と争ったことがなく、兄弟とも大きな声で喧嘩など全くしないおとなしきでした。従って小学校の頃は消極的で、運動も学力も中位のところでしたが、旧制中学の中頃から、自我に目覚めたのでしょうか、積極的にユーモアな性格に変わり、体育にも学力にもぐんぐん成績を伸ばし、骨格のがっちりした、一メートル七〇センチ余りの、遅い少年に変わって来ました――。

沖繩二中から旧制佐賀高校に入り、高校時代は乗馬部で大いに学生生活を楽しんでいた様です。かねてから父が医科進学を強く奨めていましたので、気候の温かい人情豊かな長崎の大学を選び、入学したのが昭和二十年四月のことでした。その八月に、終戦の日を三日後にひかえて、十二日にあえない最後を遂げるとは、全く残念で可哀想でなりません。こんなに気候も人情も恵まれた土地柄で、医師として成人していたら、どんなに幸福であつたらうと、姉妹で話し合ったこととございます。

被爆当時、私共の家族は遠く島根県の田舎にいましたので、原爆のニュースも人の

噂でやっと判った次第で、父が長崎に行った時は、すでに弟は四日前に亡くなった後でした。父が島根の家に帰って来た時、迎えに出た母は、父の後に弟の姿を期待していたのですが、父だけがとぼとぼと来るのを見て、やっぱり駄目だったかと、身体が地に引きずり込まれる様な気がした、と申して居りました。

他の被爆者の方も同じですが、親しい者のだけ一人にも看守されることなく、淋しく去って行った事を思い、戦争の恐ろしさ、非情さに今更ながら悲しく、心が痛くなります。私も医学部に籍を置く息子を持つ母となりまして、このように成人した子供を亡くした父母が、どんなにがっかりしたことかと、しみじみ思うこととございます。(後略)

(四五・一一・一八)

遺族 沖繩那覇市松川一一〇 米須 絹子(姉)

(前略) 私共三人は二十二日に長崎を発ちまして、それぞれの所へ帰って参りました。十月二十日は本当に私共にとりまして、忘れられない日でございます。

沖繩に引き籠って様子がわかりませぬ、先生方の御苦労に対しても、何のお手伝も出来ず、尋ねてみることにさえもしなかつた私達、こんなに永いこと連絡も致しませんで、御迷惑をおかけ致しました。氏名欄の下が白く空白で、無縁仏みたいにしておいて、心苦しさで一杯でございます。

それにしましても、調先生の並々ならぬ御厚意によりまして、原爆で亡くなられた方々や、その御遺族の消息を「忘れな草」として纏められ、唯今涙で拝見させて頂いております。記念堂の中の真鍮板にはちゃんと名前を残していただき、本当に何と感謝申し上げてよいやらわかりませんでした。私共も弟の名をその中央部に見出ししました時は、たった五字の「桃原敬太郎」の文字ではありますが、その文字を何度か繰返して胸の中に刻みつつ、ただ泣けて泣けて致し方がありませんでした。二十五年目になつと、故人にも喜んでもらえたのではないかと思ひます。

両親は共に戦後に亡くなりました。でも姉妹でやっと弟の最後の地を確かめることが出来て、心から嬉しく思つて居ります。

(四五・一〇・二八)

遺族 東京都国立市申二丁目二〇一七

山根 隆子(母)



(前略) 度々のお勧めにもお応え致さず、失礼致しましたことを深くおわび申し上げます。これまで皆様方肉親の手記をとくと拝読致し、同じ気持ちで泣きました。

さて、故繁は四人の弟妹の長男として、サラリーマン家庭に育ちましたが、生後一

年位から体が弱く、学齡期に達するまでに殆んど病気を致し、小学校入学までに四回中耳炎に罹り、四回目に病院にかけつけた時は、一刻も早く手術しなければならぬ程の重態でございました。幸に二、三カ月で退院し全快しましたが、安堵したのも束の間、二年生のとき肺下葉炎にかかり、心配でたまらず、「ただいま」と云って帰って来るランドセル姿を見るだけで、満足したものでした。

その後段々元気になり、中学、高校と進みましたが、二年生のとき集団検診の結果、また肺をおかされていることが判り、やむなく一時休学致しました。「病気で自分ほど親に心配をかけた者も少いだらう」と友人に語った由、後ほど聞いて、本人もさぞかし心を痛めたことと思ひ、なおさら可哀想な気が致しました。

小さい時から、主人が、「お前はお医者のお蔭で丈夫になったのだから、先きで立派な医者になり、御恩返しをしなくては——」と申したこともございました。

そういう訳で、小学時代からの医者志望で、長崎医大に入学致し、体も散々病み抜いたせいか、めきめき丈夫になりました。最初は岡山医大を志望して、高校の先生にお願いしましたら、「君は京都へ行け」と勧められ、最後に長崎ということになったのです。「要は実力だ。将来は医学と農学の二つの博士号を取るのだ」と云ったのを覚えております。医学と農学と、どういふ関連があるかは存じません。

弱体ということが身に沁みこんでいるものですから、私達は成績の方は余りやまか

しく申しませんでした。幸にどうにかやってくれました。

よく気がつく几帳面な性格、お話も好きな方で、何にでも口をはきみ、主人が「一言居士」と冗談を申して居りました。又長男意識で、よく弟妹を可愛がりました。

原爆で死んだ翌二十一年に祖父、二十二年に祖母、二十三年には主人までが亡くなり、四年続けて葬式を出しました。

主人は、中国電力山口支社に勤務中、広島に原爆が落ちたので、部下の方十数人と応援に出かけ、帰社して間もなく長崎に原爆投下、繁から何の音沙汰もないので又々御地へ出向き、広島同様の廢墟に驚きました由、医大へ行きましたが人影もなく、尋ねる術もなく、僅か二、三人いらしたので、一年生のいた所を覚えて頂き、そこらへ小さい骨片を十個ばかり半紙に包み持ち帰りました。「只今」の声に家のものが飛出し、「繁は」と尋ねましたら、背負ったリクサックを指し、「ここにいるよ」。一同泣きくずれました。そして早速葬式も済ませました。

何も彼も水の泡、空しい日々でした。丁度その頃、弟は陸軍士官学校にて未だ帰宅せず、生死も判らず、全く我が家は一同呆然の姿でした。真赤な夕焼空、はるか西南方の長崎の空を眺め、私も一緒に死にたくなりました。

その後弟の方は無事帰宅、高校からやり直し、東京大学を経て就職、娘達もそれぞれ嫁入りし、私一人で三年半暮して来ました。そして三十二年に上京、息子の厄介になり、家庭の悩みもあって、学校との通信も途絶え、無沙汰をして参りました。

地球上初めての原爆に見舞われて、主人と長男を失い、悲運な思い出は、今以って忘れることが出来ません。体もすっかり衰えました。毎日の神仏を祈るだけでございます。

多くの犠牲者の皆様の御冥福を祈りながら、今後戦争には絶対々々に反対をし続けます。合掌 (四五・一〇・二一)

二仲 主人と一緒に広島に応援に行かれた人達は、全部二、三年のうちに亡くなられました。やっぱりこれも放射能のせいだと思います。

(二三二) 医学部一年生 和田 正人

遺族 北九州市戸畑区小芝二丁目四一六

和田 ツマ(母)

(前略) いつも正人の事につき一方ならぬお世話になっておりますのに、何もお伝い出来ない我が身の不甲斐なさを、悲しく思っております。(中略)

近頃はすっかり身体をいたため、中古車のように、一カ所修理すれば他の所が痛む有様で、年は取りたくないものだと、つくづく考えさせられます。(後略)

(四五・一〇・二)

三、付属医専生徒遺族の手記

(二三六) 医専仮卒業生 青木 伸夫

遺族 大分市米良七組

青木 通(母)

今から三十二年前、伸夫が中学一年生の二学期、秋も末の十一月中旬だったと思います。私も若かったし、主人は日頃からスパルタ式の教育をしていたことだし、伸夫が夜道をかけて白杵から大分へ行くというのを、異存もなく許してやりました。

友人から簡単な地図を描いてもらっていましたが、いかにも中学生らしく、小川あり、小さな石地蔵の絵があり、森ありといった、昔の五十三次の絵のようなものでした。白杵市外に六ヶ迫という冷泉の湯治場があり、宿泊客は胃腸患者ばかりの寒むぎむとした温泉で、その峠を越えて行くとだけは聞いていましたが、それがどれ位の険しさか知らず、午前一時、外套一枚を肩に、鮎玉と空豆を少々ポケットに入れて出発させました。

この度ふとした機会にこの峠を車で越しましたが、人通りは少なく、拳大の石塊ばかりで、細い道の両側にはススキの穂波がゆれ、山萩やツワブキの花も色鮮かに咲き

乱れていました。「深い谷底から吹上げてくる朝霧に、足がすくんで動けなかった」と聞いた谷は此処であつたらうか。「トンネルを通る時は真暗で、両手を拡げて通つたよ」とも云っていました。当時は道とは名ばかりの杣道で、さぞ難儀したことだらうと思うと、無謀だった昔の自分の浅はかさが惚げられ、幼い頃の伸夫の姿を思い浮べて、思わず車中で涙を拭きました。

白杵から大分までは、十里の道程と聞いていました。家を出て平清水を通り、龍泉寺の門前にさしかかりますと、境内の三重の塔(文化財)の天辺がポーッと光つたかと思うと、ゴム風船ぐらいの赤味を帯びた青色の玉が、塔を離れて伸夫の頭上一間位の空間を、ゆらりゆらりと揺れながら通りを越えて、向側の寺の門内に消えて行ったそう、気丈な伸夫でも、これが人魂かと背筋がぞつとして、そのまま家に引返えそうかとさえ思つたそうです。

また市浜という所では、野犬の群に吠えられ、何も持たぬので追い払う術もなく、口笛を吹きながらすたすたと歩いたとか、小さい時から勝海舟のように非常な犬嫌いだったので、さぞ怖わかつたことだろうと思います。

大分に着いたのは朝の八時半頃だったそうで、友人の家に足を休め、その折撮つてもらつた写真は、今も尚仏壇に飾られ、少年の頃のあどけない、何となく疲れた面影を朝夕見せてくれます。あの頃は軍用犬の飼育が盛んで、時々通行人に危害を加えることもありましたので、よくも大事な長男を夜中に一人旅させたものだ、と友人から非難されましたが、伸夫のこの不屈な精神は、やがて軍医を希望して、長崎医専を受験する気持を抱かせたものと思います。伸夫は医専に入ってから、「母ちゃん、僕は犬死はしません。爆弾なんかでは死にません」と手紙に書いて来ましたが、原爆にあっては致し方もなく、可哀想なことをしたと悔まれてなりません。

伸夫の遺品は手紙も衣類も、悲しみを忘れるために私の兄が焼いてしまいました。小学校の見事な習字の筆跡は、一年生から六年生の分まで、今も袋戸棚の奥に残つており、私の唯一の自慢の種になっております。

今でも随分優秀な子供さんが数多居られるでしょうが、僅か十三才で夜中の一時に

家を出て、懐中電灯も持たず、月明りを頼りに山坂を越えて、一人旅をするような気骨ある少年があらましようか。軍医を志望して、あたから若き身を原爆の実験材料にされ、死後神に祭られたとしても、死者は満足し冥福しているでしょうか、四半世紀を経て尚、各国は原水爆使用を続けようとしている有様で、やはり犬死ということにならないのでしょうか。仲夫は無神論者でしたが、靖国の御社の中で、さぞ居つらい思いをしていることだと思います。

(四五、一〇、二九)

【別便】(前略)今年こそはと覚悟していましたが、日に日に耳も遠くなり、足も少し痛みまして、遂に慰霊祭にも参列出来ませず、残念に存じました。

皆様の御尽力にて年金でも受けられることになりましたら、耳の手当もしてみたいし、一人静かに余生を送ることも出来るかと、ひたすらそのみ楽しみに暮しております。母思いだった仲夫も、きつと安心するだろうと思うのですが、二十五年も経った現在になっては、その実現もどうかと案じて居ります。

週刊朝日の永井先生の救護報告を読みまして、今更ながら原爆の時の悲惨な有様を思い浮べ、無量の感慨に耽っております。(後略)

(四五、九、一)

(二三八) 医専仮卒業生 清田 和之

遺族 長崎市万屋町一―一三

清田 貞義(父)

長崎市若草町九―一九

兄の死 浅見 妙子(実妹)

昭和二十年九月六日〇時十七分// 私にとって一番大事な兄さん、情深い兄さん、兄さんが死んだ。思えば夢のようである。

あの日、原子爆弾が投下された日、兄さん

は自分の傷も顧みず、医大病院から穴弘法様の山を越え、看護婦さんや生き残った友人、患者さん達を連れて、西山の別宅へ歩いて帰って来た。夜は偶然に大分陸軍病



院に応召していたお父さんまで、休暇で帰って来られた。その時兄さんは、あちこち全身にかすり傷を受けていたが、一週間位たったらすぐよくなった。

八月十五日はラジオで「重大ニュースがあるからだなたも洩れなくお聞き下さい」というので、どうせこの戦争を頑張り通せというのだろうと思いつつ待っていた。

正午になったので、兄さんを先頭に衿を正してラジオに耳を傾けた。ところがちっとも聞えない。間もなく烈しい敵機の爆音が聞えたので、兄さん一人を残して壕に入った。それから約二十分、兄さんが私達を呼ぶので行くと、「戦争は終わった。国体の護持とあの猛烈な爆弾の威力に負けた」とのこと、びっくりして口もきけない程であった。

それからというもの、市民は盛んにデマをとばした。私達もとうとうデマに乗り、兄さんとおぼあさん二人を西山の疎開別宅に残して、熊本の伯父さんの所に行つた。その時人手が足りないもので、兄さんも体の具合がまだ完全でないのに、車を曳いたり手伝ったりして無理をしたようである。私達が熊本から帰った時には、兄さんは既に寝込んでいた。私は色々お世話をしてあげたが、小さいので愚図々々していたためか、兄さんは事々に私を叱つた。

九月三日、父は軍服の少尉さんの姿で帰って来た。私達はとても心強く安心した。

お父さんは初めから判っておられたのであろう、兄さんに会って少し泣かれた。私はどうにかならないものかと一生懸命だったが、普通の病気とは全然違うので、薬がないのが残念だった。

去り行く兄さん、情深い兄さん、勉強好きな兄さん、男らしい兄さんが、とうとうあの憎いアメリカのために死ぬのだと思うと、本当にたまらない。今も盛んに長崎の上空を飛んでいる敵の飛行機が、心から憎いと思つた。

九月五日の夕方から急に病状がひどくなり、午後十時頃からは家族全部が側について見守っていた。兄は四十度以上の高熱のため諺言を云う。居ても立ってもいられない程悲しかった。諺言の中に天皇陛下の事まで云っている。父は十分おきに注射をしている。死ぬ五分位前まで、大丈夫、大丈夫と何回も繰返していたが、兄の体は次第に

冷たくなって行く。私は兄の手をしっかりと握りしめて泣いた。悔しくて悔しくて、泣けるだけ泣いた。兄がとても可哀想でならなかった。死ぬ時は口から血を吐きつつ、呼吸を出来るだけ大きくして、「天皇陛下萬歳」というのが最後であった。

私は忘れない、九月六日〇時十七分、兄さんは二十四才であった。親子全部で死体となった兄の手を握って泣いた。よし、私も大きくなったら体を大切にしてい、栄ある新日本建設のために大きく歩き出そう。(二十年九月六日午前十一時記す)

応召中の父上へ宛てた故人の書簡

お父さん、軍務多忙にも拘らず、先日より度々お便りを下さりまして、有難うございます。長崎の我々一同、頗る元気に頑張っておりますから、何卒御安心下さい。

度々警報発令がありますが、市内は全然被害がありません。今のところ、敵機の目的が戦術爆撃にあるためでしょう。お父さんが居られぬと、やはり「一抹の不安なきにしもあらず」ですが、城台さんも今夜から来て下さることになっているし、我々も全力をあげて何でもやる心算ですから、御安心願います。

朝の礼拝も一家揃って行っております。この頃は母の方が余程熱心で、少しでも遅いと催促される有様です。浜屋の方も皆よくやっております。深沢さんも毎日お出になって、何やかやと手伝うことはないかと訊ねて下さいませ。

隣組長も米村氏にお頼みし、まだ今月一杯は妹がやりますが、来月からは少し楽になる模様なので、妹も張り切っております。前々から「辞める、辞める」と云っていたのですから、本当にせいせいしたとは思いますが、何しろ四年間も事実上の組長さんでしたから、感慨無量でしょう。

お父さんの手紙に書かれている様々の御注意、皆ありがたく読ませて頂きました。今後は母を扶けて一家団結し、呉々も病気に罹らせないよう、また出来るだけ無理をさせぬよう、細心の注意を払ってゆこうと思えます。

長崎の街も疎開が進捗しました。今度お父さんが来られたら、少し面喰われるかも知れませんが、おばあさんは西山の専属番人になりました。毎日こちらから食事を運んでおります。これからは万事がうまくゆくことと思えます。

沖繩本島は、相づく我が特攻隊の突入にも拘らず、敵の戦意益々猛く、全然予断を許しません。飛行機！飛行機！我々も実際じつとしては居れない程です。お互に敵機の盲爆如きでは死にたくありません。益々自重自愛、醜腐に一泡も二泡も吹かせるくらい粘りに粘って、大いなる大東亜戦争を勝ち抜きましよう。(昭和二十年五月十七日)

それでは、お父さんの御健勝と御活躍を祈ります。

大分県大分郡大分陸軍病院湯ノ平分院、薬劑少尉、清田貞美様

長崎市榎津町四九

和之

終戦直後父上に宛てた故人のハガキ通信

【第一信】度々お手紙有り難うございました。大詔渙発以来、流言飛語乱れ飛び、母と妹達は一応熊本へ参りましたが、落着いて来たので母は一昨日帰崎し、妹達も一両日中に榎津町へ帰ってくると存じます。共に傷ついた同窓生が相ついで死亡し、木田橋君も遂に角尾学長と同じ二十二日の朝死亡しました。私は未だ元氣は出ませんが、大丈夫ですから御安心下さい。

営業も船舶運営会と連絡し、早速船員さんが二十名ばかりお出でになることとなりました。今後は海軍協会がなくなるので、船舶運営会とタイアップしてやっております。母も浜荘さんから勧められ、乗気になっていきます。それでは御心配なく後始末をされ、お帰りを待つ。(二〇、八、二五)

【第二信】今朝父上の手紙を持参した帰還兵の方と会いました。先日速達葉書を出しましたが、多分行き違いになったことと存じます。

母とハルちゃん、それに坂田さんの奥さんに応援して貰って清掃、既にお客さんも十人余り泊って居られます。妹達にも帰るよう電報を打って居りますが、未だ帰りません。小生はお蔭ですつと良く、元氣が大分出て参りました。一緒に卒業の海軍々医見習尉官も、小生宅を統々と訪問してくれ、忙しいです。家のことは御心配なく、お帰りを待ちます。(二〇、八、二七)

【第三信】二十三日付の通信只今到着致し、我々の安否を深く御心配させ、誠に申し訳ありません。叔母様にだけ西山の留守を守って貰い、三名は榎津町にて連日職域

奉公に精を出しています。お客様も段々増加、只今十人余りです。

鈴子、妙子の両名は、汽車が混雑せる為か未だ帰らず、家の方は転手古舞を演じて居ります。最初は流言飛語に迷い、熊本まで母や妹が疎開して大騒ぎでしたが、街の方も新聞報道に落着き、配給品が砂糖、罐詰、鯉節など、思いの外にあって、皆明朗であります。小生も元氣にて、西山へ車を曳いて往復しても、ひどくは疲れません。それでは御心配なく、御健闘を祈ります。

(二〇、八、二七)

【第四信】 父上からのお手紙はずっと入手していませんが、長崎からの一通も着かないのは一寸変ですね。小生から葉書四通、母より封書一通、既に出しています。

鈴子、妙子の両人、電報を打つてすぐ帰るように云つてから、既に一週間経過しましたが未だ帰らず、心配して居ります。或いは電報未着の為かとも思いますが――。

小生は数日前より頭髪が猛烈に抜け、発熱三十八度、いつ迄も元氣が出ず、ウラム(原子爆弾)よりの放射線の猛烈さに今更ながら呆れたり、猛威にいささか閉口致し、「ここ数日はなお安静が必要だ」と友人より云われ、自重しております。

(二〇、八、三〇)

(二四一) 医専三年生 浅 倉 多計久

遺族 北九州市若松区今光町八一五

浅 倉 真二郎(父)

残暑厳しい折柄、何彼と御世話下さいまして有り難う御座います。私も若ければ何でも御手伝い出来ますが、何分八十四才の今日、洵に残念に存じます。

私は年に一回グビロが丘に参詣するのが何よりの楽しみで、遺族の皆さんにも逢え、また亡き子供の供養にもなりますので、これまでは毎年自動車で行つて居りましたが、昨年から汽車を利用し、前日に長崎に行つて諏訪荘に泊り、九日朝は遅れぬように出かけて参詣致して居ります。

今年も参りましたが、難聴のためお言葉もかけず、失礼致しました。懇談にも出席してお話を拜聴致しましたが、汽車の時間がありませんでしたので途中で失礼致しました。

あしからずお許し下さいませ。(後略)

(四五、八、二四)

(二四五) 医専三年生 足 立 幸 男

遺族 鳥取県境港市福定町三〇二

足 立 実(父)

足 立 つゆ(母)

朝夕の涼風は何となく秋めいて参りました。八月九日の慰霊祭には是非と思つておりましたのに、それも出来ず、先生にも故人にも申訳なく存じております。

お送り頂きました「忘れな草」第三号は、隅々まで読ませていただきました。孫達にも原爆の恐ろしさと、こんな叔父があつたことを知らせたいため、廻覧しようと思つております。色々ありますがどう御座いました。どうか今後ともよろしくお願い申し上げます。

(四五、九、二二)

(二五五) 医専三年生 高 木 恒 信

遺族 山口県岩国市大字入野五一三

高 木 郷 子(母)

(前略) 先日は遺族援護についての陳情書をお送り頂き、誠に有難うございました。犠牲学徒たちの遺言を拝しますと、臉の熱くなるのを感じます。尊い尊い心を持つて逝つた若い生命、痛ましくて可哀想でなりません。(後略)

(四五、一〇、二二)

(二六三) 医専二年生 間 野 千 春

遺族 佐世保市折橋町三二―二〇

鴨 川 堯 子(姉)

(前略) 御多忙の中に、原爆の恐ろしさを世界の人々に知らせ、平和の希望のために御尽力下さいますこと、有難く存じます。

八月九日の慰霊祭には初めて列席させて頂きましたが、御挨拶も致しませんが、失礼致しました。長年持病の神経痛を昨秋手術して、一時は治癒したかに見えましたが、相変らずの苦痛に、又毎日通院することが私の仕事になりました。

私は千春が中学一年の時遠方へ縁付きましたので、小供の頃の事しか頭に浮びませず、ただ亡くなる前一週間は側に付添ってやりましたが、辛い日々の連続で、「お父さん、僕が死んだらあとはどうなるの」と、苦しい息の下で、老父の今後の生活を案じて居りましたことなど、今も臉に焼きついて忘れることが出来ません。純粹のまま逝った弟を、いとおしと思う心で一杯でございます。(四五、一〇、二六)

(二六四) 医専二年生 赤崎安孝

遺族 鹿兒島県楳宿郡開聞町仙田二二〇七

赤崎安満(弟)

私共、長年の願ひでありました八月九日の慰霊祭に参列することが出来て、何よりの供養だったと、家族一同喜んで居ります。

実は、父安富は四十一年八月二十七日に六十四才で死亡し、母は早く二十八年十月三日に、五十才で生命を断りました。父も一度はグビロが丘に参ったことがあります。九日の慰霊祭の時にも是非にと申して居りましたのに、その願望は遂に実らずに他界しました。この意味からも、今度の参拜は親孝行ではなかつたかと、心ひそかに自ら慰めている次第です。その日は子供四人と愚妻を連れて参り、記念会館の銅板に刻まれた兄の名前を見て、本当に悲しみを新たに致しました。

私の長男(唯今小学五年生、下に男の子ばかり三人居ります)には、亡兄安孝の孝の字を変えて、安隆と父が命名しました。私共も自分の子を持って初めて、若くして亡くした父母の心痛が、心から解るような気が致します。

この度は長崎の方々を見せて頂き、原爆の怖さを知りました。心から我が国の、否世界の平和を祈らずには居られません。(四五、八、二六)

(二七七) 医専二年生 池田博実

遺族 久留米市東櫛原中尾一一九八

池田クニ(母)

(前略) お尋ねの件でございますが、博実の死亡診断書には、針尾海兵団軍医長、海軍々医中佐徳山義充と書いてありました。私も戦災に遭いましたので、書類は何も残っておりませんが、私の妹の話でも、海軍の依託生だったことは確実であります。

(後略) (四五、一〇、二七)

(二七七) 医専二年生 妹塚道俊

遺族 北九州市八幡区八千代町二二二一

妹塚数馬(兄)
妹塚雅江(義姉)

私は数馬の妻でございますが、主人に代つて道俊さんの思い出を少し書かせて頂きます。



道俊さんが医専に進んだのは、数馬が歯学へ進んだことが大きく影響したのと、数馬の助言があったからだと思っています。だから手記は書かなくとも、兄弟愛は人に負けない程あつたと思います。

私は嫁として、亡き姑が道俊さんを慕う気持は、十年間の同居生活で痛い程よく感じさせられました。姑がアルバムに書いていた和歌

○ 木枯らしの吹けば遺影のその影に 母よぶ声のするがにまどう
を見て、何よりも我が子を求める母の心をあらわしていると思えます。

私も勤務が警察署婦人補導員(ママポリス)という職務がら、戦争や政治のような公的な場面に私見を發表する訳にいきませんので、道俊さんの「憂国の便り」とでも云えるような、親への手紙を一通同封致しました。どうかよろしく願ひ致します。

又安日先生から頂いた当時の便りも同封しました。

(四五、一〇、二七)

父上へ宛てた故人の書簡

拝啓 春雨疎然として来る時、小生愕然として痛哭、亦言有らん哉。嗚呼、涙滂沱として下る。忿懣極に達して心雲擾たり。皇土曾て外侮を受けたること無きに、今中央部侵さる。この罪誰が責任ぞや。

小生医を学ぶと雖も、これを憂えてやまざる者なり。小生医に於て一身を捧げ、大御心を安んぜん覚悟なり。夜暗くして早く寝につけば、沈々として不気味なり。惘然として瞑目すれば、意馬心猿、焦躁烈し。臟腑裂くる可く、積鬱に余る。鬼畜や寸裂せずば罷まず、悲憤に盈つるの赤誠、述ぶる所無く、遂に罷まざるの旦心、故郷に檄を飛ばして、流欽を下げんと欲す。

今は凡心を超脱せる激烈行を欲するや切、良く死するの氣有らば、華府上空の必勝花たれ。盲人何を以てか情理に走る。尚輕輩浮華の徒、夜行してやまざるか、金もいらぬ名もいらぬ、只凡夫の英雄南州の再来を求めてやまず。いささか檄を飛ばして、血闘を祈る。

小生今は(二十日)、無事授業料として一期分参拾円、報国団費第一期七円五拾錢、報国団入団費として拾円、計四拾七円五拾錢收め候事、誠に感謝に堪えず、此段報告申候。

小生益々元氣旺盛、小生の事心配に及ばず、御許氣を付けられ、元氣に愉快にあられん様、御祈り申候。御送りの物皆有難く頂戴仕り候。

利幸兄が入管することに相成った様子、誠に慶賀に堪えず、夏休には何か祝物ども買つて帰る所存に候えば、まずは手紙にて御祝申上げ候。数馬兄にも早く我家の柱石になられる様、御祈り申候。小生は何分醉狂な男に候えば、何を書いているか、小生も分らない程に御座候。支離滅裂、末筆劣文を御許し下され度。(一九、七、一三)

終戦直後妹塚実蔵氏へ宛てた書簡

安日 晋(学友)

拝啓 残暑なほ酷しき折から、皆様如何致しますや、お伺ひ申し上げ候。

扱て、小生二十日に長崎に到着、妹塚君の事ども尋ね求め候ひしが、遂にその消息

を得ず候。御父兄の御心痛を思へば、身の不甲斐なきを一層に恥じ候。友中尾君も亦その消息不明にて、今日迄生存明らかなる者、その数僅かにて、その中なほ不明の原因にて没する者、その数日に多く、学長も亦二十二日に逝去致され候。全学殆んど全滅の危機に瀕せしこと、おめおめ生きて不幸なる現実にある我が身など、あれを思いこれら思つて、今更にたよりなく無念に存じ候。

思へば妹塚君は性高尚なる医学徒にして、又その心中に烈々たる理想主義の烈火を抱き、真摯なる生の探求、旺盛なる知識欲、よき医師として、単に肉体的のみならず精神的にも、多数の人々の苦悩を救うに足る人として、我々接するもの皆等しくその将来を属望せし所、然るに彼未だ帰らず、我等は一学友としてのみならず、又祖国の為に彼を惜み、悲歎を啣ちおり候。然し行方不明の人にて、友人、看護婦に伴われ、近在に療養致し居る者二、三あるを聞き、今は唯これに一縷の望をかけおり候。

さりとして長日帰らずば、遂に望みなき所と諦めねばならぬものと存じ候へば、今大業にて分骨致し居り候遺骨を戴かれるもよからんと、一筆御伝へ申し上げ候。

何れ小生一度伺ひたく存じ候も、とり急ぎ小生の不甲斐なきを、一筆お詫び申し上げます候。(二〇、八、二六)

(二七九) 医専二年生 岩永千引

遺族 長崎市旭町二二一八

岩永 造酒太(父)
岩永 ヤスノ(母)



(前略) 当時千引の下宿は松山町だったので、跡形もなく、又私達も五島より久留米へ疎開しておりましたので、形見となる品も全然なく、写真が手許に一枚だけありましたので、よろしくお願い致します。

家は代々医者ですし、千引は長男だったものですから、小さい時から周囲のもの

も本人も、医者になるものとして育つて来ました。責任感の強い温和な性格でしたので、将来は立派な医者になるものと、そのみ樂しみに致しておりました。

あの悲惨な原爆のために、二十才の若さでこの世を去ってしまいました事、本当に残念で、一生忘れることは出来ません。独り息子を亡くした方、二人一緒に亡くされた方の事を思いますと、私共は兄弟が多かった事だけでも、幸せだったと思つて居ります。

私達も去る二十八年から長崎に移り住んで居ります。主人も八十四才になります。元気に診療を続けており、これも亡き息子が地下で守ってくれる為だろうと、有難く思つて居ります。弟妹達も成人致し、第二人が医者になりましたので、故人も安心してくれる事でございます。度々頂いた「忘れな草」は、繰返し何回も読ませて頂き、心から犠牲者の御冥福をお祈り致して居ります。(四五、一一、六)

(二八〇) 医専二年生 白坂俊行



遺族 大阪府池田市神田一丁目二〇―二一

青野律子(妹)

昭和二十年九月六日の消印のある一枚の古葉書が、私の手箱の底に入れてあります。郷里の家で両親を持ちながら、茫然と過していた私の許へ届いた、母からの葉書です。

『昨九月四日、長崎から帰りました。今日は夢にもない悲しいお報せをせねばなりません。律子も涙のある限りお泣きなさい。たった一人の兄ちゃんも、もうこの世の人ではありませんでした。やっぱり大勢のお友達と一緒に亡くなったのです。』

この葉書を受取つた時、不思議に涙は出ず、広い屋敷の真中に立ちすくんでいたのを覚えています。目が腫れ上り、教科書も読めず、二重、三重に物がかすんで見える

ほど泣き明かしたのは、十月も終り頃、別人のようにやつれ果て、小さな包をしつかり持った両親を迎えた時でした。

「長崎にも広島と同じ新型爆弾か？」と、見出しのついた新聞を見てからも、兄からは何の連絡もなく、不安な日を送っている折、お友達から長崎の惨状を知らされました。私を郷里へ送り、それから兄を探しに長崎へ出かけた両親は、「二年生は衛生学講堂で授業の始まる前で、それぞれ席について先生をお待ちしていた中に、白坂もいた」と、生存中のお友達から聞かされたそうです。それでも方が一と、十日余りの毎日を血眼ちまなこになって、大学の焼跡や雨の市中を探歩き廻つて、最後に手にしたものがこの小さな包だったのです。衛生学講堂跡に寄せ集められた焼土の一握りを頂き、小さな箱に納めて持ち帰ったのです。あの逞しく優しくあった兄が、こんなに小さくなる筈がないと、どうしても信ずることが出来なかった私です。

二十年七月下旬に、大きなリュックを背に、送金も難しくなるからと少し纏つたお金を持たされ、「大金を持っているので暑いなあ」と冗談を云いながら、振り返り振り返り、手を振って行った兄の姿が忘れられず、風の叩く戸の音に、「あつ、帰つて来た」と跳び起ることも、何度かあつた歳月を過しました。

あれからもう二十五年、この葉書は、私が両親の許を離れて住わねばならなくなつた時、黙つてアルバムから抜きとり、父の手造りの手箱の底に入れて置いたものです。この度兄の写真があればとのお言葉で久々に取り出し、色あせかけた写真と涙の対面を致しました。

この葉書を書いた母も今は亡く、想い出は次から次へとかけ廻り、涙を止めることが出来ません。二十五年前の秋の日にも、泣きはらした目で空を見ました。今このかすんだ目の前を、大きなゼット機が、ゴーゴーと音を立てて飛び去つて行きます。

(四五、一〇、二九)

(二八二) 医専二年生 小出石 行 夫

遺族 福岡県豊前市山田町川内

大島 秀 夫 (実兄)

(前略) 慰霊祭の御案内を戴き、ありがとうございます。私も亡弟小出石行夫の法事を欠かさず営んで、故人の霊を慰めて居ります。近々のうちに、学校関係の旅行を兼ね、慰霊碑に参拝致す所存で御座います。(中略)

平和は人類の願いであり、平和運動に徹したいものであります。

(四五、七、二八)

(二八六) 医専二年生 岡 本 陽 一

遺族 神奈川県三浦郡葉山町下山口一〇八三

早川 みはる (妹)

(前略) 先日はわざわざ原爆記念日にお招き戴きまして、毎年の事ながら有難う存じましたが、貧血症と胃手術後の不快のため、また思い叶わぬ仕儀となりました。生きております間に、是非一度は兄の碑も見たいものと存じますが、この様な訳でございますので、何卒宜しくお願い申し上げます。(四五、七、三〇)

(二八七) 医専二年生 沖 勲

遺族 東京都北区赤羽台団地一七―三〇一

伊藤 鶴代 (妹)

「忘れな草」第三号の思い出の手記、残らず拝読いたしました。頁をめくる毎に、ハンカチの乾く間もありませんでした。

この世にたった一つの生を享けながら、誰に捧げる生け贄だったのでしょうか。

あの日から二十五年間、いやこれから一生涯、遺族は夫の、妻の、我が子の、或いは兄弟姉妹の痛ましい最後に、我が身を替えられるものであったらと、胸に竹槍を突

刺される思いで生きていくことは、どなたも同じではないかと思えます。

八月九日になりますと、苦しみぬいて仏となった兄の姿がはつきりと思ひ出され、溢れ出る涙を押えきれず、そっと黙祷を捧げるのです。煙草や酒の味も知らぬ兄は、まことに純情な青年で、裏山に登っては大空に向って川中島を吟じたり、椰子の実や浜辺の歌などを口ずさんでおりました。

身体が弱く、薬も規則正しく飲んでいましたが、包紙一枚々々を大切に保管し、英語の単語などを練習しておりました。中学時代に教練や防空訓練でかけ廻り、夜は発熱に苦しむことも度々でした。自分の苦しい体験から、医学の道を選んだ兄でしたのに、総て懐しい悲しい思い出ばかりになりました。

医専を受験した時、「あなたは沖禎介の親戚ですか」と聞かれたそうです。親戚には医者が多く、鹿兒島の本家を中心に綜合病院を造るのだ、と楽しみにしておりました。兄が医専に入学した翌年、私は大村にいましたが、兄は母の心尽しの食糧や、自分の分までずつしりと、駅のホームで待ち受ける私の両手に渡してくれました。それを大村城のお堀の側で、友達と頬ばりながら、優しい兄の自慢話をしたものです。

佐世保の家を焼かれた後、志佐に疎開しましたが、お米が豊富なので、休学中は銀飯ぎんめしが沢山食べられると大喜びだったそうです。母は兄の食欲に満足し、自分の着物を一枚づつ白米に替えていたのです。

話は変わりますが、私は靈魂の不滅を信じています。二十年の八月十四日の夜、疎開先のあばら家をコツコツと叩く音に、母は慌てて外にとび出し、兄と私の名を呼んだそうですが、闇夜に人影はなく、九日に長崎方面で大空襲のあったことや、若しやと不吉な思いで明け暮れていた矢先だったので、暫らく土間に佇んでいたら、村役場の人に来て、「息子さんが怪我をして隣村まで運ばれているが、今夜迎えに行かれるか」との知らせに、早速村の人々にお願ひし、何里もの山道を担架にゆられ、変り果てた姿で翌朝帰って来ました。十四日の夜に戸を叩いたという話は、みんな不思議に思い、近所の人々に尋ねましたが、誰も訪れた様子はなく、兄は母に会いたい一心から、お盆の迎え火に誘われるように、魂だけが早く帰って来たのではないかと思いま

した。

八月十五日には、被爆した時の様子を、苦しい息の下から語り、終戦の事も知らされないのに、世の中の変動を感知したかのように、頻りに新聞を求めたり、父の安否を気遣っていたそうです。私は十五日朝、何としても帰省したくて、やっと休暇を貰って我が家に辿りついた時、包帯に包まれ、目は落ち窪み、ビす黒く変り果てた兄を見て、茫然と立ちつくしていました。

被爆後の話は、「忘れな草」の数々の手記にありますように、阿修羅の生地獄を想像させました。十六日はあと半日の余命とも知らず、頭の包帯を取りはずし、「歩けるようになった」と云いながら、二、三步あるいて見せたのも束の間、下痢と高熱に苦しみ、渴ききつた咽は水を求めるのに、一滴の水さえ飲みこむ力もなく、送り火の炎より熱い体温のまま、「残念だ」の一語を残して、二十一年の生涯を閉じてしまいました。

悪夢のような二十五年前の八月でしたが、その後は我が家も下降線を辿るのみ、昔日の面影は思い出話の語り草で、まことに空しいものでございます。

なぜ戦争が起るのでしょうか。国は違っても一人々々は善良な人間であるのに――。非人道的な核兵器のモルモットとなった人々への償いは、どうすればよいのでしょうか。

ただ神に祈れば、それで救われるのでしょうか。今日も原爆症に苦しみ、死の壁を見つめて、ベッドに横たわっている不幸な人々や、戦下を逃げまどって大地に倒れ、水を求めて死んでいく、哀れな人々の姿が目の前に浮びます。

恐ろしいあの日から、四半世紀も過ぎたというのに、今なお世界に平和は訪れることなく、核兵器の所有国は増えるばかりです。核実験で天国まで汚染され、原爆の犠牲となられた方々は、安らかに眠るどころか、更に安住の地を求めて彷徨（さまよ）っていらっしやるのではないかと思います。奇しくも八月九日は、マリア様の昇天の日だとか伺いました。これを奇縁に、皆様の御冥福を祈るばかりでございます。

せめてもの御返返しにと、「忘れな草」を皆で回読しておりますが、今その参加者

が百名を越えました。原爆の恐ろしさ悲慘さを初めて知ったと、おっしゃる方ばかりでした。これからも多くの人々に語り伝え、読んでいただくことが私の義務であり、平和運動だと思っております。

相次いで兄の側へ逝った不憫な両親が、今日まで生きていて、この「忘れな草」に目を通すことが出来たら、どんなに慰められたことでしょうか。また老いた父母の手を引いて、グビロが丘の慰霊祭に参列することが出来たら、私もどんなに生甲斐を感じたことかと残念でなりません。

二十五周年忌の法要には参列出来ませんでした。靖国神社で皆々様の御冥福を祈らせていただきました。

(四五・八・九)

(二八八) 医専二年生 落合 潔水

遺族 宮崎県日南市油津町

落合 孝幸(弟)



「忘れな草」第一号と第二号は、妻と二人で読ませて頂きました。一字一句読み漏らすまいとすれば、ただ涙、涙……。遺族の方々の我が子に対する愛情と思慕がありありと記され、その心情を察すると、自然と涙がこぼれ出ます。近くに居る姉にも読

んで貰いました。

兄が即死であったことは、友人達の知らせで判っていましたが、医専の二年生が衛生学講堂で被爆した当時の状況は、「忘れな草」や、週刊朝日の臨時増刊号(七月二十五日発行)の「長崎医大原子爆弾救護報告」で詳しく知ることができ、又靖国神社に祀られたことで、これまで詰っていた胸の悶え(つか)がなくなり、安心することができました。

兄は親思いのよい人で、友人との交りもよく、中学時代の友人の中に一人、二十有

余年経った今日でも、なお毎年霊前に花を届けて下さる方があります。柳井唯美さんという司法書士の方であります。

私達遺族のなすべきことは、全世界に平和を呼びかけ、全人類に安寧をもたらすことだと信じます。終りに臨み、原爆で故人とられた方々の御冥福を、衷心よりお祈り申し上げます。
(四五・一一・一)

(二八九) 医専二年生 賀 来 潮

遺族 大分県宇佐郡安心院町佐田

賀 来 ツル(母)

(前略) 本日古書状を整理致しましたら、このような書面がございました。潮よりは原爆投下前の八月四日付で、二五〇キロの普通の爆弾が投下された時の状況を知らせてくれたのですが、封筒は父より出したものを裏返しにして、作り直してございました。形見とてなき有様なのに、誠に記念すべき品を見付けましたことを喜んで居ります。今夜はこの手紙と共に寝まして、潮の赤ん坊の時を偲びましょう。
(四五・一〇・一九)

八月一日の大病院被爆後に父に宛てた潮の書簡

三十日朝宇佐を発ち、途中宇之島附近で一度下車して待避しましたが、長崎には同日午後九時半頃に着きました。汽車を降りると、何でも同日昼間に敵機の来襲があった由で、さして被害はなかったのですが、それでも汽車が遅れて却ってよかったですと思いました。

翌日も〇〇地区に爆弾が落ち、更に八月一日には本格的な空襲があり、私もつぶさに空襲の凄さを体験しました。大、中、小型機延べ七十三機が、十数機つつの波状攻撃をなし、第一波の時は逸早く待避壕に入りましたので、かすり傷一つ受けず、唯服が少し汚れた位です。

波状攻撃の合間にひよっと首を出して見ると、今まで講義のあった〇〇に白煙

が濛々として、黒く迷彩を施した病院の建物が全く見えなくなっていましたので、腹が立つて立って仕様がありませんでした。

そのうちに又第二波が来襲したので、又壕の中へ身を伏せましたが、この時は思わぬ両手で耳と目を塞ぎました。暫らくして敵機も去った様でしたので、壕を出て部署につきましたが、途中見ると〇〇病棟では火事が起ったのか、窓から煙を出しているのが認められました。消防隊の応援に私も行くことになり、〇〇門を入るとそこら一面が硝子の破片、大小の石、土砂などで埋まり、爆弾は〇〇病棟と〇〇病棟の間、及び〇〇、〇〇病棟側に落下した様子で、〇〇病棟のみが火災を起していました。学校及び病院に備え付のポンプで消火に努め、約三十分で消し止めたのですが、何だかとても時間が長く、二時間位かかったような気がしました。敵機は明らかに病院めがけて非人道な爆撃を行ったのです。幸か不幸か、数発は外れて病院周辺の民家に落下致しました。大学に落ちたのは、数百キロの爆弾らしく、相当大きな摺鉢を作ります。しかしこの程度では、さして機能を失う程でもなく、市内の負傷者を多数收容している位ですから、跡片付をすれば、又講義も始まることでしょう。ただ返す返すも残念なのは、学友中に尊い犠牲者を三名出したことです。近く校葬が行われることと思えます。

加来病院は安全です。電車不通のため未だ訪ねませんが、そのうち行ってみてみたいと思います。今日は跡片付で大汗を流しました。先日来の暴風で、沖繩も相当荒れているらしく、敵機はやって来ませんが、再来に備えて荷物を疎開させたり、新しく壕を掘ったりして準備中ですから、余り心配しないで下さい。私も徒死(だつじ)はしないように充分注意する覚悟でいます。父上様も皆様も、よくそれ弾が落ちるようですから、充分お体に気をおつけになって下さい。
(二〇・八・四)

潮の死亡のため、返送された母の手紙

潮どのお手紙拝見致しました。誠に誠に危なき処を、先ず無事にて一同安心いたしました。再度の新型爆弾投下の結果は如何と、皆々心配しております。ぬからぬ

事とは思って居りますが、医大も焼失のよしを聞くにつけ、便りのあるまでは心配でなりません。

今日はまた無条件降伏と大きくにつけ、悔しさにたえず、母さんも前のおばさんも、只々涙をもって聞きました。実に悔しいことであります。

学校の都合にて、帰られるなら帰っては如何。賀来のおじさんの処も如何かと、心配申し上げて居ります。いろいろ書きたいけれど、取り急ぎ右お尋ねまで。

(二〇・八・一五)

(二九〇) 医専二年生 郭 芳 徽



遺族 台湾省嘉義県水上郷水上七二号

郭 炳 均 (父)

私は長崎の原爆遭難者である故郭芳徽 (当時医専二年在学中) の父です。林五桂先生 (学部四年林中鳳君の令弟) から再度お便りがあり、すぐに貴殿に連絡するようにとのことでしたが、実は私も七十を越した老人であると共に、過去の傷心事に触れない気持から、筆を持つ勇氣が出ませんでした。どうかお許し下さい。

芳徽は学校の先生にも、在住地の父兄の方々にも、又朋友の方たちにも大変お世話になりましたこと、誠に有難く感謝申し上げます。亡き本人も安らかに、且つ穏やかに永眠していること信じます。

生前の事は、本人の学友薬科の天野尚彰君 (福岡市大字下原七二四在住) が、事故後の様子を詳細にお知らせ下され、なお又私の次男芳村が、米國に留学の途上貴校を訪問し、学長の懇切なる御案内により、天野君と共に慰霊碑の前で追悼を行ない、学長から優渥なお言葉を頂き、御親切な款待を受けましたので、天野君からその報

告と記念写真を頂き、大切に保存して居ります。

「人生似朝露」と云うように、尚又「人生稀有百歳人」と云っている様に、儼い世間では、総てを各人の生れる以前からの宿命に任せる外ありません。

同封の芳徽の写真は、嘉義中学時代のものです。何かの御用にお使い下さいませ。靖国神社に合祀されますこと、芳徽は軍人でもなく、何ら功勞もない一人の若い学徒でしたから、私は只々恐惶多^{おそれ}いことと存じますが、学校側や遺族の方々の御賛成があれば、私に異存はありません。どうか万事よろしくお願い致します。

(四六・七・一二)

(二九一) 医専二年生 梶 原 辰 巳

遺族 佐賀県武雄市西浦町八三〇〇

松 尾 みさを (姉)

大正十五年四月七日、弟辰巳は私達の一番末の子として、佐世保市で産声をあげました。男一人、女四人のところへ、最後の子として生れ、父母の愛を一身に集めて、私達姉からは、一寸羨ましい存在でもありました。

父によく似て体格が良く、その上正義感が強く、西郷隆盛のニックネームをつづられて、自慢していました。小学校を優等で卒業し、佐世保中学に進んでも、戦時下の日本男子としてきびきびした少年で、弓道を熱心に行り、個人優勝で幾度か受賞、学校を代表して方々へ試合に参りました。夏休中も一日も欠かさず道場へ通う弟を、私達は頼もしいと思っていました。

あの頃の軍港地佐世保に育った少年は、殆んど海兵や陸士に進みましたが、弟は近視であったためその何れにも叶わず、この上は医学の道に進んで軍医となり、お國の為に御奉公するのだと、大いに張り切っておりました。

長崎医専に入學後、戦争は日に日に激しくなり、学生は皆動員されて戦地へ、或いは工場へと送られる中に、医学生だけは不足する軍医養成のために学校に留められ、日曜もなく夏休みもなく、「月月火水木金土」を地で行く特訓に特訓を重ね、久留米

の聯隊へも派遣されたりしておりました。

佐世保市には二十年六月二十九日に大空襲があり、町内の警防部長をしておりました父は、負傷して辛くも生命は助かりましたが、それを弟は非常に心配して、早く田舎へ疎開して下さいと度々便りをよこしていました。そして最後の便りとなった一枚の葉書に、八月一日の長崎の大空襲で親友三人を失い、自分は危機一髪で壕に飛び込んだため助かったが、友の葬儀委員長をや、何とも云えぬ気持だったと云って、繰返し繰返し疎開をすすめて来ました。

そして遂にやって来たあの八月九日、原爆の業火が学園の上空に降り注ぎ、嘆けども叫べども二度と返らぬ若い生命を奪い去ったのでございます。思い出すさえ悪夢の様な、地獄絵図そのままの長崎の街でした。

私は母と一緒に八月十七日に長崎に参りましたが、浦上一帯の焼野が原には、幾百柱とも知れぬ遺骨が散乱し、その中に国防色のズボンをつけた学生らしい遺体も、幾つか見られました。私達は涙ながらにお念仏を唱えながら歩きましたが、原爆の恐ろしさは、これを見たものだけしか分りません。その悲惨さ、残酷さは、とても筆舌では充分に表現することは出来ません。私達は眩暈がして倒れそうになりました。

聞くところによると、弟はその日長い間水槽につき、火をさけて金比羅山に登り、夜明けを待つて古町の下宿に辿りついたそうで、私達もその跡を偲びたいと思ひ、重い足を引摺って山越えに下宿へ参りましたが、弟は下宿で高尾様の手厚い看護を受け、お医者様にも一度手を握っていただいて、十五日午後五時三十分、「おふくろに会いたい」とか、「淋しい、淋しい」と云いながら、息を引きとったこととでございます。苦しい七日間だったことでしょう。連絡がとれぬまま、早く行ってやれなかったことが、残念でなりません。

伊良木小学校の砂場で、丁寧に火葬に付し、骨壺を抱いて十八日に長崎を去りましたが、終戦と息子の死で両親はすっかり元気を失い、母はそれ以来溜め息ばかりついて、早く辰巳に会いたいと申し、遂に二十四年三月に他界致しました。父も後を追うように二十八年十月に逝き、今では親子三人が、あの世で楽しく過していることと

ございます。

原爆は私達一家にとり、憎い憎い敵です。「原爆許すまじ」の教訓は、永遠に声を大にして叫び続けねばなりません。それが私達遺族の義務だろうと思ひます。

あの日から二十五年、長崎の街は美しく変わり、医大の校庭には新しい校舎が次々に建てられて、戦後生れの学生さん達が喜々として学んでおられますが、どうか先人の犠牲が、平和史上記念すべき八月九日を生かして行って下さることを、希望してやみません。

(二九三) 医専二年生 金子幸雄

遺族 長崎市大浦出雲町二〇〇

金子マツ(母)



十月も末、急に冷え込みを感じる昨日、今日でございます。

さて、先日から「忘れな草」第四号の原稿を……との事でしたが、文を書くなど全くの別世界と考えておりました私も、長男幸雄の慰霊のためと勇気を出し

て、何十年かぶりに作文をしました。原爆の恐ろしさと世界平和を願う気持ちを、少しでも感じていただければ幸いです。

原爆、あの恨めしい日のことなど、早く忘れようと努めながら早や二十五年、でも月日を重ね、世の中が豊かになればなるほど、逆に思ひはつのるばかりです。

空腹のままで、無残に亡くなって行った人達!!

当時、私どもは長男幸雄を頭に、八人の子持ちでした。医専の生徒だった幸雄は、学業のかたわら研究室の警備員として、昼夜の別なく暑さの中にゲートルもとかず、ごろ寝の毎日だったとか。食事といえば、医学部隣の三菱職工学校に勤めていた父親が、毎朝出勤の際に一日分の弁当を届けていました。時には生の馬鈴薯や炒り

大豆なども加えて――。

大浦の山の上から浦上の大学まで六キロ余り、電車に乗れない時は歩いて、久しい間せつせと運んでくれたものです。同じ市内に居ながら、殆んど息子の顔も見られないこの母は、父親の報告を唯一の楽しみに、不足勝ちの食糧を集め集めて、弁当作りに心をこめたものでした。ところがあの日、私からこのささやかな楽しみさえも奪ってしまったのです。

原爆の後、何処をどう歩いて探しても、父と子の姿どころか、遺骨のかけらすら見つけ出すことは出来ませんでした。暫らくは、もしかしたらひよっこり帰って来るかも――という気が失せず、世界が寝静まった暗闇の中で、じっと目をこらし、耳をすます有様でした。

今思い起しますと、久しく顔を見せず、大学に詰めつきりだった幸雄が、ひよっこり戻りまして、ほんの三十分ばかり家族団欒のひと時を持ちましたのが、原爆の前夜、八月八日の晩でした。広島に住んでいた叔母たち一家が心配だ、と話していたあの子、又小さい弟妹たち一人一人に、ささやかなプレゼントをして喜ばせたあの姿、しかし幸雄はすぐに大学へ引返して行きました。

そして一夜明けたらあの憎い原爆!! 永の別れに帰って来てくれたのかと、あの時の顔が未だに臉に浮びます。

こんな悲しい事が二度と起りませぬよう、永久の平和を念願する次第です。

(四五、一〇、二八)

(二九五) 医専二年生 亀井 宏

遺族 福岡市今宿町西松原一一六四

亀井 昂 (父)

亀井 ゆき (母)

(前略) 「忘れな草」の原稿が大変遅くなつてすみません。書きだせばあれもこれ

もと思いますが、不束で纏りません。お役に立つかどうか知れませんが、死亡十日程前の手紙をお目にかけます。

宏は日頃悪筆を気にしておりましたが、医専に入学後、山里の習字の先生のお宅に通っておりました。「僕が角帽をかぶっているの、先生が恐縮なされた」など、申しておりました。何事にも努力家でありました。私共も年をとりました故、仕事も出来ませんで、余計にあの子の事を思うようになりました。(四五、一〇、二〇)

死亡十日前によこした宏の手紙(昭和二十年七月二十九日付)

拝啓 今日久し振りの休みの日曜なので、筆をとりました。

連日連夜にわたる空襲警報のため、夜もろくろく眠れず、不愉快な日が続きます。しかし幸なるかな、当地は全く無傷ですから御安心下さい。

今日は珍らしく小型機らしきもの来り、だいぶ機銃掃射をやったようで、賑やかでした。一昨日は長崎発鳥栖行の列車が湯江附近で小型機に襲われ、命を落した人が多少あった由聞いております。お互に今一層の用心が必要だと思えます。

今年の夏は割合に涼しく、暮しよいと思っていましたところ、先日福田先生が、今年の稲は冷害のため収穫が悪く、二百万人は餓えねばならん、なんて云われました。折角夏が過しよいと思っていましたのに、食い気一方の私ばかりしました。最近はどこでもと思えますが、食糧が足らず、従って栄養も不足するし、おまけに睡眠が足らないので、さすがの私もあまり元気がありません。下宿もいつの間にか、計り飯です。しかしお菜の方が割合豊富ですから、何とかやっています。

いよいよ七月も終りに近ずきました。そろそろ水泳によい気節です。早く今宿へ帰って暴れようかと思っております。丁度八月十二日は日曜ですし、お盆も近い頃ですが、でも、先日みたいに列車で事故が起つたりしては馬鹿らしいので、なるべく帰るのは見合せましょう。

先日通知しましたように、外套や冬服を石塚君の家へ、ノート等は大浦の金子君の家に疎開させました。今度は参考書を、と考えています。破れた袴がありますので、郵送しようかと思っております。秋子のモンペでもお作りになればよいでしょう。白い

方では私の救急袋を作ってください。大きき及び形は別紙の図の通りです。角帽は友人より、徽章は一年生の滝川君が工場で作ってくれたので、もう立派な服装になりました。秋子や美津子の学校の方は如何ですか。少しは便りをするよう話して下さい。

(三〇四) 医専二年生 古賀敬賢

遺族 佐賀県杵島郡江北町

古賀賢一(父)



二十五年前の被爆当時の状況並に息子の生前の面影を追憶し、原爆の犠牲者の冥福を祈る。本年は長崎原爆投下二十五周年に当りますが、息子敬賢の安否を求めて、被爆後三日目、累々たる人体や牛馬の屍を目のあたりに眺めて、その惨状が脳裏を去らず、身の毛のよだつ思いが致します。また独り息子の敬賢の在りし頃の面影が浮んで涙をさそい、運命とは云え可哀想でなりません。

被爆二週間前に私が発熱し、一週間ほど熱が持続したので、見舞のため帰省しましたが、幸に解熱軽快しましたので、安心して長崎に帰り、登校しておりました。

ところがそれから二週間後の八月九日正午前、新型強力爆弾が長崎市に投ぜられ、全市壊滅との報が伝えられましたので、内では息子の身を案じていましたが、翌日の夜になっても息子は帰らず、気がかりでたまらないので翌々十一日、出崎のため肥前山口駅で終日列車を待ちましたが、汽車は来ず、他の乗物もなく、翌十二日になって漸く長崎行の汽車が来たので、それに乗って同日正午に長崎に着きました。

屍臭ただよう間を縫って医学部付近に行きましたが、建物は殆んどなく、ただ茫然と焼野が原を眺めている所に、大学の関係者らしい方が来られ、説明によって初めて医専二年は衛生学の講義中だったことが判りました。しかし行ってみても教室の建物はなく、瓦礫が積み重っているだけで、息子の消息は全く判りません。私は暫し茫然

と行んで、在りし日の息子の面影など思い浮べながら、涙にくれました。

此処では息子の行方を探す術もないので、八百屋町の息子の下宿先を訪れ、ここで一切の事情を知ることが出来ました。息子は衛生学講堂で被爆、脱出して金比羅山で一夜を明かし、一応下宿に立ち戻ったが、只生家に帰りたいたい一念から、下宿の人の止めるのも聴き入れず、疲労因働した体を引摺りながら、通りがかりの荷車に便乗して、又何処かで一夜を明かし、漸く諫早駅に辿りついて汽車に乗り、肥前山口駅で下車して、家に辿りついたとのことでした。

私は下宿でこの話を聞くと、すぐに郷里へ引返しましたが、私より二、三時間前に既に息子は家に帰っていました。私は息子の無事な顔を見て、一時は家中で喜び合いましたが、よくよく見ると、全身が日焼けしたように黒く焼けて元気がなく、その上顔回の下痢で衰弱が甚しく、このままでは今にも死にそうだったので、すぐに佐賀県立病院の先生や、その他開業医の方々の応援を乞い、極力治療に努めました。衰弱は日増しに加わり、若き夢を抱いたまま父母の名を呼び、妹に頼んで買い求めていた笛を手にしながら、八月十八日午前四時、二十才の若きで永遠の眠りにつきました。

わが息子の事を、親の口から云うのもどうかと思いますが、非常に正義感の強い、そして平素から親思い、家族思いの素直な息子で、こんな子が天折するのかと、無情を感じざるを得ませんでした。

佐賀中学時代はグライダールの主将として訓練に励み、戦時下の医科学生となつては、短縮卒業のため夏休みもなく、毎日夕方遅くまで学習や実習に精励し、家に帰省するのはいつも日曜日で、日帰りで長崎に引返しておりました。

敬賢の或る日記の一節に、次の様なことが書かれていました。

「父は二十才になる自分を、いつまでも幼い児のように取扱って心配をする。然しこれも父にとっては、この様にする事がせめてもの安心であり、又楽しみにしている事でもあり、子を思う親の心がよく窺われる。まあそうさせておくのも親孝行である」と。本当に親思いの子であったと、つくづく思っております。

色々と思いつきませんが、涙が出るのでこれにて止めます。

最後に原爆犠牲者の皆様の御冥福を、心からお祈り致します。(四五・一〇・二〇)

(三〇六) 医専二年生 児 玉 進



遺族 長崎市馬町七三

児 玉 治 重 (父)

忘れもしない原爆落下当時、私共の住居は爆心地より八〇〇米ほど離れた城山町で、現在護国神社の南側斜面の中段(北五条)にあり、長男進を頭に、長女(活水女専)、次女(高女)、次男(尋六)、三女(尋三)、妻と私の七人家族でした。

戦争により焼けることはあっても、死ぬることは全然考えてもいなかった当時、私は電鉄会社の工務部の責任者で、ある用件のため、会社の者が午前十時までに来る約束だったので、自宅にいたが、時間になってもその人が見えないので、十時半頃から諏訪神社下の本社に出動し、間もなくあの恐ろしい原爆の爆発、青白い強烈な閃光と爆風で、私は只事ではないと思ひ、また近くに爆弾が落ちたのかと考え、自宅の城山方面は大丈夫と察しながらも、少し不安を感じたので、友人と相談の上、一緒に帰ってみることにした。

長崎駅から浦上方面を望むと、一面に火の海と化している。とても通れないので、鏡座町の山の手中腹から医大の方に出て、純心女学院近くの浦上川の中を下ったが、そこには兵器製作所の工具らしい百数十人が、水を求めて川の草原に降り、焼け爛れた皮膚を太陽に曝らしながら、苦痛を訴えていた。既に息を引取った人も大勢見受けられた。私は大橋から川の土手伝いに行き、油木町から護国神社に登ったが、下に見える自宅は、焼け残った木材が燻り続けていて、まだ近寄れない。神社の広場には二、三人の子供が吐く息も苦しげに彷徨う中に、大学の池田先生の娘マリちゃんがいるが、何を話しかけても返答せず、氣力を失っていた。

家族の生死が気にかかったが、日が暮れたので野宿で一夜を明かし、翌朝夜が明けろのを待って、進のいた筈の大学の教室を覗いてみた。然し黒焦げの死骸ばかりで、誰とも判断がつかない。大学から病院の方に廻ってみると、焼けただけの大勢の人が横たわっていたが、ふと壁の張紙を見ると、生存者の名前が書かれていて、その中に児玉進の名がはっきりと認められた。嗚呼助かった、と跳上る思いで、大学裏の穴弘法様の上下を思い切り大声で進の名を呼びながら駆け廻ったが、どうしても出会えなかった。ところが墓の中から私を呼ぶ音がするので、駆けよってみると、それは私の知人で、「三時間ほど前にお宅の進さんに会ったが、元気な様子だった」と聞き、幸運だったと嬉しくてならなかった。

他の家族のことが気にかかったので、城山の自宅に帰り焼跡を探したところ、次男と三女の焼死体が見つかったので、再度自分で焼いて骨を拾った。今もって不思議に堪えないのは、三女は首から上が爆風で吹き飛んだのか、どこを探しても見つからなかった。三日目に、妻と次女が自宅から一五〇米ほど離れた他処の防空壕に居ることを知らされ、行って看護したが、妻は翌日亡くなり、次女は人の世話で三養病院に入院させたが、矢張り助からなかった。死後胸部が紫色に変ったのを見て、原爆で内臓が破壊されていることを知った。

十四日の正午前、大橋の所で私の懇意な人に出会ったら、「貴方は無事でしたか。実は今朝道ノ尾駅の所で進さんに会いましたが、親爺は自宅で死んだと話しておられました」との事、「体の様子は？」と尋ねたら、「相当に苦しうで、婆様の着物を肩から引掛け、素足で汽車に乗って、これから郷里の大分に帰るとか云っておられました」とのことだった。私が死んだと思ひ込んでいたのは、私が自宅を待つていることを知って学校に行ったので、無理からぬ事とは云いながら、息あるうちに私の無事なことを知らしてやりたかった。私の郷里は白杵市であるが、年寄り三里ほど山奥に疎開中で、大分市には私の弟の家があるが、駅についても自分一人で歩けない程弱っていたので、親切な人に支えられて弟の家に辿りつき、すぐ膳所病院に入院させて貰ったが、目は見えなくなり、呼吸も困難となって、僅か二日で死んだとのこ

と、そして死の直前まで「クヤシイ、クヤシイ」と連呼し、讒言には「論文を書かねば——」等と口走っていた、と弟から聞かされ、私も不憫に堪えない思いがした。原爆後四日余りも一緒に長崎に居ながら、遂に会えなかった。十七日に米軍が上陸したので、娘は疎開するように勧告され、私は一人生き残った長女を連れて郷里に帰ったが、その時進の白骨は既に仏壇に在り、線香がけがぶっていた。

一度に五人の妻子を失い、一時は茫然としたが、私の隣保班は九軒で、五十七人居た中、一家全滅が四軒、助かったものは五十七人中僅か七人でした。私の家では二人助かったので、他家に比べるとよかつた方と云えるかも知れません。然し私は爆心地の近くで八日間も生活し、毎日駆け廻ったためか、疲労が甚しく、四十日間ほど下痢が続いて衰弱も加わり、十人中九人までは、「君は助かるまい」と、卒直に云われた程でした。

本年で満二十五年を経過し、今では毎年二回の被爆者健康診断で、いつも異常なしと云われていますが、このような悲惨事は二度と繰返して起らないよう、祈らずには居られません。

(四五・一〇・二〇)

(三〇七) 医専二年生 児 玉 正 嘉

遺族 長崎市水ノ浦町二七五

児 玉 五 郎 (父)

去る昭和二十年八月九日十一時二分、原爆投下の日は蒸し暑く、私は造船所の徹夜作業を終え、朝帰ってみると、姉娘は動員で香焼こよやに行っており、妹の方は鮑ノ浦小学四年生で家に帰っておりました。正嘉は当時長崎医専二年生で、九時頃には学校に着いていたと思います。その頃米軍の飛行機からは日本文字で書かれたピラがまかれ、間もなく十一時にはピカッと光って、赤、黒、白、黄色の煙が浦上地区の上空に立ちこめました。人々は「新型爆弾だそうだ」と皆とりどりに話していると、やがて造船所前の道路を担架に乗せられて、一人、二人、三人と、見ているうちに三十人以上も

三菱病院の方へ運ばれて行きます。高い所に登ってみると、浦上の方には黄、黒、赤の煙が濛々と立ちのぼって、一面が火の海です。正嘉の身を案じて稻佐橋まで行ってみました。ここも早や火の海、どうすることも出来ません。

爆弾が落ちた後暫らくは、正嘉は多分負傷者の治療で忙がしいのだろうと思つていましたが、日が暮れても帰らず、夜が明けても姿を見せないので段々と心配になり、十日早朝から十二日夕刻まで、妻と一緒に大学、茂里町、家野町、穴弘法様のあたりまで探しましたが、どうしても見当らず、道の両側には、足が立たず目ばかりきよろつかせ、顔は真黒になり、皮膚は焼け爛れ、皆水を欲しがって、中には水溜りには入り込んで死んでいるものもあり、どうしても正視することは出来ませんでした。

浦上方面は全くの焼野が原で、其処に住んでいた私の同僚は、自分だけが造船所に勤めていて助かり、家族七人が全部死んだのがあります。正嘉は衛生学講堂で真黒に焦げて焼け死にましたが、拾った遺骨は、本当は誰のかが判りません。

あの当時、他の学生たちは皆学校は休みとなり、工場などに動員されて、そこで死んだものの遺族には年金が支給されていますが、長崎医大や医専の学生は、夏休み中も学校に抑留されて、軍医になるための勉強に動員されていたのにも拘らず、その遺族には年金支給の恩典も与えられていません。死んだ学生達もさぞ不本意だろうと思えます。

「ああ、可愛い、可愛い我が子よ」と、母は嘆きながら、二十七年十一月二十八日に、お前の写真を胸に抱きしめて逝きました。父も遠からずあの世でお前に会えるであろう。それまではどうか、母と共に安らかに眠っているように——。

(四五・一一・二七)

正嘉の絶筆、八月一日に投函した兄への書簡

冠省、悲叫歌

○ 幕府なすここのたの夷撃たずして など神氏の所得しめや

寸暇なき警報下、自己維新と医学研鑽に精勵致して居りますれば、何卒御安心下さい。二十九日にいささか爆弾を蒙りましたが、損害極めて軽微、民心びくともしませ

ん。町内に投弾なく、今後の敵襲に対する精神的準備と胆力を練られた感、後顧の憂なく、全誠意、軍務に邁進せられます様、お祈り致します。

二十七日、二十八日、平野大人、公用と休暇を兼ねて帰崎致しました。余り早く再会致し驚喜しました。重機隊とのことで、身体もやせておらず、中々張り切り、自信満々たる口調を以て話し、相変らずの元気振り、森川同人と隣隊だそうです。ゆっくりに共に語り合いました。今宵はこれにてお許し下さい。独特の拙報にて 草々

(三三三) 医専二年生 下崎 俊水

遺族 長崎市小峰町九一〇

聖フランシスコ病院

下崎 謙一(父)

(前略) 「忘れな草」第三号をお送り下さいます、大変有難うございました。

私は去る六月から、長崎の聖フランシスコ病院に入院致し、当分此処に居ると思いますので、今後私への御連絡は、前記の病院へお願い申し上げます。(四五、七、二〇)

(三一五) 医専二年生 首藤 洋三

遺族 大分市富岡町四四〇―二組

首藤 きく(母)

(前略) 二十五年忌に当り色々とお心遣いのこと、深く御礼申し上げます。

私も今度は家にて法要を営む心組でしたが、二二〇あった血圧が、七月頃からの医者の手当で一八四に下りましたので、これならと意を決して参列させて頂きました。一年振りに亡き洋三に接した心地がして、心おきなく泣けるだけ泣いて参りました。

慰霊祭の後懇談会にも出て、色々お話も伺いたいと思いましたが、お盆前で何かと家事のことが察じられ、心ならずも中座致しまして、誠に申訳ないことで御座いました。(後略) (四五、八、二五)

(三三三) 医専二年生 高橋 清

遺族 長崎市西山町三丁目三三二

高橋 正之(父)



「忘れな草」を每号お送り下さいます有難うございます。あれから早や二十五年、年をとりますと涙もろくなり、一人の方のお便りを読むのがやっとで、次に進むことが出来ません。

思い出しますと、あの前日は三菱兵器に出勤していましたが、夜勤でしたので、翌九日の朝、片淵町の自宅に帰りました。

暑い日で、空襲警報も解除になっていたのも、上衣をとった瞬間、写真のフラッシュをたいような閃光が走り、火の玉に包まれたような状態になって、物凄い音響と共に屋根がとび、ガラス窓はちんじんにこわれてしまい、何の事やらわからずに、茫然と立ちすくんでしまいました。

その頃は毎日空襲の連続でしたので、敵機の爆撃だと思い、急いで裏山の防空壕に家族を促がして駆け込みました。すると間もなく、浦上方面に爆弾が落ちたと聞き、二人の子供(清は医大、兄は三菱製鋼所勤務)の安否を気遣って、瓦の破片に埋まった道を走って電車通りまで出ましたが、電車は不通、通りは人の渦で、到底浦上まで歩いて行けるような状態ではありませんでした。そのうち空は陽が沈んだように薄暗くなり、金比羅山の方を見ると、空が赤々と燃え上っているようでした。

二人の子供も心配でしたが、家に残した妻子のことも心配で、これ以上危険にさらしたくない一心から、先ず江の浦の知人の家に疎開させるために、停電の真暗な中を夜を徹して歩き続け、妻子を知人に託して、すぐさま長崎に引返ししました。疲れた足を引きずりながら、長崎に着いた時は既に夜が明け、街の中にはまだ煙が立ちのぼっていました。

兄の方は製鋼所で被爆して、顔が腫れ上り、歯もとれて、すっかり変った人相で家

に辿りついていました。これで残るは清一人と、勇を鼓して煙の中にとび出し、何処が道やら判らぬ瓦礫を踏み越えて、浦上へ辿りつきましたが、医大の構内は全く不案内なので、ただあちこちとろつきまわるばかり、誰に尋ねても要領を得ず、困っている所に二人の医学生が親切に案内して下さい、「高橋君はいつも先生のすぐ前で講義を聞いていたから、多分このあたりに居た筈です」と、教壇の場所まで教えて頂きました。

被災後まだ早かったので、骨は一体づつはつきりしていましたが、誰彼の識別は勿論出来ません、両手を広げたのや、前かがみになったのや、色々な格好で焼けていました。仕方がないので、「一番前の遺体から骨を拾い、防空頭巾に包んで持ち帰りました。余りの惨状にただ茫然として、悲しみの実感も湧いて来ず、案内して頂いた学生さんの名前も聞かずに別れましたが、「自分達は昨日欠席したので難を逃れた」と、気の毒そうに云っておられました。

妻の話によると、その朝清は、「今日は何となく行きたくないなあ」と申したそうで、妻も一応は登校を止めましたが、「自分達は空襲の如何を問わず、文部省の命令で講義をさぼる訳には行かない」と申して、重い足どりで出かけたそうです。

清は小学校以来、十一年間無欠席で、中学時代は野球部に入って、健康には自信があったのですから、あの時無理にでも止めておけば——と思うと、涙が先に出てどう仕様もありません。

遺品としては、生前の爪が残っているだけで、友達の会合を家でした時の歌声が、今でも耳にすがるようです。私は七十一才、妻は六十八才となり、病気で不自由な今この頃では、「清がいてくれたらなあ」と、思わず愚痴がこぼれます。

そして、この「忘れな草」を一人でも多くの人に読んで頂き、戦争が如何に悲惨なものであるかを知って貰って、二度とこの様なことのない平和な世界が続くことを、心から祈っております。

(四五、一〇、二四)

(三二四) 医専二年生 高橋 茂

遺族 大分県別府市浜脇二一三―四

高橋 幸六(父)

大塚 淑子(妹)

昭和二十年八月九日、当時私の家は北鮮の羅津にあった。その頃一躍ブームタウンとして注目され、国策に基き内・鮮・満の連絡港として活躍していた港町で、満鉄(南満洲鉄道)や満洲の諸会社をバックに、活版業を営んでいた。

日の出の勢も八月八日の夜を最後に、うたかたの如く消え去った。十月に余る苦難の引揚げ、母がその前年に死亡していたので、父と私の二人連れで、翌年六月に帰国した。引揚げの途中、電信、電話の一切が断られた中で、八月の末頃であったろうか、誰からともなく、長崎にひどく大きな爆弾が落ちた事を聞かされた。でもそれは港の方だけらしいとのことで、何か不吉な予感はそのもの、自分自身の心を否定しつつ、兄の健在を祈った。

実はその前、まぎれもない八月九日の晩、公休日を利用して訪れた慶源という所の宿で見た夢が、妙に気にかかっていた。父は北鮮に相当広い田を持っていたので、稲の状況を見に来たのだった。その晩の夢は不思議に鮮明で、二十五年を経た現在でも思い出せるほど生々しく、私に最後の別れをしに来たときか思えない夢だった。覚めた後でハッとされたのを憶えている。神ならぬ身の知るよしもなく、後になって初めて正夢とわかった。思えば二十年の正月過ぎに、長崎へ帰る兄を停車場まで見送ったのが最後だった。

たった二人きりの兄妹、喧嘩もしたが仲も良かった。兄は中学時代に寄宿生活をしていたが、休みに帰ると、友達が大勢集って来て、賑やかなのがとても嬉しかった。二十一年六月、博多に上陸し、帰りついた伯父の家で、兄の原爆死を知らされた。もしやと思っていた一縷の望みは断たれ、走り込んだトイレから、暫らく出て来られなかったのを憶えている。あれから二十五年、父も老いた。満八十一才になろうとしている。幸い、私の主人が理解のあるやさしい人なので、大塚の姓になっても、ずっ

と私が父の面倒をみている。兄がいてくれたら、二人で父に孝養が出来たのにと、儂ない事ながら、時たまふっと思うことがある。

昭和二十五年の冬、一日長崎を訪れた。もつと早くと思いつながら果せなかったで、急いで医大の教務課を訪れた。その時丁度居合せた方で、浦橋という方が居られた。兄と同級だったとか、親切にも兄が被爆したという衛生学講堂のあったあたりに、連れて行って下さった。熱いものこみ上げる中で、今は何一つ形見の品のない兄の代りに、小さな小石をただ一つ拾った。あれから二十五年、今も大切に保存している。その時見た浦上天主堂も、そのままの面影をとどめ、当時の悲惨さが、まだ私の眼に焼きついている。

この方はたしか、伯父様が小倉で病院関係のお仕事をなさっている筈、御健在なればあの時のお礼を申し上げたいと思っている。なほ数名の兄の学友の方にもお会いして、原爆当時の状況をお聞かせ願いたいとお頼みしたが、「聞かない方がよいでしょう」との一点張りで、どうしてもお話しして下さらなかった。止むを得ずそのまま帰ったが、今思えば、「それでよかったのだ」と、あの時の皆様の御好意に対し、感謝の気持ちで一杯です。悲惨な有様を一部始終聞いて、夜毎日毎に苦しむ自分を考えた時、教養ある方々の御厚意に改めて頭が下がります。

私の息子も今年は中学一年になり、身長も私より高く、下の女の子も小学二年になりました。この夏休みには日課の如く喧嘩をしたり、あべれたり、実に伸び伸びと育っています。願わくはどうぞ、この平凡な毎日が続くように、と希うのみです。

朝な夕な仏前に香華をたむける時、今はもう目もうすくなくなり、老衰しつつある父がせめて病まずに余生を過せるように、そして母や兄の霊が安らげく鎮まるように、と祈るばかりです。終りに、年老いた父の代りに、私が手記をしたためたことを、お許し下さい。

(四五、八、三一)

(三三八) 医専二年生 竹下 正七

遺族 長崎県南高来郡南串山町丙一〇三八六

竹下 重次郎(父)

「忘れな草」の発刊を見る毎に、思ひは常に昭和二十年八月九日の、恐るべき原爆投下のあの日に帰り、恨めしくもあり、また悲しみを忘れることが出来ないのではありません。

愚息正七は食糧不足のため、時折り長崎から自転車で自宅に帰っていたので、一夜ぐらいはゆっくりくろいで泊っていったら、と云つても、「戦地で呻吟する負傷軍人の苦痛を思えば、寸時も勉学を怠らず、早く卒業して第一線に出征し、皇国のために生命を賭して働かねば、国民としての義務が果せぬ」と、夏休みも返上しての勉強でした。若し不幸にして敗戦の憂き目を見んか、皇国は破滅、最早や生きて甲斐なき生涯と、実に張り切っておりました。当時の医学徒の心境は、現代の青少年の思想とは、比較にならぬほどの相違でした。

医師、いや軍医に仕立てる当時の親達の意中も、好きや道楽の沙汰ではなく、有福な家庭と雖も、実に苦心慘憺して勉強させていたのであります。それも空しく、ああ、また何をか云わん。

戦死軍人並びに徴用軍属の遺族には、政府が終戦後新たに援護法を制定して、その遺族の生活を保護していますのに、政府の特命により休暇も取り止めて、一日も早く軍医となって第一線に出征すべく精励していた、長崎医大の原爆死亡学生遺族に対しては、七万円の一時金交付のみで、動員学徒の遺族とは、雲泥の差であります。

今や既に遺族の大多数は老境に入り、生活苦のために恨みを呑んで他界された人も多い、と聞き及びます。

以上の事情を種々御検討の上、長崎医大原爆死亡学生の遺族に対しても、適當の法令を制定して、速かに援護法を講ぜられるよう、祈念してやみません。

(四五、一〇、二四)

(三三七) 医専三年生 中島 之彦

遺族 長崎市西山町二一三四四

中島 金之助(父)

「忘れな草」第四号の原稿についてお知らせを頂きましたが、実は私は原爆当時、その前後の長い期間に亘って長崎を離れ、田舎で病氣療養中でありましたため、被爆による一家全滅後も、長らくそのままで過し、家族の写真なども無いまままで今日に至り、第三号刊行の折にも、写真のお届けが出来なかつた次第でございます。(後略)

(四五、一〇、二五)

(三四〇) 医専二年生 中山 喜昭

遺族 佐賀県三養基郡三根町九九五

中山 フケ(母)

(前略) 去る八月九日の慰霊祭の折は、参拜致す積りでございましたが、今年は殊更暑さが厳しく、私自身も本原二丁目で被爆したためか、原爆症に悩まされ、注射を受けて居りましたような次第で、心にもなく失礼致しました。どうぞお許し下さいませ。(後略)

(四五、九、二五)

(二四二) 医専二年生 永井 正一

遺族 熊本市池田町稗田一四二一

永井 郁子(母)



(前略) 実は私事十月中旬から、腎臓や肝臓を悪く致しまして、病床に臥しておりましたので、早く早くとは心は焦りながらも、遂々延引致しました。悪しからず御容赦下さいませ。年をとりますと気が弱くなり、まして病床についておりますと、尚

更亡くなった正一のことを思い出されまして、こんな時にあの子が生きていてくれたら、どんなに心丈夫だろう、脈もとって貰えるだろうにと、つい愚痴も出まして、ただ独り苦悶するばかりでございます。

かねてから病氣勝ちの私でございましたので、あの子がまだ生存中に、よく私に申しましたことは、「僕、早く一人前の医者になって、きつとお母さんの病氣を癒してあげるよ」と、私を喜ばせてくれました。でも今はもう、あの子はこの世の中に居なくなりまして。私の頼みの綱はぶつりと切られてしまいました。何という悲しい事でございます。

私の最も必要とする子は、あの忘わしい戦争の犠牲になってしまい、残された私は、たった一人の息子(正一の弟)と嫁、孫たちに囲まれて、余生を送ってはおりませんけれど、病氣を致しますとつい涙もろくなりまして、帰らぬものとは知りながら、正一の面影を偲んでいる次第でございます。

アルバムの中の正一の写真を同封しておきました。よろしく願ひ致します。

(四五、一一、九)

(三四五) 医専二年生 並木 輝夫

遺族 佐賀県藤津郡嬉野町下宿

並木 チカ(母)



今思い出せば昭和二十年八月四日、息子の輝夫が突然嬉野の家へ、「今のところ講義も休みだし、空襲の怖れもあるから帰って来たよ」と云って戻って来ましたが、「余り長く休んでもいけないから」と云いながら、八日の夕方、六時のバスで長崎へ帰りました。その時私も「どうせ長崎は空襲があるから、もう少しこちらに居たら」と云いましたが、矢張り本人は学校の事が気にかかったのでしょう。

丁度その頃、一カ月前に主人を戦死させた娘が、子供を一人つれて戻っていました。二人しかいない姉弟のためか、お互に仲がよく、息子は姉を慰め、姉も息子の好きなライスカレーを作って、長崎へ送り出したような訳でした。

それから四、五日たった八月十三日の朝、諫早の知合いのお医者様から、輝夫が十日の午後十二時頃、諫早中学の雨天体操場で亡くなったとの報せがあり、私は取るものも取りあえず、娘とその子供を連れて諫早に行きました。息子は既に火葬場で奈毘に付され、遺骨が淋しく私達を待っていました。

迂闊にも、長崎に原爆の落ちたことも知らず、独り息子の死にも会えずに悔しくなりませんが、こんなことなら、八日の夕方息子が長崎に帰る時、無理にでも引き止めて、あと一日でも嬉野に置いておけば、原爆に会わずによかったのに——と思うと、残念というより、運命というものが、返す返すも恨めしくなりません。

あの後、息子の遺品など整理してしましたら、その中に日記帳があり、どこを見て、一人で嬉野に居る私の事を心配した文ばかりで、涙が出てどう仕様もありません。その中の一節に次のようながあります。

【昭和二十年一月二十七日】

「去る二十四日、一泊の予定で嬉野に帰った。大した用件はなかったが、炭とか衣服とか、小包で送って貰うのも大変だから、自分で取りに行ったのである。

母と二人で食事をし、枕を並べて寝た。母が何やかやとでもよくもてなしてくるので、本当に恐縮した。母は非常に喜んでくれた。大きな家に一人で生活するのは、いくら年をとっていても淋しい事だろう。ただ僕一人に生涯の希望をかけて生きている母、僕は果してその責任を充分感じて行動しているだろうか。それを思うと、母に對してすまない気がする。今後益々自己反省をし、母の希望の万分の一にでも報いよう。

母は大変気が若い。しかし年が年である。今年五十四才を迎え、めっきり老いこんだように感じられる。僕は母を一人で生活させるのが不安だまらな——。」

以上が息子の日記の一部です。以前から「忘れな草」への手記の事を考えてはいま

したが、書くとなると、故人の事や当時の事が思い出され、どうしても触れたくない気持ちでおりました。でも矢張り、今後二度とこのような悲劇を起させてはならない。本当の世界平和を築いていかなければならない。その為少しでもお役に立てばと考え、拙い文ですが、投稿させて頂くことに致しました。どうかよろしく願ひ申し上げます。

(四五、一〇、二二)

(三五二) 医専二年生 原 浩 己

遺族 長崎県東彼杵郡東彼杵町三根郷六三〇

原 千里 (母)

広島市中広町三丁目四一九

益 田 ヒサ子 (姉)

(前略) 私は原爆で亡くなりました医専二年生、原浩己の姉でございます。今年の五月、突然母の千里から「忘れな草」第三号を送って参りました。むさぼるように私はページをめくりました。短い母の手記や、弟のハガキ一枚の候文が涙でかすみ、仲々読めなかった私でございます。

落ち着きを取り戻して、ページを初めから拝見致しましたが、御遺族の方々の想いの記の数々、よくまあこれまでに集められたものと、皆様の御尽力に感謝申し上げます。この度は母に代りまして、拙い手記を書かせて頂きました。よろしく願ひ申し上げます。

遠いあの頃のこと

昭和二十年八月九日、当時私は広島市から七〇キロほど山間部に入った、三次市十日市町の叔父の家に行っておりました。叔父はそこで内科を開業しておりましたが、広島に大型特殊爆弾の落された八月六日の午後、重傷の被爆者がこの山奥の町へ大勢運ばれて参りました。

それから三日後の八月九日には、広島と同じ爆弾が長崎に落されたことを、ラジオ

のニュースでかすかに聞きましたが、浦上が中心地とはつゆ知らず、弟の身を案じながらも、多分救護に活躍していることだろうと、遠く長崎の空を仰いでおりました。

その後近所の山田薬局の御長男が、長崎医大の附属病院で被爆され、辛うじて三次市の自宅まで辿りつかれましたので、叔父が日夜往診しておりました。山田さんはひどい出血が続き、貧血が高度となりましたので、叔父は頻繁に輸血を繰返しておりました。そして、「若しも浩巳が生存しているならば、今のところ輸血以外に治療法はないと思うから、極力輸血を続けるように知らせてやれ」と申しますので、私はすぐに佐世保の父母宛と、一縷の望みを託しながら、弟の下宿宛（長崎市山里町）にも封書を出しました。

どうか無事でいてくれますように、との私の祈りも空しく、幾日かの後、私の出した粗末なハترون紙の手紙は、「罹災」と赤い印を押されて、長崎から戻って参りました。あの時の赤い印は、いつまでも忘れられず、今でも眼の底に焼きついておりません。

弟は大変明るい性格で、家中の者をよく笑わせておりました。本人は、旅順工大か熊本高工に行きたい、と私に漏れておりましたが、三次市の叔父の勧めで、医科を選んだのでございます。あの非常時局下、一日も早くお国の役に立ちたいと、佐世保中学四年修了の後、長崎医大附属医専を受験して、幸に入学することが出来ました。

昭和十九年四月、当時は学生服もなかなか新調出来ませんでしたので、父の国民服を一着譲りうけ、帽子だけは真新しい角帽をかぶって、広島へやって参りました。その時私が、「戦争が終って平和がやって来たら、また医学部に進んで勉強するのね」と申しましたら、「僕は三次の叔父さんのような街医者にはならないぞ。南方へ行って南方医学を研究するんだ」と、大変大きな強がり云って居りましたのに――。

「グビロが丘」という言葉は、弟の口から幾度か耳にしておりましたが、二十二年の秋の末の頃でございましたか、初めて荒れ果てた浦上の街に降り立ちました。医大の校門を過ぎ、矢印に沿って小高い丘に登りましたが、そこには生き残られた方々の手によって、大理石の碑が建てられていました。「ああ、この中に弟の遺骨が――」

と思いながら、私はいつまでもその碑を撫でておりました。「またお参りに来るからね」とつぶやいて、ふり返りふり返り、私はあの丘を下りて参りましたのに、あれから二十余年、もう一度、と云って来たお参りを、私はまだ果しておりません。

【追伸】

文中の小田さんと云われる医大生の方は、その後恢復されて、戦後長崎医大が諫早で再開された折、復学されて無事卒業されたと同っております。その方お一人でも生きのびられて、社会のためにお働らき下さることを、私はとても嬉しく思っております。（四五、一一、三）

(三五二) 医専二年生 樋口匠一

遺族 大分県佐伯市西谷区三九

樋口みと(母)

(前略)匠一の思い出につきましては、「忘れな草」第三号に大方書きましたし、遺品もあの当時、目に入ることが苦痛で、全部処分してしまいましたので、今では残念に思っております。今になってみれば、遠い過去の思い出となって、読む余裕も心に出来たと思えますのに――。

いつもながら遺族援助のことで御奔走下され、誠にありがたく感謝申し上げます。私も感じておるのでございますが、国家がどうして動員学徒として取上げて下さらないのか、と残念に思います。犠牲学徒の手記を見ましても、歴然としていますし、国のため挺身報国の意気に燃えて、医療や救護にあたっており、動員と何等変わったことではないと思えます。

当時軍医が不足していると聞いていましたので、速成軍医養成のため、夏休暇も返上して突貫教育を受けながら、物資不足の中を空腹を抱えて壕を掘ったり、徹夜で監視をしたり、ただ一途に国のために純情を捧げたことを思うと、さぞ辛かっただろうと泣けて来ます。夏休暇があったら、五百有余のあたら若き命も散らすにすんだことを思うと、残された遺族の私どもにも、こんな悲しみもなかったのにと、返らぬこと

ながら悔まれてなりません。

殊に杖とも柱とも頼りにしていた独り子を失った方も大勢ございますが、年老いて女中奉公や掃除婦をして余命を送っておられるお母様方があると聞いては、涙なしにはいられません。無事であつたら今頃は安楽な余生を送っておられる事でしょうが、このお気の毒な方々のために、お国も何とかして頂きたいものと思ひます。犠牲となつた学生も、親の不遇を地下で嘆いでいることごさいましよう。

どうか御不幸なお遺族様の上に、お倅せの日は参りますように、心から念じております。(四五、一〇、二七)

(三五八) 医専二年生 前川 泰成



遺族 長崎県平戸市岩ノ上町三一三

前川 熊一(父)

思い出すまに

今日は焼土も大分冷えただろうと、八月十一日九時過ぎ、我が家の焼跡へ行き、亡妻の遺骨を掘り出しにかかった。被爆から三日目の今日でも、まだ地面や落ちた壁土が熱いので、地下足袋はいた儘で、時間をかけて覆いかぶさつた総てのものを取り除き、漸く拾い上げて骨箱に納めることが出来た。

これで先ず一つだけは済ませたが、これからは伴の遺体を、と思つただけで心が重い。一休みして汗をしずめて、医大へ足を運んだ。

教室の焼跡や、校庭、裏山、更に少し離れた穴弘法へと、照りつける夏の暑い陽ざしの中を、数えきれない程方々に倒れている若者の遺体を、一つ一つ入念に見て廻つたが、皆同じ格好で、目印となるものが何一つないので、十四日まで毎日続けたが、遂に巡り逢うことが出来ず、これではよほど親子の縁が薄かつたのかと考えつつ、ト

ボトボと帰途についた。

北部山里町へ辿りついたところ、町内の生存者十余名の人達が、焼け跡の小高い所に集つていた。「これまで何処に居たのか、よく怪我もなく無事で」と、互に喜び合つたが、無一物となつた現在、話は当然、「今後どうしたらいいか」ということに落ち着いた。町内会長は医大教授金子直氏であつたが、教授は大学内で、家族の方々は自宅で、何れも亡くなられ、又町の世話役の人達にも、生存者は一人もないとの事であつた。

私は金子会長の隣家に住んでいた関係で、会計係を担当させられ、町財産である郵便貯金が、一万三千余円あつた事を記憶していたが、通帳は会長宅にあつて焼けてしまい、記号番号も不明なので、果して払い出しが出来るかどうか大いに危ぶまれた。

しかしこの儘では皆大変なので、兎も角一応交渉してみることに衆議一決し、私長に事情を述べて即時払を懇請したところ、初めは預金名だけではと種々難色があつたが、局員を督励して貯金カードを探して頂くことになった。

二時間程待つて大方諦めかけていた頃、「これか？」とカードを示された時は、全く夢見る心地で、暫らくは感謝の言葉すら忘れて、ただ茫然としていた。

この金を、生存者八〇世帯と仮定して、一世帯一六〇円づつ分配し、実際は七二世帯だったので、残りの八世帯分、千三百余円は市の福祉課へ寄付することとした。これで町内会計係としての責務も滞りなく果すことが出来、一方伴の遺骨も大学から分骨して頂いたので、漸く肩の荷がおりて、落ち着くことが出来た。

当時勤務していた九配(今の九電)の業務も、日が経つにつれ、ぼつぼつ帰還した若者や中年者の手で復旧が日一日と進み、一切の希望を失つた私は、退職の時期を待っていたが、上司や先輩、同僚の温い心遣いにより、初志をひるがえして今日に至つた次第である。人間の運命ほど解らないものはないと思う。

あの時から二十五年の歳月が流れ去つたが、受けた生涯忘れれることの出来ないあの痛手は、まざまざと昨日の出来事のように、臉に浮んで来る。(四五、一一、九)

遺族 東京都三鷹市大沢一―五―四 吉岡方
松尾 たか子(母)

宏は二十年八月八日の朝、「今日は防空当番だから明日の夕方ししか帰らぬよ」と申して登校しました。それなのに、九日の朝九時頃、虫の知らせで一目会って家族に別れを告げるためか、遠い五キロの道を、学友の丸木建様(御生存)と二人で歩いて、片淵二丁目我が家に帰って参りました。

一寸顔を見て一口、二口話しているうちに、「松尾さん、お酢の配給をお願いします」と、町内の方から伝令が参りました。「朝食は？」と問えば、「僕は学長先生の壕でお握りを頂いたから欲しくない」と申し、洗面器に一杯水をたたえて体の汗を拭き始めました。それを見ながら、「では配給当番をすませて来るからね」と、面倒なお酢の配給の行列に加わりました。この当番は町内十軒の家から、大小様々の名札入りの瓶を預り、家族の人数だけの量を入れて貰うのを待たねばなりませんので、炎天下に順番の来るのを並んで待ち、入れ終るとその十本を家々に配って廻るのです。大変時間がかかったので大急ぎで家に帰りますと、宏達は丁度学校へ出かける処でした。「アラ、又行くの」と云えば、「アア、十時から福田先生の大切な講義があるのでね」と云いながら、玄関前の十段ばかりの石段を駆け降りて行きました。

その姿よ、新しい国防色の制服、角帽をキチンとかぶり、左腕には紫地に白く「長崎医大報国隊」と染め抜いた腕章をつけていた。実に凛々しくて見とれるような我が子の姿でした。これが、これまで男の子に恵まれなかった我が家に授かった宝玉として、二十年間育てて来た長男の宏との別れの一瞬だったのです。このお酢の配給さえなかったら、色々雑談をかわしたり、粗末ながら茶菓を頂いているうちに、時を過ぎて出発も遅れ、或いは浦上へ行かず助かったかも知れないと思うと、身を引き裂く残念さで一杯でした。これも宏が持つて生れた運命だったのでございませう。

(四五、一一、一一)

この二十五年間、折にふれ、原爆落下一時間前に、新大工町電停で別れた長兄の面影が、脳裏をかすめる。

五つ違いの兄は、当時付属医専の二年生、小隊長(級長)をしていた。八月八日の夜は防空当番で、一睡もせず警戒に当り、午前九時頃、ひよっこり片淵町の自宅へ歩いて帰って来た。

軍医になる日が次々と繰り上り、三年生の半ばには壮途につくとかで、夏休みもなく、この日もすぐ十時には、次の講義のため出発するという。一緒に電停まで行ったが、警戒警報発令中という札が下っており、一向に電車の来る気配もない。暫らく待ったが電車が来ないので、「兄さん、帰ろうや」と云ったけど、「いや、お前は帰れ、俺はもう少し待ってみる。きようなら」と、手を挙げた兄を振り返りながら自宅へ帰った。この瞬間こそ、「生」と「死」の分岐点だったのである。

このすぐあと、一時間後の十一時二分、運命の原爆が落されようとは知る由もなく、やがて来た電車に飛び乗ったものと思われる。だから丁度十一時頃には、大学の正門あたりまで辿りついたのであろう。

皇國の勝利を信じ、ひたすらに卒業後の軍医としての活躍を期して、講義、救護活動、防空当番、教練、と日夜精進していた長兄が、警戒警報中に駆付けたにも拘らず、教室まで届いたか届かぬかで焼け爛れて死んだかと思うと、実に残念でならぬ。学校附近の状況については、多くの遺族の方々の詳細な報告が寄せられている通り、総てが凄まじい悪魔の威力に打ちひしがれていた。その後もずっと何かの手掛かりを探し求めていたが、秋深い或る日、遂に級友のものと思しき封筒入りの骨片を戴き、遺品と共に伝来の墓所に葬って、漸く諦めた次第である。

何日間か数十万カウントの中をうろつき廻ったためか、私にも第二次放射能の症状が現われ始めた。そして今日、右肩には永久に消えることのない、梅干大のケロイドが定着してしまった。

当時中学二年だった私に、兄の死は強烈であった。見ることもなく遺品の医学書を読

み、アンダーラインや註記の跡を追いつつ、よし!! 俺も医学部へ進もうとの決心は日々固まって行った。角尾、影浦、古屋野、調教授などの名前も聞いていた。父母や兄弟と共に、毎年グピロが丘や病院附近を歩いては冥福を祈った。

然し人の進む道は決っているのだろうか。医学志望に必須の理数科が次第に弱くなり、文科系の学科に熱中して、入学したのは経済学部であった。

卒業後、県の貿易振興の仕事にたずさわっているが、やはり医学部の教授、学生との接触があるにつけ、二十才で新生日本の礎となった、長兄のことが想い出されてならぬ。

(三六二) 医専二年生 松元 武紀

遺族 東京都東村山市廻田四丁目二二二―二五

松元 静子(母)

今年も又宿命の日が廻って参りました。あれから二十五年、思えば長い年月です。あの子を唯一の生き甲斐として生きて参りましたのに、もうこの世では相見ることの出来ない所へ行ってしまった。

武紀が生前愛読していた本の後に、「太く短かく生きんかな」と書いてあったのを、彼が爆死してから読みまして、細々とこの世を生きるより、パッと散る桜のように、満十九才の短命で死ぬ子だったのかと思ひ、涙することでございます。

同封の武紀の手紙は、二十年七月初めに、お墓参りかたがた、軍刀を取りに鹿児島へ帰り、一週間後に長崎へ引返し、安着した時の手紙でございます。

この手紙に志賀の叔父上と書いておられますのは、武紀の義理の叔父で、大阪で戦災に遭われた後、私共の家に来ておられました。剣道の範士として重要な地位にある方で、武紀は小学校の時から剣道や武士道を教えて頂き、心から尊敬し且つお慕い致しておりました。父の死後この世に生を享けた武紀を、殊の外不慙と思ひ、可愛がって下さいました。武紀が二十年二月に、流行性脳膜炎で附属病院に入院した折も、わざわざ長崎まで来て、一晩中眠らずに看病して下さいました優しい叔父様です。

近頃になって私も一人ぼっちになり、広い家で淋しく暮していましたので、東京の親戚の者が哀れと思ひましたのか、来ないかと勧めてくれました。東京には娘も居ますので、四十三年八月から当地へ参り、只今は娘の所に厄介になっております。

戦争や原爆の恐ろしさ、敗戦の無念さを味わわなかった若い人達には無理かも知れませんが、原爆の日が来ましても、また終戦の日が参りましても、全く無関心のようにです。終戦の日の号泣、原爆の日の慟哭、この憶いを一生忘れず、今は日本再建の礎となられ、靖国に祀られし夫や子や兄弟の犠牲を無駄にしてはならないと思ひます。一年毎に薄れゆく戦争の犠牲を悲しいと思ひます。然しきつと若い人達にもよく解つて下さる日のあることを信じ、平和が続きますように祈らずには居られません。

○ 年ごとに宿命の日は廻りきて サルビアの紅炎着に燃える

○ 原爆に吾子果てなくば今頃は と思うは老いの繰り言ならんか

○ 爆心地平和の像を仰ぎ見れば 吾子果てし地なり慟哭のわれ

○ 病院の廊下に会いし白衣の医師 吾子世にあらばとしばし佇ずむ

死亡一カ月前によこした武紀の手紙(昭和二十年七月十日付)

【母上・姉上様へ】

謹啓 午前十一時に無事到着、警報下直ちに登学、只今法医学の休み時間でありませ。何卒御安心下さいませ。(午後一時二十分)

伊集院駅にて指定証も手に入りました(早くから並んだ順です)。叔父上様、酒匂様、重岡様がちゃんと席をとって下さいました。鳥栖からは友達が長崎まで一緒でした。一寸空襲がありました、幸い一弾も投弾はなく、長崎市は無傷であります。運動場には夏の緑草が生い繁っており、浦上の天主堂は青空にくっきりと聳えております。学校は相変わらず毎日日々授業が続けられていますが、鹿児島出身者は私を入れて今三人しか居りません。皆戦災とか、私のような理由で帰っております。

暫らくの間ゆっくりお話しも出来ず、色々の整理も充分できなかったと思ひますが、墓参はしましたし、皆様にもお会いしましたし、学資の件も軍刀の件も処置出来ましたし、志賀叔父様からは又斬込の稽古をして戴きましたし、それに叔母様方がいらっ

しゃいますので、母様がたも気強くて、私も本当に安心致しております。

これからは空襲必至に万全の備えをなし、決して大死は致しません。叔父様がたの御経験をしつかと肝に銘じて、防空に努め、又安心して勉強致しますから、何卒私のことは御安心下さい。空襲があっても必ず無事であるとお思い下さいませ。時間が来ましたので、これで一先ず失礼致します。

【叔母様御二人へ】

色々と有難う存じました。叔母様方が居らっしゃいますと、私も気強くて大安心致しております。田舎のこととて、何や彼や御不自由でいらっしゃいませ。何卒御遠慮なく、吾が家のように、皆様お互いに助け合ってお暮し下さいませ。

山田の叔父上様のお蔭で、家がとても綺麗になり、心強いです。色々隣組の事など田舎はうるさいですが、一寸も御心配なくお暮し下さいませ。先ずは一筆。

長崎市御船蔵町六二 宮路様方 松元武紀

(三六三) 医専二年生 三宅 治 信

遺族 東京都大田区蒲田本町藤本方

三宅 タキエ (母)

謹啓 度々の御連絡、誠に有難う御座いました。

何年経ちましても、忘れることの出来ない事で御座います。私の勤めの都合上、同じ長崎に住みながら、同居出来なかった私たち親子で御座いました。あの子等兄弟た



ちは、唯々祖父父母の愛情に包まれて成長しました。病氣以外は、一日とて学校を休んだことは御座いませんでした。

丁度前日の夕方、私の勤務先に来てくれました。「お母さん、今度は新型爆弾ということだから注意して下さいよ」と私に云い残し、学校の防空当番だと云って出かけ

ました。それが最後の別れで御座いました。そして翌日、自分がその爆弾で命を失うとは、誰一人予想致しませんでした。

その当時は、自分だけではないと気を取り直していましたが、日が経つにつれ、思い出されてなりません。角帽姿の学生さんを見ると、人様の前でも堪えられなくなつて泣いてしまいました。お近所の方や友達の方々が御心配下さりまして、しいには自分の身体がまいってしまうから、元氣を出さなくては、と励まして下さいましたので、私も仕事に帰ることにしました。今は唯々子供の冥福を祈るばかりで御座います。

持っていました写真は、あの日の戦災で全部焼いてしまいましたので、同封の写真はあの子のお友達から戴いて来ましたもので御座います。これ一枚しか持っていないので、御面倒では御座いますが、御用がお済みになりましたら、御返送して戴きとう御座います。

(三六五) 医専二年生 村田 由之

遺族 広島県尾道市西土堂町一三―三三

村田 祇子 (姉)

御はがき戴きましたが、故村田由之の父村田四郎は、去る五月五日に死去致しました。母寿子は五カ年余り病床に臥したままでございます。

先日山下大蔵様より御手紙いただきました。御送り下さいました「忘れな草」第三号は、涙が出て私には読み通すことが出来ません。

右取急ぎ、要用のみ申し上げます。かしこ (四五・一〇・一六)

朗報 (一) 昭和二十年八月一日、爆弾の犠牲となられた永見幸夫、大野明、

益田良和の三君は、防空監視中の犠牲者として、遺族の方にお見舞金が下賜されるとの情報を得ました。今度は間違いないと思います。(四六、一二、一〇)



遺族 長崎市大手町七一〇

横田 稻太郎(父)

横田 ミツエ(母)

(前略) 四カ年来、主人の病氣の上に、私もめっきり弱りまして、今年などとうとう慰霊祭にも出席出来ず、残念に思いました。

「忘れな草」第四号への手記は、私が代りに書かせて頂きました。

健さん、あなたがいなくなって、早くも二十五年経ちましたね。あの当時のことを想うと、つい二、三年前のような気がして、時の流れの早いのに驚かされます。

「忘れな草」第一号が出版される時、お母さんはお父さんに、「思い出の幾分なりと書いて下さい」とお願いしましたが、お父さんは「書かんでもいい」と、ただそれだけのお返事でした。後で、あなたの思い出を文章にあらわしたくないお父さんの氣持がわかって、もうお母さんは無理を云いませんでした。きっとあなたのことに触れるのが、苦痛でならなかったのです。それがよくわかりました。

そのうち第二号が出る頃は、お父さんは段々体も弱くなり、とうとう動脈硬化症にかかられて、それ以来現在も闘病生活中です。そして一年七カ月も病院生活を続けておられる状態ですよ。いつも「兄弟二人を医者にして、両方の手を握って貰って死ねば本望だ」と口癖のように、誰にでも話しておられましたのね。

幸い康兄さん(現在大橋町にて開業)が帰還出来たので、お父さんも幾分安心されましたけれど、今度は体の方が急に弱られて、今のお父さんの状態では、「思い出の記」どころか、退院も出来ず、記憶力もうすれて、普通のお話も出来たり出来なかったりの病状ですから、お願いするのは無理でしょう。「今度の出版がもしも終りにな

ったら——」と思つて、お父さんのお氣持を幾分なりともお伝えするために、あなたとお話がしたくなり、ペンを執りました。

思えばあの呪わしい日の前日、あなたがお腹さえこわさなかつたら、お母さんの代りに大川市に行つて難を逃れたのにと、かえらぬ愚痴を又繰り返したくなります。

九日の夜十二時頃だったでしょうか、片淵町の警防団の方のお知らせで、私たち親子三人で迎えに行きました。あの時、あなたは西山一丁目の農家で、親切に休ませて頂いていましたね。そして、「お父さん、絶対に大丈夫だ。頭も顔も血で真赤になっているけど、外傷だけで傷は浅いから——」とあなたは云ってくれました。

それでも、ゆっくり養生が出来ないから大川市へ行こう、とお母さんは焼けた長崎駅で、切符買いの行列に並びました。汽車に乗っても度々空襲に遭い、その度毎に汽車の下に隠れたりしましたが、早くあなたを疎開先に連れて行くことで一生懸命でしたから、少しも恐ろしいとは思いませんでした。

向うに着いてからも乗り物はないし、暑い中を杖をついて歩いた痛々しい姿が、今でもどうしても眼から離れません。途中で木蔭があれば休ませて励まし励まし、本当に辛かつたでしょうね。そしてとうとう十五日に、終戦と知った時のあなたの残念そうな様子が、まざまざと臉に浮んで来ます。多くの人命と財産を奪った上に、敗戦とは——。特にあなたのような前途ある人々には、堪えられぬことだと、慰めの言葉もありませんでした。

四人兄妹のうち、詮兄さんは四月に病死、康兄さんは南方に出征中、残ったのは唯一人の妹の怜子だけでしょう。ほんとに生きる勇氣もなくなりそうでした。

康兄さんは、とても無事に復員出来るとは思っていませんでした。でも待つて待つて、やっと二十一年六月に元氣で帰つて来ました。今あなたと二人分働いています。子供も四人(男二人、女二人) 出来ました。怜子の方も元氣で、二人の子(男女各々一人)の母親となり、幸福な日々を送っています。若しあなたが原爆の犠牲にならなかつたら、今頃は子供が二、三人居て、華々しく医業に従事し、お父さんを喜ばせているだろうにと、又々愚痴っぽくなります。

(三七五) 医専一年生 秋 吉 敏 郎

遺族 福岡県筑紫郡筑紫野町塔原

秋 吉 俊 蔵 (父)

私は原爆犠牲学徒秋吉敏郎の父でございます。あの日から早や二十五年の歳月が経過し、この間私共の悲しみをずっと見つめて下され、多大の御力添えを頂きました為に、年毎にその犠牲の尊さと平和への願いが盛んになり、どれだけ心の支えになつてゐるか判りません。

私は老齢と病弱のために、いつも息子への思いは御地に走っておりますのに、墓参の機会を得ず、ただ心ひそかに、犠牲者の皆様や息子の冥福を遠くから祈るばかりでございましたが、思いもかけず去る七月五日に、長男が所要のため長崎県へ参る機会がありましたので、息子に連れられて慰霊碑の前に立たせて頂きました。私には多年の夢でございました慰霊碑への参詣、何度立ったり坐ったり致しましたでしょう。花を供え、碑を見上げ、あの日の思いにひたりながら、息子に会えた喜び、悲しみに、涙を流しつづけました。皆様は長年見ておられるあの碑も、私には最上の夢でございました。息子は皆様のお蔭で、確かに安らかに眠っております。私は自分の手で、私の多年の夢が成就した姿を、はつきり手にとつて眺めることが出来ました。

短い時間でございましたので、充分に惨禍の跡を見て廻ることは出来ませんでした。が、七十五才の私には、これ以上の望みは叶わず、後髪を引かるる思いで、振り返り振り返り家路につきました。

(四五・九・七)

(三七八) 医専一年生 安 藤 俊 光

遺族 京都府宇治市羽拍子町五二―二四

安 藤 美寿代 (母)

(前略) 遺族の方々が、吾が子、吾が兄弟の想い出を綴られた手記は、同じ境遇の私にとって、涙なしに読むことは出来ません。私共一家は、北朝鮮の平壤で四十四



年の長い年月を過しました。ソ連軍下の北朝鮮の事とて、終戦後は日本と手紙のやりとりもできず、新聞だけが便りでしたが、それも内地からのでなく、ただ広島・長崎に原爆が落されたことを見ましたので、長崎医専で勉学中の吾が子のことを、一人で見守っております。

俊光の中学時代の学友(鮮人)の話では、

大学から離れた所に落ちたから大丈夫だとの事で、それを信じて、ひたすら被爆死亡された方々の御冥福を祈り、私共の生れ故郷である長崎の街の被害が少ないように、心からお祈りしております。

昭和二十一年十月十八日に、国土の余りの変貌に驚きと不安を感じながら、やっと辿りついた喜びを抱いて、博多に上陸したので御座います。しかし私達を待ちうけていたのは、余りにも悲しい最愛の子俊光の死で御座いました。

驚きと悲しみ、落胆などで、一瞬目の前が真暗になり、疲れ切った家族六人は、その場に坐り込み、「俊光、俊光」と泣き叫んだので御座います。私達の一生の中で、この時ほど悲しいことはありませんでした。土地も財産も取られて無一文で帰り、只々俊光を便りにしていたこの気持、お察し下さいませ。焼け爛れた長崎の街に漸く辿りつき、お墓から遺骨の壺を出して振った時、私には「お母さん、お帰りなさい」と聞えました。俊光は無口でしたが意志の強い子で、東陵中学を二番で卒業しましたのも、生れつきの秀才と申すのではなく、こつこつと努力する性格だったので。

七月に一度平壤に参りました時、自分が食べたくても食べずに、弟や妹に配給の干パンやバナナを沢山持つて来ましたが、あの優しい心は忘れようとしても忘れられません。一カ月後に死ぬとも知らず、私達が止めるのも聞かずに、長崎へ帰る平壤駅での見送りが、永遠の別れにならうとは思いませんでした。

聞くところによりますと、被爆より二日後の十一日に下宿へ知らせがあり、地下室

の中で、頭に包帯をして死んでいたとの事で御座います。どなた様か存じませんが、あの混乱の中で、御親切にも吾が子に最後の手当を下さったそうで、心から感謝致しております。

引揚者の私達は何一つ持って帰ることが出来ませんでしたので、下宿にありましたアルバムの中から、俊光の写真を一枚同封致しました。よろしくお願い致します。

降って私も七十一才になりました。元気なうちに一度御地へ参り、「安藤俊光」の名の刻まれた銅板名碑を拝見し、慰霊碑にもお詣りしたいと思っております。

御遺族の皆様の御多幸を、心からお祈り申し上げます。
(四六・二・五)

(三八〇) 医専一年生 井田成事



遺族 広島県尾道市長江一丁目二四一三

井田 佐太郎(父)

井田 一枝(母)

成事は私の長男で、当時父が出征して不在でしたから、何かと寂しい思いで長崎へ参り、医専に入学したものでした。

八月に入ってから、何とかして尾道へ帰ろうと思つて、(その頃食糧が相当に不

自由でしたから、帰りたいらしいのです)、何回も駅に行つたそうです(下宿の小母さんの話です)。でもあの頃の事として、切符がなかなか手に入らず、困つていたとの事でした。

その頃書いたのでしょうか。「尾道が懐かしい。お母さん、是非近い内に帰る。八月一日の空襲で学生が三人やられたけど、僕は元気であるから安心して下さい」との便りが、八月十一日に私の方へ届きましたが、それは既に原爆の落ちた後でした。

私はすぐに長崎へ駆けつけ、あの惨状を痛いほど見せつけられました。その時誰の骨とも判らぬままに、僅かばかり頂いて帰りました。成事は即死だったという事で、

何の手掛りもありませんでしたが、でも、何日か生き延びて、その間苦しむよりも、むしろ即死の方がよかつたのではないかと、自分に云い聞かせております。終戦と同時に葬式をすませ、当方の墓地に埋葬致しました。

早いものであれから二十五年、何もかも恵まれ過ぎた現在と比較して、青春も知らずに死んで行つたあの子のことを思うと、可哀想で胸が一杯になります。でも私だけではなく、当時お子様を亡くされた方は、みんな同じ気持のことと思います。

毎年の記念日には、当時を偲びつつ、当方の仏前で供養させて戴いております。
(四五・一〇・二五)

(三八五) 医専一年生 今村義徳

遺族 鹿児島市泉町一一一五

今村 源一郎(養父)

(前略) この度は原爆二十五周年忌に当り、慰霊祭が盛大に催されました由、若くして故人となつた学徒諸君も、草葉の蔭でどんなにか喜んでゐる事でしょう。遺族の一人として感謝に堪えません。私のところからも三人列席させてもらい、大変立派な慰霊祭をとり行なつて下さつたことを感謝しております。茲に改めて皆様の御冥福をお祈り申し上げます。
(四五・八二・七)

(三八六) 医専一年生 岩田昭夫

遺族 福岡県飯塚市西町西一一一九

岩田 肇(兄)

(前略) 私は本年五月中旬、急に福岡県に転任いたし、直方保健所長として勤務してあります。原爆当時は南支に軍医として従事してましたので、弟昭夫の最後の思い出は、一人で看護してくれた妻みどりに書いて貰うことにしました。弟の写真が手許になくて残念です。
(四五・一一・一五)

忘れもしません。二十五年前のあの瞬間、長崎の万物は一瞬の間に変わってしまい、あのピカドンで若い昭夫さんの十九才の命も絶たれてしまいました。それは八月十六日のことでした。一人の介抱では行届かないからというお友達の見解に、昭夫さんも同意したので、今は亡き高原憲先生の御診察を乞い、上小島の友達の家まで担架で運ぶことにしました。途中何回か強心剤を注射しましたが、その甲斐もなく、家についた時は虫の息で、午後七時とうとう担架の上で息を引取りました。

被爆当日は、大学で広島の惨状についての大切な講義があるからと云って、元気に登校したのに、あんな姿になってしまうと、予想も出来なかつたことです。

その日は片淵にいる姉と二人で、山越えで探しに行きました。途中、友達の肩にかかえられた人、担架に乗せられた人たちばかりで、話しかけるのも気の毒な程でしたが、「医専の一年生はどうしていますか」と尋ねましたら、「僕もそうですが、殆んど全滅ですよ」という人、「大学は火の海です」とだけ答える人、「水をくれ、水を」と悶え叫ぶ人、まさに生地獄でした。

遂に私達もその夜は本人に会えずに、止むなく帰宅しましたが、翌十日の正午頃、弟は割に元気な姿で帰って来たので、ほっと一安心しました。でも頭は白い布でくくり、靴は新品だから勿体ないと云って、靴の紐を結び合せて肩に担いでいました。

早速日赤病院で診て貰いましたが、外傷はただ背中に数カ所のガラス破片創がある程度で、軽傷でした。「これ位の傷でよかつたね」と、お互の無事を喜んだのも束の間、その夜から発熱、嘔吐、下痢などの症状が出て、苦しむようになりました。これは只事ではないと思い、日赤に連れて行って高原先生の診察を受けましたが、「これ位の傷、何のことだ。君も医者卵なら元氣を出さない。お兄さんは出征しているではないか」と励まされました。然し先生も当時これが原爆症とは、勿論御存知なかつたことでしょう。

幸に病院関係の知人がいたお蔭で、ブドウ糖、強心剤など、五十本ぐらい注射して貰いましたが、その割には容態が好転せず、次第に衰弱の一途を辿るばかりでした。

昼間は割合に先気でお話も致しますが、夜になると苦しみ出します。それでも爆音を聞くと、私よりも先に防空壕に走り込んでいました。

人一倍几帳面な性格で、亡くなってから机の引出しをあけて見ますと、おやつに作ってやった大豆の砂糖炒りを、「味の素」の空缶にきちんと入れてあり、また死を暗示していたかのように、若人に似合わず真宗のお経の本などもございました。戦時中とは云え、おいしいものも食べずに、また青春の楽しみも経験することなく、儚く散ってしまつた弟でした。

戦地にいた私の主人は、昭和二十一年四月に無事に帰還いたしました。元氣な弟が、原爆の投下さえなければ人並みの医師になって、医師不足の現在、少しでも世の人の為にお役にたつていたのにと、つくづく悔まれてなりません。

しかし私は弟を最後まで介抱してあげられたのを、せめてもの慰めとしています。十二人の兄弟姉妹の末っ子だった弟、肉親のものは皆和歌山にいたので、当時は簡単に見舞にも来て貰えず、「私一人だけで淋しいでしょう？」と申しますと、「いや、とても遠いから無理だ、お姉さんが側にいてくれたらそれでいい」と、懺悔なことを云ってくれた弟でした。

八月十五日には終戦のを知り、「ああ、僕は犬死だ、犬死だ、何の為に死んで行くのか」と、若人の怒りをこめた悲壮な声で嘆きましたが、私はせめて終戦を知らずに死なせたかつたと、今更ながら悔まれてなりません。愈々息を引きとる時は、「お母さん」と一言残して、担架の上で安らかな永遠の眠りについたのでした。因みに、本人は十才頃母と死別しております。

あの日から二十五年、世の中は戦前を凌駕するように立派になりましたが、その蔭には幾多の尊い犠牲のあつたこと、そして今なお原爆症に苦しんでいる人々のあることなどを考えますと、あの当時の思い出が、毎年八月九日の記念日を迎えるごとに、私の胸を強く痛めつけます。

終りに、多数の亡くなられた方々の御冥福を、心からお祈り申し上げます。

(三八七) 医専一年生 岩 永 功

遺族 福岡市赤坂三丁目八―四〇

岩 永 宝 作 (父)

(前略) 去る八月九日の慰霊祭には、是非参詣致す積りで小浜温泉で保養して居りました処、家から急用のため電報が参りましたので、残念ながら列席出来ませんでした。(中略)

私も今年満八十三才になり、春の年波には勝てず、医師の診断と思ひ合せますと、人間としての限界が近まった感が深く御座います。(後略) (四五、九、一四)

(三八九) 医専一年生 岩 永 要 範

遺族 下関市彦島海士郷新田アパート

岩 永 タ カ (母)



(前略) 一面識も御座いませぬ先生に、お手紙を差上げる不躰を、お許し下さいませ。

実は私の長男要範も、当時長崎医専在学中に被爆死亡致しましたが、死亡学生の名簿に長男の名前が記載されていませんそう

で、びっくり致しました。色々と学校の方でも調査頂きましたこと存じますが、速方にいたために判らなかつたのか、残念でなりません。

私の本籍は長崎市外ですけれど、二男の仕事の都合で、現住所に移住してから七年程になります。一度帰郷した折、親類の者が話してくれたようにも思いますが、何分とも私の手落ちであります。無学の母故にお友達と一緒に出来ないとなると、あの子ども草葉のかけで肩身がせまく、定めて母を恨んでいるだろうと思うと、夜は熟睡出来ず夢ばかり見えています。どうか七十余才の年老いた母の死に土産とお思召して、要範

を仲間に入れて下さいませ。お願い申し上げます。

(四五、八、二三)

【調 追記】 私は昨年の慰霊祭のあとで、以上のようなお手紙と一緒に、(一)西彼杵郡野母崎町の高平町長が認証された戸籍謄本、(二)戦傷病者戦没者遺族等援護法による遺族給与金証書の写し、(三)岡田長崎市長の発行された罹災証明書等が、私の許に送られて来た。

よく見ると要範君は、既に動員中の死亡学生として弔慰金も下付され、従って靖国神社にも祀られており、遺族年金も交付されていることが判明した。

要範君の名が原爆犠牲者名簿から脱落しているのは、私達が昭和三十七年に政府へ請願を行うため調査した際に、その基礎資料となった「遭難願末書」(これは生残りの学生が死亡した学友の遭難状況を記載したもので、恐らく原爆後一年以内に書かれたものと思われる)、「学生連絡簿」(これも同時頃、大学の事務当局によって書かれたものである)、「追憶」(これは昭和三十年に、上記の資料を参照して学内の各層の人々によって書かれたもの)等に、同君の名がなかったからである。

当時の医専一年生は、二十年七月一日に入学し、約一カ月後に遭難したので、お互に馴染みも薄く、岩永君のように名簿から洩れた学生が、昭和四十二年(この年度に文部省からお見舞金が下付され、靖国神社にも合祀された)の初めには十数名あったが、この年度内にそれぞれ遺族の方から申出があり、又昭和二十年三月発行の長崎新聞の記事も調査して、名簿にも載せ、銅板名碑にも追加彫刻した次第である。

岩永要範君の名は、長崎新聞発表の入学者中にもちゃんと出ており、瓊浦中学から付属医専に入学されたことは明らかであったが、大学に保管中の死亡者名にその名がないので、昨年八月に御母堂からお手紙を載くまでは、生存して居られるものとはかり思っていたのである。その後厚生省援護局の調査でも死亡が確認されたので、「忘れな草」第四号の名簿には記入する積りであるが、銅板名碑は昨年二月に既に原爆記念講堂の壁に嵌め込まれ、且つ彫刻を施す余地もないので、果して追加彫刻が出来るかどうか、苦慮している次第である。(四六、六、二二)

(三九五) 医専一年生 尾崎雅男

遺族 佐世保市早苗町一〇九

尾崎保寿(父)

(前略) 八月九日の原爆記念日には是非参列致したく考えましたが、昨年から患いまして腰の痛みが癒らず、唯今では殆んど寝たきりで御座いますので、残念ながら失礼したような次第で御座います。(後略) (四五、九、二〇)

(三九六) 医専一年生 大久保彰

遺族 長崎県西彼杵郡長与町高田郷

大久保いつ子(母)

(前略) 私事、自分の事のみに取りまぎれ、残る七人の子供達の嫁取りなど、家庭行事も益々多端になり、私の老後は大変忙しくなりそうでございます。

こんな時、ふと花も雷で逝きました彰のことを思い出して、たまらなく不憫に思われます。もう四十才も越えている筈なのに、私の臉に浮ぶのは、あの日国民服にゲートルを巻き、新調の角帽をかぶって颯爽と出て行った、十七才(数え年)の少年の面影だけでございます。

時折り長女の婿を見まして、生きていたらこんな風だろうと想像致しております。八人の中の一人の犠牲者でございますから、まだまだ外の皆様方よりは幸せな方だと思っています。(後略) (四五、一一、二八)

(三九七) 医専一年生 大楠泰正

遺族 北海道釧路市中園町三一九 近方

大楠琴子(母)

今私は北海道の最果ての地、釧路に参つて居ります。近くにアイヌ部落のある阿寒湖が、綺麗な水をたたえています。念願の北海道行も、実は淋しさを癒すためだったのです。広茫たる平野を見渡し、今更ながら泰正を思い出して、涙にくれています。

今日は些か体の調子が悪く、当地の日赤病院へ行きました。泰正と同年輩の一人の医師の担当になりました。この先生は北大医学部出身の方で、内地から来て居られましたが、又しても思い出しても涙の種でした。危うく涙が流れようとした時、先生はニコニコして迎えられ、「長崎は雨が降りますか」と聞かれ、何の事かと戸惑いしましたが、ああ、あれだと感付きました。今流行の『長崎は今日も雨だった』という歌詞を思いついて聞かれた冗談でした。その時の笑顔が、そっくり泰正の笑顔でした。そのように、泰正は怒ったことのない、いつも笑顔で人に接する子でした。

香焼島の動員生活も、班長として皆から慕われて居りました。丁度休暇を利用して南高の西郷村へ、私と妹と三人で物資補給のため、買出しに行った時のことでしたが、大きな荷物をかついで、列車中はずっと立往生でした。私も小さい子を背負っていて、思うように持たれません。苦しみ悩んでいた時、あの子は自分の荷で手一杯なのに、私の荷物まで持って、人間業とは思えない力を出して助けてくれました。あの時の顔が目にすぎません。

当時は列車も一旦空襲となるとストップして、一時近くの防空壕に待避させられましたので、長崎駅に到着したのは、夜中の一時近くでした。それから帰宅するのにも乗物は一切なく、駅から歩いて一時間もかかるので、どうして帰ろうかと泣き出した気が持でした。途中目がまわって何度も倒れそうになるのを、休み休みして二時間余りかかって、やっと我が家へ辿りつきましたが、その時も全部の荷物を彼が運んでくれました。神業でなくて何でしょう。へばった母親を途中休ませておいて、最後の荷物を運び終った後、私を迎えに来て連れて帰ってくれました。あの時の事は一生忘れることが出来ません。

ああ、あれから二十五年、今日でもあの子の顔が目につき、あの子と共にあの時の事を語ってみたい衝動にかられ、思い出しては涙にくれています。夢でもいい、幻でもよいから一目逢って、「泰ちゃん、ありがとう」と、感謝の言葉を述べたいのです。又あの時どうして長崎医専に入れたか、若し他の学校に入れていたら、又五年の卒業を待たないで、何故四年から入学させたか、など返らぬ愚痴を繰り返しては、仏

前に許しを乞うて居ります。

今病気で気の滅入っている時、同年輩の医師の方と逢って、思い出を新たにしましたので、つい一筆書き記しました。子供達が安らかに眠ることを願って、筆を擱きます。
(四六、五、三)

(三九九) 医専一年生 太田和男



遺族 佐世保市黒髪町六八九―一吉田方

太田 久(姉)

回想のうた

○ 天破れ地は焦熱の渦の中

一人の姉は何か求めて

○ 絶叫と悲しみこえてひたぶるに

姉は浦上の原をさまよう

○ あきらめん諦らむべしと念じつつ

一片の骨一すじの髪欲し

○ 稚き命は原子爆弾のいけにえと

○ 写し絵をめぐりめぐりて想いずる

原爆有感

太田 義郎(義兄)

煌然一発晦冥来 乾坤沈静潰萬物

阿鼻煉獄到絶叫 恩讐去已長崎空

(四〇〇) 医専一年生 奥野 昭

遺族 佐世保市中里町四四九

奥野 宏(兄)

(前略) 奥野ワカ儀、本年三月病のため死去致しました。長い間原爆遺族のため

お世話いただき、本人も平素常に感謝致しております。ここに改めて厚く御礼申上

げます。尚奥野昭は私の弟に当りますので、何か御用の節は、私まで御連絡のほどお願い申し上げます。(後略)
(四五、一一、二)

(四〇三) 医専一年生 片野 哲男

遺族 大分市二又町六組

片野 順平(兄)

(前略) 大変申し遅れましたが、母スエは昨年二月十四日、病のため死亡致しました。生前中は何かとお世話様になりました。なお、弟哲男を靖国神社にお祀り頂きましたことを、大変喜んでおりました。厚く御礼申し上げます。(後略)
(四五、一〇、一二)

(四〇九) 医専一年生 川崎 勝次郎

遺族 長崎県東彼杵郡東彼杵町千綿宿

川崎 トシ(母)

(前略) 勝次郎は八月九日の晩、十二時の夜行で故郷の千綿駅につき、迎えに来た千綿宿の青年たちの肩にすがり、駅前叔父の家に戻り、八月十日の晩八時に息を引き取りました。それまでは長崎の様子をはっきり話してくれ、恐ろしい爆弾であったことも、皆が遭難した悲惨な有様もよくわかりました。

当時のことは思い出しても悲しくなり、泣きたくなりますので、忘れようとばかり思っ、今日まで過して参りました。しかし先生が余り熱心なので、やっとこれだけ書きました。どうかお許し下さいませ。(後略)
(四五、一〇、五)

(四一〇) 医専一年生 川頭 琢磨

遺族 横浜市旭区市沢町五八一四

川頭 一也(兄)

川頭 輝子(兄嫁)

(前略) 琢磨の兄一也は船員で、航海中が多いので、私から御連絡申し上げます。

毎年慰霊祭の御通知を頂いておりますが、何分遠いものですから失礼させて頂き、八月九日には遙か横浜から、皆様の御冥福を祈らせて頂きました。

琢磨の母貞子が死去致しましたので、何かと雑事に追われ失礼致しました。どうか今後共よろしくお願い申し上げます。

(四五、九、二五)

(四一五) 医専一年生 北野陽一

遺族 山口県宇部市藤山区岩鼻

北野伊志(母)

下関市長府町中六波

北野光子(姉)

今年は二十五回目の慰霊祭で、グピロが丘の碑の前には、一杯に御遺族の方がお集りになって、盛大に行われましたことと想像いたして居ります。

去年初めてお詣りすることが出来、今年も是非と思っておりましたが、果せませず残念でございます。二十五年もたちましたのに、「忘れな草」を読んでおりますと、色々なことが思い出されて、泣けて泣けて仕方がありません。余り悲しくて読みつづけられない時もございます。そんな時はただ御冥福をお祈りするだけしか、私には施す術はございません。

手記の中のどの方のを読まして頂いても、生前にとりわけ心の美しい親孝行な方ばかりだったことを拝見し、「もし今生きて居られたら——」と、何度か繰返し思い出しているのだと、勇気付けられて生きて来られた遺族の方々のお気持を思い、「私達もそうですよ」と、手をとって合ってお話が出来ないのが残念でございます。それと私にとっては、四年前に亡くなりました父に、「忘れな草」を見せてあげることに出来なかつたことが、一層悲しうございます。

陽一が被爆した時、すぐ父が一人で弟を探しに行き、その時の長崎の模様など、余り喋ってはくれませんでした。新聞などで被爆の実態が発表されたり、展示会のよ

うなものが催されたりすると、「あれはほんの一部だよ。とてもとも言葉にならぬほど惨いものだった」と、話して居りました。

父と母が、弟の事を思い出しては泣いているのを知っていましたので、私と三人暮りとなつてからも、長崎の事には触れない話題にして、思い出さないように努めていたようで、とうとう生前の父からは、被爆後の長崎の様子を詳しく聞くことが出来ませんでした。父が亡くなった後に仏壇の整理をしていましたら、新聞紙できちんと糊貼りして包んだものが出て来て、弟の日記やノートが何冊か見つかりましたが、何故父がたったこれだけの遺品を長崎から持ち帰ったのか、そして二十年もの長い間出して見なかつたのか、私にはさっぱり判りません。

「忘れな草」第三号の時、遺品や遺稿もということでしたが、日記など悲しくて読めなくて、由訳ないと思いましたが、仏壇に入れたままになってしまいました。父からもつと色々話を聞いておけばよかったと、今更悔まれてなりません。

終戦から二十年経った時、「もう諦めねば仕様がなかるうなあ」と、洩らしたことがありましたが、昭和四十一年の春に他界致しましたので、もう少し生きていてくれ、弟の靖国神社合祀の話聞かせてやりたかったと思つて居ります。

母はお蔭様で元気で居ります。靖国神社にまだお詣りして居りませんので、早く念願を果してやらねば、と思つております。

御遺族の皆様方が、いつまでもお健やかに、お幸せにお暮し下さいますよう、心からお祈り申し上げます。

(四五、八、三〇)

(四一九) 医専一年生 桑原真司

遺族 山口県下関市大和町一〇

桑原順一(父)

桑原テル(母)

(前略) 思い出も新たに、また悲しみの涙にくれる。片時も忘れられない真司の面影よ!! 四人兄弟の次男に生れ、私達には過ぎたる息子でございました。明るい優



しい心、思い出の数々、私の胸中をうずかせます。

思えば長男を海軍で十九年に戦死させ、その涙の乾かぬ間に、あの恐ろしい原爆の焦熱地獄の中で、哀れ十八才を一期として次男の真司をあの世へ送りました。何と悲しいことでしょう。無残なことでしょう。

入学式の前日、昭和二十年六月三十日の夕方、父と二人で白いワイシャツ姿で出かけた後姿が、今でも目に浮びます。あれが親子の別れでございました。

下関の家は戦災で、自宅も貸家も、全部焦土と化しました。生きる希望を失い、二人ともこの世が嫌になり、毎日々々死ぬことばかり考えておりました。でも残された二人の子供の事に気付き、又人様からも励まされて今日まで生き永らえて来ました。主人は早や七十の坂を越え、私もそれに近づきつつあります。

思えばあの頃は、片手・片足がなくとも生きてさえいてくれたらと、朝な夕な心に願っておりましたが、今は遠い遠い長崎に散ったあの子の冥福を、祈るばかりでございます。

(四二八) 医専一年生 篠原昇

遺族 長崎県島原市坂下町七五六一

篠原タエ子(姉)

(前略) この度は度々お手を煩らわしまして、申訳ありませんでした。姉が大分に居りますので、何か遺品でも持っていないかと問合せていましたので、遅くなつてすみませんでした。

私共は戦時中、朝鮮元山に両親と一緒に住居して居りましたので、弟も元山中学校を四年で修了して医専に入学致しました。私共が引揚げて参りましたのは、昭和二十

一年で、弟が亡くなって一年近く経っておりませんでしたので、遺品も殆んどありませんでした。ただ日記が一冊ありましたが、母が読んで悲しむので、父が焼いてしまったように記憶しております。写真も引揚げの時何も持ってませんでしたので、一人で写ったのがございません。どうか悪しからずお許しの程お願い申し上げます。

この度弟も「忘れな草」に載せて頂きますとのこと、何かほっとしたような気持ち一杯でございます。本当に有難うございます。(後略) (四五、二、一〇)

(四三五) 医専一年生 調弘治

遺族 長崎市本原町一一二九

調来助(父)

長崎医大が爆弾攻撃を受けた日(八月一日)の弘治と私

長崎医大に六個の二五〇キロ大型爆弾が投下されて、三人の学生(医専の永見、大野、益田の三君)が爆死し、病院の建物にも多大の損害を与えたのは、昭和二十年八月一日午前十一時半過ぎの事である。

数日前から長崎市の上空には、B29の編隊が屢々現われ、高射砲攻撃や友軍戦闘機との空中戦が、青空の中で激しく展開されたが、高射砲弾は少しも的中せず、撃墜されるのはいつも我が戦闘機であった。

七月三十一日には、午前十時半頃五機の編隊を組んで大浦、浪ノ平方面に現われ、又々凄まじい空中戦が行われたが、私は防空壕の入口に立ってこれを監視しているうちに、約三十分で敵機は姿を消し、大学には何の損害もなかった。

明くれば八月一日、私は弘治と一緒に滑石の疎開先を出て、歩きながら昨日の空中戦の模様など語り合いつつ、病院の門前で別れを告げたが、正午少し前、敵機は性懲りもなく再び長崎市上空にやって来た。今日は昨日と違って、病院の真上を飛んでいる。とても空中戦を観戦するどころではない。我々は皆身の危険を感じたので、逸早く防空壕や地下室に逃げ込んだ。私は外来本館の地下にある臨時救急処置室前の廊下に立って、大勢の職員、学生、看護婦達と共に、じっと耳をすましながら祈るような

気持で、敵機が事なく退散するのを待っていた。すると敵機の急降下爆音に続いて、耳をつんざく爆発の音、同時に廊下の入口から吹いて来た強烈な爆風のために、並みいる我々は皆、将棋倒しに倒された。

敵機は波状的に攻撃して来るので、このような状態が三十分以上も続き、爆発音も五、六回聞いたように思う。やがてあたりが静かになったので、恐る恐る外に出てみると、後の病棟の方に煙が上っており、聞くところ婦人科が火事だという。行ってみると弘治も皆と一緒に、緊張した顔付で消火に従事していた。私はそれを見て、思わず胸がつまり、涙が出た。

間もなく担架で負傷者を運ぶ姿が見えたので、私は大急ぎで外来地下の救護室に引き返した。運ばれたのは医専の学生（二年生の大野明君）で、全身に破片創を受け、殆んど瀕死の状態である。大急ぎで止血と創の縫合をすませ、病室に運んだ。続いて医専三年の永見幸夫君が運ばれて来た。腹部から大腿部に及ぶ大きな裂創で、甚だ重態である。入念に手術して病室に運んだが、何ぶん出血が多量で、その上輸血が間に合わないで、生命の程は何とも云えない状態であった。

その他多数の負傷者が押しかけて来たので、治療は夕方までかかったが、午後六時頃ひょっこり精一と弘治が、私の身を気遣って救護室にやって来た。暫らく待たして三人で滑石まで歩いて帰ったが、今日の凄惨な出来事に心が痛むのか、口数も少く、足どりも重かった。

その後弘治は、爆弾で壊された病院の跡片付や、長廊下の屋根剝しなど、元氣一杯に働いていたが、八月九日の原爆で、あたら十六才の短い生涯の幕を閉じてしまったのである。

私の念願

原爆の犠牲となった愛し子は、何年たっても忘れられないもので、医専一年で死んだ弘治と兄の精一の幼ない面影は、二十六年を経過した現在でも、私の胸にありありと残っており、座敷の長押しに掲げた油絵と共に、いつまでも十六、七才の若人のままで、成長することを知らない。

私は長崎大学教授を定年で退官した翌年（昭和四十一年）三月に、ふと思い立ち、原爆で死んだ二人の愛児の身代りとして、彼等の母校であった瓊浦中学（今の西高）に新しく入学した二人の生徒と、十年余り勤めてくれたお手伝の息子と、合せて三人に、些少の奨学金を与えてその行末を見守ってやることにした。

それと同時に、私自身も三人の学習相手が出来るように、通信教育のNHK学園高校に入学して、毎月二日づつ、協力校である西高に通うことにした。私のそのような生活振りが、NHKテレビの「ある人生」で放送されたのも、丁度その頃であった。

三人が西高を卒業するまでの三年間は、共に学び共に遊び、喜びも悲しみも共にする、とても楽しい三年間だった。その三人は高校を卒業した後みな長崎大学に進学し、一人は医学部に、一人は薬学部に、他の一人は工学部に入学して、懸命に勉強しているが、やがて卒業の暁には、それぞれの道を進んで、立派な社会人に成長してくれるであろう。それを念願し、その日を想像することが、現在の私にとっては唯一の楽しみなのである。又死んだ子供達も、心から喜んでくれることと確信している。

私の使命

私は今年満七十二才、家内は六十五才で、昔であれば疾く他界している年齢かも知れないが、平均寿命が延びたお蔭で、今でも二つの病院（諫早と佐世保）の顧問として、毎週二回、朝早くから汽車やバスで出かけ、患者を診察したり、時には手術を行うこともある。洵に有難いことだと思っている。

私の現在の使命は、学問的なことも勿論いろいろあるが、何と云っても旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会の会長として、その責任を充分に果たすことが一番だと思っている。

そのためには、遺族の方々の話相手ともなり、相談相手ともなって、皆様をお慰めし、幸福な余生を送って頂くよう心をくだき、中でも特に、遺族に対する援護法適用の獲得が最大の緊急事と思っているが、この道は甚だ険しく、一朝一夕には達成出来そうにもない。然しこれが成功するまでは、死ぬにも死ねない焦燥の思いで一杯なので、どうか皆様の御援助と御鞭撻を念願してやまない次第である。（四六、九、一〇）

遺族 松山市御幸二丁目二一三三

関 屋 信 明（父）

関 屋 花 子（母）

（前略） 「忘れな草」第三号では、一人一人の原稿を書き直され、校正までお一人でされて、御心労のため御病気にまでなられましたのに、又しても第四号を作成されます由御通知を受けましたので、これまで故人の遺書など色々見て頂きましたが、お互に同情し合い親しみ合うことこそ、遺族の慰さみであり、故人の喜びかと存じまして、また筆を執ることに致しました。

今年八十八才になる祖母（私の母）宛に来ていた手紙を、祖母は仏前にお供えして泣き伏しました。その手紙の内容は次の通りです。（昭和二十年七月三十日付）

『拜啓、その後長らく御然沙汰致しました。帰省中は本當に御厄介をかけました。承りますれば去る二十年七月に、B29が五十機松山市に来て、焼夷弾攻撃を行ったとのこと、二十九日の新聞を見て吃驚しました。しかも相当の被害がありましたそうで、大内のお婆さん初め、松山の人達はどんなであつたらうかと、気が気ではありませんでした。いずれ松山にも来るだろうとは思つていましたが、まさかこんなに早く来るとは——。』

あの晩、長崎でも同じ時刻に警報が鳴り響き、待避の準備をしていたのですが、大牟田まで来て引き返しましたので、安心して眠ることが出来ました。しかし長崎にもいつかはやって来るでしょう。その時はすぐに避難出来るよう準備していますから、御安心下さい、昨日も今日も、朝から沖繩の機動部隊の小型機がやって来て、勉強が出来ずに困っています。でもこれ位で弱つては何も出来ません。

やっと一カ月が無事にすんで、近頃ぼつぼつ死体をいじり始めましたので、人間の身体の構造も少しはわかるようになりました。本當に複雑なものです。毎日忙しい学習に追われ、暑くて身体はだれますが、人間の大切な命を預かる職ですから、ここで居眠つていてはと、大いに張り切っています。御安心下さい。

九月の試験がすむと一週間ほど休暇がありますから、場合によっては帰ってみようかとも思っています。皆様御身ご大切にお願い申し上げます。』

この後十日ほどしか生きることの出来なかつた自分の命も知らずに、故郷のことはかり気ずかっていた雅俊でした。調弘治様は雅俊の同級で、同じ山里にお住まいだったそうですから、さぞかしお世話になつたろうと思えます。なお銅板名碑も同じ所に記名されていますので、本當にご縁のあつた方だと存じます。

今年の八月十三日には、次女の友近絢子一家が、私達に代つて靖国神社に参拝致しました。奥の本殿でとても鄭重な祭礼に預かり、受納証やら、供物まで戴いて帰りました。愈々平和の御霊として祀られたのかと、思わず胸を撫でおろすのでした。参拝したのは友近学、同絢子、同晋、同俊明と、関家佐恵子の五名でした。

原爆當時のことを新聞などで見ますと、昭和二十一年七月三日の大阪朝日新聞の記事に次のようながあります。

『昨年八月九日午前十一時頃、九千メートルの高度から投下された原子第二第三弾は、長崎市松山町の地上五百メートルで炸裂した。あれから一年近く、当時身をもつて体験した長崎医大院長調来助教は、その日をこう語る。

「午前九時空襲警報が解除されたので、十時過ぎ自室に帰り論文を書いていると、いやな爆音が覆いかぶさるように響いて来た。空襲だと直感、ただちに部屋を出ようとした刹那、青色の光がパッと眼前に光つたので、無意識の中にその場に伏せた。その瞬間、鈍いボンという音がしたかと思うと、天井が家鳴りを始め、バラバラと背中の上に落ちて来た。元の静けさにかえつたので目を開いたところ、視界は真暗、暫らくすると吹上げられた土が大雨の如く降つて来た。これが静まるにつれて、視界は黎明のよりに美しい光と共に明けて来た。外にとび出すと、あたりは一面怪我人や死人で、ふた目と見られないような惨状、医大横の横穴壕も重傷者で満員だった。

裏山にかけ上つて見ると、街はすごい勢で火をふき、万物を舐めつくしていた。原子爆弾の放射を直接受けたものは、内臓がこわされて、葡萄糖、リンゲル、輸血、ビタミン剤など、あらゆる治療を施してみたが、手がつけられず、三週目ぐらいからや

つと効果が現われて来たが、爆心地から一キロ以内の者は、死亡率一〇〇パーセントと云つてもよく、一・五キロ以内で五〇%から五五%、二キロ以内で五%から一〇%、二・五キロ以内で三%という数字が出た」と発表されている。』

これを読んで当時の物凄さを痛感致しました。

下瀬隆治様(毎日新聞記者)から戴いた便りに、次のようながあります。この方は私が昭和二十六年八月九日の慰霊祭に参りました際に、『亡き子を偲んで小冊子を手向け、グロビが丘に泣く婦人』という見出しで、私が慰霊碑の前にぬかずく姿を長崎新聞に出された方です。

「御丁寧なお便り有難う御座いました。ささやかな私の原爆犠牲者の遺族に捧げる気持が、皆さんに喜ばれたことを、私自身嬉しく思います。私も原爆で家を失い、家人だけは助かりましたが、裸一貫になった者です。医大の知人に、慰霊碑を守って貴女達の御子息のために祈ってくれるよう、頼んでおきました。御一家の御多幸をお祈り致します。」

私はまだまだ沢山の記念物を大切に保管しておりますが、この度はこれ位にて止めます。(四五・八・二八)

(四三九) 医専一年生 撰 津 定 昭

遺族 愛媛県東宇和郡宇和町一―九三

撰 津 御 幸 (母)

第一信 (前略) この度原爆二十五周年忌に当り、慰霊祭の御案内を頂き厚く御礼申し上げます。就ては何をおきましても、本人最後の地でもありますので、今一度御地をお訪ね致し、在りし日の面影を偲んで霊を慰め、皆様にもお目もじ致したく存じます。何分にもこの暑さ、ましてや老の身の事として、遠路はどうも無理かと存じますので、返す返すも残念でございますが、不本意ながら失礼させて頂くより外ないと思っております。どうかあしからずお許しのほどお願い申し上げます。

第二信 (前略) 八月九日の原爆二十五周年忌には、大勢の御遺族の方々がお集

り頂き、盛大に滞りなく法要を営まれました事、さぞかし地下の故人達にも喜ばれましたことと、列席出来なかつた私も、有難く感謝致して居ります。(後略)

(四五・八・二七)

(四四二) 医専一年生 田 代 正

遺族 佐世保市福石町二〇―三

田 代 春 子 (母)



原爆が投下されてから早や四分一世紀を経た今日、昭和四十五年八月九日、グロビが丘の盛大な慰霊祭に参列させて頂き、爆死された大勢の方々や長男正の冥福をお祈りし、何だか重荷が下りたような安堵感と云うのか、ホッとした気持になり、心静かに当時を思い浮べ、涙も新たに感無量で御座いました。

モルモット代りに、人類最初の実験台となられた方々の貴い死、世界平和への礎石となられたことを思う時、戦争の残忍さ、原爆の恐ろしさ、二度と再びこのような惨禍を招かぬよう、悲惨事に遭遇して生き残った者が、声を大にして後世に伝うべきだと、思いを新たに致しました。

懇談会におきましては、皆様方のお話を聞き、また調先生を初め遺族会理事の方々の、並々ならぬ遺族援護についての御配慮や、御尽力の程を拝聴致しまして、有難く御礼申し上げます。何卒お体をお大切にお願い致します。お健やかに過ごして遊ばされませう。念じ上げます。(合掌)

- 狭き門くぐりて入りし大学の その学び舎に爆死せし子よ
- 掌の珠と思いて育てし愛し子の 爆死に遭いぬ神の試煉か
- グロビが丘の碑より亡き子もその友と 日々学び舎を眺めて居らむ
- 爆死せる子も願わむか吾れもえう 未来永劫戦いなき世を

- 靖国の社に眠る愛し子よ とこしえに国の鎮めとなれよ
- 逝きし子は今年いくつと数えみて 男盛りの顔組み立てる
- 子は逝きて二十五周年まのこ葬雲は 遠く重なり夏雲のしむ
- 爆死せし遺家族集い慰霊祭 グヒロが丘にかけろうゆらぐ
- 一瞬に瓦礫と化せし浦上に 家建ち並びひまわりの炎ゆ

正しがくれた最後の手紙（昭和二十年八月二日付）

皆元気ですか。私も元気ですが、今日このように手紙を書くのが、全く不思議な位です。何故ならば、当地は最近敵機の来襲がはげしく、三十一日は三菱方面に爆弾が落ちて、学校や病院は無傷でしたが、昨日の八月一日には、とうとう病院がやられました。丁度解剖の講義の時間に戦爆聯合の来襲があり、部署につく報らせの空襲警報の鐘がなったので、病院の方へ走りましたが、途中で敵機が頭上に現われましたので、友達二人と一緒に山べりに添って走りました。然しまだ地理がよくわからず、道を迷って院内には入り込み、丁度古屋野外科の所まで来た時に、敵機の急降下の音が聞え、同時に爆音が聞えましたので、夢中で廊下に伏せました。すると四方が真暗になり、烈しい音の中から「やられたッ」という声がかすかに聞え、頭、背、足に小石や硝子の破片が雨のように降って来ました。家の中は危いと思ひ、立ち上って走りましたが、出口がわからず、まごまごしている間に又来襲があつたので、物陰に隠れ、後の窓口から跳び降りて走り、山陰の所に伏せて居りました。その間にも何回となく敵機が来て、生きた心地はしませんでした。

爆音が聞えなくなつたので、横穴防空壕の方に走って行くと、二年生の方が二人で血まみれの学生を運んでいました。見ると大腿部と頭部をやられた二年生で、この人が、さつき叫び声を聞いた人ではなかつたかと思ひます。後でよく見ると、僕が伏せていた場所の右手二十米の所に一つ、左手三十米の所に二つ落ちていました。今日学校で医専生三人の犠牲者の告別式（？）がありました。

式の後で、僕等は院内の跡片付けて四時まで働き、今帰って来たところですが、明日もまた今日と同じ作業です。大和田野先生（私の従弟）も寛吾叔父さん（私の弟）

も無事です。先生の居た建物の階段にも落ちました。頭巾を作って送って下さい。まだ長崎には来ない方がよいようです。今から病院の防空当直に出かけます。

× × ×

この最後の便りが、七日後の午前十時ごろ配達され、その時当地にも空襲警報が出て、私は手紙を持って急いで防空壕に走つたことを記憶しています。その時の警報が長崎に敵機来襲の知らせで、原爆投下となつたのだらうと考えられるのです。近い長崎から一週間もかかって、被爆と殆んど同時に私の手許に届くなど、何か因縁を感じずにはいられません。この手紙を最後に、生を享けてから十七才三カ月で、希望多き身でありながらこの世を去つたのです。

主人や私の弟の家族の話によりますと、原爆の落ちた九日午前十一時二分頃は講義中だったそうで、正は「無傷なのは自分一人だった」と申しました由、被爆後は自分達が掘つた防空壕で数時間を過し、夕方になって裏の山を上り下りしながら一晩中歩き続け、十日朝八時頃にぐったりとなつて、西山の私の弟の家に辿り着きましたそうです。其処には私の母が居て、正は前から母を連れて佐世保に帰る約束をしていたので、玄関に入るなり立ちながら母に向つて、「佐世保に帰りましょう」と申した由です。然し「お父様も今朝救護のためこちらへ来られたよ」と聞き、「それでは」と云つて、そのまま弟の家に止まって父とも会い、父の手で出来るだけの手当を受けつつ、次第に悪くなって十一日の夕方死亡致しました。

主人は警察の命令で救護隊長という名目で長崎に派遣され、十日早朝長崎着、稲佐小学校の救護所で被爆者の治療に當っていました。私の弟の知らせで、正が無傷で無事に帰つたことを聞き、安堵して救護事業を続けたと申して居りました。然し結局は正が死亡し、自分の手で最愛の子を焼き、お骨にして佐世保へ帰つたのです。この様な悲惨事が、この世に又とあつてよいのでしょうか。でも考えてみると、大勢の方の中には、何一つ印しるしになる物もない方があるのに、正は父親に会い、出来るだけの治療を受け、祖母や親類の看護の内に息を引き取つたのですから、それだけはせめてもの幸せかと思ひます。

親の口から云うのも烏^{おと}背^せがましい事ですが、正は親兄弟思いで、而も祖国愛・正義観に燃え、どっしりした子で、友達からも頼られる子であり、渾名も「親爺」と云われておりました。同封の写真は昭和二十年七月二十八日、正が一寸帰宅した折に撮ったもので、この時が私との一生の別れとなりました。虫の知らせか何となく淋しそう、神ならぬ身の知る由もなく、「しつかり頑張りなさいよ」と励まして出発させました。

主人は長崎で残留放射能にやられたのか、だんだん弱って、二年後に他界致しました。当時幼なかった弟二人は、苦難を越えて父や兄の跡を継ぎ、医者として身を立てて居りますので、きつと親子して蓮^{うすな}の台に坐って喜んで見守ってくれている事と、善きにつけ悪しきにつけ、私の脳裏より一日として去ることのない憶いで御座います。以上拙文ながら、犠牲者の皆様の御冥福を祈りつ—。 (四五・八・一〇)

(四四二) 医専一年生 田尻達郎



遺族 佐賀市中ノ館町二—二

田尻 ゆい (母)

(前略) 去る九日の慰霊祭に初めて参列いたし、立派な慰霊碑の前に立ち、また見事な田板碑に田尻達郎の名前の刻まれたのをこの目で確かめ、感慨無量のものが御座いました。毎年今年こそは、今年こそはと思ひながら、暑さの為の体の不調でその意を得ず、残念に思っておりますが、永年の念願叶い、皆様にも親しくお目にかかれて、誠に嬉しう御座いました。

この度行なわれます年金請願運動に、少しでもお役に立てばと存じ、二十五年間奥深く大切にしまっておりました達郎の書類類に目を通しましたが、思い出が走馬灯の如く、老いの目に涙あふれる思いでした。入学以来僅か四十日余りの間に、我が家と

戦地の兄宛に、四十通余りの便りを出しております。

初めて我が家を離れ、如何にも親姉弟が懐かしい便りのみ、忙しい登校の一ときをさいて、解剖の絵など書いて便りをしていました。何と心のやさしい、肉親思いで、また愛国心に燃えた子だったかと思ひ、人様から、「今頃は立派なお医者様になって居られましように」と云われるれば、この世に花も咲かせず、可哀想で、また新たな涙を誘われます。

父に宛てた書簡の一節(昭和二十年七月四日付)

拜啓 父上様にはお変わりもなくお暮しの御事と存じます。やはり家庭の楽しさ、面白さ、愉快さは、故郷を離れることなくしては味わうことが出来ません。父母の恩は無論のこと、兄弟のよしみや恩も非常なものです。最初は非常に淋しく感じますが、この時こそ、自らを省みる境遇になった時であります。

日々戦争も苛烈さを増して、九州上陸は時間の問題にまで緊迫致しました。長崎も非常に緊張して居ります。学校では今防空態勢の確立と、軍の陣地構築作業に従事して、二、三日後から授業が開始されると思ひます。佐賀の方は如何ですか。毎日毎日の空襲も馴れたので何ともありません。警報が出ると、直ちに学校防衛にかけつけます。皆様には余り御心配にならないよう、くれぐれもお願ひ致します。空襲は余り危なくありません。これから又学校へ夜警に行かねばなりません。

母への手紙の一節(昭和二十年七月八日付)

近況を報告致します。朝は五時起床、六時食事、七時半登校、八時より講義開始、一科目二時間、午後四時下校、五時半食事、十時半就床。十時以後に電灯をつけたら敵しくやられます。一度十一時につけていたら怒鳴られました。追々勉強の方も忙しくなります。朝晩の冷水摩擦もしています。暇さえあれば手紙を書きます。空襲の際は医大に集合、防衛並びに負傷者の治療や死者の運搬です。

兄へのハガキの一節(昭和二十年七月十一日付)

兄上様には其後もお元気に軍務に御精励のことと察し申上候。降って小生も元気に長崎にて頑張っており、未来の軍医将校として活躍する積りに御座候えば、御安神下

され度候。この危急存亡の時、一身を抛って君國に捧げんことを誓い申し候。

入学祝は有難く頂戴致し候。医専も二年、若しくは一年半となり、全部軍医少尉として前線にて活躍致すことと存じ候。兄上もお体に留意せられ、共に米英撃滅に邁進致さんことを切望致し居り候。兄上の武運長久をお祈り申上候。

父へのハガキの一節（昭和二十年七月十二日付）

小生も極めて元氣にて、勉学に勇猛邁進致し居り候。軍医は兵科将校よりも戦場にては危険にて、男子の最も勇敢なるを表わす所に御座候。

陸軍の軍医は最前線にて、而も第一線散兵の治療を駆けめぐつてなすものに御座候へば、決して兄上にも負けざる、否それ以上の軍医となることを決心致し居り候間、何とぞ御安神下され度候。学校の授業も猛烈に詰込まれ、一刻の暇とて惜しく候間、これからの手紙とても失礼致すやも知れざれど、なるべく便りする積りにて候。家よりの手紙での御注意が一番身にしみ候へば、何とぞ御注意下され度候。

父へのハガキの一節（昭和二十年七月十四日付）

小生等も一週に一度、学校当直を命ぜられ候。又勉強の方は一年間にする所を三ヵ月の短期間につめ込んでしまい、国家は医専からの軍医を切に要望致し居り候。又医専卒業後は直ちに軍医少尉として、前線に活躍するの光榮に浴する事に相成居り候。

依託生の試験は来年にある予定に御座候。全身全霊を以て国家の危急に應ずる信念と覚悟に御座候へば、何卒御安神下され度候。父母上の御健康を祈り上げ候。

（四四八） 医専一年生 高崎 惇 佑

遺族 千葉市作草部町九〇八管理事務所

高崎 充（父）

高崎 子ヨ（母）

（前略） 私は厚爆の投下された当日を思い出しては、涙を新たにしております。

去る十月九日、靖国神社の大祭に参拝致しまして、久し振りに亡き惇佑に逢って参りました。

思えば二十年前、原爆が長崎に投下された時は、私達は蒙疆（今のモンゴル）の首都張家口という所に在任しておりました。長崎に原爆の投下されたことは、終戦後北京で疎開生活をしていた折に知ったのです。それからは毎晩のように、鉢一面に包帯をしてベッドに横たわっている、惇佑の夢を見るようになりました。

子供や母は、夢は逆夢というから、そんな怪我などしてはいないよ。きっと元氣であるよ、と慰めてくれました。私もそうだ、きっと元氣でいるのだと思ひ直しながら、やっと佐世保へ引揚げて来たのです。

真先に惇佑の事を兄に聞きましたが、暫らくは何とも云ってくれないので、若しやとは思いましたが、どうぞ生きてくれさえしたらと神に祈りながら、兄の返事を待ちました。でも兄や姉が目涙を一杯浮べましたので、ああ、もう駄目かと思ひ、氣も狂わんばかりになり、子供達と手を取り合つて、声を限りに泣き叫びました。

兄（医者）は佐世保の救護班に加わり、トラックで長崎に行き、一日中惇佑の姿を探し歩いても惇佑の死骸が見当たらないので、「運よく学校へ行かずに、何処かで命拾いしているのではなからうか、どうぞそうあってくれ」と神に祈りながら、多くの怪我人の手当をしたのだそうです。そして毎日、ひよっこり帰って来てくれよ、と願ったのだそうですが、でもやっぱり駄目でした。

『原爆の落ちたあの日は、解剖学教室で人体の解剖を見学していたとかで、恐らく原爆のために吹き飛ばされたのかも知れない。あの目を覆うばかりの凄惨な光景は、それこそこの世の地獄とでも云おうか、いや、そんなものではない。もう何とも譬えようもない悲惨極まりない有様だ。親のお前が、あんな姿になった惇佑を若し見たとしたら、お前もその場で死んでいたかも知れない。お前達は遠くに居て、あの惨状を見なかったことは、却って不幸中の幸いだつたかも知れない』

兄は私達を慰めるつもりで、このようなことを云ってくれました。でも私は、それこそ死ぬまで、その事が一番残念でならないのです。親として、どんなに無残な姿に変わり果てた子供でも、この親の手でしっかり抱き上げて、幾十年かかってでも自分の命の続くかぎり、看護してやりたかったと思ひました。また、若しかあの時大怪我をし

て、父母の助けを求めて泣きつづけながら、一人哀れな姿で死んで行ったのではなからうかと、本当に可哀想で可哀想でなりませんでした。もしかしらひよっこり、「只今」と云って帰って来るのではないかと、今でもまだ待つております。

本当に、こんな戦争があつていいものでしょうか。あの憎い憎い戦争のために、私と同じ悲しみを受けて、今だに泣いておられる日本人が、幾百万とおられるのでしょうね。

今グビロが丘に静かに眠つておられる先生方や、また生徒さん達のためにも、本当に世界の平和を心から祈りたいと思います。

X X X

(四五、一一、四)

今年もとうとうグビロが丘にお詣りが出来ず、残念でなりません。今年は大勢の参列者の方がグビロが丘を埋めつくし、とても盛大な二十五周年忌でありました由、定めし地下で眠つていらつしやる故人たちも、御満足だった事でございましょう。

でも思えば地下で眠っている亡き倅佑は、今年もまた両親や弟妹達の姿が見えず、一日中待ちわびて、淋しい思いをしながら待ちくたびれ、泣きながら眠つたことだろうと思ひ、何だか可哀想でなりません。

来年もし元気でいましたら、何としてもお詣りしたいと思ひますが、実は主人が昨年・今年と続けての眼病のために、左眼は殆んど失明同様になりましたので、果してお詣りが出来るかどうか、大変心許なく存じております。然し昨年は十月十九日に、靖国神社の大祭に参詣いたしましたして、久し振りに亡き倅佑に逢うことが出来て、こんな嬉しいことはございませんでした。

(四五二) 医専一年生 高比良 房 男

遺族 長崎県西彼杵郡多良見町西園名

永江 ユキノ(姉)

○ 年ふれど思い出悲し筆執れば 生々しくも胸迫りくる

我儘な御無沙汰をいたし、今日に及びましたことを深くお詫び申し上げます。この



間、私など為すこともなく坐して居ましたのに、慰霊祭の執行、名碑の建立、靖国神社合祀、「忘れな草」の発刊、遺族の補償など、幾多の困難な私共の悲願を成就させていただきました。並々ならぬ御苦勞を偲び、調遺族会長様初め、関係の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

房男の生い立ち

弟房男は、私ども兄弟姉妹の末子として、昭和三年三月六日に旧大草村で生まれ、旧制長崎中学在学中に、当時の予科練に熱をあげていたところを、周囲の説得により長崎医専に進学、国鉄大草駅より徒歩四十分の行程にある自宅から、汽車通学を致しておりました。

運命

被爆当日の朝は、何かで足を痛めていたのか、足を引きずりながら大草駅に向つたように、通勤者の中には、当日の雲行きに危険を感じて、途中から引返す者もあつたらしいのですが、本人は、「今日の講義は重要だから是非出席したい」と申し、足よりも鈍く、予定よりも遅れて、漸く大草駅に辿りつきました。その特列車は既に発車して徐行中でしたが、それに無理に飛び乗ったのださうです。

いっそ汽車に乗り遅れていたなら——と当時は思つたのですが、僅か一、二分の違いが、人の世の生と死を振り分ける結果となり、今更のように、運命というもの厳しさを、強く感じている次第です。

無意識の意識(前夜)

被爆前夜のことです。さらだに夏の夜は蒸し暑いのに、当時は灯火管制のこととて、窓の開放も意の如くならず、房男は暑さに堪えかねたらしく、「今夜はとても暑くて眠られぬ」と申しましたので、母が「そんなに二階(房男の勉強部屋兼寢室)が寝苦しいなら、下(両親の寢所)に来て寝たら」と申しましたところ、平素は年頃

の事とて、この様な誘いには一顧も与えなかったのですが、その夜に限って素直にこれに応じ、両親の中間で安らかな一夜を明かしたそうです。そしてその朝、房男は死出の旅に立ったわけでございます。この夜こそ両親との最後の訣別、無意識の意識とでも申しませうか。

探 索

被爆の翌日、父の一行は長崎方面を終日探し求めましたが、全く手懸りがなく、翌々日には私共一行が再度の探索のため、道ノ尾駅で下車し、市内は勿論、これはと思われる要所々々を余すところなく、終日歩いて探索しましたが、やっぱり無駄に終わりました。愈々絶望と諦めて大学に引返し、残務整理中の職員の方に、房男のいた教室を教えて貰い、目を蔽うばかりに折り重なった幾多の白骨の中から、先生のではないかとと思われる太い骨片や、学生のもと思われる普通の白骨数片を、せめてもの形見として壺に納め、力も尽き果てて、とぼとぼと帰途についた次第でございます。

大学構内にあった多種多様の遺骨や遺体の中で、燃え残りの建物を背にし、姿態も崩さず石段に腰をおろし、黙然として生けるが如く往生なさっている学生さんの姿が、今なお強く印象に残っております。

X X X

時移り、あれから二十有余年、私の兄もその前に戦死しておりましたので、私は兄弟の全てを失い、更に昭和二十二年一月には父が、引続き母も他界致しましたので、残るは私一人となりました。当時を偲べば涙が先にたつのですが、残された者の務めとして、心を奮って亡き親兄弟の葬祭を果して参っております。それにつけても、原爆被爆の悲惨さはさることながら、医師対策が声を大にして叫ばれる今日、あれだけ多数の有為な頭脳が、一瞬にして灰に帰した事実は、惜しいというより、勿体ない感で一杯でございます。

(四五・一〇・二四)

(四五三) 医専一年生 竹 原 豊

遺族 神奈川県川崎市鷺沼四一七一六

竹原 コト(母)
竹原 勲(弟)

(前略) 父土地男は四十一年十月、当地に於いて他界致しました。母はまだ健在で、鷺沼で一緒に暮しております。実は昨日亡父の三年忌をとり行なったところでございます。母が元気な中に、是非一度長崎を訪ねてみたいと思っております。

今後の御連絡は私宛にお願い出来れば、洵に幸甚に存じます。(四五・一〇・五)

(四五四) 医専一年生 立 石 希 男

遺族 長崎市緑町三二一八

立 石 昇(父)
立 石 ヶ子(母)



私事、故立石希男の母で御座います。昭和二十年八月九日、長崎医大で講義中にあるの恐ろしい原爆を受けました。両親は勤めの関係で福岡に居り、希男だけ稲佐町の外磯さんの家に下宿させておりました。

後日外磯さんからお聞きしたところでは、九日の原爆のあと、その日の午後から方々を探し廻り、九日、十日は駄目でしたが、十一日の朝、大学本門の所で漸う見つけたようで御座います。しかし重態のため早速時津の国民学校に収容され、外磯さんや大勢の方々の手厚い看護も空しく、十一日の夕方五時頃、最後の水を求めながら、両親の来るのも待たずに、息を引き取ったとのこと御座います。

希男はたった一人の子供でしたので、その時の私共の気持は、とても筆や言葉では云い表わすことは出来ません。只々涙のみです。返らぬことながら、今年生きたいら、四十五才の男盛りの医者となつて、社会の人々の為に尽しているのと思ひますと、返す返すも残念でなりません。でも八百人余りの遺族の方々も、同じ思ひでお過しのことと思ひ直し、諦める外はないと、朝な夕な仏様にお願いして居りますもの

の、八十一才の主人と七十才の私ですので、明日をも知れぬ身の上、老後をみてくれるものもない有様で御座います。心細い日暮しをしながら、希男の冥福を祈っている淋しい母親でございますが、命のある限り、毎年八月九日にグピロが丘の慰霊祭にお詣りして、名碑に刻まれた希男の名を見ることが、大きな楽しみでもあり、また老後の私共の唯一つの慰めでもあります。この名碑の名は永久に学内に残りますので、悲しい中にも喜びに堪えません。希男の霊も名碑と共に、安らかにグピロが丘に眠っていることでしょう。合掌
(四五・一一・一四)

(四五五) 医専一年生 鶴 武 俊

遺族 大分市金池南一丁目二一五

鶴 喜代蔵(父)

暦の上では早や秋となりましたにも拘らず、まだ残暑が厳しく、凌ぎ難い季節で御座いますが、先生には益々御元氣にて、色々と遺族会のお世話をして頂き、厚く御礼申し上げます。

先日の原爆二十五周年慰霊祭は、大変だったことと思いますが、私は都合悪しく参拝も出来ず、誠に相済みませんでした。長い間いろいろ御供養、御慰霊を頂き、地下の霊もさぞかし喜んでいることと存じます。(中略)

亡妻の初盆もどうやら無事に終り、ホッとしていますが、何にしても長年一緒に暮して来たのに、独りになった孤独感がひしひしと胸に迫って、何をする気力もない程です。(後略)
(四五、八、二七)

私の愚痴

原爆という文字や言葉は、日頃いつも見聞するのですが、その度にあの悲惨な二十五年前の長崎が思い起されて、亡くなった愛し児の若々しい面影が、自然に臉の中に浮んで参ります。亡くなった時は少年でしたが、あれから二十五年の歳月が流れ、今存命ならば働き盛りの四十才代なのに、思い出の中では、いつまでも無邪気な紅顔の少年です。それだけ、私自身も老い込んでしまいました。

将来を託そうと思った長男に逝かれ、本年は妻にも死別して、ヒシヒシと淋しさを感ずるようになりました。あの悲惨な原爆さえなかったら、現在の生活環境も、もつと幸せであったかも知れません。私だけでなく、この様な思いをしておられる方が、何十万と居られることでしょうが、二度とあの様な悲惨事を繰返さないようにしたいものです。

今の長崎の風景を見たら、あの様な悲惨な状態があったことなど夢のようで、それだけ平和な世界になっているのですが、当時の惨憺たる状態、悲痛な思い出は、犠牲に遭った人、そしてそれを実際に経験した人でなければ、とうてい理解も想像も出来ない程のものでした。

私は現地でその状態を実際に見て、あの混乱の中を、負傷しながらも喘ぎ喘ぎ帰宅した子供の、生への執着力の強さを嬉しく思い、抱きしめて喜び合ったのも束の間、四日間だけ苦しみが延びただけで、原爆症で斃れてしまい、生きる努力が空しく消え去ったことが、哀れで可哀想でなりませんでした。

何度愚痴を云つても、死んだ児は帰っては来ないのですが、それでも、時々思い出しては、心の中で愚痴が云つてみたくります。多分私の年のせいでしょう。本当に二度とあの悲惨事を繰り返さないで、今の平和な世界がいつまでも続いて欲しいものです。

武俊は亡くなって、現世にはいないが、私の胸の中や頭の中には、いつもニコニコした無邪気で潑刺とした顔で現われて来ます。私が生きている限り、あの子の面影もなくなりはありません。そしてグピロが丘で沢山の人々から見守られ、供養されている幸せ者と喜んで居ります。

私も老境に達しましたが、武俊の外に子供も居り、孫も出来ましたので、いつまでも平和であって、幸せな生活をさせてやりたいと思います。皆でそのように努めて行きたいものです。
(四五・一一・六)

(四五七) 医専一年生 土橋弘基

遺族 長崎市愛宕町八四

土橋清英(父)

土橋清子(母)

亡き弘基を偲びて

(前略) あれから二十五年の歳月が流れ去ろうとしていますのに、余りにも悲しみが深く、これまでどうしても書くことが出来ませんでした。嬉しかった思い出、悲しかった思い出、また懐しい思い出が一杯で、書こうとすれば胸がせまり、涙が後から後からとあふれ出て、どうすることも出来ません。ある時は声を出して泣き、ある時は人知れず忍び泣きして。これはこの母の命ある限り続くことでしょう。母ももう明ければ七十才になり、だんだん弘基の側に行く日が近づくつあります。

あなたがいつも自分の部屋で、端然と椅子に腰かけ、机に向って何かを書き、何かを読んでいた姿は、今もありありと目に焼きついて離れません。寝転んだりあぐらをかいたりして寛いでいた姿は、どうしても思い出されません。たった十九才の短い命だったのですもの。書くことが山程あったのでしょう。読みたい本が山程あったことでしょう。それは小学生から中学生、そして医専の学生になっても、ずっと続きませんでした。ノートや色々な紙切れに書かれたのが山程ありました。幾度整理しかけても、つらくて、又その儘にしてしまおうのでした。

ある日思い切って、伊良林小学校の卒業式に戴いた硯箱をあけてみましたら、中から綺麗に描かれた解剖の図が出て来ました。その図には、「医専一年、第一小隊、第六分隊、九〇番、土橋弘基」と記してありました。

文科に進みたいとの念願でしたのに、親の云う通りに医科に進み、医科に進んだからには、医学の道に精根を傾ける——そういう素直なあなたでした。几帳面で心優しく、いつも静かで無口でした。清潔な学究肌のあなたでしたから、さぞかし立派な外科のお医者様になっていたでしょうに——。

昭和十九年、長崎中学四年在学中に、学徒動員のため三菱兵器大橋工場にやられ、二十年三月には戸町のトンネル内工場に移されて、三月には長崎医大付属医専の試験に合格して、入学を許可されましたが、兄の勢至も熊本高工にパスして、その年の春は歓喜と希望に充たされ、幸福の絶頂でした。それから五ヵ月後に、あのような悲惨な出来事が起るとは、誰が予想出来たでしょうか。

兄は十月から始まる予定でしたが、医専は七月一日に入學式が行われ、夏期休暇も中止されて毎日登學し、爆撃による負傷者の救護作業に挺身していたのです。夜間に空襲警報が発令されれば、時を移さず登學して配置につき、又週に一回位の割合に徹夜で勤務に服していました。いつも巻ゲートルに戦闘帽、鉄兜の服装でした。勉強どころではなく、戦場の兵隊さんと少しも変わりはなかつたのです。本当に哀れでなりません。八月九日の原爆では、五百三十名の前途有為の若人の尊い命が失われ、哀れ吾が子の弘基も、その中の一人でした。

被爆当時の残忍な有様は、「忘れな草」第一号(昭和四十三年四月十五日発行)に主人が記していますので、ここには繰り返しません。私には書く勇氣もないのです。熊工を卒業した長男の勢至は、長崎県庁に勤務して真面目にやっています。五才になる孫娘の育子は今レデンプートル幼稚園に通っており、私が送り迎えています。私の子供は男ばかりだったので、孫の育子は老後の私の淋しさを、どんなにか慰めてくれることでしょう。この孫娘に弘基叔父ちゃんの事を話して聞かせますと、目を輝かせて聞いてくれます。この時が私の一番嬉しい時であり、楽しい時なのです。

原爆当時八才と六才であった長久、道良の二人の弟も、市役所に勤務して、良きお嫁さんに恵まれ、年老いた七十七才と六十九才の老父母に孝養を尽してくれました。

遺族会役員の皆様の御尽力で、靖国神社への合祀も相叶い、「忘れな草」という思い出の御本も頂き、有難さ駆けなさに只々感泣致すのみでございます。日夜読み返し繰り返し拝読するのが、私の唯一の慰めでございます。御遺族の方々も同じお心と存じます。

緑に包まれたグピロが丘に、学業半ばにして逝かれた若人と共に眠る弘基よ。静寂

を好み孤独を愛した弘基にふさわしい所に、あなたが永遠に眠ることを、母は嬉しく思っています。四十三年八月九日に完成された原爆犠牲者名碑に、「土橋弘基」と記名され、永久に永劫に残ることを、母は嬉しく思っています。有難く思っています。終りに、弘基によせられた哀悼歌を認めさせて頂き、筆を擱きます。

【島内八郎様（主人の友人）より】

○ ひととせは短きことしきのふけふ かの日さながら夏雲のいろ

○ 亡き霊をなぐさめむとて町々は 夾竹桃のくれない咲かす

○ 君がまた安くねむらせながさきの ちまたはろかに見えている家よ

【菊岡孝一様（私の弟）より】

○ ともすれば消えなんとするわがちから ふるいおこして家路をたどる

○ 目をおほふ惨烈のさなか苦しみて 一夜をあかししそのあはれさよ

○ うらわかき十九の命うばはれて そのちちおふその母思ふ

【二伸】 次のことを書き落しましたので、手記の中にお書き添え下さい。

昭和二十年七月一日の入学式に参列した時、学長より新入学生に対し、左の趣旨の訓示がありました。

「諸君は本日より長崎医大の学生として、第一線で死闘を続けている我が大日本帝國の将兵と同様、内地に在って救護隊に動員された以上、昼夜の別なく、献身その任に服し、敵機襲来に備え万全を期せよ」 (四五、一一、一四)

【調 附記】 土橋清子様からは、手記と一緒に、弘基君が生前に書き残した色々の遺稿が届けられた。それは余りに老大で、その全部を転載する事は出来ないのので、その概略をお伝えするに止めたい。

土橋弘基君の遺稿

(一) 「八月七日」——三枚の原稿用紙に鉛筆で書かれた短文で、最後に近いものと思われる。内容は、防空壕の中で席に坐り、図書館で借りたワイルド全集を読んでいる時、二、三の同級生が傍に来て坐り、又出て行くまでの情景が、ユニークな筆法でコント風に書かれている。

(二) 小さな懐中手帳に種々の随想文が書かれている。表紙に「文の道を我は斯く歩きぬ」と書かれ、第一頁には「文の道といふは、その尽くるところ、大なる慰藉と、大なる快樂との花園にして、路傍にて摘みしうるはしき小さき花を、いみじくもあつめしものなり」と記されている。随想文としては、①文章を如何にしようまくかくか②「自分」俺は余程の自惚だ、云々、③足の疾患になやみて、④我が読まんとする本、⑤ついでに（長い口語詩）、その他、詩、短文、俳句、等々。

(三) 「昭和二十年四月十七日、土橋弘基」と書かれた小冊子、これも随想を集めたもので、その冒頭に次の文が書かれている。

「医学徒は、一、強靱なる身体を要す——。一、明敏なる頭脳を要す——。一、健全なる志操を要す——。一、綿密にして根気強きを要す——。されば精神を統一する術を学べ」。

その他、「不必要なるものを購へば、やがて必要物を売るに至る。」「専門家は読書するだけでは駄目だ。しかし専門以外の一般的教養をうるために、また専門の学いろいろな示唆を与へるものを得るために、読書することは必要である。」「嗚呼、現実を不満なりと焦心する者には、己の求めるものが既に身近にあり、決して他にあるべきではないことを、悟るべき眼を具えることこそ必要なのだ。」等々。

(四) 昭和十九年十一月二十七日に書いたと思われる、ザラ紙十五枚にペンで書かれたもので、「親と子が座を正して向い合い、家系のこと、家庭のこと、家の将来について改まった話をする」ということは、徒ならぬ、^た忽せならぬ^{ゆるが}ことでもあります。こんなことはそう度々あると申すものではありません。私はその大切な瞬間を、いま父上の前にお願ひしたいと存じます。」という書き出しで、自分の人生行路、進学の道を諄々と父上に訴えた格調高い文章で、読む者を感動させずにはおかない。唯惜しむらくは、文科系を愛しながら理科系に進み、あたら二十才にも充たぬ若人を原爆の犠牲に捧げたことは、運命とは云え、真に痛惜の至りと云わねばならない。

(四六一) 医専一年生 轟 木



汎

遺族 福岡市大字名島新開町

九電社宅四〇号

轟 木 ホスエ (母)

八月初め頃帰省した時、念願の角帽が出来ていたのでそれをかぶり、希望に満ちた笑顔で長崎に発って行きました。お盆の十四、五日には帰ると云って、張り切って行きましたが、お盆になっても帰って来ず、

人の噂で、長崎に今迄にない新型の爆弾が落ちたことを耳にしましたので、不安とあせりで取るものも取りあえず、長男を連れて長崎へ駆けつけました。大学に行つて受付で一年生の教室を教えて貰いましたが、一縷の望みも消えて、教室の焼跡には死体がゴロゴロと転がり、これを眺めた私たちはただ呆然として、急には涙も出ませんでした。もともと汎は体が小さかったので、多分これだろうと判断し、長男と二人で半焼けの死体を骨にして、胸に抱いて帰りましたが、大学の焼跡はまるで地獄そのまま、長くは留まることも出来ず、汎の死んだのも夢のようで、空しい気持で帰宅致しました。

思えば汎は体こそ人並みより小さい方でしたが、頑張り屋で、頭は他の我が子より遙かに良く、医者になることを大きな望みとして、親の私にも安心するように、将来の事でも話してくれました。

あれから早や二十五年、私も七十六才になって、今は我が子や孫と安らかな余生を送っていますが、今頃汎が生きていましたら、頑張り屋のあの子の事ですから、きっと開業でもして、楽しい日を送っていることと思います。でも考えてみますと、汎の死も犬死でなく、靖国神社にも祀って頂き、永久に残る名碑にもその名を刻んで頂きましたので、今は何も思ひ残すことはなく、ただあの子の冥福を祈るばかりでございます。

(四五、一〇、二五)

(四六六) 医専一年生 中 島 禎 三



遺族 鹿児島県嚙吠郡大隅町坂元

中 島 きくえ (母)

涙にむせてしまいます。思い返せば、昭和二十年六月二十八日の夜、鹿児島駅に見送ったのが、最後の別れとなってしまいました。

禎三は三男で、県立鹿児島二中の五年に在学中に長崎医専に合格し、入学のため六月二十八日の夜行で伯父(私の兄)に連れられ、鹿児島駅を出立いたしました。当時父は既に十五年に病歿し、長男と次男は共に出征中でしたので、私は嫂と共に駅まで見送りましたが、これが永の別れになるうとは、夢にも思いませんでした。

それから僅か四十余日で、あの恐ろしい原爆にあつたのでございます。在学中に一度手紙をくれましたが、「生臭い人骨にも慣れました。僕が卒業するまで、お母さん頑張つて下さい。僕も頑張ります」と、優しく書いてございました。

最初に長崎へ受験に行きました時のこと、お友達と街を歩いていたら、兵隊さんが僕の側につかつかと寄つて来て、「君は鹿児島島の二中生か。僕も二中出身だ。頑張り給え」と、かたく手を握られたと話しますので、私もつい涙したことでございました。帽子の徽章や制服のボタンで、二中生は一目で判るのでした。出立の時も、霜降り製の白のゲートルを巻いて、リュック一杯の荷物を背負った姿が、今も目に焼きついて忘れられません。口数少く、心は至つてやさしい子でした。

禎三には兄二人、弟二人、妹一人の兄弟姉妹があり、父は長男が数え年十九才の時亡くなりましたので、五男一女の養育や教育に、大変苦労いたしました。長男が

二十一才の時に父の後をつぎ、郵便局長の職についてホッとしたのも束の間、すぐに徴兵にとられ、通信兵として十八年二月十日に出征しました。私は広島まで見送りしましたが、行先はどこか判りませんでした。六ヶ月後、幹部候補生として、神奈川県相模ヶ原の通信学校へ帰り、三ヶ月の教育を受けて支那大陸へ出発しました。陸軍少尉として支那大陸を駆けまわり、終戦の翌年五月に復員、再就職いたしました。永の苦勞が祟り、その後病気で亡くなりました。解除後のこととて、何の恩恵にも浴しませんでした。

次男は二中卒業後、当時の熊本高等工業機械科を卒業し、十九年二月に出征、技術少尉として東京日立航空に勤務中に終戦になりました。長男の歿後兄の職をつぎ、現在私の面倒をみてくれて居ります。母の私から見れば、修めた技術を捨ててお門違いの田舎の局長とは、可哀想な気も致しますが、弟や妹の面倒をよく見てくださいました。四男、五男も共に二中卒業後、大学を出まして、今東京で幸せな家庭を持っております。末っ子の長女は一年三月で父を失い、顔も記憶にないようでございますが、鹿児島女高卒業後、鹿児島銀行に勤めておりましたが、良縁があつて東京で家庭を持ち、今二児の母でございます。私は現在八人の孫があり、皆がやさしくしてくれますので、感謝で一杯でございます。今静かに思いますに、こんなに息子達が一人もぐれず、真面目に成長してくれたことを、私は寧ろ息子達に感謝しております。それについても、尚更に長男と禎三が偲ばれてなりません。(後略) (四五、八、一〇)

(四七一) 医専一年生 長谷 茂

遺族 長崎市花園町一四―五

長谷 弘 (兄)

橋村 良子 (妹)

あやまちを二度と繰り返さないで

また油照りする八月九日が来しました。十一時二分、あの悲惨な地獄の様相が瞳から離れません。二十五年たった今、忘れようとしている戦争の恐ろしさを、私達が次の



世代に語りつがなければ――。

当時、私は十二才(小学六年生)でした。兄とは四つ違いで、すぐ上の兄でした。いつも私に数学などを教えて、励ましてくれていました。

兄はいつもよく勉強し、努力して居りましたので、私は子供心にも、努力家に向学心に燃える兄を、心から尊敬して居りました。医専に合格しました時、一家中で祝ったことは申すまでもありません。

あの恐ろしい原爆の落ちた朝は、いつもいそいそと出て行く兄が、あの日に限って何となく行きたがらない様子なので、早くしないと電車が満員になると云って、母がせきたてた程でした。しかし十一時過ぎに原爆が落ちると、急に心配になり、いつまで待っても帰らない兄を捜しに、何べんも医大へ出かけました。

浦上方面の凄惨な様相、鼻をつく牛馬や人の死体を両脇に見ながら、無残な医大の焼跡で求め得た兄の姿は、小さな封筒に入れられた数片の遺骨でした。

これが私の兄なのかしらと、疑いながらも涙があふれてなりません。母はその封筒を抱きしめて、「茂ちゃん、熱かつたろう。苦しかつたろう」と、つぶやきながら泣き伏しました。それから数十日の間は、いつか兄がひょっこり帰って来はしないかと、心待ちに待つ日が続ききました。

あんなに勉強に励んでいましたから、今生存していたら、社会のために何かのお役に立っていることは疑いありません。本当に戦争の恐ろしき、怖さが、しみじみと実感として湧いて来ます。

人間が生きる限り、人間が人間を殺してもよいのでしょうか。一体、戦争は誰の為にするのでしょうか。兄を返して――と叫ばずには居られません。

二十五年経った今、又再軍備論とか自衛隊云々とか云われていますが、二度と過ちは繰り返してはならないと思います。(四五、八、九)

(四七二) 医専一年生 西 大雲

遺族 福岡県築上郡新吉富村尻高
西 ブジ (母)

福岡県築上郡大平村土佐井

大竹 建 三 (義兄)

(前略) 母ブジ事、最近元気を回復し、東京の大由兄の所に行つて、兄と一緒に靖国神社に参拝して帰郷しました。お蔭で丁重な取扱ひを受けたと、大変喜んで居ります。来年は私も同道して、原爆忌には是非参列したいと考えて居ります。(中略)

大雲から父宛の葉書を五枚同封しました。第四号に載せて頂けたら幸いです。

大雲より父兎雲に宛てた葉書

その一 (昭和二十年七月一日付、七月二十一日着)

珍しく暦通りに上ったかに見えた梅雨が、再び盛り返してか、ここ長崎では毎朝晩雨がしとしと降つて居ます。そちらでは水不足とか、如何ですか。

先日母上よりの便り確かに拜見、「親恩う心に勝る親心」とか云う心境が泌々感じられて、親心の偉大なるは、単に山の高さ、谷の深さに比ぶべくもありません。

兄上が帰られたそうですね。双方とも嬉しかった事でしよう。自分も会いたかったです。皇国の興廃を背負う帝国将校として、相当張り切つていた事でしよう。兄に負けぬよう、自分も頑張らねば申訳ありません。(後略)

その二 (昭和二十年七月七日付、十一日着)

お元気ですか。私は益々元気でやっていますから、安心願います。親に心配をかけるほど親不孝はないと悟りました。此処に来て、親の恩、兄弟姉妹の恩が、分りきるほど分りました。どうか父上も母上も、お身体を丈夫に、無理せぬようにお願ひ致します。

空襲頻々たる折から、裏の防空壕を完備して、ケガのないように——草々

その三 (昭和二十七年七月十三日付、十七日着)

父上よりの慈愛溢れるお端書、本日確かに拜見致しました。家中皆お元気にて、毎

日忙しい日を過して居られることと拝察致します、小生も元気に毎日登校致し居りますれば、何卒御休心下さい。学校では既に毎日授業です。何事も最初が最も大切です故、しっかりやります。

戦局も現在のように切迫すると、何時如何なる事態が惹起するかも分りません。併し必勝を信じ、飽くまで頑張るのみです。(中略)

今までの自分が、余りにも勝手気儘な奴であった事を、深く恥じ且つ詫びる次第です。祈健康、敬具。長崎市山里町二九〇松坂方、西大雲

その四 (昭和二十年七月十六日付、二十三日着)

昨日土佐井の大竹より端書到着、文面によると又してもそちらは大雨にて、相当の被害とか。家の近所はどうでしたか。こちらも大分降りましたが、何等の変化もありません。御心配は勿論御無用。併しながら腹のへるのは大変な苦痛です。何か、例えば唐豆の炒つたのなど沢山送つて下さい。要するに食うものなら何でもよいです。水書見舞から、とんだ食糧催促になってしまいました。宜敷くお願いします。

その五 (昭和二十年七月二十七日付、三十一日着)

月日の経つのは早いもので、自分が尻高を出てから、既に一カ月を経過しようとして居ます。下宿生活も大分馴れて来ました。学校の内情も段々分つて来ました。

学校生活の大要は、朝八時から正午まで午前中の授業、午後は一時から四時過ぎまで授業があり、修業年限は戦時特令のため短縮されて、四年の筈が二年半、戦争次第では二年位に短縮されるかも知れませんし、或いは醜敵一たび上陸すれば、学徒隊として、このまま戦場へ、何れにしろ学校も決戦場そのものです。

長崎は幸にも、まだ一発の焼夷弾攻撃も受けていません、不思議な位です。しかし何時あるか、少しも予断は許されません。

そちらでは近日来、敵機動隊より発進する艦上機が、福岡県東部を行動中とありますが、被害はありませんでしたか。今は何処も同じことです故、用心が必要不可欠です。何卒自重自愛の程を——。

(四七六) 医専一年生 野 口 陽 一

遺族 佐賀市水ヶ江二丁目一三三

野 口 ム メ (母)



(前略)

「忘れな草」第四号の原稿募集が始まっておりますので御座いますが戦時中の事として、医専在学中の陽一の写真が見つかりませんから、中学五年の時の写真一枚と、浦上天主堂を写生した古い葉書

一枚を同封致しました。この葉書は医専に入學した当時、弟宛に書きかけたものでうで御座います。遺品中に御座いましたからお目にかけますが、これも母の思い出の一つで御座います。

○ 年毎に我が子の思いいやまさる 原子兵器ののろわしきかな

【調 附記】 陽一君の古葉書というのは、薄茶色に着色してはいるが、それには被爆前の浦上天主堂が、鉛筆で丹念に見事に描かれ、下段に「長崎医大より教会堂を望む」(二〇、四、二六) Y・Nと書かれている。殆んど忘れかかっていた往時の天主堂を、思い出させて頂いた気がして、大変嬉しかった。

その表の下段には、「前略、諸君にはその後お変わりなきことと思ひます。今日は午後一寸暇が出来たから、スケッチをしてみました。医専のまわりは中々いい景色ですよ。」と書かれている。宛名もなく、通信文も未完成のようで、スタンプもないので日付も不明だが、多分昭和二十年七月頃書かれたものであろう。

(四七八) 医専一年生 長谷川 脩

遺族 長崎県壱岐郡郷浦町本村触大里

長谷川 マト (母)
長谷川 春子 (姉)

(前略) 二十五周年忌慰霊祭の御案内状を頂き、ありがたうございました。母を

連れてお参りいたしたく思っておりましたが、参列出来ませず、残念に思っております。

毎年八月九日が廻ってまいります度に、あの恐ろしい日の事が想い出されて参ります。原爆記録映画を見まして、本当に苦しんで逝ってしまった弟の事、また学友の皆様方の事を思い、これで果していいのかと——でも毎年皆様方にお参りしていただき、故人も喜んでおりますことと存じます。(後略) (四五、九、一〇)

(四八〇) 医専一年生 浜 口 恭 三

遺族 佐賀県唐津市唐房五丁目

浜 口 計 (父)
浜 口 イソ (母)



(前略) 先日のお手紙では、原爆当時の有様を詳しく書くように、とのことでしたが、思い出せば涙の種、又当時の悲惨な有様が目の前に浮び、^{まぼろし}幻ともなって現われますので、思い出さぬことに努めて居りました。しかし恭三の供養のためにも思い直し、一筆書かして頂くことに致しました。

長崎に新型爆弾が落ちたと聞き、私達は防空壕の中で、恭三の無事を祈って居りましたが、人の話に、浦上の大学なら早く行ったがよいと聞き、原爆投下後七日目に、長崎に行きました。八月十五日頃だったかと思ひます。

長崎に近づくと、山々の草木が真赤に変わり、屋根の瓦がサザエのように渦を巻いているのに驚きました。浦上に着くと駅は無く、只目に止ったのは、小高い石段と、工場の鉄骨が無気味に曲りくねって聳えているだけでした。足もとにはコンクリートの砕けたのが、石ころの様に転がっている。その附近一帯には、手に手に小さな壺を持

ち、泣きながら肉親の骨を求めて探し廻っている。又背中にもウジ虫がわき、焼け爛れてアイゴー、アイゴーと泣いている男の人もいました。でも皆自分のことで手一杯らしく、変り果てた長崎の姿は、何に誓えようもなく、只々目を見張るばかりでした。

悪臭漂う中を、恭三の無事を祈りながら、ようやく大浦の下宿先に辿りつきました。これが元気で我が家を出て行った我が子かと思える程、変り果てた姿になっているのに、又驚きました。僅か四、五日の間に瘦せ衰えて、骨と皮ばかりになり、顔は紫色に変わり、口は腫れ上って、火ぶくれが口を塞いで居りました。眼の玉はまるでミナのツツのようになって、虫の息となって居りました。

私達が側に行つて、「もう大丈夫だ、どんな事をして助けるから、安心して氣をしっかりと持ちなさい」と云つても、苦しい息の中から、「爆弾にあつて、こんな姿になつてすみません」と謝りながら、「本当にお母さんか」と、冷たい両手で私の顔を目と云わず鼻と云わず、一生懸命にさすりながら涙を流していました。その時恭三の目ももう見えなくなっていることに気付きましたが、注射して貰いたくても医者はず、薬一服も吞ませることが出来なくて、そのまま夕方に息を引き取りました。こんなに書いてみると、その当時の子供の顔が目の前にチラチラして、涙で字が見えなくなりました。

旅の空で遺体を抱えてどうすることも出来ず、かと云つて火葬場もなく、家の壊れた木切れを拾つて、姿のままに火葬せねばなりません。今思つてもぞつとします。自分の子を姿のままに焼くということは、鬼のような母親にならねば出来ぬことです。でも生地獄の中だから、仕方がありませんでした。恭三が当時はめていた腕時計は、中味の時計がどこへか飛んで、バンドだけが残っていました。

下宿の方のお話では、その日登校して授業中にピカッと光り、すぐ机の下にかがみ込んだがそのまま氣を失い、生氣を取り戻した時はあたりが燃えていて、熱くてたまらなかつたので、隙間から這い出し、山へ駆け登つてみると、街は火の海と化し、あたりには死人が折り重なつていたそうです。また水道の鉄管が破れて、水が到る所から吹き出していたので、咽が乾くままにその水を飲み、一昼夜山道をさまよいなが

ら、やっとのことで大浦に帰つては来たものの、全身に紫色の斑点が出来、血便の下痢がひどくて動けなくなり、目も見えなくなつて死が待つていたということです。

可愛い我が子が、こんな死にかたをしたことを思い出す度に、腹立たしく、またこれ以上の悲しみはなく、当時は朝起きて竈に火をつけ、それが燃え出すと、火葬の時の子供の姿が幻となつて、火の中にチラチラと浮び、強く私の心を痛めたものです。今でも、いや私の生ある限り、この心の傷は消え去ることがないでしょう。この私の悲しみを二度と味わうことのないよう、祈つてやみません。日本でも、外国でも――。

最後に、恭三や恭三と一緒に亡くなられた諸先生方、お友達の方々の冥福を祈つて筆を擱きます。
(四五、一一、一三)

(四八一) 医専一年生 浜崎 菅男



遺族 長崎市古川町五一二

吉田 スガ(実母)

昭和二十年八月九日、あの怖い日の十日程前だつたと思ひます。菅男が長崎中学時代の友達が来るからと云つて、日見の親類の家へ行き、ヒワを三籠ほど自転車に積んで帰り、私が夕食のため作つていた代用食

の蒸パンを、座敷に持ち込んで、友達四、五人が輪になり、薄暗い電灯の下で蒸パンとヒワで良い気分になつたらしく、話はずみ、後には拍手をそらえた歌まで出て、夜の更けるのも忘れ、さも楽しげにしていたことが、極く最近の事のように、ありありと想ひ出されます。

八月九日の朝は十時頃だつたでしょうか、私が洗濯物を干している時、急に胸騒ぎがして、何か起つてゐるのではないかと厭な気がしましたが、それから間もなく、あ

の恐ろしい原爆でした。ところが夜になっても朝になっても、菅男が帰って来ないので、だんだん不安になり、探しに出かけようとしたが、その頃私は身重みおもの体でしたので皆に止められ、友人や家のものが二、三日探し廻りました。でもとうとう見つけることは出来ませんでした。それで近くにお住いの三重さんのお宅を訪ねましたところ、三重さん（医専一年、原爆死）は怪我をして無事に帰って居られましたので、様子をお聞きしたら、丁度解剖学の講義中で、殆んどの人がその場で下敷になりましたとか、菅男も多分そのまま焼け死んだのだろうと思います。

思えばあの頃御飯も充分に食べさせてやれず、ジャガイモ、カボチャ、蒸パンなど代用食をやっても不平一つ云わず、その日も弁当箱にはジャガイモの茹ゆでたのを入れて行きましたが、それさえ口にする暇がなく、定めてひもじい思いをして逝ったことでしょう。せめて自分で探しに行つて居りましたら、何か手懸りがつかめて居たのではなかったかと、毎年その日が来る度に、胸を締めつけられる思いが致します。

お元氣だった三重さんも、間もなく他界されました由、自分一人でなく、何百人の親御様も、同じ思いで居られるだろうと、今は諦めて居ります。

(四五、一〇、二八)

(四八三) 医専一年生 原 襄

遺族 佐賀県神埼郡神埼町田道ケ里

原 和三郎(父)
原 テイ(毎)

(前略) 原爆忌も目前に近づきましたが、この度は又「忘れな草」第四号御出版の御計画がございますので、先生のお元氣には驚き入ります。追憶顯彰の志無くしては出来ぬこと存じます。私共は何はなくとも、毎月十四日の命日に墓参だけは欠かさず続けて居りますが、近頃は一人静かに「忘れな草」を繰返して読み、命日のお経にもまさる何よりの手向けと存じ、誠にありがたく感謝申し上げます。

(四五、八、五)

(四八四) 医専一年生 日 高 康 隆

遺族 宮崎県日南市材木町四二二

日 高 アヤ(毎)

(前略) 私も此頃は何となく元氣がなく、老人病とでも申しましようか、あそここが痛くて歩行が不自由です。これも主人の死亡後、子供の教育などで相当に苦勞した上に、康隆を亡くして、心の痛手が強くこたえたものと思います。(後略)

(四八五) 医専一年生 久 松 鶴 市

遺族 長崎県西彼杵郡西海町七釜郷

久松 徳左衛門(兄)

(前略) 原爆記念日が又廻つて参ります。私は弟のほか妹も一人亡くしましたので、当日は必ず寺から御住職をよんで、佛前供養を致しております。

封入の手紙は、二十年八月八日に投函され、死後に配達されたもので、鶴市の今生の絶筆として、時々取出しては当時を偲んでおります。

弟鶴市の絶筆の手紙 (昭和二十年八月八日付)

盛夏の候となり、毎日よく照つて居ります。皆様にはお褒りありませんか。お伺い申し上げます。こちらは皆元氣で頑張つて居ります。

毎日の空襲で、そちらも余程忙しい事でしょう。当方もブルン、ブルンやつて来てうるさくて困りますが、至極元氣で居りますから御安心下さい。

八月一日の空襲の時は、皆様こちらの事を心配されたことでしょう。皆様が心配しているだろうと思つて、僕も大分心配しました。お蔭で人の被害はほんの少しでした。家は大分痛みましたが、人さえ助かれば致し方ありません。今から雨の時は少し困るかも知れませんが、天気の時は大丈夫です。今度初めて身近に弾丸を受け、今まで想像したより威力の小さいことに安心しました。

今度の戦訓を活かし、益々防空に邁進する時、此の度の空襲は却つて尊い戦訓とも

なると存じます。参考のために、爆弾攻撃及び機銃掃射の場合の注意事項を、述べてみたいと思います。

先ず一番大事なことは、横着してはいけません。待避を怠ることが一番危険です。敵機が来たら、速かに壕に這入って下さい。見物しよう等と思つたら大間違いです。兎に角敵機に姿を見せないことです。今から見物しなくても、度々見る機会はあるでしょうから、落着いて、而も速かに待避して下さい。

それから、これ以上に忘れてならないことは、体を低くすることです。壕に行く暇がない場合、或いは妙な音を聞いた場合は、出来る限り早く伏せて、耳や目をおさえて下さい。爆弾が落ちる時はザーという落下音がしますから、注意して下さい。

それから特に兄さん達のように出勤する人、或いは長子さん、祥ちゃん、明ちゃん達のように学校に行く人たち、外出する時は必ず頭巾を持って行って下さい。あれを被っていると安全率も高いし、持っていない時に較べて、非常に心強く感じます。この前は頭巾を持たないで待避しましたが、痛切にその必要を感じました。

その他、三角巾を二枚携行すること、負傷した場合は何よりも先に指の根本、親指の下の脈搏部、上腕の腋の少し下、鎖骨の上の窪みの内側、或いは大腿の内側等を止血することが大切です。さし当って、この度の経験を述べると以上の様なものです。

皆様は、田舎ではそんな必要がないと思うかも知れませんが、今後奴等は必ず都鄙を問わずに来ることでしょう。それから見ても横穴壕の完成は、本当に喜ぶべきことだと思います。

学校も七月一日から始まりました。国家の危急存亡を争う時、ただ医学関係だけが勉学を許されたことは、真の無上の光栄であります。正に国家の命によって、勉強しているのです。この事を肝に銘じて励んで居ります。

本土決戦を目前に控えて、僕達の意気は正に天を衝くばかりです。どうぞ御安心の上、御奮闘を祈ります。呉々もお体をお大事に――。

長崎市浜口町二七九 久松鶴市

(四九〇) 医専一年生 深江寛男

遺族 北九州市小倉区黒原南町四一

深江 厚(母)



せた姿でございます。

その後盲腸の手術を受けましてから健康を取り戻し、見違えるように丈夫になっておりました。その頃私共両親は、こうじろ神代(長崎県南高来郡神代町)の家に居りましたので、八月四日の土曜の夕方に帰って参り、むごたらしい負傷者の話や、病院内の話など、聞くに堪えない無残な話を元気に話して、日曜の夕方になると、兵隊と同じだからとか、学長先生の訓辞にもあったのだからと申して、止める母の言葉も聞かずに、長崎の学校へ勇みたつて帰って行きました。「行って参ります」と、表に出てまでふり返り、見かえつたそのにこやかな面影は、二十五年を経た今日でも、まぎまぎと險の裏に見ることが出来ます。その時着ていた制服は、その四日後の原爆の時に、真裸になっていた友達に着せてやったと云いながら、ズボンだけはいて、枯竹の杖をつき、行方を探し求めていた我が家に帰って参りました。

最後まで、周囲で看護する祖父、両親、長崎から疎開して来た叔母、いとこ従弟妹たちを見まわしましたことで、精神だけははつきりしていたことが判りましたが、口中一杯に小さい腫れものが出来て、口はきけず、水さえ通らない有様で、顔から体一面が黒人のように真黒になり、それでも家に帰って一週間は、苦しみながら生きておりました。お医者様も心配して、度々診て下さいましたが、こんな世界でも初めての原爆ですもの、運命と諦めるより外はありませんでした。

今日でも、色々養生されながら死んで行かれる方を耳にしますが、この長い年月の間を、どんなに苦しめたこととごいませう。かような話を聞きますと、原爆傷害の無残さは、いついつ迄も消えないものかと、今更ながら身ぶるいの出る思いでございませう。もう私には何とも云うべき言葉もございませう。(四五・一一・五)

(四九二) 医専一年生 藤田正義

遺族 東京都世田谷区経堂五―三三―三

安田火災社宅

藤田カキ(母)

(前略) 早いものでございまして、二十五周年も過ぎた今日でも、最近のような思いでございませう。去る八月九日の記念日には、私も朝からお供物を仏前に飾り、一時にはテレビにかじりついて、皆様と一緒に居る気持で黙祷を捧げ、涙ながらに過ぎました。

私も年をとりまして、その上病弱なので一人旅も出来ませう、グビロが丘の参拜も叶わず、皆様にもお目にかかれませう、誠に残念に思っております。(四五・九・九)

(四九七) 医専一年生 前川茂樹

遺族 佐賀県伊万里市二里町大里

前川文平(父)

山中良子(妹)

今夏の慰霊祭の日、お焼香をすませた父が、私達と一緒に帰りにかけた途中で、調先生にお会いし、御挨拶を述べた後で、「ではこれでお別れ致します」と申しましたので、来年はもう来られないのではないかと縁起を担ぎました。多分ここでと云う筈のところを、云い間違えたのでしょうか。

母が亡くなって三年が過ぎ、今年父は八十八才になりますが、出来たら来年も再来

年も、姉か私のどちらかが付添って、八月の暑いグビロが丘の上に案内し、沢山の御遺族方に混って兄を偲ばせてあげたい、と想っていた矢先だったので、殊更にそう感じたのでございませう。

この度「忘れな草」第四集が出版されますので、それには私が何か書くように、と父から申されましたので、当時小学二年生だった私の記憶に残っている兄のことを、書いてみたいと思ひます。

兄は原爆が落ちてから三日目の八月十二日に、有田駅まで一人で帰って来ましたが、有田からは学徒動員中の姉が付添い、伊万里駅からは知人のリヤカーに乗せられて、やっと我が家に辿り着くことが出来ました。

その時の容態は、外傷はかすり傷程度でしたが、背中が一面に紫色に黒ずんでいました。兄の話によると、講堂で被爆した時、机の下に潜ったそうですから、多分その下敷になった為だろうと思ひます。

帰って来た夜は、母の作った豆乳(当時は牛乳が入手困難でした)を美味しそうに沢山飲み、被爆当時やその後の模様を、いろいろ話してくれました。

一応落ちつきましたので、私共が茶の間でおそい夕食をとっていましたら、兄が母を呼んで、「淋しいから僕を一人にしないで」と申しましたので、交代で食事をすませたことを憶えております。

その頃兄はひどい下痢をしておりました。何でも咽が乾くので田圃の水を飲んだそう、そのためではないかと父は云っております。また体中に蕁麻疹が出来て、痒い痒いと云いながら、私にも掻いてくれとせがみますので、母と一緒に掻いてやりましたが、あとで母にも私にも、頬べたに二つ三つ蕁麻疹のようなものが出来、蕁麻疹はうつる訳はないのに、と不思議に思いました。その後兄の蕁麻疹は大きな水泡に変わり、紫に色ずいたように憶えています。

十七日の夜中頃だったかと思ひますが、父が胸に注射針を刺していると、母が、「もうお父さん、カンフルはやめて下さい。苦しめるだけかも知れませうよ」と申しましたら、兄は目で親戚や知人に、父や母を頼むという仕草をして、「ありがとう」

と目で感謝を現わした後、脱脂綿にした水を美味しそうに口に含んで、そのまま息絶えたそうです。舌も爛れていた為、不完全な発音で、母と一緒に唱えていた念仏の音が忘れられない、と姉は云っております。どんなに死にたくなかったことか!!

兄は以前に何度も空襲に遭い、経験があるから大丈夫と自慢していたのですが、原爆にやられるなど、思いもかけなかったことでしょう。

被爆後十二日までは、長与の下宿で下痢や熱に一人で苦しみ、どんなに心細い思いをしたことかと、胸が痛みます。こちらでは、田舎の事とて詳しい事情がわからず、何か新型爆弾が落ちたらしいということだけで、兎に角行ってみようと、切符の手配している中に、十二日を迎えました。

いろいろの、又大なり小なりの犠牲を払った多くの人達とその家族は、そういう運命を持っていたのでしょうけれど、こんな悲しい歴史は二度と繰返すべきでない、大人も、子供も、無傷の人達は特に、心に銘記しなければならないと思います。又どこかの国の戦争で、国民経済が潤うというように、今後なくなるように念願致します。(四五・一一・三)

(五〇五) 医専一年生 丸 田 修 造



遺族 東京都小金井市貫井南町

四一八〇

丸 田 千代吉(父)

追 憶

久遠の恨み、昭和二十年八月九日、私共一家は当時郷里の武雄市に住んで居りました。昨日は佐世保、今日は大村と爆撃の情報が頻りに伝わって、人心恟々、湯の町武雄もいつ空襲されるかと、毎日緊張の連続でありました。

その日、九日午前十一時半頃、大村市にある航空隊基地が空襲を受けて、薄黒い煙

が雲間に浮き昇っていると、人から人へ、口から口へと喧伝されたので、遙か南の方を山越しに望み見たら、そうだと想われる煙が見えました。同じ南の方角に当る長崎が急に気にかかり、夕方になると長崎が大爆撃を受けたという人々の噂が飛んで、その夜は皆碌々床につくことも出来ませんでした。

翌十日、長崎本線白石駅の近くに、余儀ない用事で出かけたので、用事を匆々に済ませ、午後一時頃駅に行つて切符を求めましたところ、切符はすぐ売ってくれましたが、列車は二時間ほど遅れる見込みとのこと、詮方なく待つことにしましたが、二時間待つても三時間待つても列車は来ず、その間に長崎よりの列車が二、三通過するのを見ると、頭や手に包帯した人が多く乗っているので、一刻も早く行つて子供の安否が知りたく、焦りに焦つた四時間後、漸く来た列車に跳び乗つて、長崎に急行しました。

汽車は午後九時頃長与につきましたが、此処から先は行けぬというので、乗客は皆下車して歩き出しました。行人声なく、進むにつれて在るべき笠の家は見えず、路傍には焼け残つた倒壊家屋の残骸、特に浦上あたりでは、嘔気を催す異様な悪臭、工場の鉄骨は飴のように捻じれ、想像もつかない爆弾の威力に、驚異の目を見張りながら、焼け落ちた家々の間を、瓦礫に埋もれた道を辿つて、伴が下宿していた諏訪神社下まで行きました。その辺は山腹で、原爆の直撃を免がれたが、戸、障子、窓などは微塵に吹き飛ばされ、跡片付もまだ出来ていない有様でした。

何よりも先ず伴の安否を尋ねましたら、昨日学校に行つたまま帰らぬとのこと、今のところ行方不明で、或いは爆死されたのではないかとの話を聞き、既に覚悟はしていたものの、胸が塞がって落涙千行、夜も深更まで色々と原爆の概況等を伺い、其処に一泊することにして疲れた体を横たえましたが、眼は冴えて眠られず、あれこれと遭難の状況を想像しながら、一夜を明かしました。

翌朝は食事もそこに医大を訪れ、受付へ行きますと大勢の遭難者の家族の方々も来られ、そこで一年生が解剖学の授業中に被爆したことを教えられて、講堂の焼跡まで案内して頂きました。尚、医大では死亡者の整理もまだついていない有様で、あ

たりに転がっている無残な屍骸も、誰のものやら一切判らず、被爆後屋外に脱出したものもあるが、その氏名もまだ判明していないとのこと、色々詳しい説明がありました。私の仲は去る三月、中学の学徒動員中に有田の香蘭社陶器工場で、右手首に切断寸前の負傷を受け、右手が自由に使えない不憫な末子であったため、生存の望みも薄く、私も半ば諦めかけていた処に、郷里からお医者が来て、伊良林小学校に負傷学生が収容されていることを教えて頂いたので、若し万一ということも考え、焼くような夏の陽射しに照りつけられながら、原爆の効果を確認するかのように飛来する敵機を睨みつつ、その学校へ行ってみました。

そこでは数ある教室が、何れも死線を彷徨する被爆者の群で埋まり、呻く声、這いまわる人、精根尽きてただ肩や口でかすかに呼吸する重傷者、アングロ、サクソンの悪魔に囚われた悲惨な人達が、足の踏み場もないほど収容されて居りました。

言語に絶する阿鼻叫喚、焦熱地獄の現実を見た私は、二十五年後の今日も尚忘れ得ぬ無残な有様に、唯呆然として暫し佇む外はありませんでした。

その時、十二、三才になる、破れた浴衣を着た女の子が、私に、「小父さん、便所に行きたい、助けて——」と、手を差しよべるので、手を牽いたが歩けない、抱えるようにして外庭に連れ出して用を済ませましたが、その便が血便らしく、赤褐色であったのを覚えています。欲しがる水を飲ませて元の場所に寝かせましたが、余程嬉しかったとみえ、合掌して私を見る目に光るものがありました。これが末期の水であるかも知れない、よい功德を積んだ、亡き愛児の追善供養にもなったであろう、と私は思わず涙ぐみました。

午后四時頃下宿の家に帰ったところ、近くに医専一年生が生存して帰っていると聞き、会ってみるとその学生は、「自分は教室の戸口近くにいたので、壊れた屋根の桁の隙間から抜け出ることが出来たが、脱出したものは十人ばかりで、窓近くにいた脩造君は、脱出出来なかったのではないかと思います」と、苦しい息の中から、さも気の毒そうに話してくれました。教室は間まなく猛火に包まれたそうですから、私は聞き得た脩造の終焉の有様を思い浮べつつ、厚くお礼を述べて辞去致しました。あとで

聞けば、その学生も四、五日後に他界されたとか——。

家の者がさぞ待っているだろうと帰途につき、夜十一時頃に家に着きましたが、家族の者は予期していたのか声もなく、僅かに「駄目でしたね」と云って、子供の写真を仏壇に祀り、皆で拝みつつ長崎での一部始終を話し、共に嘆き、共に悲しんだのであります。

十四日に姉娘を伴って再び医大を訪ね、集めてあった骨袋の中から一片の骨を貰い受け、亡き子供の遺骨として持ち帰り、仲の冥福を祈ってやりました。

二十日には心ばかりの葬儀を行い、夢の間にあの可愛かった仲間も、「大鑑院脩仙義志居士、俗名丸田脩造、行年十八才、昭和二十年八月九日、長崎医大医学専門部ニ於テ原爆死」と書かれた白木の位牌となりました。

当時三人の男の兄が居りましたが、長男は昭和十五年に相模原の陸軍士官学校を卒業、北支に出征して中支、南支、仏印、タイと転戦し、部隊長として活躍中とのこと、負傷して帰還した郷里の人から聞いただけで消息はなく、次男は学徒召集で飛行隊に配属され、満洲に居るとか、これ又消息不明で、残る三男の脩造が原爆死、洵に骨の疼く思いがしたのであります。心の痛手は頭髮に通ずるものか、二、三カ月も経たない間に、すっかり白くなりました。

三十七年には妻にも先立たれましたので、孤独に堪えず、遠く故郷を離れて茲に八年、東都郊外小金井の里に、余生を長子に委ね、総ての世界を擲って蟄居して居ります。在郷中は毎年八月、学校の慰霊塔に頼りて居りましたが、上京してからは三回帰省して、その慰霊塔に香華を手向けたぐらいで、心に無沙汰はなけれども、八十の老いの坂は思うに任せず、遙かに富岳の彼方西陲を望んで往時を追憶、静かに亡き愛児を偲び、その冥福を祈って居ります。

(五〇九) 医専一年生 三宅 紀男

遺族 東京都練馬区南大泉町二一九

三宅 儀七郎(父)

(前略) 遺族の待遇改善運動のため、懇々御上京、要路の方々に陳情下さったこと、先生方の不断の御努力に対しましては、只々感謝の外はありません。

折悪しく小生病状悪化して、十月十五日から再び表記の病院(杉並区河北病院)に入院して治療を受けていますが、老令のため捗々しくありません、気長に養生することに致しています。字を書くことが苦しくて、甚だ簡単で意を尽しません、不悪お許し下さい。

(四五、一一、四)

【調 附記】 三宅儀七郎様は、このハガキを書かれてから二十六日後の十一月三十日に御逝去の由、御令息敏郎様から通知がありました。(因みに行年満七十五才)

東京都練馬区南大泉町二一九 三宅 敏郎(兄)

ご鄭重なお悔みのお手紙、有難く拝見致しました。

尊台はじめ皆様のご努力により、一時金を頂いたり、また靖国神社に祭っていただき、私共遺族といたしましては、洵にありがたく存じております。

皆様方の念願である遺族年金の実現を見ないまま、父はこの世を去りましたが、皆様のご尽力を草葉の蔭から、御礼申し上げていることと思えます。

弟紀男のお骨は、この春父が九州から持って帰り、当地に準備していたお墓に納めました。近く父の遺骨も同じ墓に納めることとなります。同じ墓の中で、亡き父と弟が、「長崎」のことを語り合うことだろうと思えます。

お申越しの遺族代表者のことは承知いたしました。何卒よろしくお願いいたします。

(四五、一二、一三)

(五一三) 医専一年生 光 永 応 美

遺族 東京都東村山市栄町一―三三―二九

光 永 ス キ(母)

(前略) 「忘れな草」を読ませて頂き、先生のお子様も応美と同級であられたことを知りました。あちら様こちら様を思い出しまして、長崎の当時の事を、家族中で涙ながら語り合いました。



私も家を焼かれ、長男は爆死、三男も爆死して、原爆とは何と恐ろしいものかと、寸時も忘れることが出来ません。

今は少しの土地を求めて、ささやかながら家が出来ました。私は庭のまわりに花や野菜を作り、九日には毎年毎月、花をあげて家の中でお参りさせて頂いております。

靖国神社にも参詣させて頂きました。お見舞金も頂きました。又原爆手帳も「特別」となりましたので診察して頂きましたら、「血圧に気をつけるように」と注意して頂きました。

今日は十一月九日です。応美の写真を同封しましたから、よろしくお願い致します。どうかこれからも平和の日々が続きますよう、お祈り致します。

(四五、一一、九)

(五一四) 医専一年生 峯

寛

遺族 長崎県北松浦郡宇久島平

峯 ヨシ(母)

宮崎 輝子(姉)

あの忌わしい原爆から二十五年の歳月が流れましたのに、当時の悲しい想いはうすれることもなく、つい此の頃の出来事のように思われます。

思えば二十年六月二十八日、七月一日の入学式を前に、母と私は長崎へ出発の用意を整えて、寛の来るのを待っていました。ところがその時になって、「今日は行くのを止める」といった寛の寂しげな表情が、今なお私の脳裏に焼きついております。虫の知らせとでもいうのか、最後の我が家に一日でも長く居たかったのでございましょう。

翌日、出征兵士の乗って行く船に便乗を頼み、長崎へ発って行きました。十人ばかり

りの兵士は、死を覚悟して、故郷の山河にも別れを告げて征ったでありましょうに、間もなく皆さんは無事に帰られ、唯一人寛だけが帰らぬ人にならうとは、何という運命の皮肉さでしょう。

八月九日に原爆が投下され、寛が必死に死と戦っていることを知る由もない我が家では、祖母が頻りに鴉の鳴声を気にしておりました。そして十五日、運命の詔勅によって、長崎に落された新型爆弾とはどんなものか、と不安になって来ましたが、「まさか、まさか」と、打消しておりました。

十六日から十七日にかけて、長崎で負傷した人がぼつぼつ帰郷し始めました。「長崎は全滅だ」、「浦上方面は中心地」、「誰も生きたものはいない」等々。家族一同、気も転倒せんばかりの我が家では、唯々無事に居てくれと祈りつつ、十七日の夜中に長崎へ向いました。

地獄さながらの長崎へ着き、大学の焼跡に貼り出された生存者名の中に、寛の名を見つけた時の嬉しさ、とび立つ思いで片淵町の下宿を訪ねた時は、既に同宿の学部一年の大坪様に、佐賀へ連れて行かれた後でした。寛は大学から山を越え、それこそ九死に一生を得て下宿に辿り着いていたのです。

元気でいなくても、寛に逢えることと信じきって、訪れた佐賀で待っていたものは、便箋一枚に鉛筆でたどたどしく書かれた両親宛の遺書と、小さな壺に入った白骨だったのです。被爆した時の右手の甲の傷は、佐賀の県立病院で手当を受けている中に、大きくなっていたそうです。助かった、命拾いした、と思ったものでも、原爆は死へ誘いこむのです。刻一刻と悪くなって行くことを、家に知らせることも出来ず、お友達の家とは云え、見ず知らずの方々に見て頂いてさぞ苦しかったであろう。して貰いたいこともあったであろうに、と思うと、涙が止めどなく涙れます。

両親の愛と希望を一身に受け、行く末を楽しんでいた寛は、むごい戦争によって國の犠牲になって了ったのです。運命とは云え、この憤りをどこへ持って行くこともならず、父は淋しきの中に、三十五年に亡くなりました。せめて生存中に、この「忘れな草」を見ることが出来ていたら、皆様方のこともよく判って、どんなにか慰めら

れたことかと、残念に思っております。

今私の長男が、亡き弟と同年になっております。どこか似かよったその面差しに、私は弟の姿を求めているのでございますが、当時の学生と現在の学生との違い様に、今更ながら二十五年の歲月の流れを思うのでございます。(四五・八・二四)

(五一六) 医専一年生 牟田 五十夫

遺族 埼玉県所沢市大字和ヶ原

二三八舟橋方

牟田のぶ(母)



(前略) 亡き五十夫の思い出は沢山でございますが、何よりも兄弟四人の中で、一番意志強固な子で御座いました。長男は戦死し、次男は学徒動員中に病死しまして、五十夫は三男で御座いました。生れた時は普通より二キロも多い体重でしたが、余中病のために成長が遅れ、心配しておりましたところ、種々手当の結果めきめきと丈夫になり、病気もすっかり全快致しました。病気にかかったこともあって、医学の道を志し、御校へ入学させて頂いた次第でございます。

戦時中は大分市に居りましたので、敵機の襲来が烈しく、私達は毎日毎夜防空壕入りをして居りましたが、五十夫は一人縁側に坐って、敵のB29を数えておりました。その後佐世保へ移り、六月二十九日に大空襲を受けましたが、その時も五十夫は蚊帳から飛び出して、空襲の様子を眺めておりました。

二十年七月、入学のため家を出る時、縁側に寝転んで、もうこの家には僕は帰らないと祖母に云ったそうです。やっと父にせき立てられて家を出ましたが、曲り角に立って手を挙げ、いくら追い立てても行こうとせず、心の奥深く別れを告げていたことと思えます。

あれから早や二十五年の歲月となりました。主人が亡くなってからは、寄る年波に

一人暮しと、娘の家にお世話になっておりましたが、四男が川崎市へ転勤になりましたので、目下表記の所に転居致しております。

(後略) (四五・一一・一)

(五一八) 医専一年生 森 敏之

遺族 大阪府摂津市正雀四丁目二一三七

森 えい(母)

(前略) 永らくお便りも差上げずに失礼致して居ります。実は主人(又之助)が今年一月七日に急死致しましたので、郷里熊本県天草の方へ遺骨納めに参りまして、留守して居りましたので延引致し、誠に失礼致しました。

亡き主人も今年六十九才、あと二カ月で七十才になる予定でしたが、常に長男敏之の事のみ案じ暮して居りました。私も六十五才の老いの身で御座いますので、近くのシオノギ製薬会社へ働きに出て、細々と暮している次第でございます。

亡き長男の死は、一生胸中から消え去る事の出来ない、親としては悲愴の日々で御座います。恐らく先生方も同じ思いだと信じます。若し援護法適用の目的が達せられましたら、亡き子も満足して喜ぶことで御座いましょう。(後略) (四五・一〇・三)

(五二一) 医専一年生 山口 明次

遺族 長崎市柳谷町二一〇

山口 重夫(兄)



弟の思い出

あれから二十五年余。弟は昭和二十年八月二十八日、自宅(当時は長崎市中川町カールス横に疎開中)で、両親と私に見守られて死亡しました。当時の思い出を二、三

申述べてみたいと思います。

今でも私の脳裏にハッキリ残っております事は、弟は死の直前まで自分を意識し、

最後は母校長崎中学の校歌を口ずさみながら、私共を見廻して、「お世話になりました」と挨拶まで述べて、ホントに綺麗に、そして若い青年として、死んで行ったことでもあります。

あれほど冷静な死に方をしただけに、弟の不憫さが偲ばれてなりません。

被爆当日は、夕方六時頃でしたでしょうか、弱った状態で帰宅して参りました。その時の話では、友人大勢と受講中に被爆し、天井が落ちかかる一瞬、体を机の下にかわし、片方から燃える炎を横目で見ながら、天井穴から屋外に飛び出し、無我夢中に金比羅山を越えて山を逃げ廻った、と申しております。

一緒に逃げていた二人の友は次々に斃れ、弟も諏訪神社のあたりで倒れていたところを、幸運にも親切な通行人に助けられ、その人の自転車に乗せられて帰って来ました。その時の弟の報告で、私共は浦上地区が全滅した事を、詳しく知った次第です。

弟達が実際に医専に入学したのは、二十年七月一日からで、それまでは入学を許可されながら、勤労動員学徒として三菱の工場で働いておりました。だから医専の新年生だった期間は、僅か一カ月余りで、その間に使った何か医学としての思い出の品はないものかと、常々心懸けていましたところ、最近次の遺品を発見致しました。

(イ) 入学当時に購入したドイツ語辞典

(ロ) 警察署長の発行した死亡検認証明書

(ハ) 弟のノート一冊(生理学―清原教授)

特に清原先生の生理学講義ノートを見ますと、まだ中学生の匂いがプンプンするよくな、鉛筆の走り書きで、生理学の定義から始まっております。今日までの二十五年の断層を飛び越えて、当時の模様が追憶され、弟が偲ばれる次第です。

私の兄の山口長次(当時三十四才)は、同じく長崎医大を卒業し、当時は確か影浦内科医局に勤務致しておりましたが、この兄も城山町で夫婦ともに被爆し、一家全員死亡しております。この兄の遺骨を、父と共に現地で拾いまして、中川町の自宅へ持ち帰ったのでありますが、新米医学生生の弟は、大先輩である兄の遺骨を手にとりながら、しげしげと眺め入って、何かこの兄と対話でもしているかのような、あの当時の

光景がまぎまぎと思ひ出されます。それから一週間後に、兄の遺骨を手にとつて眺めた弟も、遂に後を追うように逝つてしまいました。

「医者であつた兄、その卵であつた弟」。私はこの医学徒であつた二人の兄弟を、「原爆に死す」と墓所に刻名して、その冥福を祈つております。

医学生としては、僅か一カ月余りしか命のなかつた弟に対して、今日このように関係の先生や諸先輩を初め、遺族会の方々から並々ならぬ慰霊のことは頂戴し、洵に恐縮に存じております。且つ又今日まで、文部省初め対外的にも、この原爆死亡学生のため、その社会的な認識を求めつづけて参られました御努力に対し、私はこの紙面をかりて厚く御礼申上げたいと存じます。

(四五・一〇・二六)

(五二二) 医専一年生 山崎 邦雄

遺族 福岡市堤八一五

山崎 みち子(姉)

- きみのため国のためぞと思ひける あたら若さを唯散らしたり
- この平和かげに数多の犠牲あり 尊き命のきづきしとりで
- 君や師や親のおしえをひたすらに 学びて散りし弟あわれ
- 君はいまいずくの国にておわすらん みたまよ永久とほにねむりたまえ
- 乘みても柿を見てさえ思うらん いとしあの子の好みしなれば

若き弟のために

ああ弟よ 若き命ははかなくて

楽しき青春はるも来ぬままに ただ祖国の為にとて

いのち 生命の炎あききえるまで けなげに生きた十九年

今は静かにふるさとの たらちねのひざにて永久とこしえに

ねむりているらん安らかに

遠き国へ旅立てる日

フリージヤの白さをめでし 水仙のきよさを好みし君なれば

花にうもれてにつこりと えみし口もと今もなお

きのうの如くまぶたに浮ぶ (入棺の日の思ひ出)

(五二七) 医専一年生 山之内 正信

遺族 宮崎県北諸県郡高城町一〇五

山之内 カヲ(母)

(前略) 私こと昨年末より座骨神経痛が出まして、何となく自由がきまきませず、八月九日の二十五周年忌の御案内を戴きながら、歩行困難のため、止むなく失礼致しました。誠に残念至極に存じて居ります。定めて正信も残念がつていることと思ひ、遠い南の空から御供えを上げさして頂き、来年こそはと楽しみにいたして居ります。亡き主人も是非とも御供養に参りたいと、いつも申して居りました故、何をさておいても考えて居りましたのに、ほんとうに残念に存じます。

この春は「忘れな草」第三号を頂戴いたし、手許を放さず、幾度となく拝見いたしながら、今日こそは、明日こそはで、遂々今日までお礼の手紙も差上げませぬ、我まをいたしまして、今更ながら何ともお詫びの申上げ様もございません。あしからずお許し下さいませ。

(四五、九、一〇)

(五三二) 医専一年生 米 精一

遺族 長崎県南松浦郡富江町広町

米 トメ(母)

(前略) 私もお蔭様で去る八月二十日に七十才となり、老人の仲間入りする年となりました。しかし未だまだ元気で、福祉の仕事に働かせて頂いておりますから、どうか御安心下さいませ。(後略)

(四五、九、一)



遺族 長崎市諏訪町六―二七

渡 辺 伊 代 (母)

あの頃の事を振りかえりますと、私は二十年二月に長女(病死)、五月に長男(戦死)、八月に次男(原爆死)と、半年間に三人の子供を次々に亡くし、呆然そのものの毎日でございました。

この世の中に、私ほど不幸なものはないように思われ、朝夕は殊の外身に沁みて悲哀が感じられて、一人で忍び泣きをし、放心した連日でございました。

陽一は清水商船と長大医専を受験して、双方とも合格し、本人は清水商船の方を強く希望致しましたが、主人が出征中で留守でもありましたし、長崎だったらと、私の願いを聞き入れてくれまして、長大の医専の方へ進みました。あの時なぜ本人の希望通りに、商船に入學させなかつたかと、今更のように残念で、私の責任が強く感じられます。相済まぬ思いにかられてなりません。

親の私から申すのも変ですが、陽一は非常な努力家で勤勉、また几帳面で、机の引出しなどもキッチンと整頓し、弟や妹にいじられるのを嫌がる、そんな良い面ばかりが次々に思い浮べられる日々でございます。

原爆直後、流れ出る血を拭いながら、廢墟となった校舎の土煙の中から這い出し、目が血で塞がるのをこらえ、やつのことで水を求めて天主堂の川まで辿りつき、水を掬って飲もうとすると、水は赤くて周囲には死体が一ぱい。仕方なく家へ帰ろうと歩きかけると、同級生の森尾さんがふらふら歩いているので、声をかけたがとても弱っていて、今にも倒れそうだったそうです。それで森尾さんを助けながら、夜の十時頃帰って参りました。その後郷里の五島に連れて帰りましたが、十日間高熱に悩みながら、遂に十八年の生涯を終りました。

現在では、この子の一生はこれだけだったのだと、我身に云い聞かせていますが、「生きていたらなあ、生きてほしかったなあ」と、回想する毎日でございます。

(四五、一一、五)

四、付属薬専生徒遺族の手記

(五四〇) 薬専三年生 池 田 敏 明

遺族 佐世保市広田町五六―二

池 田 寿 人 (弟)



(前略) 「忘れな草」の原稿、及び亡兄敏明の写真についてのお葉書を頂きながら、返事も差上げず、大変失礼致しました。何分にも先月二日次男が生れましたが、家内が急性腎臓炎になり、未だに入院

している有様で、この亭主オロオロ取りみだしてしまいました。写真は全部原爆で焼いて一枚もございません。同級生と一緒に写した写真でもございましたら、よろしくお願い致します。

私の家族では、次のものが原爆で死亡致しました。

- 池田 多吉(父) 浜口町の三菱青年学校で被爆死
- 池田 トシ(母) 山里町二九五番地の自宅で爆死
- 池田 敏明(兄) 長崎医大薬専の防空壕前で爆死
- 池田 保邦(弟) 瓊浦中学の学徒動員中、三菱製鋼所で爆死
- 清光 正宜(義兄) 浜口町の三菱青年学校で爆死

私(寿人)は国家総員法により、学徒報国隊として三菱兵器製作所で働いていましたが、戦局の風雲急を告げると、急遽造船所に転配され、そこで被爆しました。数時

間後にあの凄じい地獄絵図さながらの中を、焰や黒煙、死体、焼け爛れた人々の間を縫って、自宅附近に辿り着いたのが、午後七時頃だったと思います。

然しその附近はまだ余燼があつて、足をとどめることが出来ず、断念して浦上天主堂上の防空壕で一夜を明しました。この時地上からの熱氣と真夏の酷暑とで、異常な渴を覚え、天主堂前の小川で水を飲もうとしましたが、水辺には、半ば顔を水中に埋めている死体のごろごろとして、凄惨目を覆うばかり。それでも渴の苦しきには勝てず、汚水をがぶがぶと飲みこみました。今考えても思わず慄然とします。

夜中天主堂の巨大な壁が崩壊する度に、火燵が天をこがします。この時、星が綺麗に中天にまたたいていたことを憶い出します。壕内は断末魔の呻きと静寂が交錯し、異常な臭気が満ちみちていました。

翌朝壕を出て自宅跡に行つて、母の黒ずんだ両手ほどの遺体を発見、この時父が近くの壕内にいることを知らせてくれましたので、行つてみると、重傷で浜口町の三菱青年学校から辿りついたとのこと、やつとこのことで道ノ尾駅まで運び、日も暮れて避難列車に乗り込み、北高小江の親戚の家についたのは真夜中でした。その後看護に耐えぬ程の苦しみを続け、十六日にとうとう絶命しました。兄敏明の死は三日目に之を確認し、鴉の群がる地獄の原野で、荼毘に付しました。

その後私は心身共に疲れ、時折り出血性の下痢を見ることもあり、二十一年の九月には、肋膜炎を併発して佐世保市民病院に入院、二十四年に嬉野国立病院に転じ、貧と病苦に悩まされつつ、聴力等も冒されて、再三死のピンチを逃れながら、闘病十八年余。三十五年には胸部手術が一応成功をおさめて、先ず先ず小康を得、四十一年には目出度く結婚にゴールインして、今では二児の父親となり、静かに生を見つめつつ、子供の成長と世の平和を希い、時々死んだ兄の年を数えてみたりします。

(四六、九、三〇)

【調 附記】 想い起せば昭和二十年四月十日頃、私共は当時爆心地から三〇〇米とは離れていない、山里町二九五番地に住んでいたが、老母や妻子のために、滑石町に疎開することが決り、荷作りを済ませてトラックの来るのを待っていた。

丁度その時敏明君の父上多吉様がお出でになり、強制疎開にあつたので後を譲つてくれないか、との事であつた。「トラックさえ来れば直ぐにでも移転するから、どうぞ」と申上げると、四方八方回転して下さい、四月十七日に二台のトラックで荷物を運び、無事に滑石町へ疎開することが出来た。

その跡に池田様御一家が移られた筈であるが、噂に聞けば一家全滅とのこと、私はただ呆然として合掌し、御一同の御冥福をお祈り申上げた次第である。

その後寿人氏お一人が生残されたことが判りましたが、氏のお話によれば、被爆後十数年間を病院で送られ、生死の間を彷徨さまよわれたとのこと、洵に痛ましい極みで、甚だ申訳ないような気さえする。

(五四一) 葉専三年生 石田 憲 敬



遺族 熊本市黒髪町立田六二一

石田 保利(父)

(前略) 本年八月九日の慰霊祭には、小生も家族を従えてケピロが丘に参拝致しましたが、日帰りの関係で、御挨拶もせず失礼致しました。

「忘れな草」第四号に掲載用の憲敬の写真と同封しましたので、よろしくお願い致します。憲敬が母によこした書翰は、私が忘れ形見として秘蔵してきましたので、私の生ある限り手放すことの出来ないものです。御用済みの上は是非御返送下さいませ。お願い致します。

憲敬が母に宛てた書簡

その一 (昭和二十年三月、彼岸の中日付け)

昨日も一昨日も、毎日々々の空襲・警戒警報にて、一日も安らかに寝ることの許されぬ世の中になりました。但し今までが、余りにものんびりし過ぎて居たのです。戦

争というものは、これが普通かも知れません。

昨日まで僕と一緒に働いて下さった優秀な準職員や工員が、共に空襲警報下に召集令状を受取られ、愈々身近かに血戦が感ぜられ、正に内地も戦場と化し、我々の責任は重大、誓って職場死守を遂行せねばならぬと思えます。

一昨日でしたか、長崎・佐世保に於ても空襲警報が発令になったようですが、被害は如何な模様でしたか。こちらも現在では、宇佐・築城など二、三の航空基地、練習場、及び疎開せる軍需工場等が多数ある故、安心しては生活出来ません。

二、三日前の新聞に、一年間授業停止行と出ていました。政府のこの断は、むしろ運きに失する感さえある次第です。頭の切り替えの出来ない政府の役人は、現在の若い者の気持を知らないのです。

今度五月中旬か下旬に、陸軍衛生部委託生の試験があるので、殆んど大部分が受験致します。僕も受験しようかと思つて居ります。学校はいつも切近くなって通知する故、家と相談する間がない位です。

春と云えば入学試験を必ず思い出しますが、学校より遠く離れて、全然入学試験のあの殺気立った雰囲気を見ないので、今年の春は何だかずると来たよう、物足りなさを感じます。ところで松本さん、星野さんはどこに合格されましたか。町内会長の方ちゃんは？——色々長崎の変つた事、珍らしい事がありましたら、ニュースをお知らせ下さい。

授業停止で、九月まで勤労働員か、六月まで動員で直ちに出征か、ですね。

家の者皆元気にお働き下さい。今日は彼岸の中日で会社は休日、朝からゆつくりして、今手紙を書いて居ります。今から中津の町に補給、映画に行こうと思つています。今友達と一緒にに行こうと呼びに来ましたから、今日はこれにて失礼致します。

福岡県築上郡吉富町、武田化成皇后石寮 石田 憲敬

長崎市古河町一六 石田 多美様

その二 (昭和二十年七月中旬某日付)

永らく御無沙汰致し、誠に申訳御座いません。その後如何お暮しですか。私も益々

元気に、必勝生産に従事致し居ります。

毎日々々の空襲で、家人の皆様お疲れの事と思えます。

此処中津の町は、近所に多くの飛行場、飛行機工場があり、又北九州への通路として、空襲警報が入ると必ず上空を通過致します故、本当に癪にさわりませんが、今のところ我々の工場には、何等被害はありません。長崎の方は如何なる模様ですか。

敵は沖繩上陸を敢行し、正に時局は危機に切迫しましたね。この調子では近い内に我々も卒業を待たずして、出征になるやもはかり知れず、一同も早く軍人になるのが増しかも知れません。

今度海軍見習尉官に友人二名が合格し、十五日に入校のため動員解除となり、又病氣や傷などで、現在では十五名で頑張っています。又会社の工員の人も次々に応召され、僕は一番大切な部門で、昔の熟練工の得量以上の得量をあげて居ります。

現在マラリヤ剤のカメレードは、日本で当工場だけが作つて居ります故、日本で一人の技術者であるとの自覚と自惚を持ち、頑張つて居ります。

万葉の中にこの一節あり、

○ 大君の御門の守り 吾を措きて亦人はあらじ

徴兵年齢の繰り下げ、丙種合格の多数の入営で、現在は皆が軍人であります。我々もお召しになる日は、さして遠い事ではないと思ひます故、軍刀を用意置き願ひます。聞くところによると、戸町の刀鍛冶は有名とのこと、新刀の無銘でもよいのがある故、どうかお頼み致します。

ともすれば、ゆるみ勝ちなる若人の気持をひきしめてくれるものは、家よりの激励の手紙です。どうか手紙はかかさずお頼み致します。それから陸軍委託生、簡閲点呼など、通知解り次第、御通知願ひます。

金が不足致し居ります故、御送金願ひます。右薬指が化濃致し、昨日医者からツメを取つてもらいました故、乱筆にて失礼致しました。では身体に注意されんことを——。

(五四三) 葉専三年生 仰木英雄

遺族 福岡県中間市烏森

仰木 マスエ(母)

北九州市八幡区本城

綾部 富美江(妹)



年前の出来事を想像いたし、悲喜ともごもの心持でした。皆様のお骨折りにより、毎年盛大な慰霊祭を施行して頂き、有難うございます。

「忘れな草」の手記を早く提出しなければと思いながら、遅くなって申し訳ございません。実は兄の遺体捜索より遺骨拾集まで一人でやりました父が、五年前に他界いたしましたので、うすうす話は聞いて居りましたが、詳しいことが判りませず、又下宿先の方々も原爆に遭われて、一家全員亡くなられ、その消息も判明せず、教科書一つも遺品は帰って来ませんでした。

兄は長男でおとなしい人でした。私が当時安川電機に勤めて居りましたので、卒業後は安川病院に就職する、とよく云って、期待しておりました。

武田化成から動員解除となり、最後の仕上げに学校に帰った矢先の出来事でした。又十月には、幹部候補生として仙台に行くことに決定、喜んで帰って来ました。

原爆の当日は、下宿先が疎開されるので、下宿探しに行くこと云って、一応学校に顔を出して行ったらしく、実際に被爆したのは、城山附近だったそうです。

被爆直後から、地獄への戦いが始まったようで、焼けたかれた体、しかも炎熱の暑さ、想像しただけでも、さぞ苦しかった事だろうと思います。

兄は城山で被爆してから、道ノ尾の同級生渡辺さんの家へ行ったらしいのですが、何処をどうして行ったのか、渡辺さんの家の前にじっと立っていたのは、翌十日の朝

だったそうです。近所の人が見つけ、渡辺さんが帰って来られたと思われたそうですが、それが実は兄で、渡辺さんは葉専の防空壕前で爆死されたことが、後になって判りました。

その時の兄の容姿は、本当に見るも哀れで、素足でふるえていたとの事です。もはや氣力がなかったのでしょうか。それから兄は渡辺さんのお宅で手厚く看護して頂き、トマトを戴いたそうですが、唇が爛れて固い皮を噛み切ることが出来ず、とうとう食べられなかったとのことでした。

十一日には、中間の自宅に帰りたいというので、白い布に住所氏名を書いて服に縫いつけて貰い、道ノ尾駅まで連れて行って頂き、初めは駅長も快く引受けられたそうですが、兄の容態が余りに重篤なので、これではとても無理と思われたのでしよう。近くの岩屋公民館に収容されて、十二日に亡くなったそうです。

この話はこの度慰霊祭に参列し、渡辺さんのお宅にお伺いしました折に、詳しく話して頂き、収容されて死亡したという公民館にも、案内して頂きました。速く離れていたで、介抱して上げられなかったのが、残念でなりません。現在生きていますら、どんなにか頼れる兄だったろうにと、今は只々冥福を祈るばかりでございます。

渡辺様には色々とお世話になりました。誌上をかりて厚く御礼申し上げます。
写真は葉専時代のものが見当たらないので、工業学校在学中のものでございます。

(四五、九、一)

(五四四) 葉専三年生 岡本省三

遺族 下関市栄町三一二五

岡本 知定(父)

(前略) 凄惨の感も既に二十五年の春秋を経て、遺族の方々も一人消え、二人消え、流転の人生をしみじみ身に覚えます。

本夏は二十五周年忌に当り、焼香も考えて居りましたが、暑さと老齢のため、失礼致しました。悪しからお許し下さい(後略)

(四五、八、二六)

(五五二) 葉専三年生 藤 田 豊 弘

遺族 長崎県南高来郡加津佐町

本 田 元 喜 (伯父)

思い起せば昭和十二年八月十四日、補充員集めに応召し、九月二日夜、揚子江口に進入、花火を見る如き砲火線、轟く砲声、豆を炒る如き銃声の中に上陸命令あり、予て国家の干城として、数年の訓練は受けていたが、瞬間、身も魂も凍るような気がした。

棧橋が崩れて上陸が中止となり、三度目の決死上陸敢行命令、勝栗、ヨロ昆布、目出鯛、お祝に心を引きしめ、次の命令を待つ。部隊長より訓示あり。

「最悪とは何か。曰く、戦争である。軍人が戦に臨んでは、必ず勝たねばならぬ。勝つためには悪事又止むを得ず。強盗、放火、強奪、殺人、強姦、何でもやってよい。但し戦争に勝つ為には、戦争はそれ以上の最悪であり、是が非でも勝たねばならぬからである」と。上陸するや直ちに前進、戦火に燃え盛る呉淞鎮街、焼け倒れた。練瓦、電柱、のた打つ如き電線、時々顔をなでる如き炎の中、人力で引張る砲車、あちこちに転がる死体、さながら地獄絵そのままの敵中へ。軍歌「戦友」を思い浮べ、口ずさみつつ、全員目は窪み、体の焼けるかと思うほど渴きを覚え、語る気力もなし。只耳を痛める銃砲声、死体の悪臭に戦のいたましが身に沁み、同済大学の焼跡に野営、夜は敵襲に休みも得ず、翌早朝、宝山城総攻撃、実戦参加、五日午前同城占領、攻守両軍の間に牧場あり、乳牛約二百頭、飼料を与える人もなく、殆んど傷付き、又空腹の為か、哀れな泣声を出し、道路、田、畑、所きらわず死体は転り、諸車は捨てられ、死体の悪臭、酢酸を鼻に押込んだようで、頭まで通る。

さしもの大場鎮も十月二十六日に占領、同夕市街に入る。宝山より数倍と思われる惨状、数千か数万の腐った死体、男女ともあり、足の踏み場もない位、砲撃が空爆か、焼け続く建物、くすぶる機々。

嘉定、常州、南京、特に南京城外下関の死体を見て来た僕が、被爆後の長崎に入

り、先ず日見の桜樹の蔭で、体の自由を奪われた被爆者が数十名、水を、父母を、弟妹をと、かぼそい声で探し呼んでいる姿、今も尚目に浮ぶ。市内は丁度大場鎮突人時の如く、電柱は焼け倒れ、電線はのたうつ如く、諸軍随所に焼け、或いは立往生、家は焼け、市内随所に大火葬場を現出、嗚呼悲惨、惨の極、正に焦熱か、修羅地獄か、我が郷土にその絵図が繰り広げられたのである。又とかかる惨禍の起らぬようと、神仙に心清めて祈っております。

(四五、一一、一〇)

五、看護婦及び事務職員遺族の手記

(五九七) 看護婦 後 川 千代美

遺族 長崎県福江市大円寺県営住宅B二号

後 川 松之助(父)

(前略) その後は御無音に打ち過ぎ失礼して居りますが、実は人様のお話によりますと、原爆二週間以内に、爆心地から二キロ以内の所に入ったものには、原爆手帳が交付されますとのこと、私も娘千代美のことが心配なので、八月十二日に長崎に渡り、早速大学病院へ参りましたが、浦上一帯は全くの焼野原で、死体があちこちに転がっていて、臭気が甚しく、本当に悲惨な光景を呈しておりました。

病院の受付で尋ねましたが、千代美の消息は全くわかりませんので、その夜は五島町の旅館に泊り、翌朝から浦上地区は云うまでもなく、片瀕町の高商付近、諫早、大村の収容所まで探して廻りましたが、とうとう見当らないので、大学から遺骨を戴いて、五島へ帰りました。

原爆手当を戴くためには、特別手帳お持ちの方二名の証明が入用だそうでございますから、恐入りますがどうかよろしくお願い申し上げます。(後略)

(四六、六、二五)

【調 附記】 後川様は、その後七月中旬に長崎へ来られたので、私と村山繪婦長

が証明書を書いて差上げた。書類は福江支庁を通じて長崎県庁へ提出されたそうだから、今頃は最早や原爆手帳を入手されたことと思う。
(四六、九、八)

(六〇五) 看護婦 橋 川 ヤスノ

遺族 佐世保市奥山町

橋 川 巷(父)

見事に製本された「忘れな草」第三号をお送り頂き、誠に有難うございました。いつもながら、遺族への思い遣りを、心から感謝申し上げます。

戦後早や二十五年、遺族の殆んどが老境に達し、ひそかに平和を祈念しつつ日暮しするほか、なす術^{すべ}を知らない私共の為に、今後もお達者で御尽力下さいますよう、切にお願い申し上げます。
(四五、五、二)

(六四六) 看護婦生徒 田 中 松 枝

遺族 北九州市戸畑区菅原四丁目一番八十一

田 中 スエノ(母)

この度は「忘れな草」第三号をお送り頂きまして、誠に有難うございました。予想外の立派な本に作られて、私の粗文も他人の書いたもののような気が致します。

子供の遺品もあの写真がたった一つでしたが、とても素敵なものとなりました。一生大事にしまつて置きたいと思っております。家族のものたちからも、くれぐれもよろしくとのことでございます。本当に有難うございました。
(四五、五、二)

(六六四) 看護婦生徒 古 巢 ヒサ子

遺族 長崎県南松浦郡奈留町一六〇一

古 巢 小三郎(父)

この度原爆被爆者の遺稿が一冊の本となり、世に出る運びとなりましたことは、関



係御一同の御尽力の賜物であり、心から感謝申し上げます。

私の娘ヒサ子は原爆の犠牲となり、若くして死亡した訳でございますが、兄の光男も現役で従軍中ビルマで戦死、次の兄の泉は徴用で従軍して、セベレス島で戦死しました。姉のナセも次兄と同じように、これ又徴用で死んでしまいました。

このように、兄や姉たちが次々に戦死しましたが、ヒサ子自身もお国のために御奉公したいと申し、看護婦を志望して、長崎医大で原爆の犠牲になったのでございます。

私は現在本籍地の五島奈留島に居住しておりますが、このように次々に起つた子供達の死去で、案ずることも多く、唯今は高血圧や心臓病で療養中でございます。

(後略) (四五、四、二四)

(六七九) 看護婦生徒 湯 川 明 子

遺族 長崎県南松浦郡新魚目町似首

湯 川 萩(母)

第一信 先日は「忘れな草」第三号を送って頂き、待ちに待っていたこととて、取るものとりあえず、直ぐ開いて見ましたが、余りにも立派なのに驚き、早速老眼鏡をかけて拝見させて頂きました。

一昨年のこと、亡くなりました私の兄が長大病院に入院していた折、見舞に行き、甥に連れられてグピロが丘の慰霊碑にお詣りしました。その時小さな石を一つ頂いて帰り、遺骨のないまま写真だけを葬っている明子の墓に、お骨の代りに埋めました。それで私の気持も少し落ち着きました。

八月九日の慰霊祭には、せめて一度でも御縁にかかりたいと思ひながら、乗物に弱

私はいつも思い止まっています。今「忘れな草」を一頁一頁丹念に読んでおきますと、あの時の悲惨な様子が、手にとるように胸にこたえて参ります。五島にある私の村は、戦時中は安全地帯だったので、皆様方の当時のお苦しみは、想像も及ばなかったこととございます。お写真を拝見致しましても、本当に感無量でございます。(四五、六、五)

第二信 (前略) 私事、先生の御厚情におすがり致したく、拙きペンを執りました。た。

実は私の長男のことですが、被爆していながら、まだ原爆手帳を持っていないので、今からでも貰えるかどうか、お教えの程お願い申し上げます。

長男は湯川哲と申し、原爆当時瓊浦中学の一年生で、若し学校で愚図々々していたら即死だったでしょうが、幸にも空襲解除と共に帰途につき、電車も通らぬので歩いて帰る途中、長崎駅前あたりでピカドンに遭い、頭半分に軽い火傷をしました。その頃長男は矢ノ平町にある伯父(私の兄、当時長崎市事務課長)の家に厄介になっていましたので、時間は相当にかかったが、兎に角無事に家に辿りついたそうです。

終戦後は福岡へ行き、中学から福岡高校を卒業して、今は博多郵便局に勤務致して居ります。別に病氣という程ではありませんが、今年も行って会ってみると、何となく若さがなく、疲れているように見えますので、「どうかあるの」と尋ねても、「何ともない」と答えるだけです。二人の子供もあることですし、もっと元気であって欲しいと、私の方が心配で気がもめます。(四五、六、二四)

【調 附記】 私は以前から厚生省の原爆被爆者医療審議会の委員をやっているので、「若し特別手帳を持っている二人の証人から、被爆の事実を証明して貰い、書類を福岡県庁の予防課に提出すれば、原爆手帳が貰える」ことを云ってやったところ、十一月四日付で湯川哲氏から、手帳を入手したとの知らせがあった。御母堂も定めて安心されたことと申す。

第三信 (前略) 只今文部省から見舞金七万円送金の通知書が参りました。皆様のお蔭で本当に有難うございました。

今日は明子の命日でもあり、早速佛前に供えて明子の霊を慰めました。私も何だか明子が目の前に現われたようで、抱きしめたい気持ちにかられました。明子も犬死にならず、救われた気持ちで一杯でございます。(後略) (四五、一二、九)

(六九一) 男子事務職員 池田 等

遺族 東京都世田谷区代沢四一二八―四

池田 巳之吉(父)

(前略) 初めての手紙で失礼ですが、去る七月十四日、東京被爆者募参団の員として来崎の際は、一方ならぬ御厚情に預り、厚く感謝申し上げます。

実は私の長男等は当時十七才で、医大病理の保野博士の助手として勤務中に爆死しました。その当時何度も現場に行つて尋ねましたがわからず、或る日若原先生と云われる方が御親切に、「原爆が投下された時は屍体解剖中だったので、保野博士、看護婦と私の子供とそのまま爆死」とのことであつた。死体は黒焼けになって原形は全くなかつたので、死体の灰を少しづつ貰い受け、それを子供の遺骨としてお祀り致しました。初めは色々迷つておりましたが、晩になると毎晩のように私の傍に現われて、ニコリ笑う夢を見ましたので、この死体の中に自分の子供も居ると確信したのであります。その時の事は到底筆や言葉で表わすことは出来ません。

私は今七十三才であります。原爆で妻(八月二十九日死亡)、長男(八月九日死亡、二十二日確認)、長女(二十年十月死亡)を爆死させ、若い時から働いて新築した自分の家も、貸家も、楽しい生活も、一瞬の中に失つて無一物となり、自分も妻子の後を追つて死なうと思つたことが、何度あつたかわかりません。戦争や原爆がなかつたら、こんな惨めな生活はせずによかつたのにと、一生忘れることは出来ません。

あの当時お礼も申し上げなかつた若原先生の御住所、若しおわかりでしたらお知らせ下さい。又子供「池田等」の名が爆死者名簿に記載されて居りますかどうか、私を助けると思つてお知らせ下さいませう、切にお願い申し上げます。

(四五、九、九)

【調 附記】 若原猛夫博士の住所が「鹿兒島市城山町二―二五」であること、等君の名は死亡者名簿のみならず、原爆記念講堂に安置されている銅板名碑にも彫刻されていることをお知らせした。但し保野博士と等君の死亡場所は、「追憶」記載のものと少し違っているようである。

(七五〇) 男子事務員 福井 条 一

遺族 長崎県南松浦郡有川町中筋

福井タケ(母)

(前略) 私は八十五才に近い老婆でございます。原爆当時独り息子の故条一は、貴殿の学部で助教授を致して居りましたが、原爆の犠牲となって私一人取り残され、毎日淋しい生活を送って居ります。孫が一人居りますが、仕事の都合でこれとも一緒に暮らすことが出来ません。

最近聞く所によりますと、当時の殉職者には、国からか学校からか判りませんが、見舞金が出されているとか聞きました。本当でしょうか。当方で問合せでも全くわかりませんので、失礼とは思いましたが、お尋ねする訳です。無様な事をお尋ねして申訳ありませんが、真実をお知らせ下さいませよう、伏してお願ひ申し上げます。

(四五、一一、二六)

【調 附記】 福井タケ様は故条一氏を「助教授」と書れているが、昭和三十年に大学から出版された「追憶」によると、「医専助教授兼書記」となっており、事務関係の部で「学生係」の中に書かれているので、「忘れな草」の名簿でも、協議の結果「男子事務職員」の中に入れることとした。然し助教授にせよ事務職員にせよ、見舞金の下附は行われていないので、お気の毒とは思ったが、そのように御返事を差上げた次第である。

(七九八) 女子事務職員 岡田 醇子

遺族 神戸市長田区長尾町二―一〇―二

岡田美佐(養母)

(前略) 想いますれば、原爆被災後二十五年の歳月が過ぎましたが、この間私共は無事平穩に過ごすことが出来まして、夜も枕を高くして眠れるのでございます。

加えて国は栄え、一般の人々の寿命も延びました由、あの身心共に困窮に堪えさせられ、遂に原爆犠牲者となった人々の上を思う時、洵に感慨無量でございます。

海外での核兵器は、どの国もお預けのままらしいようで、これもすべて、原爆犠牲者の睨みがきいているからでございます。どうか優れた智識は、万人の幸せの上に向けられたく、心から祈っております。

(四五、一一、四)

朗報(二) 旧長崎医大原爆犠牲学徒の遺族に下付された文部省のお見舞金は、昭和四十二年内に申請書を提出したものにだけに限られていたので、その時何かの理由で申請されなかつた方や、四十三年度以後に遺族の判明した方々には、お見舞金の下付がなく、ただ死亡学生の籍国神社合記だけが許可された次第であるが、最近の情報によると、左記の学生遺族に対しても、近くお見舞金が下賜されることである。まだ確実とは云えないが、大いに期待が持てるものと思ふ。またそうであつて欲しいと、心から祈念する。

(四六、一二、二〇)

岩崎誠彦 相川清澄 生駒晋助 太田祐司 風早哲郎 久保道也 堀家 潤
高妻秀夫 佐賀章生 竹本文亮 立石和生 西谷 重 野津 恭 箱田吉清
浅田 昇 古森泰而 田中秀雄 篠原 昇 松山常雄(名簿番号順、敬称略)

編集後記

調 来 助

毎年春に出版していた「忘れな草」が、第四号は年末になってしまった。それは個人の健康や都合もあったが、これが最後かと思うと、一人でも多くの方の手記を掲載したい希望から、御寄稿を催促したり、原稿の到着を待たたりしたのが、最大の原因と云えよう。早く投稿された方々は、鶴首してお待ちになっていたことと思う。衷心よりお詫び申し上げたい。

さて今後はどうなるか、という問題であるが、第四号が最後と申し上げたのは、分厚い本の出版が最後という意味であって、パンフレット程度（一〇―二〇頁）のものは、今後も基金の続く限り、「忘れな草」の名の下に印刷して、皆様のお手許にお届けしたいと思っている。

第三号以来、ここ一年半の間起った新事実を要約すると、

一、会員の増加 昨年は遺族会々員の数が八八五名であったが、四人増加したので（二三頁参照）、総数が八八九名となった。その内訳は次の通りである。

| 職 員 | | 学 徒 | |
|---------|----------|-------------|--------|
| 教 職 員 | 事務職員 | 看 護 婦 徒 | 医 学 生 |
| 学長及び教授 | 助手及び副手 | 看護婦及び助産婦の生徒 | 付属医専生徒 |
| 助教授及び講師 | 事務官及び事務員 | 看護婦及び助産婦の生徒 | 付属薬専生徒 |
| 一〇 | 一五 | 五八 | 三六 |
| 四二 | 二〇六 | 一〇九 | 五三二 |
| 八八九 | | | |

二、陳情のこと 昨四十五年は二回（春と秋）、本年は三回（七月、十月、十一月）陳情のため上京したが、政局多端の折柄とて、予期に反することのみ多く、この分なら何とか成功しそうな感じがしても、次の回には又話ががらりと変って、落胆して引揚げざるを得ない場合が屢々であった。多少とも経験のあられる方は、この辺の事情がよくお判りのことと思う。然しやりかかった以上、成功するまでは石に噛りついても、続けて行きたいと思っている。

三、銅板名碑の追加彫刻 銅板名碑は昭和四十二年八月に初めて作製し、翌四十三年に追加彫刻を行ったが、その後新しく判明した犠牲者が六名あったので、目下再度の追加彫刻を交渉中である。多分出来ることと思う。

四、物改者の追加 本年に入り、二七頁記載の外に、更に服巻光子様と尾崎保寿様が御他界の由、お知らせがありました。謹んで御両所の御冥福をお祈り申し上げます。（四六、一一、一五）

忘れな草

原爆思い出の手記と故人の遺稿集

昭和四十六年十二月二十五日 印刷
昭和四十六年十二月三十一日 発行

（非売品）

長崎市本原町一―二九 編集 調 来 助

長崎市本原町一―二九 調来助方 発行 旧長崎医科大学 原爆犠牲者遺族会

長崎市幸町六番三号 印刷 大同印刷紙器株式会社